新宿のニューカマー韓国人のライフヒストリー記録集の作成
―顔の見える地域作りのための基礎作業―

中間報告書

신쥬쿠의 뉴커머 한국인의 라이프히스토리 기록집 작성
―얼굴이 보이는 지역사회 만들기를 위한 기초작업―

중간보고서

研究代表

渡辺幸倫（相模女子大学）

トヨタ財団2009年度研究助成
（D09-R-0422）

中間報告書

目次

ごあいさつ / 인사말 …… i
プロジェクトの概要 / 프로젝트의 개요 …… iii
初年度の活動 / 초년도의 활동 …… v

第一部：インタビュアーの視点　제 1 부：인터뷰어의 시점 …… 1
プロジェクトのキーワード　/　프로젝트의 키워드
＜キーワード /키워드　1＞
河合優子「ナラティブ理論」（記録集 1 収録） ……2
카와이 유코「내러티브 이론」

＜キーワード / 키워드　2＞
川村千鶴子「人生に寄りそうライフサイクル論」（記録集 2 に収録） ……4
카와무라 치즈코「인생에 동행하는 라이프사이클론」

＜キーワード /키워드　3＞
藤田ラウンド 幸世「言語景観（Linguistic landscape）」 ……6
후지타라운도 사치요「언어경관（Linguistic landscape）」

コラム・論考 / 칼럼 논고
＜コラム・論考 / 칼럼 논고 1＞
武田里子「インタビュー調査について」（記録集 1 に収録） ……10
타케다 사토코「인터뷰 조사에 대하여」

＜コラム・論考 / 칼럼 논고 2＞
若園雄志郎「記録集 1&2 におけるインタビュー対象者の分析」 ……12
와카조노 유시로「기록집 1&2 의 인터뷰 대상자에 관한 분석」

＜コラム・論考 / 칼럼 논고 3＞
堀内康史「統計から見る新宿区の韓国人」 ……16
호리우치 타카시「통계로 보는 신주쿠의 한국인」

＜コラム・論考 / 칼럼 논고 4＞
藤田ラウンド　幸世「生活空間を映し出す多言語景観　―新宿区大久保地域のニューカマー韓国人に関わる言語景観を中心に」 …… 22
후지타라운도 사치요「생활공간을 비춰내는 다언어경관(多言語景觀)
-신쥬쿠구(新宿区)오오쿠보(大久保)지역의 뉴커머 한국인의 언어경관을 중심으로」

＜コラム・論考 / 칼럼 논고 5＞
李 坪鉉「多文化空間での子育てをめぐるナラティブ」 ……41
이 호현「다문화공간에서의 자녀교육을 둘러싼 내러티브」

＜コラム・論考 / 칼럼 논고 6＞
呉 世蓮「―心の癒しの場所、コリアンタウン― 私のナラティブ：自分と新宿区との関わり」
（記録集 2 に収録）……45
오 세연「―마음의 휴식처、코리안타운― 나의 내러티브:신주쿠구와의 관계」

第二部：読み手の視点 第 2 부：읽는 사람의 시점 ……47
記録集の感想
＜『記録集 1』の感想 / 『기록집 1』의 감상 1＞
武田 香織さん（30 代、女性）「韓国は近くてとても遠い国」（記録集 2 に収録）……48
타케다 가오리（30 대、여성）「한국은 가깝고도 아주 먼 나라」

＜『記録集 1』の感想 / 『기록집 1』의 감상 2＞
中島 広美さん（40 代、女性）「ナラティブへのギャップと感想」（記録集 2 に収録）……49
나카시마 히로미（40 대、여성）「내러티브에 대한 갭과 감상」

＜『記録集 2』の感想 / 『기록집 2』의 감상 1＞
塩見 直亮さん（20 歳、男性）「新宿のニューカマー韓国人のライフスタイル記録集を読んで」
……51
시오미 다다아끼(20 세, 남성)「신쥬쿠에 새로이 이주해 온 한국인들의 라이프스타일
수록집을 읽고서」

＜『記録集 2』の感想 / 『기록집 2』의 감상 2＞
北口 弘剛さん（19 歳、男性）「記録集を読んで」……53
키타구치 히로타케 (19 세, 남성)「기록집을 읽고서」

第三部：27 人の韓国ニューカマーの人たちの声
第 3 부：27 명의 한국인 뉴커머들의 목소리 ……55
＜ インタビュアー / 인터뷰 1 ＞ キム・スヒョン（20 代・女性）呉（2009/11）
「日韓共同作業を夢見る、作家志望生」（記録集 1 に収録）……56

＜ インタビュアー / 인터뷰 2 ＞ Y さん（30 代・男性） 渡辺（2010/ 1/12）
「新宿は今の自分にちょうどいい」（記録集 1 に収録）……58
한국어번역 ：Y 씨(30 대•남성)「신쥬쿠는 지금의 나에게 딱 좋다」

＜ インタビュアー / 인터뷰 3 ＞ PH さん（30 代・女性）武田（2010/2/25）
「幼稚園は小学校の予備教育？」（記録集 1 に収録）……62

＜ インタビュアー / 인터뷰　4 ＞ PY さん（20 代・女性）武田（2010/3/3）
「10 月に戻ります」（記録集 1 に収録）……64

＜ インタビュアー / 인터뷰　5 ＞ PH さん（20 代・女性）武田（2010/3/4）
「将来の夢はパン屋さん」（記録集 1 に収録）……66

＜ インタビュアー / 인터뷰　6 ＞ L·M・（20 대·여성）오세연（2010/ 3/ 18）
「5 년간의 일본유학생활을 되돌아 보고」
日本語訳：L・M さん（20 代・女性）「5 年間の日本の留学生活を振り返って」
（記録集 1 に収録）……70

＜ インタビュアー / 인터뷰　7 ＞ T さん（40 代・男性）渡辺（2010/ 4/3）
「新宿から二度目の出発」（記録集 1 に収録）……72

＜ インタビュアー / 인터뷰　8 ＞ T さん（30 代・女性）川村・李（2010/4/7）
「異国での出産と教育について」（記録集 1 に収録）……73

＜ インタビュアー / 인터뷰　9 ＞ Ann さん（40 代・女性）李（2010/4/18）
「日本語さえできればたくさんの機会がある国、日本」（記録集 1 に収録）……75

＜ インタビュアー / 인터뷰　10 ＞ U さん（20 代・女性）河合（2010/12/17）
「中国から韓国、そして日本」（記録集 2 に収録）……77

＜ インタビュアー / 인터뷰　11 ＞ 金某さん（40 代・男性）堀内（2010/3/4）
「貿易業での成功を夢見て」（記録集 2 に収録）……78

＜ インタビュアー / 인터뷰　12 ＞ B さん（30 代・女性）ソン（2010/3/12）
「日本の生活に満足」（記録集 2 に収録）……79

＜ インタビュアー / 인터뷰　13 ＞ OY さん（20 代・男性）武田（2010/3/30）
「男同士の約束」（記録集 2 に収録）……82
한국어번역　：OY 씨(20 대 /남성)「남자끼리의 약속」

＜ インタビュアー / 인터뷰　14 ＞ KJ さん（30 代・男性）武田（2010/4/1）
「一目惚れ」（記録集 2 に収録）……87
한국어번역　：KJ 씨(30 대/남성)　「첫눈에 반해버린 나의 아내」

＜ インタビュアー / 인터뷰　15 ＞ M さん（30 代・男性）若園（2010/4/1）
「どの国でもいいところ・わるいところはある」（記録集 2 に収録）……92

＜ インタビュアー / 인터뷰　16 ＞ PY さん（30 代・女性）武田（2010/4/5）
「チャンスの女神の前髪」（記録集２に収録）……93

＜ インタビュアー / 인터뷰　17 ＞ ヨンさん（40 代・男性）渡辺（2010/4/13）
「世界と日本のゲートウエイを作る」（記録集２に収録）……95
한국어번역 ：영씨(40 대/남성) “세계와 일본의 게이트웨이를 만들다”

＜ インタビュアー / 인터뷰　18 ＞ N さん（30 代・女性）藤田ラウンド（2010/4/16）
「留学、結婚を経て、日本に暮らす」（記録集２に収録）……101

＜ インタビュアー / 인터뷰　19 ＞ S さん（20 代・女性）河合（2010/7/5）
「残りの大学生活でやってみたいのは英語の勉強」（記録集２に収録）……103

＜ インタビュアー / 인터뷰　20 ＞ K さん（30 代・男性）河合（2010/7/8）
「日本で研究者に」（記録集２に収録）……105
한국어번역 ：K 씨(30 대·남성)　「일본에서 연구자로」

＜ インタビュアー / 인터뷰　21 ＞ R さん（20 代・女性）河合（2010/7/13）
「スペインにも留学したい」（記録集２に収録）……109

＜ インタビュアー / 인터뷰　22 ＞ LS 씨（20 대·여성）李（2010/7/17）
「정겨운 나라 일본, 많이 보고, 많은 것을 경험하고 싶은 나라」（記録集２に収録）
日本語訳：LS さん（20 代・女性）「懐かしい町並みを残している国　にっぽん、
たくさんのことを見て、いっぱい体験してみたい国」……113

＜ インタビュアー / 인터뷰　23 ＞ J・E さん（20 代・女性）　呉（2010/7/18）
「理系界の女性研究者を志す / 이공계의 여성 연구자를 꿈꾸다」……115

＜ インタビュアー / 인터뷰　24 ＞ H さん（20 代・女性）藤田ラウンド（2010/7/23）
「日本と韓国の関係をもう一歩進めたい」（記録集２に収録）……117

＜ インタビュアー / 인터뷰　25 ＞ PH 씨（40 대·여성）李（2010/8/7）
「언제든 돌아갈 타국 땅에서 내 자녀들이 자라는 나라가 된 일본」（記録集２に収録）
日本語訳：PH さん（40 代・女性）「「いつでも帰るという他国から、我が子が育つ国に
なった日本、これからは賢く日本を満喫し、子どもたちも両国の良さを学んでほしい」……121

< インタビュアー / 인터뷰　26 > JO 씨（40 대·여성）李（2010/8/7）
「일본어가 너무 좋아, 좀더 실전 일본어를 배우고 싶어 일본 유학을 결심. 지금은 한국어 강사를 하면서 언어에 대한 열정을　불태우며, 박사논문 연구 중」（記録集２に収録）
日本語訳：JO さん（40 代・女性）「日本語が大好きでもっと本場の日本語を学びたい一心で留学、今は韓国語講師として言語への研究意欲を燃えつくしている」……125

< インタビュアー / 인터뷰　27 >李某さん（30 代・男性）堀内（2010/8/12）
「ジャパニーズドリームの可能性に賭けて」（記録集２に収録）……127

スケジュール / 스케쥴……129
プロジェクトメンバー / 프로젝트 멤버……130

ごあいさつ

この冊子はトヨタ財団 2009 年度研究助成　（D09-R-0422）『新宿のニューカマー韓国人のライフヒストリー記録集の作成—顔の見える地域作りのための基礎作業—』（2009 年 11 月~2011 年 10 月）の中間報告書です。

本冊子は、初年度に発表されたものを中心に、第一部インタビュアーの視点（プロジェクト理解のためのキーワード、プロジェクトに関する論考）、第二部読み手の視点（読者から寄せられた記録集 1，2 の感想）、第三部 27 人のニューカマー韓国人の声（インタビュー27 本、うち日韓バイリンガル 10 本）の三部校正となりました。ここには新たに日本語＝韓国語間で翻訳されたインタビュー、これまでのインタビュー対象者や新宿に住む外国人の分析、大久保地区の言語景観についての論考なども含まれています。これにより本プロジェクトの現状のみならず、現在の新宿の姿も幅広く知ることができることと思います。

読後には、ぜひ冊子に挟んである読者カードを記入してご返送下さい。もちろんメールでも結構です（宛先は冊子の最後のページにあります）。いただいたご意見は今後の活動に活かしていきたいと思います。また、プロジェクト全体の詳細はホームページ上にも掲載されています。興味のある方はアクセスしてみて下さい。

2010 年 10 月 31 日

研究代表　渡辺幸倫

このプロジェクトは、トヨタ財団 2009 年度研究助成　（D09-R-0422）『新宿のニューカマー韓国人のライフヒストリー記録集の作成—顔の見える地域作りのための基礎作業—』（2009 年 11 月~2011 年 10 月）の助成を受けています。
（http://koreannewcomersintokyo.web.officelive.com/）

인사말

이 책자는 토요타재단 2009 년도 연구조성（D09-R-0422）『신쥬쿠의 뉴커머 한국인의 라이프히스토리 기록집 작성－얼굴이 보이는 지역사회 만들기를 위한 기초작업－』（2009 년 11 월~2011 년 10 월）의 중간보고서이다.

이 책자에는 초년도에 발표한 것을 중심으로 제 1 부 인터뷰어의 시점(프로젝트의 이해를 위한 키워드, 프로젝트에 관한 논고),제 2 부 독자의 시점(독자로부터 회신된 기록집 1,2 의 감상), 제 3 부 27 명의 뉴커머 한국인의 소리(인터뷰 27 건, 그중에 일한 이중언어 10 건)로 3 부에 걸친 구성을 했다. 이것에는 새로운 일본어＝한국어 간에 번역된 인터뷰, 지금까지의 인터뷰 대상자나 신쥬쿠에 살고 있는 외국인의 분석, 오오쿠보 지구의 언어경관에 관한 논고등도 포함되어있다. 이것으로써 본 프로젝트의 현상황 뿐만아니라, 현재의 신쥬쿠의 모습도 폭넓게 알수있다고 생각한다.

읽으신 후에는 책자에 끼워져있는 독자카드에 기입하신 후 꼭 반송해주십시요. 물론 메일로도 괜찮습니다.(보내실곳은 책자의 맨 끝 페이지에 있습니다.) 앞으로의 활동에 참고 하고자 합니다. 또한, 프로젝트 전체의 세부사항은 홈페이지에도 게재되어 있습니다. 관심있으신 분들은 홈페이지에 접속해서 봐주십시요.

2010 년 10 월 31 일

연구대표 와타나베 유키노리 (渡辺幸倫)

이 프로젝트는 토요타재단 2009 년도 연구조성（D09-R-0422）『신쥬쿠 뉴커머 한국인의 라이프히스토리 기록집 작성－얼굴이 보이는 지역사회 만들기를 위한 기초작업－』（2009 년 11 월~2011 년 10 월）을 받고있다.
(http://koreannewcomersintokyo.web.officelive.com/)

プロジェクトの概要

多文化・多民族化する日本の地域社会で、住民同士のつながりをどのように作っていくのかが重要な課題となっています。特に新宿区では韓国人ニューカマーが大きな存在感を持っているものの、地域の人々との接点は必ずしも多くなく、「顔の見える関係」という地域作りの基盤が弱いといわれています。

本プロジェクトでは 100 人の韓国人ニューカマーに一人一時間程度のライフヒストリー・インタビューを行い、その内容を本人の同意のもと、定期的に印刷物・ホームページで公開し自由に共有できるようにします。重要な社会の構成員としてインタビューされる人々の地域社会への所属意識向上が期待できるとともに、受け入れ社会側には「地域にいる『韓国人』も、かけがえのない人生の一時期を、同じ地域空間を共有しながら生きている」という気づきが可能となるのではないでしょうか。

このプロジェクトの理論的背景には、人生を語り／聞くことで世界観を作っていくという物語（ナラティブ）理論があります。本プロジェクトは、インタビューを通して、関係する全ての人が自己を肯定しながら社会を理解できるようになることを目指しています。このような人と地域のつながりを作る手がかりを得ることが本プロジェクトの目標です。

프로젝트 개요

다문화, 다민족화가 진행되고 있는 일본 지역사회는 주민들 사이의 연결고리를 어떻게 만들어 가느냐라는 중요한 과제를 안고 있습니다. 특히 신주쿠는 한국인 이주자가 큰 존재감을 가지고 있지만 지역의 주민들과의 교류가 적어 “얼굴이 보이는 관계” 라는 지역사회를 만들기 위한 기반이 취약합니다.

본 프로젝트에서는 한국인 이주자 100명에게 한 시간 정도의 라이프 히스토리 인터뷰를 하여 본인의 동의하에 그 내용을 정기적으로 인쇄물, 홈페이지에 공개하여 자유롭게 공유할 수 있도록 하려고 합니다. 이로 인해 인터뷰에 응해 주신 분들이 사회의 중요한 구성원으로서 지역사회에의 소속감을 고취시키는 것과 동시에 지역사회 측에는 “지역사회에 속한 한국인 또한 인생의 소중한 한 시기를 같은 지역공간에서 함께 살아가고 있다”는 사실을 깨닫게 할 수 있지 않을까요?

이번 프로젝트는 인생에 대하여 듣고 말하는 것을 통해 세계관을 만들어 나가는 이야기(내러티브)이론을 배경으로 하고 있습니다. 그리고 인터뷰를 통해 모든 분들이 자신에 대해 긍정적인 마인드를 가짐과 동시에 사회를 이해할 수 있기를 바랍니다. 즉 사람과 지역의 연결고리를 만드는 계기가 되는 것, 그것이 본 프로젝트의 목표이기도 합니다.

初年度の活動

渡辺幸倫

初年度の活動については、メンバー間での調査方法などについての共通認識の醸成に時間をかけたため、当初の予定より若干の遅れが出たもののおおむね計画通りに進めることができた。活動の詳細は以下の通りである。

＜主な実施事項＞

本年度（2009 年 11 月～2010 年 10 月）は、メールでの情報交換の他、ほぼ月に一度全体会議を開き、以下のことを行った。

11 月：

① 論的背景（特にナラティブ理論）の確認、
② インタビューの方法（インタビューマニュアルを作成）、
③ 対象者の選出方法などの共有、
④ プロジェクト紹介リーフレット作成、
⑤ 出金マニュアルの作成、
⑥ ホームページの作成　などの実施。

12 月：パイロット調査を行い、インタビューマニュアルの不備を修正。
1 月：インタビューの書き起こしに際しての、執筆要領（書式、要約方法など）を修正。
3 月：第一回成果発表会（3 月 29 日：大東文化大学信濃町キャンパス）を開催し、発表会までに実施していた 10 名ほどのインタビューで分かった点、修正点、課題等について議論。
4 月：『記録集１』の目次、執筆要綱、校正方式、印刷業者、配布先などを決定。
5 月：『記録集１』を発行し、関係各所に配付すると同時に、ホームページにて公開。
7 月：『記録集１』への反応などを元に『記録集２』への改善点を洗い出し。
8 月：『記録集２』の校正、細部の打ち合わせ、発行の準備。
9 月：『記録集２』を発行し、関係各所に配付すると同時に、ホームページにて公開。
10 月：中間報告会、トヨタ財団 2010 年度贈呈式ミニシンポジウムでの報告
11 月：中間報告書の発行

＜プロジェクトの運営上の課題と改善策＞

研究者間の共通認識の醸成に最も時間と手間がかかった。10 人のメンバーは全員インタビューによる調査や多文化社会などを対象とする研究の経験が豊富であるため大枠の了解に関しては問題なかったが、インタビュー手法の詳細（質問の仕方、インタビュー音声の文字化・原稿化の方法など）については、パイロットインタビューや作業マニュアルを作成し、それを元に議論を重ねて共通認識を醸成した。

具体的な作業方法の他に、インタビュー時の使用言語（インタビューを日本語で行うのか韓国語で行うのか）やインタビュアーの属性（年齢、性別）などが、対象者へのアプローチとインタビューで語られる内容に影響することが論点になった。これらへの対応についても共通認識を持つ必要があった。

結論としては、パイロットインタビューや初期のインタビューを通して問題点を洗い出した上で、それらについて議論し、「メンバー間での許容される「幅」の確認」をするという形で解決した。

＜今後の取組について＞

今後の取組として特に意識したいのは以下の４つの多様化である。

内容の多様化：

これまでのプロジェクト上のキーワードの解説等に加えて、読者を巻き込んだコラムの充実を想定している。これには、読み手からのフィードバックをどのように集めるかという課題が出てくる。現在の読者カードだけでなく新たな方法を模索する。

使用言語の多様化：

記録集の多言語化も行う。現在の所は日本語が中心だが、韓国語で内容を読みたいという強い要望が寄せられているため、韓国語のページも増やしたい。また、日本語・韓国語圏以外からも問い合わせが来ているので、英語版やその他の言語による情報発信も行いたい。

配付手段の多様化：

現在は、自治体の一部機関や、韓国語学校、日韓交流カフェ、大学、地域の NGO 等を通して配付しているが、これをさらに広げて行きたい。 積極的に各所に依頼するとともに、プロジェクト自体の広報活動を地域活動、学会発表などの中で行い、知名度を上げることで配付協力者を得たい。

インタビュー対象者の多様化：

初年度の対象者を念頭に属性のバランスを考えたい。対象者選定にメンバーを起点にしたスノーボール式という方法をとった関係上、メンバー自身の属性などの要因が対象者選定に影響を与えている。当初から 30 人程度で傾向を分析し、その後の選定に反映させる予定であったため、本中間報告で、これまでのインタビュー対象者の分析を行った。ニューカマー韓国人社会の縮図を正確に反映することが本プロジェクトの目標ではないが、様々な背景を持もつ人々の話を聞けると調査全体に厚みがでる。次年度にはここでの分析の結果を念頭に対象者を広げて行きたい。

以上

초년도의 활동

와타나베 유키노리（渡辺幸倫）

초년도의 활동에 대해서는, 멤버들간에 조사방법등에 관하여 공통인식을 양성하는데에 시간을 많이 들인 관계로 처음 예정보다 조금 늦어졌지만, 대체로 계획대로 진행할수 있었다. 활동에 관한 상세사항은 다음과 같다.

＜주된 실시사항＞

올해（2009 년 11 월～2010 년 10 월）는, 메일을 통한 정보교환 외에, 거의 매월 한번 전체회의를 열어서 다음과 같은 것을 진행했다.

11 월 :

①이론적배경（특히 내러티브 이론）확인
②인터뷰 방법（인터뷰 매뉴얼 작성）
③대상자의 선출방법등을 공유
④프로젝트 소개 리플릿 작성
⑤출금 매뉴얼 작성
⑥홈페이지 작성 등을 했다.

12 월 : 파일럿 조사를 하고, 인터뷰 매뉴얼의 부족한 부분을 수정했다.
1 월 : 인터뷰 한 내용의 문자화에 관해서 집필요령（서식, 요약방법등）을 수정했다.
3 월 : 제 1 회 성과발표회（3 월 29 일 : 大東文化大学信濃町캠퍼스）를 개최하고, 발표회까지 실시해 온 10 명 정도의 인터뷰를 통해서 알게 된 점, 수정해야 할 부분, 과제 등에 관해서 토론했다.
4 월 : 『기록집 1』의 목차, 집필요강, 교정방식, 인쇄업자, 배포할 곳 등을 결정했다.
5 월 : 『기록집 1』을 발행하고, 관계처에 배부함과 동시에 홈페이지에 공개했다.
7 월 : 『기록집 1』의 반응을 바탕으로『기록집 2』를 위한 개선점을 선별했다.
8 월 : 『기록집 2』의 교정, 상세한 부분의 논의, 발행준비를 했다.
9 월 : 『기록집 2』를 발행하고, 관계처에 배부함과 동시에 홈페이지에 공개했다.
10 월 : 중간보고회, 토요타재단 2010 년도 증정식 심포지엄에서 보고
11 월 : 중간보고서의 발행

＜프로젝트 운영상의 과제와 개선책＞

연구자간의 공통인식 양성에 가장 시간과 손이 많이 갔다. 10 명의 멤버들은 전원 인터뷰 조사와 다문화사회등을 대상으로 한 연구경험이 풍부한 분들로 큰 틀에 관한 이해에는 시간이 안 걸렸지만, 인터뷰 수법의 상세(질문하는 방법, 인터뷰 음성의 문자화/원고화의 방법등)에 관해서는, 파일럿 인터뷰와 작업 매뉴얼을 작성하여 그것을 바탕으로 논의를 반복하여 공통인식을 형성했다.

구체적인 작업방법 외에, 인터뷰를 할때의 사용언어(인터뷰를 일본어로 할지, 한국어로 할지)나 인터뷰어의 속성(연령,성별)등이 대상자에게 접속하는 방법과 인터뷰에서 이야기되는 내용에 영향을 미치는지가 논점으로 거론되었다. 이러한 점들에 어떻게 대응할지에 관해서도 공통인식을 가질 필요가 있었다.

결론적으로, 파일럿 인터뷰나 초기 인터뷰를 통해서 문제점을 선별한 후에, 그것에 관하여 논의하고, 「멤버간에 허용되는 “범위”의 확인」을 하는 형태로 해결했다.

＜앞으로의 대처방안에 관하여＞

앞으로의 대처에 관해서 특별히 의식해야 할 것으로는 아래의 4 가지 다양화 부분이다.

내용의 다양화 :

지금까지의 프로젝트 상의 키워드 해설에 더불어, 독자로부터의 컬럼에 충실을 기하려고 생각하고 있다. 이것은, 독자로부터의 피이드백을 어떻게 수집할지가 과제로 떠오른다. 현재의 독자카드 뿐만 아니라 새로운 방법을 모색해야겠다.

사용언어의 다양화 :

기록집의 다언어화를 실시한다. 현재로는 일본어 중심이지만, 한국어로 내용을 읽고싶다는 요청이 많아지고 있어서, 한국어 페이지도 늘려가고 싶다. 또, 일본어 한국어권 이외에서도 문의가 오고있어서, 영어판이나 그 외의 언어로도 정보발신을 하고싶다.

배부수단의 다양화 :

현재는 자치체의 일부기관이나 한국어학교, 한일교류카페, 대학, 지역의 NGO 등을 통해서 배부하고 있지만, 더욱더 넓혀가고 싶다. 적극적으로 각처에 의뢰하는 것과 동시에 프로젝트 자체의 홍보활동을 지역활동과 학회발표등을 통해 지명도를 높여가는 것으로 배부 협력자를 얻고자 한다.

인터뷰 대상자의 다양화 :

초년도의 대상자를 염두에 두고 그 속성에 밸런스를 고려하고 싶다. 대상자를 선정하는 데에 멤버를 기점으로 한 스노볼식 방법을 취함으로 인해, 멤버 자신의 속성등의 요인이 대상자 선정에 영향을 미치고 있다. 처음부터 30 명 정도로 경향을 분석하고, 그 후 선정에 반영할 예정이였기에, 본 중간보고에서 지금까지의 인터뷰대상자의 분석을 했다. 뉴커머 한국인 사회의 축도를 정확하게 반영하는 것이 본 프로젝트의 목표는 아니지만, 다양한 배경을 가진 사람들의 이야기를 들음으로써 조사전체에 볼륨이 더하리라 본다. 다음년도에도 여기서의 분석결과를 염두에 두고 대상자를 넓혀가고 싶다.

이상

第一部：インタビュアーの視点

제 1 부 : 인터뷰어의 시점

＜キーワード /키워드　1＞

ナラティブ理論

河合優子

人が存在するところにはナラティブ（物語）がある、と言っても過言ではありません。フランスの思想家ロラン・バルトは、ナラティブは「どの時代にも、どこでも、そしてどんな社会にも存在」し、「人類の歴史の始まりと同時に存在していた」と主張しています（Barthes, 1975, P. 237）。コミュニケーション学者のフィッシャーは、人間を「物語る動物（Homo-Narrans）」と定義し、人はナラティブを通して現実世界を理解すると述べています（Fisher, 1984）。

人は、子どもの頃には、童話やアニメとともに成長し、大人になってからも小説、映画、ドラマといったナラティブとともに生きていきます。さらに、職場で同僚と口論になった経緯を家族に詳しく語るとき、落ち込んでいる友人からそのいきさつを聞くときの「経緯」や「いきさつ」もナラティブとして語られます。このように、自分が生きる世界だけでなく、異なる世界で生きる人びとのことも、ナラティブを通して触れることができます。ナラティブは、多様な文化、年齢、教育背景の人びとにとって、身近で理解しやすいものであると言えます。

ナラティブは、人文・社会科学において、特に 1980 年代以降、注目されるようになり、幅広い学問領域で理論的概念および分析方法として使われてきました（Riessman, 2008）。したがって、ナラティブの定義には様々なものがあります。しかし、広く定義すれば、2 つ以上の出来事が、関連した、連続性のあることとして語られること、と言えるのではないでしょうか。

しかし、常に出来事 A と出来事 B が連続して語られるわけではなく、出来事 A と B の間に C を入れて語られることで違う印象を与える話になったりします。例えば、「韓国の大学で経済学を専攻し、日本経済について学んだ」「日本に留学した」という 2 つの出来事があったとします。この 2 つの出来事だけが語られたのであれば、「日本経済を学んだから日本に留学した」となります。しかし、「日本の大学院から奨学金をもらった」、さらに「アメリカの大学院へ行くことも考えていた」という出来事が、この間に語られると、少し違ったナラティブになります。

では何のために人は「物語る」のでしょうか。主要な目的の一つが、過去の経験の記憶です。経験が存在するというよりは、「物語る」という行為によって経験はつくられるのです（野家、2005）。人生においてはさまざまな出来事が起こりますが、そのままでは、割れたガラスの破片のように無形であり、混沌としています。人はそのようなさまざまな出来事をつなぎあわせることで経験（＝ナラティブ）として記憶します。しかし、すべての出来事が経験を構成するわけではありません。ある出来事は別の出来事とつなげられることなく、人生の経験の一部とならず忘却される、もしくは語られないことがあります。ある人の人生において、関連性のあるものとして語られた過去の出来事の集合体、つまり、ナラティブ（＝経験）は、同時に、その人が誰であるかという意味、つまりアイデンティティを表すものでもあります。

ニューカマー韓国人のライフヒストリーというナラティブから、語り手の生きる世界やアイデンティティを垣間見ることになります。さらに、このプロジェクトでは、多様な世代の日韓の研究者がインタビューにあたりました。よって、ここで語られた人生は、ニューカマー韓国人の人たちと研究者の共同作業によるナラティブであり、語り手の人生の一面に過ぎないのかもしれません。それでもこれを読んだ方には、新宿のニューカマー韓国人の「顔」が、以前より少しはっきりと見えてくるのではないでしょうか。

引用文献

Barthes, R. (1975). An introduction to the structural analysis of narrative. *New Literary History, 6*(2), 237-272.

Fisher, W. R. (1984). Narration as a human communication paradigm: The case of public moral argument. *Communication Monographs, 51*, 1-22.

Riessman, C. K. (2008). *Narrative methods for the human sciences*. Thousand Oaks, CA: Sage.

野家啓一（2005）『物語の哲学』岩波現代文庫

＜キーワード /키워드　1＞

내러티브 이론

카와이 유코（河合優子）

인간이 존재하는 곳에는 내러티브(이야기)가 존재한다라고 말해도 과언이 아닙니다. 프랑스의 사상가 로렌발트는 내러티브가 “어떠한 시대, 장소, 그리고 사회에도 존재하며 인류 역사의 시작과 동시에 존재하고 있었다” 라고 주장합니다 (Barthes,1975,P.237）. 커뮤니케이션 학자인 피셔는 인간을 “이야기하는 동물 (Homo-Narrans)”이라고 정의함으로써 사람은 내러티브를 통해 현실세계를 이해한다고 언급했습니다（Fisher, 1984）.

인간은 어릴 적에는 동화나 애니메이션을 접하며 성장하고 어른이 되어서는 소설, 영화, 드라마와 같은 내러티브 속에서 살아가고 있습니다. 또한 직장에서 동료와 다툰 경위를 가족에게 자세히 이야기 하는 경우나 풀이 죽어있는 친구에게 그 이유를 물을 때, 우리는 “경위” 또는 “경과” 를 내러티브로서 듣게 됩니다. 이처럼 내러티브를 통하여 자기가 살아가는 세계뿐만 아니라 전혀 다른 세계에서 살아가는 사람들을 접할 수 있습니다. 내러티브는 다양한 문화, 세대, 교육 배경을 가진 사람들에게 있어서 친밀하고 이해하기 쉬운 것이라고 말할 수 있습니다.

내러티브는 특히 1980 년대 이후 인문, 사회과학 분야에서 주목 받기 시작하여 폭넓은 학문 영역에서 이론적인 개념 또는 분석방법으로 사용되어 왔습니다（Riessman,2008）. 때문에 내러티브에 대하여 다양한 정의가 존재하지만 넓은 의미에서 정의하자면 연속성과 관련성을 가진 두 개이상의 사건을 이야기하는 것이라고 할 수 있겠습니다.

하지만 사건 A 와 사건 B 를 항상 연속적으로 이야기하는 것이 아니라 사건 A 와 사건 B 사이에 C 를 넣어 이야기함으로써 전혀 다른 인상을 가진 이야기가 되기도 합니다. 예를 들면 “한국의 대학에서 경제학을 전공하고 일본경제에 대해서 배웠다”, “일본에 유학왔다” 라는 두 개의 사건이 있다고 가정합시다. 만약 이 두 개의 사건만을 본다면 “일본경제에 대해서 공부했기 때문에 일본에 유학왔다” 라는 이야기가 구성됩니다. 하지만 “일본의 대학원에서 장학금을 받았다”, “미국의 대학원에 가는 것에 대해서도 생각했었다” 라는 사건이 그 중간에 이야기되어지면 조금 틀린 내러티브로 변하게 됩니다.

그러면 사람은 왜 이야기를 할까요? 주된 목적 중에 하나는 과거 경험의 기억입니다. 경험이 존재하기 보다는 “이야기를 하는 행위”를 통해 경험이 만들어져 가는 것입니다（野家、2005）. 사람의 인생중에는 여러가지 사건들이 일어나지만 그것들은 깨어진 유리의 파편처럼 무형의 혼돈으로 존재합니다. 인간은 그와 같은 여러가지 사건들을 끼워 맞춤으로써 경험(내러티브)으로 기억하게 됩니다. 하지만 모든 사건들이 경험을 구성하지는 않습니다. 어떤 사건은 또 다른 사건과 관련되지 않고 인생 경험의 한 일부로서 잊혀져 가거나 이야기 되어지지 않는 경우도 있습니다. 어떤 사람의 인생에 있어서 관련성 있는 것으로 이야기되어진 과거 사건의 집합체 즉 내러티브(경험)는 그 사람이 어떤 사람인가 라는 의미와 동시에, 말하자면 그 사람의 아이덴티티를 나타내기는 것이기도 합니다.

새로이 이주해 오신 한국분들의 라이프스토리라는 내러티브로 부터, 이야기하는 사람의 살아가는 세계나 그 사람의 아이덴티티를 엿보게 됩니다. 더 나아가 이번 프로젝트는 여러 세대의 한일 연구자들이 인터뷰에 참여하였습니다. 때문에 지금 이야기되어지는 인생은 새로이 이주해 오신 한국분들과 한일 연구자들의 공동작업으로 만들어진 내러티브이며 이야기하는 사람의 인생의 한 부분일지도 모릅니다. 그렇지만 이것을 읽은 분들은 신쥬쿠에 이주해 오신 한국분들의 “얼굴”이 전보다 조금은 확실히 보이지 않을까요?

인용문헌

Barthes, R. (1975). An introduction to the structural analysis of narrative. *New Literary History, 6*(2), 237-272.

Fisher, W. R. (1984). Narration as a human communication paradigm: The case of public moral argument. *Communication Monographs, 51*, 1-22.

Riessman, C. K. (2008). *Narrative methods for the human sciences*. Thousand Oaks, CA: Sage.

野家啓一（2005）『物語の哲学』岩波現代文庫

＜キーワード /키워드　2＞

人生に寄りそうライフサイクル論

川村千鶴子

ライフヒストリーの物語＜ナラティブ＞に耳を傾けることは、他者の「人生」に寄り添うことであり、想像を逞しくして、その人生を共有することにもなります。国境を越える人々の体験には、さまざまな困難が伴いますが、それらの克服の過程からは、その人の精神発達や人格的な成長を感じ取ることができます。

アイデンティティを学問的に概念づけたエリック・H・エリクソンは、人の精神発達や人格発達といったことは、生まれてから死ぬまでの長い人間の生涯全体のテーマであることに着目しました。鑪幹八郎によれば、エリクソンの発達論の有効性とその重要な意義は、人間生涯の展望の中で発達をとらえたことにあり、これをエリクソンは、「ライフサイクル論」と呼んでいるのです。

人の移動と人間発達、そしてライフサイクルに視座をもち、出産・保育・教育・就労・定住・医療・老後の現場のアクチュアリティに迫ってみると「よくがんばっているなぁ」という共感が沸いてきます。街の表層からは、見えなかった部分、つまりそれぞれの移動に伴う親密的な世界を垣間見ることができるのですね。

たとえば、多文化・多民族の妊娠と出産とケア、保育園空間から創出される協働の世界、外国系児童 6 割の公立小学校と言語施策など、人間発達と移住とは大きな関わり合いがあることが認識できます。それに、日本語学校のこと、留学のこと、エスニック・ビジネスの起業と展開、まちづくりへの参画などを聴いているとわくわくするような自己実現のプロセスを感じることもあります。新宿はこうしたトランスナショナルな現象を先進性をもって明示してくれる「多文化の磁場」でもあります。

このように人のライフサイクルにそって人間発達をみてみると実に多くの共通テーマが存在します。妊娠・出産・子育て、受験と塾、留学、学生生活とアルバイト、恋愛と家族、就職と起業、結婚と離婚、嫁と姑、親戚付き合い、信仰と祈り、介護と老後の幸せ、葬儀のお墓など生から死へのライフステージです。ライフサイクルの過程には、「ケア」の概念が潤滑油のような役割をもっていることも感じられます。ケアワークの負担をだれが担っているのかといったジェンダーの視点も生まれてきます。家族という親密圏のなかでの「市民」とは何かという政治性も感じられるようになります。

もっとも新宿に定住する者もあれば、通過点としてさらに海外に拡散する場合もあります。いづれにしても「新宿」は第二の故郷（ふるさと）となっているのですね。

このように人生に寄り添うことの効果は絶大です。ライフサイクル論は、多元価値社会での分断を防ぐことができるからです。貧富の格差、民族の格差、障害の有無による格差など、社会の分断を防ぐうえで、お互いの顔が見える関係性を築いていく努力は、大切なことだと感じています。

参考文献

鑪 幹八郎（たたら みきはちろう）著『アイデンティティとライフサイクル論』2002 年、ナカニシヤ出版
斎藤純一著『親密圏のポリティクス』2003 年、ナカニシヤ出版
川村千鶴子編著『多民族共生の街・新宿の底力』1998 年、明石書店
川村千鶴子、近藤敦、中本博皓編著『移民政策へのアプローチ―ライフサイクルと多文化共生―』2009 年、明石書店

＜キーワード /키워드　2＞

인생에 동행하는 라이프 사이클론

카와무라 치즈코（川村千鶴子）

라이프 히스토리의 이야기<내러티브>에 귀를 기울이는 것은 타인의 삶의 곁에 다가가는 것과도 같으며, 상상력을 강하게도 하며 그 인생을 공유하게도 합니다. 국경을 건너와 생활하는 사람들의 체험담에는 여러 어려움을 겪게 되지만 그러한 것들을 극복해가는 과정이 그려져 있고 우리는 그 속에서 사람의 정신적인 발달이나 인격의 성장을 느낄 수 있습니다. 에릭.H.에릭슨은 아이덴티티를 학문적으로 개념화한 사람입니다만, 그는 사람의 정신발달이나 인격발달이 사람이 태어나서 죽기까지 평생에 걸친 테마라는 것에 주목하였습니다. 타타라 미키하치로우 (鑪幹八郎)에 의하면 에릭슨의 발달론의 유효성과 중요한 의의(意義)는 인간의 삶 전체에 걸친 발달을 다룬 점에 있으며 에릭슨은 이것을 “라이프 사이클론(論)” 이라고 부르고 있습니다.

사람의 이동(移動)과 인간발달 그리고 라이프사이클에 초점을 두고 출산, 보육, 교육, 취직, 정주(定住), 의료, 노후의 생동감 넘치는 현장을 들여다 보면 “정말 열심히 살고 있구나” 라고 공감할 수 있을 것입니다. 거리의 겉모습만으로는 보이지 않았던 즉 가지각색의 이동(移動)과 함께 하는 친밀한 세계를 엿볼 수 있는 것이지요.

예를 들면, 다문화/다민족의 임신과 출산, 그리고 산후조리, 보육원으로부터 창출되는 협력의 세계, 외국인 아동이 60%를 차지하는 공립초등학교와 언어정책 등, 인간발달과 이동은 서로 크게 관여하고 있다는 것을 깨달을 수 있을 것입니다. 더군다나 일본어학교에서의 이야기, 유학중의 이야기, 에스닉(ethnic) 비지니스를 시작하거나 전개하는 것, 마치즈쿠리(지역사회활성화)에 참가하는 것 등, 듣기만 해도 두근거리는 그러한 자기실현의 과정을 느낄 때도 있습니다. 신쥬쿠(新宿)는 이러한 다국적 교류의 현상을 선진적으로 보여주는 “다문화의 자기장(磁氣場)” 과도 같습니다.

이렇게 사람의 라이프 사이클에 맞추어서 인간발달을 보면, 실로 많은 공통 주제가 존재합니다. 임신, 출산, 육아, 수험과 학원, 유학, 학교생활과 아르바이트, 연애와 가족, 취직과 기업(起業), 결혼과 이혼, 며느리와 시어머니, 친척과의 교제, 신앙과 기도, 간병과 노후의 행복, 장례후의 묘지 등 생에서 죽음까지의 인생무대 입니다. 라이프사이클의 과정에는,「CARE」 의 개념이 윤활유와 같은 역할을 가지는 것으로 보입니다. 보살피는 일의 부담을 누가 담당하느냐라는 젠더(Gender)에 관련된 시점도 생겨납니다. 가족이라는 친밀권 안에서의 「시민」이란 무엇인가 라는 정치성도 느끼게 되었습니다.

더군다나 신쥬쿠에 정주해서 사는 분도 있지만, 이곳을 통과지점으로 삼아 더 나아가 세계로 확산해나가는 경우도 있습니다. 어찌되었든 신쥬쿠는 제 2 의 고향이라고 할 수 있겠지요.

이처럼 인생에 있어서 함께 동행해 나아간다는 것의 효과는 이루 말할 수 없을 만큼 급니다. 라이프사이클론(論)은 다원적 가치를 추구하는 사회에서 분열을 막을 수 있습니다. 빈부의 격차, 민족의 격차, 장애의 유무에 따른 격차 등, 사회의 분열을 막기 위해서, 서로간의 얼굴이 보이는 관계성을 만들어 나가는 노력은 소중하다고 생각합니다.

참고문헌

鑪 幹八郎（타타라 미키하치로우） 著『アイデンティティとライフサイクル論』2002 년、ナカニシヤ출판
斎藤純一(사이토 쥰이치)著『親密圏のポリティクス』2003 년、ナカニシヤ출판
川村千鶴子編(카와무라 치즈코)著『多民族共生の街・新宿の底力』1998 년、明石書店
川村千鶴子(카와하라치즈코)、近藤敦(곤도 아츠시)、中本博皓(나카모토 히로쯔구)編著『移民政策へのアプローチ—ライフサイクルと多文化共生—』2009 年、明石書店

＜キーワード /키워드　3＞

言語景観（Linguistic landscape）

藤田ラウンド 幸世

言語景観は多言語的背景を持つ景観のことです。社会言語学においては、ここ 10 年の間に「言語景観(Linguistic landscape)」の概念が広がり、言語景観のアプローチから世界各地の多言語状況が新たな視点で映し出されつつあります。

言語景観に関しては、Landry & Bourhis（1997:25）は「特定の領域、あるいは地域の公共的・商業的表示における言語の可視性と顕著性」が、「道路標識、広告掲示板、街路名、店の商業看板、そして行政政府の建物などに表出された標識が、その地方行政区、州、または近代の都市特有の凝縮した塊として形成されている」と定義しました（庄司・バックハウス・クルマス 2009; Shohamy & Gorter 2009; Sebba and Zabrodskaja 2010)。

Landry & Bourhis の上記の定義を出発点に、言語景観の研究が進むにつれて、「凝縮した塊(agglomeration)」を読み解くためには、二言語併用や多言語併用の状況の中で「言語の可視性と顕著性」を見るための対象メディアが、「標識、看板、広告」から、看板や広告がさらに流動的な媒体、お店のポスター、ビラ、チラシ、切符に拡がり、言語の分析においても、流動的な媒体の上に印刷された「固定された記号(fixed signage)」や標識以外の公的空間に現れた記号としての文字の表出というような広がりを見せています（Shohamy & Gorter 2009; Sebba and Zabrodskaja 2010）。近代都市の環境の中に、グローバリゼーションがどのように多言語として表現されているかを追求しているものです。

第 18 回社会言語学シンポジウムでは、'Signs in context: multilinigual texts in semiotic space(文脈の中の記号:記号論的多言語空間における多言語で印刷されたテキスト(筆者訳)'という題名でグループ発表がありました。具体的には、**エストニア**におけるロシア語、英語、フィンランド語、フランス語の多言語の看板や商業広告、**台湾**における台湾のアイデンティティに関わる中国語の簡体字・繁体字表記、ローマ字表記、英語、フランス語、日本語の指標性、**エチオピア**の地域都市における現地語と公用語であるアムハラ語、また英語との混在状況、**南アフリカ**における黒人地域の消費者を意識したコマーシャルや商業広告の中に現れる多言語の混在、**フィンランド**の都市、ヘルシンキと周辺地方における英語とフィンランドの混ざり方の比較など、それぞれの国の公共標識、看板や広告、観光スポットでの多言語状況が具体例とともに報告されました。一方で、すでに二言語使用が定着したと考えられている**カナダ**のモントリオール（フランス語と英語）や**ベルギー**のブリュッセル（フランス語とフラマン語）の比較の中で、本来の二言語が厳密に実行されている地域と、そうではない地域、そのズレが都市計画や地域の成り立ちに実際には深く関わるといった、多言語に拡がるだけではなく、逆の軸、二言語使用という前提がありながら一言語が優位に立つ状況の報告もありました。二言語・多言語状況（バイリンガリズム・マルティリンガリズム）と社会との「融合」や「境界」の模索を分析していると言ってもいいかもしれません。

言語景観のいずれの研究も「グローバリゼーション」がキーワードとなっています。実際には、グローバリゼーションという国際化が国内の民族間、歴史上の多言語性などの歴史的要素と近年の経済的要素による移民言語の力関係にどのように影響を与えたか、こうした複雑な状況を言語上から読み解くといってもいいかもしれません。また、先のグループ発表後の全体討論では、言語景観の中に新たな新語が生み出されている可能性も指摘されました。これは、社会言語学の分野らしい視点ともいえます。例えば日本の外来語もそうですが通常意識することはなく生活の中で実際に使用される中で現地の人が「英語」だと思っている語彙が、実はそれは英語としては通じないばかりか現地語となっている可能性が高い、といった発表事例に見られた文字表記や新語に結実している言語的創造性が指摘されたもので

す。

まさに、言語景観から見えてくるものは、「言語の『都市景観』であり、多言語的背景をもつ景観(クルマス 2009:81)」だといえるでしょう。そして、言語景観は、各地により多言語の背景がそれぞれ異なり、また多言語の表出が時間により移り変わるものだともいえます。言語景観だけで、背景となる全ての文脈を映し出せるということはできませんが、切り取った景観の中に、その時間の中に埋め込まれた、文字記号・音声上・非言語も含めた「言語」を分析することができます。言語景観の中には、「言語」以外にも、多言語・多文化・多民族の力関係や歴史的事実も浮き彫りになるかもしれません。

日本の二言語・多言語状況に関わる言語景観は生活レベルで具現された言語表記を言語景観に見るという試みを、バックハウス(2009:147)が行政的背景として行った東京都の多言語表記の指針をもとにした事例や「日本」の言語景観について、庄司・バックハウス・クルマス(2009：10)らが日本の言語景観に関わる言語景観から言語と社会の複雑な関わりを可視化する要素として引き出した、「西欧化」、「国際化」、「多民族化」の概念に見ることができます。これは、これからの日本の言語景観の流れを作っているといえます。また、バイリンガリズム・マルティリンガリズムからのアプローチから、Fujita-Round and Maher (2008：393-404)らが、言語教育政策をたどり、近代化の中で日本が進めた「国際化」に関する記述も、こうした日本の言語景観につながるものだと位置付けることができます。

言語景観は、文字表記や新語として、多言語が融合した「言語的創造性」を通して多文化・多民族・多言語が共存する環境を映し出すでしょう。過去と未来につながる「現在」を切り取る一つのアプローチとして、言語景観は可能性を秘めた研究手法・概念を提供するものでしょう。

参考文献

ペート・バックハウス (2009)「第 6 章　日本の言語景観の行政的背景」, 庄司博史、ペート・バックハウス、フロリアン・クルマス編著『日本の言語景観』三元社, pp. 145-170

フロリアン・クルマス(2009)「第 3 章　言語景観と公共圏の起源」, 庄司博史、ペート・バックハウス、フロリアン・クルマス編著『日本の言語景観』三元社, pp. 79-94

庄司博史、ペート・バックハウス、フロリアン・クルマス編著 (2009)『日本の言語景観』　三元社

Fujita-Round, S. and Maher, J. C. (2008) 'Language Education Policy in Japan' in S, May & N, Hornberger (eds.) *Encyclopedia of Language and Education (2nd ed)*, Volume 1. NY: Springer, pp.393-404

Sebba, M. and Zabrodskaja, A. (Chairs) (2010) 'Signs in context: multilingual texts in semiotic space', in The Abstracts of Sociolinguistic Symposium 18: Negotiating transnational space and multilingual encounters, Univeristy of Southhampton, 1-4 September 2010, pp.141-145

Shohamy, E. and Gorter, D. (eds.) (2009) *Linguistic Landscape: Expanding the Scenery.* NY: Routledg

Landry, R. and Bourhis, R. Y. (1997) Linguistic landscape and ethnolinguistic vitality: An empirical study.　*Journal of Language and Social Psychology* 16, pp. 23-49

＜キーワード /키워드　3＞

언어경관（Linguistic landscape）

후지타라운도 사치요（藤田ラウンド 幸世）

언어경관이란 다언어적 배경을 지닌 경관을 말하는 것이다. 사회 언어학에서는 근래 10 년간「언어경관(Linguistic landscape)」의 개념이 확대되어, 언어경관에 대한 접근 방법으로 세계각지의 다언어상황이 새로운 시점에서 비추어지고 있는 중이다.

언어경관에 관해서, Landry & Bourhis（1997:25）는「특정영역, 또는 지역의 공공적・상업적표시에 있어서의 언어 가시성과 현저성」이「도로표식,광고게시판,가로명, 상점의 상업간판, 그리고 행정정부의 건물등에 표출된 표식이 그 지방행정, 주, 또는 근대의 도시특유의 응축된 덩어리로서 형성되어져 있다」고 정의했다（쇼우지(庄司)・Peter Backhaus・Florian Coulmas　2009; Shohamy & Gorter 2009; Sebba and Zabrodskaja 2010).

Landry & Bourhis 는 위의 정의를 출발점으로, 언어경관의 연구가 진행됨에 따라「응축된 덩어리(agglomeration)」를 해독하기 위해서는, 두언어병용이나 다언어병용의 상황속에서「언어의 가시성과 현저성」을 보기위한 대상 미디어가「표식, 간판, 광고」에서 간판이나 광고가 더욱 유동적인 매체, 상점의 포스터, 전단지, 광고지, 승차권까지 확대되어, 언어의 분석에 있어서도 유동적 매체상에 인쇄된「고정된 기호(fixed signage)」나 표식 이외의 공적공간에 나타난 기호로서의 문자의 표출과 같은 광범위함을 보여주고 있다.（Shohamy & Gorter 2009; Sebba and Zabrodskaja 2010）. 근대 도시 환경속에서 세계화(Globalization) 가 어떻게 다언어로서 표현되고 있는지를 추구하고 있는 것이다.

제 18 회 사회언어학 심포지엄에서는 'Signs in context: multilinigual texts in semiotic space(문맥중의 기호 : 기호론적 다언어공간에 있어서 다언어로 인쇄된 교재 (필자역)' 이라는 제목으로 그룹발표가 있었다. 구체적으로는 에스토니아(Estonia) 에 있어서의 러시아어, 영어, 핀란드어, 프랑스어의 다언어간판이나 상업광고, 대만에 있어서의 대만 아이덴티티에 관계된 중국어의 간체자(簡体字)・번체자(繁体字)표기, 로마자 표기, 영어, 프랑스어, 일본어의 지표성, 에티오피아(Ethiopia)의 지역도시에서의 현지어와 공용어인 암하라 어(Amhara 語) 또는 영어와 혼재상황, 남아프리카에 있어서 흑인지역의 소비자를 의식한 광고나 상업광고중에 나타나는 다언어의 혼재, 핀란드의 도시 헬싱키와 주변지방의 영어와 핀란드의 혼합방법의 비교 등, 각국의 공공표식, 간판이나 광고, 관광지에서의 다언어상황이 구체적인 예와 함께 보고 되었다. 한편에서는, 이미 두언어 사용이 정착되었다고 생각되어지는 캐나다의 몬트리올(프랑스어와 영어)이나 벨기에의 브뤼셀(프랑스어와 플라망어 Flamand 語)의 비교 중에서, 본래의 두언어가 엄밀히 실행되고 있는 지역과, 그렇지 않은 지역, 그 차이가 도시계획이나 지역의 성립에 실제로는 깊이 관계된다는 것 등, 다언어에만 확대되어지는 것이 아니라, 그 반대축인 두 언어사용이라는 전제가 있으면서 한 언어가 우위에 서는 상황에 대한 보고도 있었다. 두 언어・다 언어상황(Bilingualism・multilingualism) 과 사회와의「융합」이나「경계」의 모색을 분석하고 있다고 해도 좋을것이다.

언어경관에 대한 어느쪽 연구도 「세계화」가 키워드이다. 실제로는 세계화(Globalization)라는 국제화가 국내의 민족간, 역사상의 다언어성등 역사적요소와 최근의 경제적요소에 의한 이민언어의 힘의 관계에 어떤 영향을 끼쳤는가, 복잡한 상황을 언어상으로 해독한다고 해도 좋을 것이다. 또한, 앞선 그룹 발표 후의 전체토론에서는 언어경관중에 새로운 신어(新語)가 생겨나고 있는 가능성도 지적되었다. 이것은, 사회언어학 분야다운 시점이라고 할수 있지만, 예를들어 일본의 외래어도 그렇지만, 통상적으로는 의식되지 못한채 생활속에서 실제로 사용되어지는 것처럼, 현지 사람이「영어」라고 생각하고 있는 어휘가, 실은 그것은 영어로서는 통하지 않을뿐더러 현지어일 가능성이 높다 라는 발표사례에서도 알 수 있듯 문자표기나 신어로 결실되어진 언어적창조성이 지적된 것이다.

정말로, 언어경관에서 알수 있는 것은, 「언어의『도시경관』이며, 다언어적 배경을 가진

경관(Florian Coulmas2009:81)」이라고 할 수 있을 것이다. 그리고, 언어경관은, 각 지역에 따라 다언어의 배경이 각각 다르며, 또한 다언어의 표출이 시간에 따라 변해가는 것이라고 할 수 있다. 언어경관만으로 배경이 되는 모든 문맥을 비추어 낼 수 있는 것은 불가하지만, 잘라낸 경관중에는 그 시간속에 메워진 문자기호・음성상・비언어도 포함된「언어」를 분석할 수 있다. 언어경관 중에는 「언어」이외에도, 다언어・다문화・다민족의 힘의 관계나 역사적인 사실도 드러날 수 있을지도 모른다.

일본의 두 언어・다 언어상황에 관한 언어정책 중에, 생활수준에서 구현된 언어표기를 언어경관으로 보는 시도를 Peter Backhaus (2009:147)가 행정적인 배경으로서 행한 동경도의 다언어표기의 지침을 바탕으로 한 사례나「일본」의 언어경관에 대해서 쇼유지(庄司)・Peter Backhaus・Florian Coulmas(2009 : 10)가 일본의 언어경관에 관련된 언어경관에서 언어와 사회의 복잡한 관계를 가시화하는 요소로서 끌어낸 「서구화」,「국제화」,「다민족화」의 개념에서 볼 수 있다. 이것은, 앞으로의 일본의 언어경관의 흐름을 만들고 있다고 할 수 있다. 또한, Bilingualism・multilingualism 의 접근방식으로, Fujita-Round and Maher (2008 : 393-404)가 언어교육정책을 더듬어 가서, 근대화 속에서 일본이 진행한「국제화」에 관한 기술도, 이러한 일본의 언어경관에 연결되는 것이라고 자리매김 할 수 있다.

언어경관은, 문자표기나 신어로서, 다언어가 융합한 「언어적창조성」을 통한 다문화・다민족・다언어가 공존하는 환경을 낼 것이다. 과거와 미래에 연결되는 「현재」를 잘라내는 하나의 접근으로서, 언어경관은 가능성을 감춘 연구수법・개념을 제공하는 것이라고 할 수 있다.

참고문헌

Peter Backhaus (2009)「제 6 장 일본의 언어경관의 행정적배경」, 쇼우지히로시, Peter Backhaus・Florian Coulmas 편저『일본의 언어경관』三元社, pp. 145-170

Florian Coulmas (2009)「제 3 장 언어경관과 공공권의 기원」쇼유지히로시（庄司博史） Peter Backhaus・Florian Coulmas 편저『일본의 언어경관』三元社, pp. 79-94

쇼유지히로시（庄司博史）・Peter Backhaus・Florian Coulmas 편저 (2009)『일본의 언어경관』三元社

Fujita-Round, S. and Maher, J. C. (2008) 'Language Education Policy in Japan' in S, May & N, Hornberger (eds.) *Encyclopedia of Language and Education (2nd ed)*, Volume 1. NY: Springer, pp.393-404

Sebba, M. and Zabrodskaja, A. (Chairs) (2010) 'Signs in context: multilingual texts in semiotic space', in The Abstracts of Sociolinguistic Symposium 18: Negotiating transnational space and multilingual encounters, Univeristy of Southhampton, 1-4 September 2010, pp.141-145

Shohamy, E. and Gorter, D. (eds.) (2009) *Linguistic Landscape: Expanding the Scenery.* NY: Routledg

Landry, R. and Bourhis, R. Y. (1997) Linguistic landscape and ethnolinguistic vitality: An empirical study. *Journal of Language and Social Psychology* 16, pp. 23-49

＜コラム・論考 / 칼럼 논고 1＞

インタビュー調査について

武田里子

このプロジェクトは、調査チーム 10 人でニューカマー韓国人 100 人のライフヒストリーを集め、それらを文字化して公開することにより、日本人と韓国人の双方で共有できるようにすることを目指しています。インタビューは、①日本に来日した経緯、②現在何をしていて、③どのような将来構想をもっているのかを中心に、家族関係や日本人との関係、日本社会についての意見などを織り込んで自由に語っていただく手法をとっています。まだ、インタビュー内容をどのように要約するかなど、メンバー間で試行錯誤をしている最中ですが、今回は初めての報告なので、実際にどのようにインタビューを進めているのかについて、私の経験と感想を中心にご紹介します。

これまでに私がインタビューしたのは、日本語学校生 3 名と韓国系企業で働く 3 名です。性別は女性 4 名と男性 2 名、年齢は 21 歳から 33 歳、来日時期は 1998 年の方 1 名を除くと 2002 年以降です。6 人に共通しているのは、いずれも日本での生活の第一歩を日本語学校生として歩みだしていることです。日本で学ぶ韓国人留学生は 1 万 9605 人と国籍では中国に次いで 2 番目に多く、留学生 13 万 2720 人（2009 年）の 15%を占めます。韓国人の若い世代は、日本語学校を経て大学や専門学校に進学、あるいは就職するというライフコースを歩んでいる方が多いのではないかと思います。

最初の日本語学校生は知人に紹介してもらい、次の方は、その方から友だちを紹介してもらうという、スノーボール方式で進めています。初めは面識のない方に上手く会えるかどうか、インタビューがちゃんとできるだろうか不安でしたが、これまでのところ問題なく進んでいます。インタビューを始める前に、プロジェクトについてパンフレットにそって説明をします。インタビューを IC レコーダーで記録させていただくこと、文字起こしした内容を再度確認していただくこと、そしてその内容をホームページや紙媒体で公開することを明記した同意書にサインをいただいた後でインタビューを始めます。

インタビュー内容は報告書の頁をお読みいただくこととして、ここでは私自身がこのインタビューを通じて印象に残ったことを記します。それは、彼らの家族観や社会観、人生観と私が限られたメディアや文献情報から形成してきた「韓国観」とのギャップでした。ひょっとすると、お話を伺った方々は、日本（海外）で学び働くという意味では、特別な韓国人かもしれません。それでも韓国社会の変化のスピードの速さをうかがい知ることができます。わずか 6 人の物語に過ぎませんが、韓国と日本という 2 つの国を往来しながら、自分らしく生きたいという思いと結婚や家族規範との間で悩み、夢を追い求めて挫折し、そこから再び立ち上がってくる彼らの物語は、当たり前と言えば当たり前ですが、人が生きていくこととは、日々新しい物語を紡ぎだしていくことだということに気づかされます。これから紹介していくニューカマー100 人の物語の中に、これをお読みいただく皆さんにも新たな発見や共感する言葉との出会いがあり、それらがニューカマー韓国人との新たな「顔の見える」関係づくりの一助になることを願っています。

<コラム・論考 / 칼럼 논고 1>

인터뷰 조사에 대하여

타케다 사토코（武田里子）

이번 프로젝트는 10 명의 조사팀이 새로이 이주해 오신 한국인 100 명의 라이프 히스토리를 모아, 문자화하여 보고서와 홈페이지에 공개함으로써 한국인과 일본인이 상호간에 공유할 수 있도록 하는 것을 목표로 하고 있습니다. 인터뷰는 1)일본에 오게 된 경위, 2)현재 무엇을 하고 있는지, 3)미래에 대해 어떠한 계획을 가지고 있는지를 중심으로 가족 관계, 일본인과의 관계, 일본사회에 대한 의견 등을 포함하여 자유로이 이야기하는 방식으로 이루어지고 있습니다. 또한 이번이 첫 보고이기에 인터뷰 내용을 어떻게 요약할지, 멤버들 사이에서 시행착오를 거치고 있는 중이지만 실제로 어떤 식으로 인터뷰를 이끌어 나갈 지에 대하여 저의 경험과 감상을 중심으로 소개하고자 합니다.

지금까지 저는 일본어학교 학생 3 명과 한국계 기업에서 일하시는 3 명을 대상으로 인터뷰를 하였습니다. 성별은 여성이 4 명, 남성이 2 명이었으며, 나이는 21 세부터 33 세, 일본에 온 시기는 한명이 1998 년이고 나머지는 2002 년 이후에 온 분들입니다. 6 명의 공통된 점은 전부 일본 생활의 첫 걸음을 일본어학교에서 시작했다는 점입니다. 일본에서 공부하는 한국인 유학생은 19.605 명으로 중국 다음으로 많고 유학생은 132.720 명(2009 년)중에 15%를 차지하고 있습니다. 한국의 젊은 세대들은 일본어학교를 거쳐 대학이나 전문학교에 진학, 또는 취직하는 등의 라이프 코스를 거쳐 나가는 경우가 많다고 생각되어집니다.

처음에는 아는 사람에게 일본어학교 학생을 소개 받아, 그 다음은 그 사람으로 부터 친구를 소개받는 스노볼방식으로 진행하고 있습니다. 처음에는 면식이 없는 사람과 만나므로 잘 만날 수 있을지, 혹은 초면인 저의 인터뷰에 응해줄 지 염려되었지만, 지금까지는 인터뷰에 협조해주신 덕분으로 순조롭게 진행되고 있습니다. 인터뷰를 시작하기 전, 프로젝트에 관하여 팜플렛의 내용을 설명하고 인터뷰를 IC 레코더에 녹음하는 것, 문자화한 내용을 다시 확인하는 것, 그리고 그 내용을 홈페이지나 인쇄물에 공개하는 것을 명시한 동의서에 사인을 받은 뒤에 인터뷰를 시작합니다.

인터뷰 내용에 대해서는 보고서의 항목을 참조해 주시기 바라며 여기에서는 제 자신이 인터뷰를 하면서 인상 깊었던 점을 쓰도록 하겠습니다. 그것은 그들의 가족관이나 사회관, 인생관과 한정된 메디아나 문헌정보를 통해 형성된 저의 “한국관”사이의 차이입니다.

처음에는 인터뷰를 한 사람들은 일본(해외)에서 배우며, 일한다는 의미에서, 보통의 한국인과는 다를 지도 모른다고 생각했습니다, 그러나 그들의 이야기에서 등장하는 가족이나 친구의 언어들 속에서 , 저의 스테레오타입적인 한국의 이미지를 기분좋게 배신당하는 것들이 많이 있었습니다. 조사를 실시하고, 그것들을 분석해서 문자화 하는 중에도 현장은 변화하고 있습니다. 조사연구와 현장과의 사이에는 결코 매꿀 수 없는 시차가 계속 존재합니다. 이 프로젝트에서는, 새로이 이주해 온 한국인의 이야기를 정중히 기록해서, 다양한 뉴커머 한국인의 존재가 보일 수 있도록 하는 것을 목적으로 합니다. 이 이야기를 어떻게 해독할 지는, 읽는 여러분을 포함해서, 저희 연구자들의 다음 작업이 될 것입니다.

현재 제가 기록한 것은, 비록 6 명의 이야기이지만, 한국과 일본이라는 두 나라를 오고 가면서 자신다운 삶을 살고자 하는 마음과 결혼이나 가족규범 사이에서의 고민, 꿈을 쫒는 과정에서의 좌절, 그리고 다시 일어서 나아가는 그들의 이야기는, 당연한 이야기이지만, 사람이 살아간다는 것은 매일 매일 새로운 이야기를 만들어 나가는 것이라는 사실을 깨우쳐 줍니다. 지금부터 소개하는 100 명의 이야기 안에, 읽는 여러분들에게도 새로운 발견이나 공감되는 부분들과의 만남이 있어서 그것이 새로이 이주해 오신 한국분들과의 새로운 “얼굴이 보이는” 관계를 만들어 가는데 조금이나마 도움이 되기를 바랍니다.

＜コラム・論考 / 칼럼 논고 2＞

記録集 1&2 におけるインタビュー対象者の分析

若園雄志郎

本プロジェクトでは、スノーボールサンプリングにより記録集 1 では 9 名、2 では 18 名、計 27 名の協力者にインタビューを行ってきた。ここではインタビューに協力していただいた方々のデータ的な分析を行う。これによりインタビューから見えてきたことを明らかにし、今後のインタビューの対象や方法について検討を加えるための基礎資料としたい。検討にあたっては記録集にある内容から全ての分析を行った。そのためここでの情報は全てインタビュー時のものである。

＜1. 性別・年齢について（表 1）＞

27 名のうち男性は 9 名、女性は 18 名であった。すなわち男女比は 1：2 となっており、男性に対するインタビューが比較的少ない。年代は 20 代が 11 名、30 代が 10 名、40 代が 6 名である。30 代及び 40 代における男女比は 1：1 であるが、20 代のみ 1：10 となっており、圧倒的に女性へのインタビューが多くなっている。これは後述するように協力者の職業が関係している部分が大きいと考えられるが、その他にも女性のインタビュアーによるインタビュー数が多いためでもあるだろう。

＜2. 日本滞在期間について＞

日本滞在期間は最も短い方で 4 ヶ月、最長で 22 年であり、平均すると約 7 年 4 ヶ月である。

＜3. 職業について（表 2）＞

職業は日本語学校・大学・大学院などの学生が 13 名、自営業 5 名、会社員 5 名、韓国語講師、大学助手、主婦、パートが各 1 名である。学生のうち女性は全て 20 代であり、これが前述の性別年齢構成に影響しているといえる。すなわち、知人の紹介を基本としたインタビュー手法をとっているため、同級生を紹介していただける場合が多く、また同時に比較的時間に余裕のある協力者は学生になってしまうということが考えられるだろう。

＜4. 出身地について（表 3）＞

首都ソウル出身が 13 名ともっとも多く、インタビュー全体の約半分を占めている。次いで多いのは釜山（4 名）である。首都ソウルおよび韓国国内に 6 カ所ある人口 100 万人以上の「広域市」出身を合せると 22 名となり、インタビュー全体の 8 割が都市部の出身であるといえる。ただし、具体的な出身地を教えていただいた場合もあれば公開を道レベルまでにしてほしいという要望がある場合もあり、また来日直前に居住していた地域を回答する場合もあると考えられるため、数値の若干のぶれはあり得るだろう。

＜5. 来日動機について＞

親族などによる誘いやすすめが主な来日動機となっているのは全体の 3 分の 1 となる 9 名であった。この中には「日本で親族が経営している企業や商店を手伝うため」という場合や、必ずしも仕事の手伝いのためというわけではなく「日本にいる（行ったことのある）親族が誘った・勧めた」という場合があった。

また、「日本語を学んだため」「日本文化に関心があった」など日本や日本語に対する興味関心が来日動機となっていたのは 7 名であった。この場合の多くは現在、日本語学校や大学における留学生として滞在している。もちろんこれ以外で「○○を学ぶため」と明確に話していた方は 3 名であった。

逆に来日動機が明確ではない、ないしは海外であればどこでもかまわなかったという方も若干みられた。いらっしゃった。

＜6. 日本・新宿・新大久保について＞

日本全体に対しては概ね好感をもっている場合が多いが、新宿に対しては人と人とのつながりが希薄

であることを指摘している方が数名いた。特に来日時は地方に在住し、その後新宿に移り住んだ場合では、地方では国籍に関係なく（ないしは外国籍であるため）親切にされることが多かったのに対し、新宿では周囲がお互いに無関心であることが多いように感じられていると述べた方が 2 名いた。あるいは警察官による職務質問に代表されるような不快な経験をすることが多いという方もみられた。

新大久保に対しては韓国籍の方々が多いことに対する受け止め方によって親しみがあると述べた方、あまり好きではなく行かないようにしていると述べた方がほぼ半分ずつであった。親しみがあると述べた場合は生活上の利便性や交流ができることを理由として挙げており、逆に好きではないと述べた場合は日本語や日本の文化を学びに来ているのでわざわざ韓国人が多いところに行くことはないとのことであった。

ただし、インタビュー時の流れによって特に語られなかった場合もあることを付記しておきたい。

＜7. 将来について＞

明確に述べていない場合もあるが、「最終的には韓国に戻りたい」「当面は日本にいる」「わからない・考えていない・その他」と述べたのはそれぞれ全体の約 3 分の 1 であった。「その他」には、日本と韓国以外の国を挙げた方や環境が整っていればどの国でもいいと述べた方が含まれている。「日本にいる」と述べていた場合で子どもがいる場合は、やはり子どもたちのアイデンティティや母語の習得について気がかりであるようだ。

以上、記録集 1&2 の分析を行ってきた。1～4 の分析結果を受け、今後は手薄な箇所（20 代の男性や社会人として活躍している女性など）にインタビューができればと考えられる。
目標の 100 名に対して達成率は約 25%ではあるが、協力いただいた一人一人の貴重なお話を伺うことができた。もちろんそれぞれの環境や考えは多種多様であり、数値的な傾向はあくまでも参考とした上で隣人を見つめ直すきっかけになれば幸いであろう。

表 1　年代（単位：人）

	男性	女性	計
20 代	1	10	11
30 代	5	5	10
40 代	3	3	6
計	9	18	27

表 2　職業（単位：人）

	男性	女性	計
学生	1	12	13
自営業	3	2	5
会社員	4	1	5
その他	1	3	4

表 3　出身地（単位：人）

地名	人数
ソウル特別市	13
釜山広域市	4
蔚山広域市	2
京畿道	2
大田広域市	1
光州広域市	1
大邱広域市	1
全羅北道	1
慶尚南道	1
延辺朝鮮族自治州（中国）	1

＜コラム・論考 / 칼럼 논고 2＞

기록집 1&2 의 인터뷰 대상자에 관한 분석

와카조노 유시로(若園雄志郎)

본 프로젝트에서는, 스노볼샘플링 방법으로 기록집 1 에서는 9 명, 기록집 2 에서는 18 명, 합계 27 명의 협력자에게 인터뷰를 해왔다. 여기서는 인터뷰에 협력해주신 분들의 데이터를 분석하고자 한다. 이것을 통해 인터뷰에서 잘 파악하지 못했던 부분들이 명확해지고, 앞으로의 인터뷰 대상과 방법에 관해 검토할 때의 기초자료로 삼고자 한다. 검토방법으로는, 기록집에 있는 내용들을 중심으로 분석했다. 따라서 여기의 정보는 모두 인터뷰 당시의 상황임을 밝혀둔다.

＜1. 성별・연령에 관하여（표 1）＞

27 명중에 남자는 9 명, 여자는 18 명 이다. 즉, 남녀비율로는 1 : 2 이며, 남자에 대한 인터뷰가 비교적 적다. 연령대로는 20 대가 11 명, 30 대가 10 명, 40 대가 6 명이다. 30 대 및 40 대의 남녀비율은 1 : 1 이지만, 20 대는 1 : 10 으로 압도적으로 여성에의 인터뷰가 많다. 이것은 나중에 부연하겠지만, 협력자의 직업과 관계된 부분의 영향이 크다고 본다. 그리고 그 외에도 여성 인터뷰어에 의한 인터뷰 수가 많기 때문이기도 할 것이다.

＜2. 일본체제기간에 대하여＞

일본체제기간은 가장 짧게는 4 개월에서 가장 길게는 22 년으로, 평균을 내면 약 7 년 4 개월이다.

＜3. 직업에 관하여（표 2）＞

직업은 일본어학교･대학･대학원등 학생이 13 명, 자영업이 5 명, 회사원이 5 명, 한국어강사, 대학교 조교, 주부, 파트타임이 각 각 1 명이다. 학생중에 여자분은 전부 20 대로, 이것은 앞서 설명했듯이 성별연령구성에 영향을 미치고 있다고 할수있다. 즉, 지인의 소개를 기본으로 한 인터뷰 수법을 취하고 있으므로, 동급생을 소개시켜주는 경우가 많고, 동시에 비교적 시간적인 여유가 있는 협력자는 학생인 경우가 많으므로 그 영향으로도 볼수있다.

＜4. 출신지에 관하여（표 3）＞

수도 서울출신이 13 명으로 가장 많고, 인터뷰 전체의 약 반수를 차지하고 있다. 다음으로 많은곳은 부산으로 4 명이다. 수도 서울 및 한국국내에 6 군데 있는 인국 100 만명을 넘는 광역시 출신을 합하면 22 명으로, 인터뷰전체의 80%가 도시부 출신이라고 할수 있다. 다만, 구체적인 출신지를 알려주신 분도 있지만, 공개할때 도 부분 까지만 해달라고 부탁하신 분도 있고, 또는 일본에 오시기 직전에 거주하고 있던 지역을 말씀하신 분도 있는것을 감안한다면, 수치에는 약간의 오차가 있으리라 본다.

＜5. 일본에 오게 된 동기에 대하여＞

친척등에 의한 권유나 추천이 주된 동기가 된 경우는 전체의 3 분의 1 로 9 명 있었다. 그 중에는「일본에서 친척이 경영하고 있는 기업이나 가게를 돕기 위해서」라는 경우나, 반드시 일을 돕기위해서는 아니고「일본에 있는 (또는 일본에 간적이 있는) 친척이 권유했다・추천했다」라는 경우를 들수 있다. 또한,「일본어를 배우기 위해서」「일본문화에 관심이 있어서」등 일본이나 일본어에 관한 흥미관심이 일본에 오게 된 동기가 된 경우는 7 명이였다. 이 경우의 대부분은 현재 일본어 학교나 대학에서 유학생으로 체재하고 있었다. 물론 그외에도「○○을 배우기 위해」라는 명확한 답변을 하신 분도 3 분 계셨다. 반대로 일본에 오기된 동기가 명확하지 않거나, 또는 해외라면 어디라도 상관없었다는 분도 몇분 계셨다.

＜6. 일본・신쥬쿠・신오오쿠보에 대하여＞

일본전체에 대해서는 대체적으로 호감을 가지고 있는 경우가 많지만, 신쥬쿠에 대해서는 사람간의 연관이 희박하다는 것을 지적하신 분이 많았다. 특히, 처음 일본에 왔을때 지방에 살다가, 나중에 신쥬쿠에 옮겨살게된 경우, 지방에서는 국적에 관계없이 (또는 외국국적이여서) 친절하게 대해주는

경우가 많았던것에 비해, 신쥬쿠에서는 주변이 서로간에 무관심한 경우가 많다고 느낀다고 말씀하신 분이 2 분 계셨다. 또는 경찰관에 의한 직무질문으로 인한 불쾌한 경험을 하는 경우가 많다고 하는 분도 계셨다.
신오오쿠보에 대해서는 한국국적의 분이 많은 것에 대해 받아들이기에 따라 친근감이 있다고 하시는 분과 별로 좋아하지 않아서 되도록 안가려고 한다고 하시는 분이 반반씩이였다. 친근감이 있다고 하신 경우는 생활상의 편리성이나 교류가 가능하다는 것을 이유로 들고 있고, 반대로 좋아하지 않는다고 하신 경우는 일본어나 일본문화를 배우기 위해 왔는데 일부러 한국인이 많은 곳에 갈 필요는 없다는 것이었다.
단, 인터뷰를 할때의 흐름에 따라서 특별하게 말씀하시지 않으신 경우도 있다는 것을 부연해두고자 한다.

＜7. 장래에 관하여＞
명확히 말씀하시는 분도 계시지만,「최종적으로는 한국에 돌아가고 싶다」「당분간은 일본에 있겠다」「모르겠다・생각해보지 않았다・그 외」라고 말씀하신분은 각각 전체의 3 분의 1 정도였다.「그 외」에는, 일본과 한국이외의 나라를 말하거나 환경만 갖춰져 있다면 어느나라라도 상관없다는 분도 포함되어있다.「일본에 있겠다」라고 하신 경우, 자녀가 있는 경우는 역시 자녀들의 아이덴티티나 모어교육이 신경쓰인다고 했다.

이상으로, 기록집 1&2 의 분석을 행했다. 1～4 의 분석결과, 앞으로는 부족한 부분인 20 대 남성이나 사회인으로 활약하고 있는 여성분들에게 인터뷰를 늘려갔으면 한다.
목표의 100 명에 대해 달성율 약 25%인 상태지만, 협력해주신 한분 한분의 귀중한 이야기를 들을수 있었다. 물론 각각의 환경이나 사고는 각양각색으로, 수치적인 경향은 어디까지나 참고 정도로 이웃을 다시금 바라보는 계기가 되었으면 좋겠다.

표 1　연령대（단위：명）

	남성	여성	합계
20 대	1	10	11
30 대	5	5	10
40 대	3	3	6
합계	9	18	27

표 2　직업（단위：명）

	남성	여성	합계
학생	1	12	13
자영업	3	2	5
회사원	4	1	5
그 외	1	3	4

표 3　출신지（단위：명）

지명	인원수
서울특별시	13
부산광역시	4
울산광역시	2
경기도	2
대전광역시	1
광주광역시	1
대구광역시	1
전라북도	1
경상남도	1
연변조선족자치주（중국）	1

＜コラム・論考 / 칼럼 논고 3＞

統計から見る新宿区の韓国人

堀内康史

＜新宿区の韓国人の概要＞

新宿における韓国人[1]の存在は、どのようなものであろうか。ここでは、統計データを元にして、新宿区における韓国人について見ておきたい。

ここの最初の 2 つのグラフは、2010 年 1 月 1 日現在の外国人登録人口[2]のデータから作成したものである。

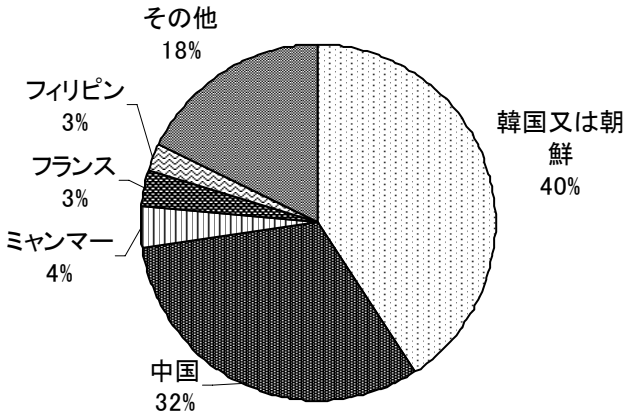
図 1 は新宿区に登録している外国人の国籍別割合を示している。

最も多いのは約 40%の「韓国又は朝鮮」というカテゴリーの人々で、実数では 14,332 人である。ここには、戦前・戦中から日本にいるいわゆるオールドカマーとしての韓国・朝鮮籍の人々も含まれているが、後述するように多くはニューカマーと言われる人々であると考えられる。ちなみに、第 2 位は「中国」で 32%である。この 2 つのグループで実に全体の約 4 分の 3 を占めている。第 3 位からは「ミャンマー」、「フランス」、「フィリピン」と続いていくが、いずれも 5%未満の割合である。

新宿区の国籍別外国人割合と日本全体のそれ(図 2)を比較すると、韓国や中国出身者が多い傾向は同じであるが、全国では「中国」が 32%で 1 位、「韓国・朝鮮」が 26%で 2 位であるが、新宿では「韓国・朝鮮」が 40%で 1 位、「中国」が 32%で 2 位となっている。やはり新宿区には「韓国・朝鮮」の人々が集中していると言えよう。ちなみに全国レベルの統計で、「韓国・朝鮮」の割合は戦後ずっと第 1 位であったが、2007 年に「中国」が取って替わっている。

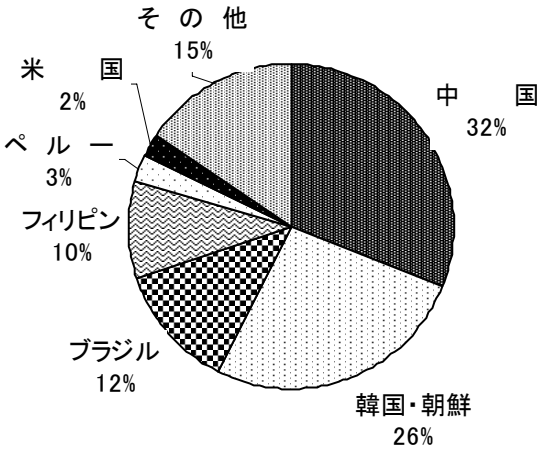
もう 1 点、全国データとの比較で分かることは、新宿区には「ブラジル」がほとんど見

図1　新宿区の国籍別外国人割合(2010)



出典：新宿区,2010,『新宿区の統計（平成 22 年)』より作成

図2　日本全体の国籍別外国人割合(2010)



出典：入国管理局ホームページ

（ http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00005.html, 2010.10.15 アクセス）より作成

[1] 本稿では韓国人について記述するものの、実際には以下の記述のように、統計データとしては朝鮮籍の人も含まれる。

[2] ここでは、あくまでも外国人登録に基づく統計であるため、この地域の実際の外国人の存在を直接的に説明するものではない。例えば、当初新宿区で登録したのち新宿区外に転出したものの、転居を届け出ていない場合は登録が新宿区に残ることになるなどのズレは少なからず生じる。また、逆に、新宿区以外に登録している者が、働きに来ていたり、就学している場合もあることは留意されたい。

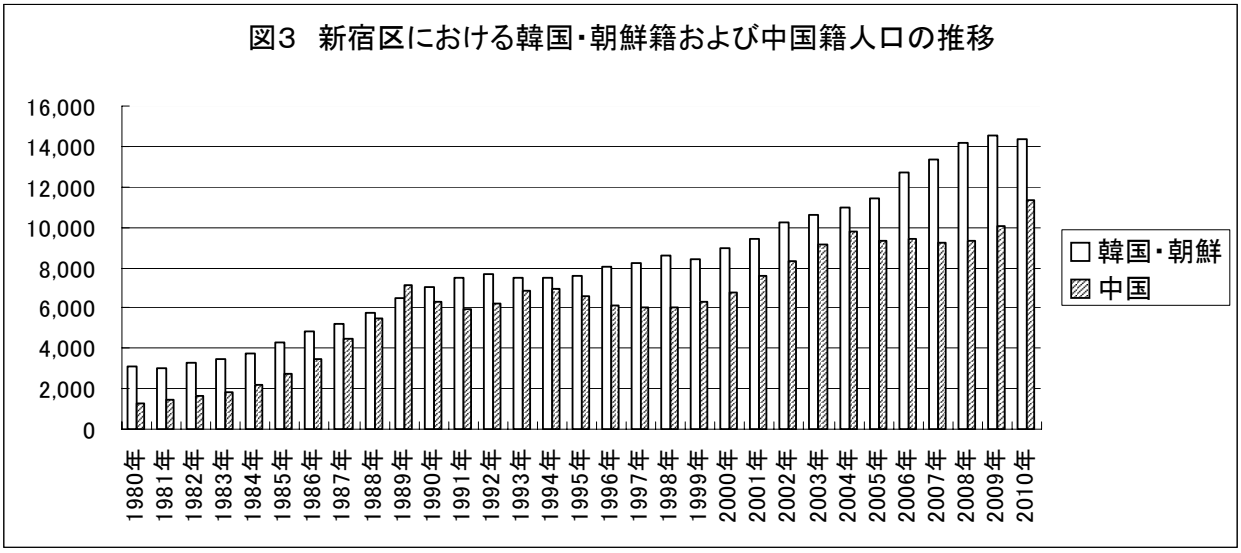
られない点である。ブラジル人は第 2 次産業に従事しているケースが多く、地方都市などに住んでいることが多い。それに対し、韓国人や中国人は様々な地域に満遍なくいるともいえるが、大都市を中心に就学・就業し定住していることが多い。

＜時系列に見た韓国・朝鮮籍の人々＞

次に時系列のデータを元に、新宿区の韓国人登録人口を概観してみる。図３は、新宿区の外国人登録データの内、「韓国・朝鮮」および「中国」の人口を時系列にグラフ化したものである。この 30 年間に限定したのは、紙幅の関係ということもあるが、円高を背景に日本に外国人が増え始めたのが 80 年代後半であったこと、また韓国人の日本への大量流入が 89 年の韓国の海外旅行自由化によるもの（高 1997: 63)、と言われているので、その前後を含めて概観しようという目的でこの期間に限定した。

図３では、80 年代後半から「韓国・朝鮮」も「中国」も共に増加し始め、89 年に順位が一度入れ替わるものの、その後は現在まで、「韓国・朝鮮」がやや大きな差をつけて 1 位を保っている。

そもそもなぜこの地に外国人が多いのかについては、複数の要因が考えられるが、一つは歌舞伎町に



出典：新宿区,1980-2010,『新宿区の統計（昭和 55 年－平成 22 年)』より作成

隣接した地域であることに由来すると考えられている。歌舞伎町には台湾系や韓国系の所有するビルも多く、1980 年代にそこで働く従業員たちがこの大久保地区に多く住んでいたというものである（稲葉 2008: 56)。そのほか同じ 80 年代に日本語学校が増えたことなどが、韓国人を含めた外国人増加の要因の一つと考えられている（稲葉 2008: 61-62)。この大久保地区が韓国系の人々の集まる地域として、メディアを通して多くの人に認知されるようになったのは、2002 年のサッカーW 杯の時であろう。ここにある韓国料理店が行った駐車場でのパブリックビューイングと、その熱狂の様子はメディアを通して広く紹介されることになった。また 2003 年から 04 年にかけてはドラマ「冬のソナタ」が放送され、いわゆる韓流ブームを呼び起こし、韓流グッズを取り扱う店舗が大久保地域に増加した。このような変遷を経て、現在 JR 新大久保駅から明治通りにかけてのエリアは、韓国系の店舗・施設が集中するようになっている[3]。

＜ニューカマーの割合＞

なお、これらの「韓国・朝鮮」の人々の内、どの程度の割合がニューカマーなのであろうか？ニュー

[3] この店舗等の看板などによる視覚的な存在感については、本書掲載の藤田ラウンド幸世「生活空間を映し出す多言語景観」に興味深い考察があるので参照されたい。

カマーの定義は、「オールドカマー以外の人々」となるので、オールドカマーの定義が必要になる。ここでは統計上のカテゴリーとの整合性から、サンフランシスコ講和条約発効（1952 年）以前から日本に在住していた旧植民地出身者およびその子孫、としておく。これは現在の滞在資格でいうと「特別永住者」[4]というカテゴリーに相当する人々である。新宿区の資料で[5]、この「特別永住者」が記載されている最も古い滞在資格別の統計は、1991 年 12 月末のものであり、この時 1,183 人が登録されている。

2010 年 10 月 9 月末の統計では、「韓国・朝鮮」籍の人は全体で 14,540 人おり、そのうち「特別永住者」は 1,498 人である。法律上および統計上オールドカマーと言える人々は約 1 割、逆にニューカマーと言える人は約 9 割といえよう。ただし、日本に帰化した人々はもちろんここに含まれていない。このように現在 14,000 人を超える「韓国・朝鮮」登録人口の多くは、やはり近年移り住んできたニューカマーの人々と言えるだろう。

2000 年以降のコンスタントな韓国人の増加は、この新宿（特に大久保周辺）が、韓国系の人々にとって象徴的な意味を持ち始め、さらに多くの人を引き付け、さらにまた象徴的な意味合いが増す、というような循環ができていることを示していると考えられる。

【参考文献】

稲葉佳子，2008,「受け継がれていく新住民の街の遺伝子」川村千鶴子編著『「移民国家日本」と多文化共生論』明石書店
金敬得，2005,『新版　在日コリアンのアイデンティティと法的地位』明石書店
高鮮徽，1997,「韓国人」駒井洋編『新来・定住外国人がわかる事典』明石書店

[4] この滞在資格は「日本国との平和条約に基づき日本の国籍を離脱した者等の出入国管理に関する特例法」（1991 年法律第 71 号）の施行により定められた資格。これ以前は、協定永住者、一般永住者、法 126 該当者等に分けられていた在日韓国・朝鮮人の法的地位が、この年に特別永住者に一元化された（金 2005; 184）。

[5] 新宿区戸籍住民課所蔵の在留資格別人数調査表。

＜コラム・論考 / 칼럼 논고 3＞

통계로 보는 신쥬쿠의 한국인

호리우치 타카시 (堀内康史)

＜신쥬쿠의 한국인의 개요＞

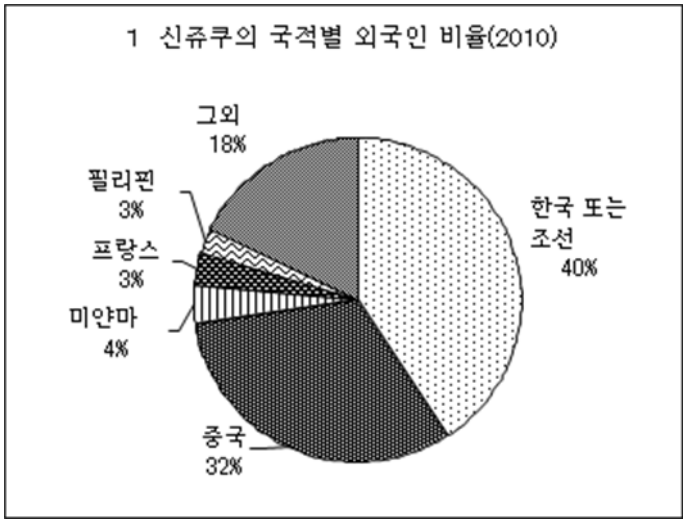
신쥬쿠에 있어서 한국인[1]의 존재는, 어떤 것일까? 여기 서는 통계 데이터를 중심으로 신쥬쿠의 한국인에 관련해서 살펴보고자 한다.

처음 두 그래프는, 2010 년 1 월 1 일 현재의 외국인등록 인구[2]자료를 바탕으로 작성 한 것이다.

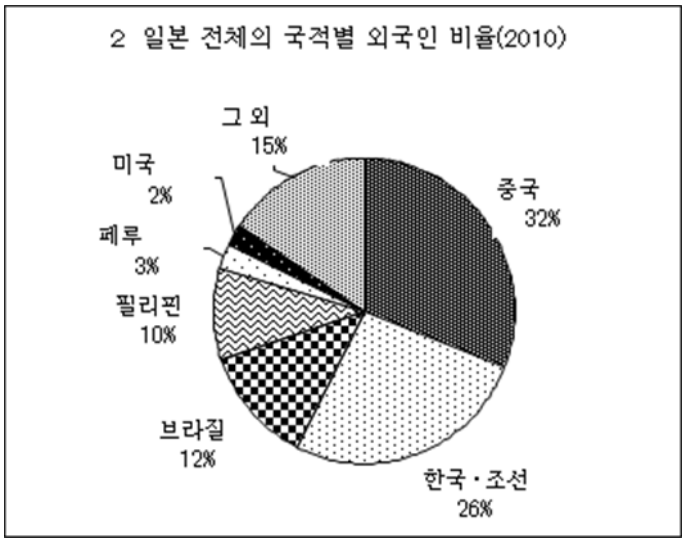
図 1 은 신쥬쿠에 등록되어 있는 외국인의 국적별 비율을 표시하고 있다.

가장 많은 나라가 약 40% 로「한국 또는 조선」 이라는 카테고리의 사람들이며, 실제 수로는 14,332 명이다. 여기 에는, 전쟁전이나 전쟁중일때 부터 일본에 있었던 말하자면 올드커머로서의 한국・조선 국적의 사람들도 포함되어 있지만, 나중에 부연하듯이 많은 뉴커머라고 불리는 사람 들이라고 생각할 수 있다. 덧붙여, 제 2 위는「중국」으로 32%를 차지한다. 이 두 그룹 이 실제로 전체의 약 4 분의 3 을 차지하고 있다. 제 3 위부터는「미얀마」、「프랑스」、「필리핀」순이지만, 모두 5%미만을 차지하고 있다.

신쥬쿠구의 국적별 외국인의 비율과 일본전체의 것(図 2)을 비교하면, 한국이나 중국 출신자가 많다는 경향은 같지만, 전국에서는「중국」이 32%로 1 위,「한국・조선」이 26%로 2 위 이지만, 신쥬쿠에서는「한국・조선」이 40%로 1 위、「중국」이 32%로 2 위 이다. 역시 신쥬쿠구에서는「한국・조선」의 사람들이 집중되어 있다고 말할수 있다. 덧붙이자면



출전 : 신쥬쿠,2010,『신쥬쿠의 통계 (2010 년) 』에서 작성



출전 : 입국관리국홈페이지

(http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00005.html, 2010.10.15 열람) 에서 작성

---

[1] 이 원고에서 한국인에 대하여 기술하는 것은, 실제로는 아래에 기술하듯 통계자료 로서는 조선족 분들도 포함되어있다.

[2] 여기서는 어디까지나 외국인등록에 기초한 통계이므로, 그 지역의 실제 외국인의 존재를 직접적으로 설명하는 것은 아니다. 예를들면, 처음 신쥬쿠구에서 등록한 후 신쥬쿠 구외로 옮기셨지만, 주민이동 서류를 제출하지 않은 경우는 등록이 신쥬쿠구에 남아있는등의 오차가 생기는 일이 적지않다. 또는, 반대로, 신쥬쿠구 이외에 등록되어있는 사람이 일하기 위해 오거나, 취학중인 경우도 있다는 것에 유의할 필요가 있다.

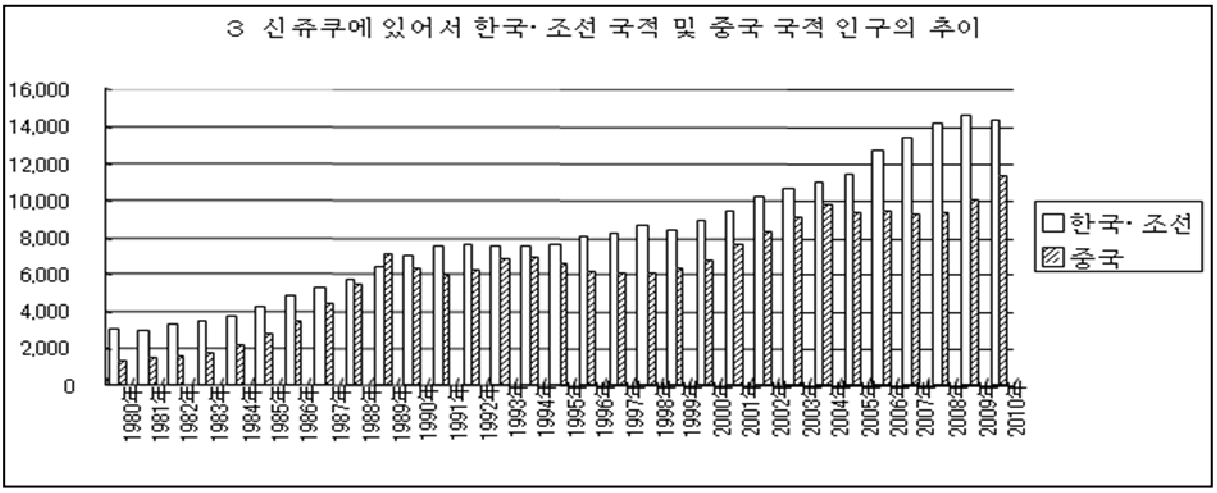
전국레벨의 통계에서는,「한국・조선」의 비율이 전쟁종료 후 계속 제 1 위 였지만, 2007 년에「중국」으로 바뀌었다.

한가지더, 전국자료와의 비교에서 알수있는것은, 신쥬쿠구에서는「브라질」국적이 거의 없다는 점이다. 브라질 사람들은 제 2 차 산업에 종사하고있는 경우가 많고, 지방도시등에 살고있는 경우가 많다. 그것에 비해 한국인이나 중국인은 다양한 지역에 빈틈없이 있다고도 할수 있지만, 대도시를 중심으로 취학・취업해서 정주하고 있는 경우가 많다.

＜시계열적으로 본 한국・조선국적의 사람들＞

다음으로는 시계열적 데이터를 바탕으로 신쥬쿠구의 한국인 등록 인구를 개관해 보겠다. 図 3 에서는 신쥬쿠구의 외국인등록 데이터 중에「한국・조선」및「중국」의 인구를 시계열적으로 그래프화 한 것이다. 근래 30 년간에 한정한 것은 지면폭의 관계도 있지만, 엔고를 배경으로 일본에 외국인이 증가하기 시작한 것은 80 년대 후반이였다는 것, 또 한국인이 일본에 대량유입된 것이 89 년의 한국 해외여행 자유화에의한 것 (高 1997: 63) 이라고 말해지고 있으므로, 그 전후를 포함해서 개관하려는 목적으로 이 기간에 한정했다.

図 3 에서는, 80 년대 전후부터「한국・조선」과 「중국」이 함께 증가하기 시작해서, 89 년에 순위가 한번 바뀌어지지만, 그 후로는 현재까지「한국・조선」이 조금 많은 차를 보이면서 1 위를



출전 : 신쥬쿠구,1980-2010,『신쥬쿠의 통계 (1980 년－2010 년) 』에서 작성

유지하고 있다. 도대체 왜 이 지역에 외국인이 많냐는 것에 관해서는, 많은 요인을 생각할수 있지만, 한가지는 카부키쵸에 인접해있는 지역이라는 것에 유래한다고 생각되어진다. 카부키쵸에서는 대만계 혹은 한국계 분이 소유하는 건물도 많고, 1980 년대에 그곳에서 일하던 종업원들이 이 오오쿠보지역에 많이 살고 있었다라는 것이다 (稲葉 2008: 56) . 그 외에, 같은 80 년대에 일본어학교가 증가했다는 것이, 한국인을 포함한 외국인 증가요인의 하나로 생각 되어지고 있다 (稲葉 2008: 61-62) . 이 오오쿠보 지역이 한국계 분들이 모이는 지역으로서, 미디어를 통해 많은 사람들에게 인지되게 된 것은 2002 년 월드컵 축구대회 때이다. 이곳의 한국요리점에서 열었던 주차장을 개방한 대중관람(Public Viewing)과, 그 열광하는 모습은 미디어를 통해 광범위하게 소개되어졌다. 또, 2003 년 부터 2004 년에 걸쳐서는 드라마「겨울연가」가 방송되어져, 일명 한류붐을 일으켜, 한류상품을 취급하는 점포가 오오쿠보지역에 증가했다. 이러한 변천을 거쳐서, 현재 JR 신오오쿠보역에서 메이지도우리까지의 영역에 걸쳐 한국계 점포와 시설이 집중하게 된 것이다[3].

[3] 이 점포나 간판등에 의한 시각적인 존재감에 대해서는 본 원고에 게재한 후지타라운도(藤田ラウンド幸世)씨의「생활공간을 비추어내는 다언어경관」에서 흥미진진하게 고찰하고 있으므로 참조하길 바란다.

<뉴커머의 비율>

한편, 이러한「한국 ・ 조선」의 사람들중에, 어느 정도의 비율이 뉴커머일까? 뉴커머의 정의는,「올드커머 이외의 사람들」이라고 되어있어서, 올드커머의 정의가 필요하다. 여기서는 통계상 카테고리와의 정합성으로 인해, 샌프란시스코 평화조약 발효 (1952 年) 이전부터 일본에 재주하고 있었던 구 식민지출신자 및 그 자손으로 정의해 두고자 한다. 이것은 현재의 체재자격으로 말하면「특별영주자」[4] 라는 카테고리에 해당하는 사람들이다. 신쥬쿠구의 자료로 [5]、이「특별영주자」가 기재되어있는 가장 오래된 체재자격별 통계는 1991 년 12 월 말의 것으로, 그때 1,183 명이 등록되어져있다.

2010 년 10 월말 통계에서는「한국 ・ 조선」국적의 사람은 전체의 14,540 명으로, 그 중에「특별영주자」는 1,498 명이다. 법률상 및 통계상의 올더커머라고 불리는 사람들은 약 1 할, 반대로 뉴커머라고 불리는 사람들은 9 할이라고 할수있다. 단, 일본에 귀화한 사람들은 물론 여기에 포함되어 있지 않다. 이와같이 현재 14,000 명을 넘는「한국・조선」등록인구의 대부분은, 역시 근래에 이주해 온 뉴커머 분들이라고 말할수 있다.

2000 년 이후의 항상적인 한국인의 증가는, 이곳 신쥬쿠(특히 오오쿠보 부근)가 한국계의 사람들에게있어서 상징적인 의미를 가지게 되면서, 더욱더 많은 사람을 끌어들이게 되고, 거기에 또 상징적인 의미가 증가하는 이러한 순환이 이루어지고 있는것을 나타낸다고 생각할 수 있다.

【참고문헌】

稲葉佳子, 2008, 「계승되어져가는 신주민의 거리의 유전자」, 川村千鶴子편저 『이민국가일본과 다문화공생론』 아카시서점
金敬得, 2005, 『신판 재일코리언의 아이덴티티와 법적지위』아카시서점
高鮮徽, 1997, 「한국인」駒井洋편『신래(新来)/정주(定住)외국인을알수있는사전』 아카시서점

[4] 이 체재자격은「일본국과의 평화조약에 기준된 일본의 국적을 이탈한 자 등의 출입국관리에 관한 특례법」(1991 년 법률제 71 호) 의 시행에 의해 정해진 자격. 이 이전에는협정영주자, 일반영주자, 법 126 해당자 등으로 분류되어져 있었던 재일 한국・조선인의 법적지위가 이 해에 특별영주자로 일원화 되었다 (金 2005; 184) .
[5] 신쥬쿠구 호적주민과 소장의 재류자격별 인원수조사표.

＜コラム・論考 / 칼럼 논고 ４＞

生活空間を映し出す多言語景観
―新宿区大久保地域のニューカマー韓国人に関わる言語景観を中心に

藤田ラウンド　幸世

新宿区は、日本のゲートウェイともいえる、首都東京の中心にあります。本稿では、2009 年から 2010 年の一年間に撮った大久保地域の画像をもとに、言語景観（本報告書のキーワードを参照）に映し出されたニューカマー韓国人の人たちの生活空間、また、大久保地域の国際化と多民族化を考えることにします[1]。

１．多言語背景を持つ「新宿」の言語景観

「日本」の言語景観について、庄司・バックハウス・クルマス(2009: 10)らは、1960 年以降の先行研究から浮かび上がる、言語と社会の複雑な関わりを可視化する顕著な要素として「西欧化」、「国際化」、「多民族化」を挙げました。日本全体に英語やその他の西洋言語が言語景観において可視性を高めたことを「西欧化」、1980 年代以降、日本人を対象に装飾的な外国語使用をしているのではなく、増加してきた外国人のための多言語表示を指し、最初から英語とローマ字表記の日本語が併記された、ローマ字と英語の可視性が公的表示に及んでいること、また、中国語と韓国・朝鮮語、点字などが表示に加わった傾向を「国際化」、さらに日本に在住する外国人が主にコミュニティ内の情報交換のために掲げる表示への発展を「多民族化」として挙げています。

「新宿区」に関する言語景観には、山手線沿線上の駅前通りの看板から見る多言語の言語景観（バックハウス 2005, Backhaus 2007）と関西コリアンコミュニティの言語変容との比較による、韓国・朝鮮ニューカマーの移民言語の表れとしての言語景観（金美善 2009)があります。後者の金は、コリアンに関する言語景観の中から、可視化されたハングル表示の増加に関するグローバル化の影響を指摘し、言語景観の中から、①日本で進行中の一連の多民族化現象、②韓国からの旅行者数の増加、③日本における社会現象としての「韓流」ブームの影響の三つの要素を導きだしました（金美善 2009:194)。金は、また、コリアンニューカマーによって築きあげられたコリアンタウンを、東西では、大久保駅周辺から明治通り、南北では歌舞伎町、職安通りから大久保通り周辺までの地域とし、そこでの「新宿」のニューカマーによるエスニック性の高まりを挙げています。金が映し出した「新宿」の言語景観と本稿とは、研究手法や目的、対象とする地域、研究期間が異なるので、一概には比較できません。フィールドワーク調査が基本となる本稿の言語景観では、「どのような」プロセスで多民族化が起き、韓流ブームが影響し、生活をしているのか、その一端を映し出す事を目的とします。

1.1　調査地と調査期間

調査地：　新宿区百人町１・２丁目、大久保１・２丁目

調査期間：2009 年 9 月～2010 年 8 月[2]

---

[1] 初めに補足をしますが、公共空間にみられる景観として、路上の店や広告看板などに現れた言語景観を筆者の眼で切り取っていきますが、街の景観としての全体は、当然のことながら社会言語の日本語に占められています。本稿の目的は、日本語がマジョリティである街の、公共的空間に現れた「多言語景観」を切り取っていくわけですので、大久保地域全体が多言語景観だけに覆われているわけではないということに留意を促しておきます。その上で、現在の多民族・多文化の共存として現れる多言語景観を分析していきます。

[2] 2009 年 9 月 25 日(61 枚)、2010 年 3 月 18 日(26 枚)、4 月 16 日(5 枚)、5 月 9 日(5 枚)、8 月 3 日(62 枚)の合計 5 回のフィールドワークで 159 枚の写真を撮影しました。数のばらつきは、第一回目と第五回目は言語景観のためのフィールドワークでしたが、他の回は新しい景観の出現だけを記録したためです。

1.2　新宿区のニューカマー韓国人

2010 年現在、新宿区に在住する区民のうち、約 11%が外国出身者となっています。2010 年 6 月 30 日時点の新宿区の統計[3]によると、新宿区の外国人登録者数は 35,583 人で、その内訳は韓国・朝鮮 14,539 人、中国 11,793 人、ミャンマー1,247 人、フランス 1,063 人、米国 896 人、フィリピン 867 人、ネパール 861 人、タイ 679 人、英国 428 人、カナダ 245 人、その他 2,965 人です。2010 年 6 月 1 日の統計[4]によると、国籍数の合計は 117 カ国となっています。まずは、統計の数値上で多民族化が顕著に表れてきます。

新宿区の在留資格[5]（2010 年 6 月 30 日時点）から「特別永住者」数を国籍別にみると、韓国・朝鮮 1,496 人、中国 30 人、米国 11 人、フランス 2 人、英国 2 人のみとあります。これが意味することは、新宿区で最も外国人登録者数が多い、韓国・朝鮮国籍者の約 10%は「日本が朝鮮半島を植民地にしていた時代(1910～1945)前後に来日したオールドカマー(生越　2005)」であることがわかります[6]。オールドカマーとニューカマーに関して、藤井(2005)は、前者を(日本の)植民地支配下において、あるいは、戦後、朝鮮半島からきた人々や日本で生まれ育った子孫、後者を 1989 年の韓国の海外渡航自由化を機に増加し、主に留学生、駐在員、日本人や永住者の配偶者として若い世代、がそれぞれ中心になっていると定義しています。加えて、金美善（2005:191)は、2006 年の日本の外国人登録者数が約 208 万人の中で、日本国内のコリアンは 598,219 人、そのうちオールドカマーが約 47 万人、ニューカマーが約 14 万人だと概算しています。

新宿区は、日本の歴史に深い関わりを持つコリアン（歴史的移動者)、現在の新宿区で最も大きいエスニック・グループとなったニューカマー韓国人（現在の移動者)、さらに、日本社会のマジョリティとしての日本人(ホスト社会の居住者)が共に住まう居住地としての一面を持ち合わせていることがわかります。

２．大久保地域の言語景観

まずは、大久保地域を図 1 で鳥瞰します。ここでの大久保地域は、JR 新大久保駅(写真 1，2)を起点に、JR 大久保駅から JR 新大久保駅までを「大久保通りの西（写真 3，4，5)」、JR 新大久保駅から明治通りまでを「大久保通りの東（写真 6，7，8，9)」、そして大久保通りと職安通りの縦軸空間の東側を「大久保生活圏（写真 10，11)」とします。

2.1　駅の構内に見られる国際化と多民族化

図 1 の写真 1 は、JR 山手線の新大久保駅の写真です。写真 2 には、駅構内の改札口近くにある日本語と英語の二言語併記の駅周辺の案内図があります。JR の案内図がなぜ日英の二言語併記をしているのかという疑問には、バックハウス(2009:147)が行った公的表示の調査があり、「国際化に対応するために、情報の表記は『和英併記』を原則とする（東京都情報連絡室 1991)」という東京都の指針と、東京都交通局が 1997 年に旅客案内標識の設置マニュアルに挙げた「国際化」が答えとなるでしょう。1990 年代に増加した表記は日本語と英語もしくはローマ字併記ですが、英語以外の外国語を含む表示については、バックハウスは 1997 年から中国語と韓国・朝鮮語におけるゴミ収集の説明表示がされたことを指摘しています（バックハウス 2009:161)。1990 年代の東京都の施策である日英の二言語併記に、日本国内での「国際化」の概念が反映されていることがわかります。JR 新大久保駅の案内図にもこうした「国際化」が反映しているものでしょう。

---

[3] 新宿区役所戸籍住民課発行資料(2010/07/06)。

[4] 新宿区ウェブサイト http://www.city.shinjuku.lg.jp/content/000067408.pdf(2010/9/30)

[5] 脚注 3 上の資料。

[6] ただし、日本に帰化をした在日コリアンもいますので、この数値はあくまでも外国登録者数にすぎないことに留意を促しておきます。

図１．地図上に見る大久保地域[7]

写真１　JR 新大久保駅

写真２　JR 新大久保駅の案内板

写真３　エステティックサロン

写真４　韓国料理店と薬局

[7] 新宿区地図の出典は、新宿区ウェブサイト http://www.shinjuku.go.jp/(2009/12/24)

写真５　八百屋

写真６　韓流グッズ店

写真７　韓流グッズ・料理・カフェのあるビル

写真８　美容室

写真９　薬局

写真 10　産婦人科クリニック

ところが、写真 2 をよくみると、JR 駅構内という公共的空間に、二言語併記と同時に、商業的な広告が二言語併記の案内図を取り巻く形で多言語景観を作り出しています。案内板の上の広告は、日本語（ひらがな、カタカナ、漢字）の表記、加えて、韓国語、英語、タイ語、中国語と日本語を含めて五言語、表記の種類で挙げれば七種類の表記文字が見られます。もうひとつの左横の広告は、韓国語をフォントと色で象徴的に配しながら、日本語表記の一つでもあり、中国語でもある漢字を用いて日本語・中国語の漢字の読み手を意識し、他にひらがな、カタカナの入った日本語の文、さらに店名の英語表記も加えた、四言語、五表記となっています。前者の質屋の広告板は多言語使用者を対象とし、後者の韓国スーパーは主に日本人、韓国・朝鮮人、中国人、また、駅前であるという立地条件を考えると「国際語」の英語表記は、英語使用者にアピールをすると同時に装飾性を持つものかもしれません。

2.2　大久保通り周辺の店（1）:「多民族化」の非言語コミュニケーション

JR 新大久保駅は大久保通りに面しています。大久保通りの西側では、新大久保駅周辺に、多言語表記の中でも日本語の表記が強調され、外国語が飾りとして表出されている多言語景観が顕著に見られます。具体的には、「西欧化」では、フランス語を併記した喫茶店やエステティックサロン(写真３)、「国際化」では、ローマ字表記を併記した飲食店や英語のみで表記をしているファーストフードの店、また、エスニック料理店の韓国・中国の飲食店が韓国語表記や中国語表記で多言語景観を作り出しています(写真４)。

多言語が三言語、四言語と併記されている「多民族化」の言語景観が見られる地区は、それぞれ異なる民族や言語話者の人たちが日々、その場で生活を営んでいることを表わしているともいえるでしょう。こうした地区で商売をする場合は、音声を表記することが目的の、意味を表わさない「ローマ字表記」、「西欧化」、「国際化」の表記だけでは十分ではない場合もあります。多民族の人たちをお客として考えた場合、店の名前や店の意味だけを翻訳して一方的に多言語表記をするだけではなく、多民族の人たちに「いらっしゃいませ」と、呼びこむ挨拶に相当するアピールをする必要があるのではないでしょうか。

写真 5 の八百屋の表看板には、日本語表記（漢字・ひらがな）を中心に、英語・韓国語・中国語（繁体字）の多言語表記、それに加えて、漢字の「笑顔　元気」というメッセージが配されています。メッセージは、漢字を共通の表記として、中国語や韓国語使用者のお客にも向けられていると考えられます。異なる民族の人が共存することを意識し、自らメッセージを発信して、その視覚的な非言語コミュニケーションが表れた看板といえるでしょう。これは情報を多言語表記で伝達する「国際化」から、多言語使用者に書きことばのミュニケーションでアピールする「多民族化」にシフトをしている例として挙げられるかもしれません。

2.3　大久保通り周辺の店（2）: 日韓表記と「国際化」

大久保通り東には、2002 年のワールドカップの日韓共催以降、韓国語やハングルの経済価値を高めた韓流ブームを体現している多言語景観が、新大久保駅周辺に可視化できます。

写真６は、K-pop(韓国の歌謡曲)の音楽と共に目に飛び込んでくる、韓流ブーム関連のグッズを売る販売店の一つです。店の外側には、両国の文化交流を表わす韓国と日本の国旗が交差した飾りものが象徴的に掲げられ、両国の文化交流の前向きなメッセージが送られています。これは、両国の文化交流を韓流ブームと結びつけたメッセージでもあるのでしょう。しかし、国旗のさらに上の看板の表記は日本語だけです。店の中に入ると、店員同士のおしゃべりは韓国語、日本人客に対しては日本語と、二言語の話しことばが飛び交い、韓国直輸入の音楽、映像、写真などがあふれ、音と文字が飛び交い、言語という「記号」以上に、韓国「文化」が店全体の価値観を構築しているように見えます。このような韓流ブームに関わるサブカルチャー的な文化の価値を、視覚的に、聴覚的に体験できる店内の「書きことば」をよくよく見ると、アイドル歌手の名前やポスターやカレンダーに印刷されている文字表記は英語を意識したアルファベットが大半を占めていました。この英語の文字としての表出は、韓国内での「西欧化」（ローマ字表記・英語表記）を直輸入した結果なのか、それとも日本の「西欧化」を意識した商業的戦

略なのかはここでは明らかにはなりません。日本語と韓国語の両国の社会に起きた「国際化」が、結果として起こした「西欧化」と見ることもでき、また、その点からいえば、英語というステイタスの高い「装飾性」が伴う言語景観における「国際化」ということもできます。二重の「西欧化」と「国際化」がここでは重なり、また、日本と韓国のグローバリゼーションの時代背景も重なる、二重の「国際化」といえるでしょう。

写真 7 を見ると、韓国語の店名を漢字と音声表記としてのカタカナ表記を主体として、韓国語表記は飾りの一部として一つのパネルだけに配する食堂と、韓国語の店名を韓国語表記のハングル文字と音声表記としてのカタカナ表記を主体として、装飾的に英語の表記と花のイメージを配したカフェとが同じビルに同居しています。職種によっても表記の言語選択が異なると考えられます。韓流グッズ店やカフェという、若者を対象とする、サブカルチャー的要素の強いビジネスには、日韓表記の上にさらに、流行の先端の指標ともいえる英語が加わる傾向がみられるのかもしれません。日本が 1980 年以降に進めた国際化では、当時、国際語と同意義で使われていた「英語」化をするという理念が色濃く重なっていました[8]。言語景観から、このような「国際化」の多層性も表出します。

2.4　大久保通り周辺の店（3）：ニューカマー韓国人への日韓表記

写真 8 から写真 10 までに共通している特徴は、韓国語のハングル文字の「フォント」の大きさが目立ち、韓国語表記が明らかに主体となっていることです。ここでは日本語との二言語、もしくは日本語・ローマ字表記の三言語で看板や広告は表記されています。

美容院とクリニックの看板や広告には、大久保通りのエステティックサロン同様、「西欧化」の装飾的ローマ字表記も見られます。しかし、対象者となるお客・患者はハングル文字の読める韓国出身の「女性」が意識されているのでしょう。薬局の看板は、フォントだけではなく、韓国語表記が主体で、日本語は「薬」の漢字、入口の上の看板には韓国語の下に併記された漢字とカタカナ表記がありますが、店名の日本語表記はありません。韓国語・日本語の二言語のみの表記は、漢字の「漢方薬」が中国語使用者を意識しているのかもしれません。一方、文字表記ではなく、お店の前に設置された日本の薬品会社のマスコットキャラクターは、日本人の目には「薬局」であるという視覚的な非言語コミュニケーションのメッセージを送っています。

写真 10 の産婦人科クリニックの広告は、住宅街の、幼稚園に面している路上、電信柱に設置されたものです。韓国語が主体となっていますが、情報により、言語としての記号や機能を使い分けています。最寄駅の情報は日本語と韓国語の併記にし、ロゴマーク、色、デザインといった装飾を施し、ウェブサイトの記載もあり、小さい広告空間に多くの情報が盛り込まれています。小学校と幼稚園の間の路上にあることから、広告の対象者は、韓国から来た若いニューカマーの家族やニューカマー韓国人女性一般が対象として考えられているのでしょう。さらに電柱広告という点で、店という、表通りの固定された場所にある看板とは違い、「形状」も不安定で、ローカルな生活者対象に限定されている広告の媒体に、多言語表記が現れていることも興味深いところです。言語景観として見たときに、電柱広告は、公共的空間に浮かぶ、多言語の電話帳のような、ネットワークの役割を果たしているかのようにも見えてきます。

2.5　生活空間としての教育機関：生活から現れる「多民族化」の実践

2010 年 3 月 18 日に、大久保地域にある幼稚園で修了式がありました。当日、幼稚園の外側には子どもたちの「ひらがな」のお祝いのことば、修了式と「漢字」で書かれた看板、色とりどりの絵や工作の飾り、日本の国旗が表玄関にありました。外から見る限り、日本で見かけるごく一般的な幼稚園の風景です。その一ヶ月後、同じ幼稚園の表玄関の脇の門に、今度は、新しい、手作りの看板に気づきました。写真 11 の多言語表記の看板です。

---

[8] 国際化と英語の結びつきに関しては、Fujita-Round and Maher(2008)を参照ください。

写真 11　幼稚園

看板には、日本語（漢字）を中心に、韓国語、タガログ語、タイ語、中国語（簡体字）、英語の六言語で表記があり、子どもと一緒に乗るタイプの自転車の絵が三つ描かれています。写真 11 は、幼稚園という生活空間の中に現れた、六言語が可視化された言語景観です。

この看板の特徴は、①手書き、②言語ごとに色を変えるというコンセプト、③子どもと大人の二人乗りの自転車の絵となるでしょう。つまり、「手書きで多言語表記を書いた人」、「言語ごとに色を変えようと提案した人」、「自転車の絵を描いた人」が考えられます。複数の人的関わりから、作成された看板です。ここでは、幼稚園の送り迎えの際に、公的な空間としてのルールが必要となり、子どもを迎えに来るすべての子どもたちの親（父親、母親）や家族（祖父母や親せき）に明示的に示すための案内板を作成することになったと考えることができますが、この幼稚園ではルールの周知の徹底を図るためには六言語が必要となったわけです。そこで、幼稚園と看板を読む対象ともなる六言語に関わる複数の多言語使用者であり、親の協力が看板作りに必要となり、保育園内での多民族を背景に持つ人たちの協働が自然に派生したと考えられるのではないでしょうか。

「幼稚園駐輪場」というメッセージだけではなく、そこには多言語使用者が作り手として、看板が完成までに至るプロセスを楽しんでいるということも視覚的なメッセージとして伝えています。看板の描き手は、義務で描いているのでも、金銭のために書いているのでもないでしょう。ここには生活空間の中に現れた言語景観の中に、自発性のある多民族化の実践を読み取ることができるでしょう。

３．むすびに：　多民族化の文脈と言語景観

庄司・バックハウス・クルマス(2009：9)らは、1962 年に新宿を対象に調査を行った地理学者の正井泰夫から「知らない外人が見たら、外人がたくさん新宿を利用するのか、それとも日本が『植民地』だからだと思うかもしれない[9]」と引用しています。正井が言ったことを証明するための写真をみた編者たちの眼には「1960 年代の日本の言語景観は、現状と比べて、実はきわめて同質的なものであったことがわかる」と映ったようです。編者たちが見た写真には、カタカナ外来語も数少ないながらあるものの、漢字とひらがなの可視性が圧倒的に強く、ローマ字の看板は「TEA FOR TWO」という一例のみとあります（庄司・バックハウス・クルマス　2009：9)。

[9] 庄司・バックハウス・クルマス(2009：9)では、正井泰夫（1972)『東京の生活地図』時事通信社, pp. 153-158 から引用をした。

正井が 1960 年代にとった新宿区の言語景観は、漢字、ひらがなが圧倒的だったとすると、当時の新宿区、あるいは大久保地域に、多言語の表記は現在ほど可視化できなかったと言えます。50 年後、本稿の新宿区の大久保地域の、限られた言語景観からではありますが、本稿で見た多言語の表記は、韓国語、中国語（簡体字、繁体字）、タイ語、タガログ語と英語という 5 言語、6 表記です。ここからは表記を読む人たち、ニューカマー韓国人、在日オールドカマー、中国大陸、台湾、タイ、フィリピンの出身者が、大久保地域に関わり、大久保地域が多民族となっている状況が確認できます。

本稿での「多民族化」の定義は、先に挙げた庄司・バックハウス・クルマス(2009)らの定義です。日本に在住する外国人が主にコミュニティ内の情報交換のために掲げる表示への発展を「多民族化」と捉えました。ここでは、多民族がただ集まったという事実だけではなく、集まった中で情報交換をする、そのプロセスとその実際のコミュニケーションのやり取りを詳しく見ることが、「多民族化」に凝縮した塊を読み解くことになるという解釈も可能でしょう。その点において、本稿中、八百屋の「笑顔　元気」という視覚的メッセージ、「幼稚園駐輪場」の多民族の、多言語を使用する人たちの生活空間で起こった自発性のある実践を「多民族化」、もしくはその実践例として挙げられるものです。

大都市としての多民族化と同時に、大久保地域の特徴として、日本語と韓国語の書きことばの二言語状況（バイリンガリズム）が韓流ブームを機に進み、ますます複雑さが増していることを「国際化」の多層性として確認しました。ここにおいては、グローバリゼーションの影響が、日本と韓国の両国にそれぞれ「西欧化」を引き起こしたことが挙げられます。また、今後、大久保地域の言語景観がニューカマー韓国人と韓国と日本の経済・文化交流の影響により、新たな景観をもたらす可能性も示唆されます。一方で、生活空間としてのニューカマー韓国人を対象とした言語景観は韓流ブームから起きた文化とは一線を画し、薬局やクリニックにみられる日本人がお客として考えにくいサービスを提供する業種では、韓国語の表記とウェブサイトの掲載など、韓国人を対象にしたものが明らかでした。こうした業種が言語景観として増えたときに、それがニューカマー韓国人の生活空間の広がりとして捉えられるでしょう。

多民族・多文化共生社会というときに、「多民族」と「多文化」に凝縮された塊をどのように解き明かすのかは、社会科学全般の学問領域に関わる課題となっています。そこでは、多民族や多文化、多言語に関わる事実の羅列をするだけでは、十分な実態に伴う文脈は立ち上がってきません。ここに言語景観の一つのアプローチの可能性が考えられると思います。画像の分析をする言語景観の研究手法は、写真を撮るという「切り取る」作業で、「何」を切り取るか、また、分析する写真を選ぶことで、ここでも「何」を言いたいのか、といった視点を切り取ることを促します。また、参考文献のテキストではない「情報」としての画像を分析することになります。その点で、多様なメディアが台頭をした情報社会となった 21 世紀の現在、多様な社会を映し出す新たな研究手法として、言語景観も一つのアプローチとなりうるのではないでしょうか。

新宿区は日本の他の自治体にはない、多国籍・多民族の現実を持っています。その中でも、現在の移動者であるニューカマー韓国人の動向と大久保地域全体がどのようにつながるかは、少子化が進む大都市の新宿区の未来にもつながってきます [10]。50 年後の大久保地域の多言語景観から映し出されているの

---

[10] 事例として、子どもと家族をめぐる多民族化の実践例が現れた言語景観として、大久保地域の児童館便りをつけ加えます。児童館と学童保育所が併設された大久保児童館では毎月、児童館便りを出しています。児童館名を囲む形で「ようこそ・こんにちは」という意味の八言語（日本語、英語、中国語、ポルトガル語、フランス語、スペイン語、韓国語、タイ語）が書かれています。毎月、日本人の児童館職員による手書きで、多言語使用者の子どもたちや親に向けて暖かいメッセージを送り続けています。大久保児童館は区の統廃合計画のため、2011 年 3 月で無くなることが決定しており、このような「多民族化」の実践が見られても、消滅することがあることも示唆しています。この児童館は、外国につながる子どもの学習支援をしてきたグループが学習の場として使っていたという経緯もあり、児童館が大久保から無くなることを惜しむ、地域住民や学習支援に関わった様々な立場の大人たちが「さよなら大久保児童館」と題して地域住民と外国につながる子どもたちとを結ぶ、「大久保児童館アートプロジェクト」を展開しています。プロジェクトのイベントに関わる画像や写

は、果たしてどのような「多言語」でしょうか。

参考文献

藤井幸之助（2005)「韓国・朝鮮人」, 真田信治・庄司博史編著『事典　日本の多言語社会』岩波書店, pp. 178-1

金美善（2005a)「言語景観にみえる在日コリアンの言語使用」, 真田信治・生越直樹・任榮哲編著『在日コリアンの言語相』和泉書院, pp. 195-224

金美善（2009)「第 8 章　言語景観における移民言語のあらわれかた」, 庄司博史, ペート・バックハウス, フロリアン・クルマス編著『日本の言語景観』三元社, pp. 187-205

生越直樹（2005)「在日コリアンの言語使用意識とその変化」, 真田信治・生越直樹・任榮哲編著『在日コリアンの言語相』和泉書院, pp. 195-224

P. バックハウス（2005)「日本の多言語景観」、真田信治・庄司博史編著『事典　日本の多言語社会』岩波書店, pp. 53-56

ペート・バックハウス(2009) 「第 6 章　日本の言語景観の行政的背景」, 庄司博史, ペート・バックハウス, フロリアン・クルマス編著『日本の言語景観』三元社, pp. 145-170

庄司博史、ペート・バックハウス、フロリアン・クルマス編著（2009)『日本の言語景観』三元社

Backhaus, P. (2007) *Linguistic Landscapes: A Comparative Study of Urban Multilingualism in Tokyo*, Clevedon: Multilingual Matters.

Fujita-Round, S. and Maher, J. C. (2008) 'Language Education Policy in Japan' in S, May & N, Hornberger (eds.) *Encyclopedia of Language and Education (2nd edition)*, Volume 1, pp.393-404,

参考ウェブサイト

大久保児童館アートプロジェクト　http://np-okubojidoukan.artforia.net/

新宿区役所　http://www.city.shinjuku.lg.jp/

トヨタ財団研究助成プロジェクト「新宿のニューカマー韓国人のライフヒストリー記録集の作成――顔の見える地域作りのための基礎作業」
http://koreannewcomersintokyo.web.officelive.com/default.aspx

---

真を言語景観と捉えるならば、大久保生活圏には、地域住民だけではない地域外の人を巻き込む「多民族化」が広がっていることもわかります。2010 年の大久保地域の街の景観と児童館周辺の生活空間をウェブサイトでみることができます（http://np-okubojidoukan.artforia.net/)。

＜コラム・論考 / 칼럼 논고 4＞

생활공간을 비춰내는 다언어경관(多言語景觀)
-신쥬쿠구(新宿区)오오쿠보(大久保)지역의 뉴커머 한국인의 언어경관을 중심으로

후지타라운도 사치요（藤田ラウンド　幸世）

일본의 게이트웨이라고도 불리우는 신쥬쿠구(新宿区)는 일본의 수도인 동경중심에 위치하고 있습니다. 이 보고서에서는 2009 년부터 2010 년까지 1 년간 오오쿠보(大久保)지역의 화상을 통하여 언어경관(보고서의 키워드 참조)에 비춰진 뉴커머 한국인들의 생활공간, 그리고 오오쿠보지역의 국제화와 다민족화를 생각하려고 합니다[1].

1. 다언어(多言語)를 배경으로 가진 "신쥬쿠(新宿)"의 언어경관

쇼우지(庄司), 벡하우스(バックハウス), 쿠루마스(クルマス)(2009 : 10)등은 일본의 언어경관에 대하여 1960 년대 이후의 선행연구를 통해 언급하였는데, 특히 언어와 사회의 복잡한 관계를 가시화(可視化)하는 눈에 띄는 요소로서 "서구화", "국제화", "다민족화"라는 세 가지 요소를 지적하였습니다. 전체적으로 영어 또는 그 외의 서양 언어에 의하여 언어경관의 가시성(可視性)이 높아진 것을 "서구화"라고 합니다. 그리고 1980 년대 이후 일본인을 대상으로 하여 단지 장식용으로 외국어를 사용하는 것이 아닌, 외국인의 증가로 인하여 다언어 표기를 하게 된 것, 또한 처음부터 영어와 로마자와 일본어가 같이 표기되어짐으로써 로마자와 영어의 가시성이 공공표기에까지 이르게 된 것, 그리고 한국어와 중국어, 점자 등의 표시가 추가되어 가는 경향을 "국제화"라고 합니다. 더 나아가 일본에 거주하고 있는 외국인이 주로 커뮤니티 안에서 정보교환을 위하여 게시하는 게시물의 표기에까지 발전해 나아가는 현상을 "다민족화"로 꼽고 있습니다.

"신쥬쿠"에 관련한 언어경관은 야마노테(山手)선의 전철역 앞 거리의 간판에서 볼 수 있는데 이는 여러 개의 언어로 표기된 언어경관(バックハウス 2005, Backhaus 2007)과 한국과 조선으로부터 새로이 이주해 온 사람들의 이민언어와 칸사이(関西) 코리안 커뮤니티의 언어변화와의 비교를 통한 언어경관(金美善 2009)이 있습니다. 후자의 경우인 김미선(2009)은 코리안 뉴커머에 관한 언어경관 중에서 가시화된 한글표기의 증가와 관련된 글로벌화의 영향을 지적하였고 언어경관 중에서도 1. 일본에서 진행중인 일련의 다민족화 현상 2. 한국으로부터의 여행자 증가 3. 일본에서의 사회 현상인 "한류" 붐의 영향과 같은 세 가지 요소를 도출해 내었습니다(김미선 2009: 194). 또한 김미선은 한국에서 새로이 이주해 온 사람들이 이루어낸 코리안타운을 동서로는 오오쿠보역 주변으로부터 메이지도오리(明治通り)까지, 남북으로는 카부키쵸(歌舞伎町), 쇼쿠안도오리(職安通り)로부터 오오쿠보도오리(大久保通り) 주변의 지역까지로 규정하였고 신쥬쿠의 뉴커머에 의해 민족적 다양성이 높아지는 것을 지적하고 있습니다. 김미선이 비추어 낸 "신쥬쿠"의 언어경관과 본 보고서는 연구방법과 목적, 대상으로 하는 지역, 연구기간이 다르므로 통틀어 비교를 할 수는 없습니다. 필드워크를 기본으로 하는 본 연구의 언어경관에서는 "어떠한" 프로세스를 거쳐 다민족화가 발생하는지, 한류 붐의 영향이 어떤 것인지, 어떻게 생활하고 있는지에 대한 한 단면을 그려내는 것, 이것이 본 보고서의 목적입니다.

---

[1] 공공의 공간에서 볼 수 있는 경관으로서 거리의 가게나 광고 간판 등에 나타나는 언어경관을 필자의 눈으로 분석해나가고자 합니다. 하지만 물론 거리의 경관 전체는 사회언어인 일본어가 대다수를 차지하고 있습니다. 본 보고서의 목적은 일본어가 다수파인 거리의 공공의 공간에 나타나는 "다언어경관"을 분석해가는 것이기 때문에 오오쿠보지역 전체가 다언어경관으로 뒤덮여 있다는 것에 주의하여 주시기 바랍니다. 그 위에 현재의 다민족/다문화 현상과 공존하여 나타나는 다언어경관을 분석하겠습니다.

1.1 조사지역과 조사기간

조사지역: 신쥬쿠구 햐쿠닌쵸 1,2 쵸메(百人町 1・2 丁目), 오오쿠보 1,2 쵸메(大久保 1・2 丁目)

조사기간: 2009 년 9 월~2010 년 8 월 [2]

1.2 신쥬쿠구에 새로이 이주해 온 한국인

2010 년 현재, 신쥬쿠에 살고 있는 구(区)민 중에 약 11%가 외국출신자입니다. 2010 년 6 월 30 일을 시점으로 신쥬쿠구의 통계 [3] 를 보면 신쥬쿠구의 외국인등록자수는 35.583 명으로 한국/조선이 14,539 명, 중국이 11,793 명, 미얀마가 1,247 명, 프랑스가 1,063 명, 미국이 896 명, 필리핀 867 명, 네팔이 861 명, 태국이 679 명, 영국이 428 명, 캐나다가 245 명, 그 외에 2.965 명이 등록되어 있습니다. 2010 년 6 월 1 일의 통계 [4] 에 의하면 국적별 합계는 117 개국이었습니다. 먼저 통계의 수치상에서 다민족화가 뚜렷히 나타나고 있습니다.

재류자격 [5] (2010 년 6 월 30 일 현재)중에서 "특별영주자"의 수를 국적별로 본다면 한국/조선이 1,496 명, 중국이 30 명, 미국이 11 명, 프랑스가 2 명, 영국이 2 명뿐입니다. 이것은 신쥬쿠구에서 가장 외국인등록자가 많은 한국/조선국적자의 약 10%가 "일본이 조선반도를 식민지로 삼고 있었던 시대(1910~1945)전후에 일본에 넘어온 올드커머(오고시(生越)2005)"인 것을 의미합니다[6]. 올드커머와 뉴커머에 관하여 후지이(藤井 2005)는 전자의 경우, 일본의 식민지 지배하에 또는 전쟁 이후에 조선반도로부터 넘어 온 사람들이나 일본에서 태어나 자란 자손으로 정의하였고 후자의 경우 1989 년 한국의 "해외여행 전면 자유화"를 계기로 증가하였는데 주로 유학생, 주재원, 일본인이나 영주권자를 배우자로 삼은 젊은 세대 등으로 구성되어 있다고 정의하였습니다. 더욱이 김미선(2005:191)은 2006 년 일본의 외국인등록자수가 약 208 만 명으로 그 중에서 일본 국내의 코리언은 598,219 명으로 올드커머가 약 47 만 명, 뉴커머가 약 14 만 명으로 추정하고 있습니다.

신쥬쿠구는 일본의 역사와 깊은 연관을 가진 코리언(역사적인 이동자(移動者))과, 현재 신쥬쿠구에서 가장 많은 민족적 그룹을 형성하고 있는 한국인 뉴커머(현대의 이동자(移動者)), 나아가 일본의 다수파인 일본인(호스트사회의 거주자) 가 함께 살아가는 거주지로서의 단면을 함께 가지고 있는 것을 알 수 있습니다.

2. 오오쿠보지역의 언어경관

먼저 오오쿠보지역을 그림 1 에 나타내겠습니다. 이 오오오쿠보지역은 JR 오오쿠보역(사진 1,2)을 기점으로 JR 오오쿠보역으로부터 JR 신오오쿠보역까지를 "오오쿠보도오리의 서쪽(사진 3,4,5)", JR 신오오쿠보역에서 메이지도오리까지를 "오오쿠보도오리의 동쪽(사진 6,7,8,9)", 그리고 오오쿠보도오리와 쇼쿠안도오리를 위아래로 나누었을 때 동쪽부분을 "오오쿠보생활권(사진 10,11)"이라고 합니다.

2.1 역 구내(駅構内)에 보이는 국제화와 다민족화

그림 1 의 사진 1 은 JR 야마노테선(山手線)의 신오오쿠보역 사진입니다. 사진 2 에는 역 안의 개찰구

---

[2] 2009 년 9 월 25 일(61 장), 2010 년 3 월 18 일(26 장), 4 월 16 일(5 장), 5 월 9 일(5 장), 8 월 3 일(62 장), 총 다섯 번의 필드워크를 통해 159 장의 사진을 촬영하였습니다. 필드워크 중에 찍은 사진수가 각각 틀린 것은 첫 번째와 다섯 번째의 경우 언어경관을 위한 필드워크였지만 다른 경우는 새롭게 출연한 경관만을 기록했기 때문입니다.

[3] 신쥬쿠 구청 호적주민과 발행 자료(2010/07/06)

[4] 신쥬쿠 웹사이트 http://www.city.shinjuku.lg.jp/content/000067408.pdf(2010/9/30)

[5] 각주 3 의 자료와 동일

[6] 일본에 귀화한 재일교포도 있으므로 이 수치는 어디까지나 외국인등록수일뿐이라는 것에 유의하여 주십시요

근처에 일본어와 영어로 표기되어 있는 역 주변 안내도가 있습니다. JR 의 안내도가 왜 일본어와 영어로 표기되어 있는지에 대한 의문이 생깁니다. 이것은 벡하우스(2009:147)가 실시한 공공표시에 대한 조사를 보면 "국제화에 발맞추기 위하여 정보의 표기는 '일영병기(和英併記)' 를 원칙으로 한다(도쿄도정보연락실東京都情報連絡室 1991)" 라는 도쿄도의 지침과 도쿄도의 교통국이 1997 년에 여행안내표식의 설치매뉴얼에서 언급한 "국제화" 가 그 이유라고 생각됩니다. 1990 년대 일본어와 영어 아니면 로마자를 같이 쓰는 표기가 증가하였는데 특히 영어 이외의 외국어를 포함한 표기에 관해서 벡하우스는 1997 년부터 중국어와 한국, 조선어가 쓰레기 집적소의 설명서에 사용되었다고 지적하였습니다. (벡하우스 2009: 161) 1990 년대 도쿄도의 시책(施策)인 일본어와 영어의 동시표기에 일본국내의 "국제화"라는 개념이 반영되어 있는 것을 알 수 있습니다. JR 신오오쿠보의 안내도에도 이러한 "국제화"가 반영되어 있는 것이겠지요.

그림 1. 지도상으로 보는 오오쿠보지역 [7]

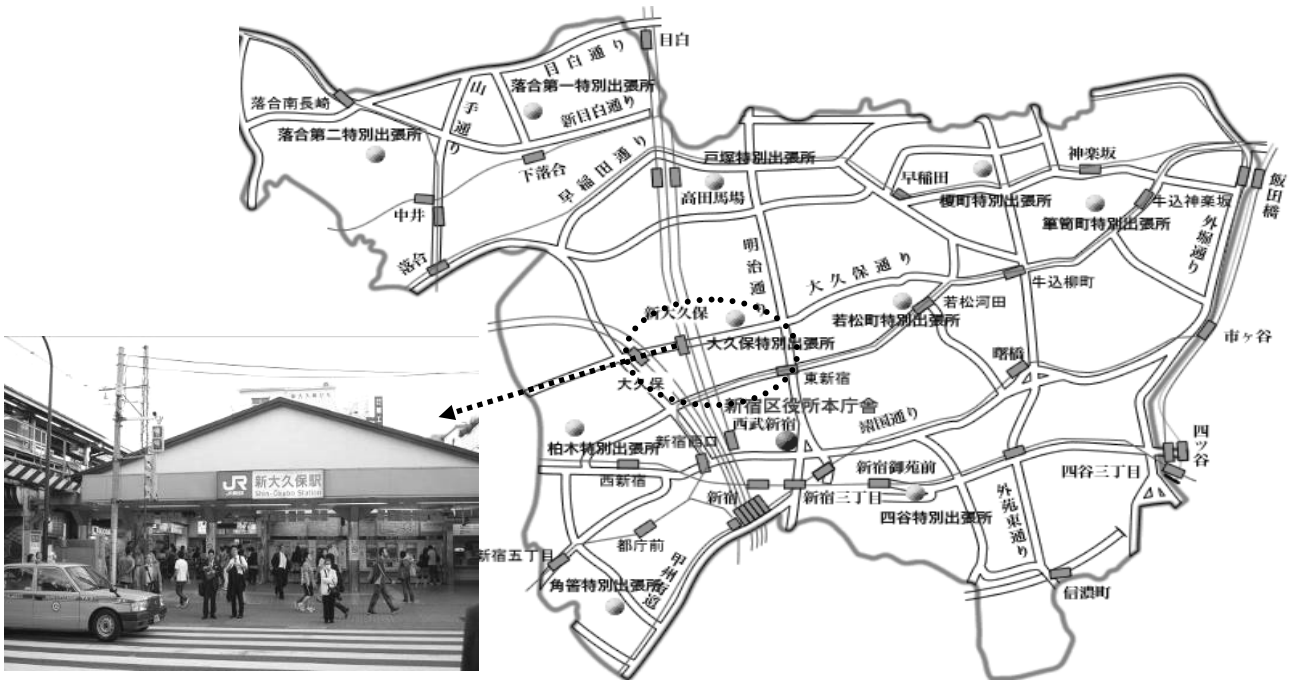


사진 1. JR 신오오쿠보역

[7] 신쥬쿠 지도의 출전은 신쥬쿠구 웹사이트 http://www.shinjuku.go.jp/(2009/12/24

사진 2. JR 신오오쿠보역의 안내판

사진 3. 에스테틱 살롱

사진 4. 한국요리점과 약국

사진 5. 야채가게

사진 6. 한류 상품점

사진 7. 한류 상품, 요리점, 카페가 있는 빌딩

사진 8. 미용실

사진 9. 약국

사진 10. 산부인과 클리닉

그런데 사진 2를 자세히 보면 JR역 안이라는 공공의 공간에 두 언어 표기와 함께 상업적인 광고가 그 두 언어 표기의 안내도를 둘러싸는 형태로 다언어경관을 만들어 내고 있습니다. 안내판의 광고는 일본어(히라가나, 카타카나, 한자)표기에서 더 나아가 한국어, 영어, 태국어, 중국어와 일본어를 포함한 다섯 개의 언어로서, 단순히 표기 종류로만 따진다면 7종류의 표기문자가 있습니다. 또 하나 왼쪽 가로의 광고에서 한국어의 경우, 글자크기와 색깔을 조절하여 상징적으로 배치하고 있는데 일본어표기법 중의 하나이기도 하며 중국어 표기법의 하나이기도 한 한자를 사용하여 일본어, 중국어의 한자를 사용하는 사람을 의식하고 있습니다. 그리고 그 외에도 히라가나, 카타카나를 사용한 일본어문장, 거기에다 영어표기까지 더해진, 네 개의 언어/다섯 개의 표기로 되어 있습니다. 전당포의 광고는 다언어 사용자를 대상으로 하고 있으며 한국 슈퍼마켓은 주로 일본인, 한국/조선인, 중국인, 그리고 역 앞이라는 입지조건을 생각한다면 "국제어"로서의 영어의 표기는 영어 사용자에게 어필함과 동시에 장식용으로서의 이점을 가지고 있을지도 모릅니다.

2.2 오오쿠보도오리 주변의 가게(1): "다민족화"의 비언어커뮤니케이션

JR 신오오쿠보역은 오오쿠보도오리에 접해 있습니다. 오오쿠보도오리의 서쪽편의 신오오쿠보역 주변에는 다언어표기 중에서도 일본어표기가 강조되어 있으며 외국어가 장식용으로 나타나 있는 다언어경관이 눈에 뛰게 보입니다. 구체적으로 들여다 보면, "서구화"라는 측면에서는 프랑스어를 함께 사용한 커피점이나 에스테틱 살롱(사진 3), "국제화"의 측면에서는 로마자표기를 함께 사용한 음식점이나 영어만 사용한 패스트푸드점, 그리고 민족요리점인 한국/중국의 음식점에서 한국어표기나 중국어표기를 사용하면서 다언어경관을 만들어 내고 있습니다. (사진 4)

세 개의 언어나 네 개의 언어 등 다언어로 표기되어 있는 "다언어"의 언어경관을 볼 수 있는 지역는, 그 곳에서 서로 다른 민족, 다른 언어를 구사하는 사람들이 매일매일 자기의 자리에서 각자의 생활을 꾸려 나가고 있는 사실을 드러내고 있다고 말할 수 있습니다. 이러한 지역에서 장사를 하는 경우, 단지 음성 자체를 표기하는 것이 목적으로 별다른 의미를 나타내지 않는 "로마자표기", "서구화", "국제화"와 같은 표기만으로는 충분하지 않은 경우가 있습니다. 여러 민족의 사람들을 손님으로 하는 경우, 가게의 이름이나 의미를 일방적으로 번역해서 여러 언어로 표기하는 것뿐만 아니라 여러 민족의 사람들에게 "いらっしゃいませ (어서 오십시오)"라는 접객인사에

상응하는 어필이 필요하지 않겠습니까?

사진 5 의 야채가게의 앞간판은 일본어표기(히라가나, 카타카나)를 중심으로 영어/한국어/중국어(대만글씨 繁体字)로 되어 있는 다언어표기, 거기에다 한자로 "笑顔(웃는 얼굴), 元気(건강)"을 표기해 그에 걸맞는 이미지를 더하고 있습니다. 이러한 광고에 드러나 있는 메시지는 한자를 공통의 표기로 하면서 중국어나 한국어를 사용하는 손님들을 향하여 발신하고 있다고 생각됩니다. 서로 다른 민족이 함께 살아가고 있다는 것을 스스로 의식하고 있으며 또한 자발적으로 메시지를 발신하는 등, 그야말로 비언어커뮤니케이션이 잘 나타나 있는 간판이라고 말할 수 있겠습니다. 이 것은 정보를 여러 언어로 표기함으로써 전달되는 "국제화"로부터 여러 언어를 사용하는 사람들에게 글자라는 커뮤니케이션으로 어필하는 "다민족화"로 변화해 가고 있는 일례일지도 모릅니다.

2.3 오오쿠보도오리 주변의 가게(2): 일한표기와 "국제화"

오오쿠보도오리의 동쪽 편에는 2002 년 한일월드컵 공동개최 이후, 한류 붐에 의해 경제가치가 높아진 한국어와 한글이 구체적으로 나타나 있는 다언어경관이 있으며, 이는 신오오쿠보역 주변에서 직접 눈으로 확인할 수 있습니다.

사진 6 은 K-pop(한국의 가요곡)의 음악과 한류 붐 관련 상품을 함께 파는 판매점 중에 하나입니다. 가게의 외관에는 일본과 한국의 교류를 나타내는 국기가 서로 교차된 형식으로 걸려있어 양국의 문화교류의 긍정적인 메시지를 매우 상징적으로 나타내고 있습니다. 이것은 양국의 문화교류를 한류 붐과 연관하여 생각한 메시지이겠지요. 하지만 국기의 위쪽에 있는 간판에는 일본어 표기만 되어 있습니다. 가게 안으로 들어가보면 점원들간의 잡담은 한국어, 일본어 손님들에게는 일본어를 쓰는 등, 두 개의 언어가 섞여있으며, 한국으로부터 직수입된 음악, 영상, 사진 등이 넘쳐나고 있습니다. 그리고 음성과 문자가 섞여있는데 언어라는 "기호" 이상으로 한국의 문화가 가게 전체의 가치관으로 확립하고 있는 것처럼 보여집니다. 이러한 한류 붐에 관련된 하위문화적인 문화의 가치를 시각적으로 그리고 청각적으로 체험할 수 있는 가게, 그 가게 안에 나타난 "글"을 자세히 보면 아이돌 가수의 이름이나 포스터, 카렌더 등에 인쇄되어 있는 문자는 영어를 의식한 알파벳이 대부분이었습니다. 이러한 영어 표기는 한국에서의 "서구화(로마자표기/영어표기)"가 그대로 일본으로 넘어 온 것인지, 아니면 일본의 "서구화"를 의식한 상업적인 전략인지 여기서는 알 수 없습니다. 일본과 한국의 사회에서 발생한 "국제화"가 결과적으로 발생시킨 "서구화"로 보는 것도 가능해집니다. 이런 점에서 본다면 이러한 영어 표기는 사회적인 지위가 높은 영어의 "장식성"을 동반한 언어경관에 있어서 "국제화"라고 할 수 있습니다. 이중(二重)의 "서구화"와 "국제화"가 이곳에서 겹쳐지며 또한 일본과 한국의 글로벌화 시대의 배경에도 겹쳐지는 이중(二重)적인 "국제화"라고도 말할 수 있겠지요.

사진 7 을 보면 한국어의 가게 이름을 한자와 음성표기로서의 카타카나를 중심적으로 나타내고 있는데 여기에 한국어표기를 덧붙여서 하나의 간판에 나타낸 식당과, 한국어의 가게 이름을 한국어 표기법인 한글문자와 음성표기로서의 카타카나를 중심적으로 나타내고 다음으로 영어표기와 꽃으로 이미지를 나타낸 카페 등이 같은 빌딩에 위치하고 있습니다. 직종에 따라서 표기법의 언어선택이 달라지리라 생각됩니다. 한류 상품점이나 카페와 같이 젊은 세대를 대상으로 하는 하위문화적인 요소가 강한 비즈니스는 일한표기에다가 유행의 첨단을 달린다고 말할 수 있는 영어를 추가적으로 표기하는 경향이 있는 지도 모릅니다. 일본이 1980 년 이후부터 진행해 왔던 국제화는 당시 국제어와 동의어로 "영어"를 이곳 저곳에서 사용하자는 "영어화"라는 이념과 "국제화"라는 이념이 혼용되어 사용되고 있었습니다[8]. 언어경관은 이러한 "국제화"의 다양한 계층성을 나타내기도 합니다.

[8] 국제화와 영어의 연결점에 대해서는 Fujita-Round and Maher(2008)를 참조해 주시기 바랍니다.

2.4 오오쿠보도오리 주변의 가게 (3): 뉴커머 한국인을 위한 한일표기

사진 8 에서 사진 10 까지 공통적인 특징은 한국어의 한글문자의 크기가 크다는 것이 눈에 띄며 명확하게 한국어 표기가 중심이 되어 있다는 것입니다. 그리고 이 사진들에는 일본어와 함께 두 언어나 아니면 일본어/로마자 표기와 함께 세 개의 언어로 된 간판이나 광고가 보입니다.

미용실과 클리닉의 간판이나 광고는 오오쿠보도오리의 에스테틱 살롱처럼 "서구화"의 영향을 받은 장식적인 로마자 표기가 나타나 있습니다. 하지만 대상자인 손님은 한글 문자를 읽을 수 있는 일반 "여성" 손님이나 "여성" 환자를 의식한 것이겠지요. 약국의 간판은 글자 크기뿐만 아니라 한국어 표기를 중심으로 일본어의 "약"이라는 한자, 그리고 입구 위의 간판에는 한국어 밑에 한자와 카타카나를 같이 표기하고 있으나 가게 이름은 일본어 표기로 되어 있지 않습니다. 한국어/ 일본어 두 언어만으로 표기된 것은 한자로 쓰여진 "한방약"으로 이것은 중국어 사용자를 의식한 것일지도 모릅니다. 한편 문자 표기뿐만 아니라 가게 앞에 설치된 일본 제약회사의 마스코트 캐릭터가 일본인의 눈에는 이 곳이 "약국"이라는 시각적인 비언어 커뮤니케이션으로서 메시지를 보내고 있습니다.

사진 10 의 산부인과 클리닉의 광고는 주택가의 유치원 앞의 도로에 있는 전신주에 설치되어 있습니다. 한국어가 중심적으로 쓰여져 있습니다만 정보의 종류에 따라 언어로서의 기호나 기능을 구별하여 사용하고 있습니다. 제일 가까운 역의 정보는 일본어와 한국어로 표기하고 있으며 로고마크, 색깔, 디자인을 이용해서 꾸며져 있습니다. 또한 웹사이트의 주소도 적혀 있어 작은 광고공간에 많은 정보가 포함되어 있습니다. 초등학교와 유치원 사이를 통과하는 거리이기 때문에 광고의 대상자는 한국으로부터 온 젊은 뉴커머의 가족이나 또는 뉴커머 한국인중에서 젊은층과 중년층 장년층에 이르기까지의 일반 여성이라 생각됩니다. 또한 전신주 광고라는 특성상 가게의 전면에 나타나 있는, 고정된 장소에 있는 간판과는 다르게 그 "형상"이 불안정한데 이러한 지역주민을 대상으로 하는 광고에 다언어표기가 쓰여져 있는 것은 정말로 흥미 있게 생각해 볼 일입니다. 언어경관이라는 관점에서 봤을 때 전신주 광고는 공공의 공간에 떠오르는 다언어의 전화부와도 같은 네트워크 역할을 수행하고 있는 것처럼 보입니다.

2.5 생활 공간으로서의 교육기관: 생활로부터 나타나는 "다민족화"의 실천

2010 년 3 월 18 일에 오오쿠보지역에 있는 유치원에서 수료식이 열렸었습니다. 당일은 유치원 바깥쪽에는 어린이들이 "히라가나"로 쓴 축하의 글, "한자"로 쓰여진 수료식 간판, 형형색색의 그림이나 공작품으로 꾸며져 있었으며 정문 현관에는 일본의 국기가 걸려 있었습니다. 유치원의 외면만 본다면 이러한 풍경은 일본에서 볼 수 있는 극히 일반적인 유치원의 모습입니다. 한달 후 같은 유치원의 정문 현관의 옆쪽 문에 이제 막 만든 것 같은 수제 간판이 등장했습니다. 사진 11 의 다언어로 표기된 간판입니다.

사진 11 유치원

간판에는 일본어(한자)를 중심으로 한국어, 타갈로그어, 태국어, 중국어(대만글), 영어로 총 6 개의 언어로 표기되어 있으며 어린이와 함께 탈 수 있는 자전거가 세 대 그려져 있습니다.

이 간판의 특징은 1, 직접 손으로 쓴 것, 2, 각 언어마다 색깔을 바꾸는 등의 컨셉, 3, 어린이와 어른이 함께 탈 수 있는 자전거의 그림입니다. 즉, "직접 손으로 여러 언어를 표기한 사람", "언어마다 색깔을 바꾸자고 제안한 사람", "자전거의 그림을 그린 사람" 등이 있으리라 생각됩니다. 여러 사람이 이 간판을 함께 만들었다는 것이죠. 유치원에 아이를 데리러 오거나 데리러 갈 때에는 공공의 공간을 이용하기 위한 룰이 필요합니다. 이 때문에 어린아이를 데리러 오는 모든 부모님(아버지, 어머니)이나 가족(할아버지, 할머니나 친척)의 눈에 보이도록 하기 위한 안내 간판으로 작성하게 되었으리라 생각됩니다만, 이 유치원에서는 모두가 룰을 인식할 수 있게 하기 위해서 6 개의 언어로 표기할 필요가 있었던 것이겠지요. 유치원과 간판을 읽는 대상인 동시에 6 개 언어의 각각 사용자이기도 한 부모들의 협력이 간판 만들기에 필요했을 것이며 보육원 안에서 다민족을 배경으로 가진 사람들의 협동이 자연발생적으로 생겨났다고 생각됩니다.

"유치원 자전거 주차장"이라는 메시지뿐만 아니라 이 간판에는 다언어를 쓰는 사람들이 직접 만든 간판을 완성하기까지의 과정을 즐겁게 참여했다는 시각적인 메시지도 전해져 옵니다. 간판을 그린 사람은 의무적으로 만든 것도 돈을 위해서 만든 것도 아니겠지요. 이 간판에는 생활 공간에 나타난 언어경관 중에서도 자발성이 돋보이는 다민족화의 실천을 엿볼 수 있을 것입니다.

3. 끝마치면서: 다민족화 문맥과 언어경관

1962 년에 신쥬쿠를 대상으로 조사를 했던 지리학자 正井泰夫는 "아무것도 모르는 외국인이 본다면 많은 외국인이 신쥬쿠를 이용하는 것인지 아니면 일본이 '식민지'이기 때문이라고 생각할 지도 모른다 [9]" 라고 말하였는데 쇼우지(庄司)/벡하우스(バックハウス)/쿠루마스(クルマス)(2009:9) 등은 이 말을 인용하고 있습니다. 正井가 말한 것을 증명하기 위한 사진들을 본 집필자들의 눈에는 "1960 년대 일본의 언어경관은 지금 현재와 비교해 볼 때 매우 동질적인 것이었다는 것을 알 수 있었다" 라고 비취어진 것 같습니다. 그들이 본 사진에는 카타카나 외래어의 수가 적기는 하지만 한자와 히라가나의 가시성이 압도적으로 강하며, 로마자로 쓰여진 간판은 "TEA FOR TWO"라는 예로 단 한 군데뿐입니다. (庄司・バックハウス・クルマス 2009 : 9)

[9] 庄司・バックハウス・クルマス(2009 : 9)에서는 正井泰夫 (1972)『東京の生活地図』時事通信社, pp. 153-158 에서 인용하였습니다.

正井가 1960 년대에 찍은 신쥬쿠의 언어경관은 한자와 히라가나가 압도적으로 많았다고 한다면 당시의 신쥬쿠 또는 오오쿠보지역에 다언어 표기는 지금과 같이 가시화되어 있지 않았다고 말할 수 있습니다. 그로부터 50 년 후, 본 연구의 신쥬쿠구의 오오쿠보지역의 한정된 언어경관이긴 하지만 그 속에서 본 다언어의 표기에는 한국어, 중국어(대만글, 중국글), 태국어, 타갈로그어와 영어라는 5 개의 언어, 6 가지의 표기입니다. 표기를 읽는 사람 뉴커머 한국인, 재일교포인 올드커머, 중국대륙, 대만, 태국, 필리핀 출신자들이 오오쿠보지역에 모여들어 그 곳에서 오오쿠보지역의 다민족을 구성하고 있는 상황을 확인할 수 있습니다.

본 연구에 있어서 "다민족화"는 앞서 언급한 쇼우지(庄司)/벡하우스(バックハウス)/쿠루마스(クルマス)(2009) 등이 정의한 일본에 살고 있는 외국인들이 주로 커뮤니티 안에서 정보교환을 위해 설치하는 표시에 발전해 나가는 것을 "다민족화"의 정의로서 규정하고 있습니다. 이러한 정의는 다민족이 단지 함께 모였다는 사실뿐만 아니라 모임 중에 정보교환이 이루어 지는 것, 그 프로세스와 실제의 커뮤니케이션의 상세한 실상을 들여다 보는 것이 "다민족화"에 응축되어 있는 덩어리를 들여다 보는 것과 동일하다는 해석도 가능해지겠지요. 이런 점에 있어서 본 연구에서 야채가게의 "笑顔 元気" 라는 시각적인 메시지, "유치원의 자전거 주차장" 의 다민족, 다언어를 사용하는 사람들의 생활공간에서 일어난 자발적인 실천을 "다민족화" 또는 그 실천적인 예로 들 수 있겠습니다.

대도시에서의 다민족화, 구체적으로는 오오쿠보지역의 특징이라고도 말할 수 있는 일본어와 한국어 글씨로 이루어진 두 개의 언어상황(바이링가리즘)은 한류 붐을 계기로 진행되어 왔으며 점점 복잡해 지고 있다는 사실을 "국제화"의 다양한 계층성을 통하여 확인할 수 있었습니다. 이러한 과정 속에는 글로벌화의 영향이 일본과 한국 양국에 있어서 각각 "서구화"를 불러왔다는 사실을 발견할 수 있습니다. 또한 앞으로 오오쿠보지역의 언어경관이 뉴커머 한국인과 한국, 일본의 경제/문화교류의 영향으로 새로운 경관을 만들어 낼 수 있다는 사실을 시사하고 있습니다. 한편으로는 생활공간으로서의 뉴커머 한국인을 대상으로 한 언어경관은 한류 붐을 계기로 일어난 문화와는 그 구분이 명확하며, 약국이나 클리닉과도 같은 곳에서 볼 수 있는, 일본인을 손님으로서 생각하기 어려운 서비스를 제공하는 업종에서는 한국어 표기와 웹사이트의 주소 등, 한국인을 대상으로 하고 있다는 것을 알게 되었습니다. 이러한 직종이 언어경관으로 증가하는 현상은 그것이 곧 뉴커머 한국인의 생활공간이 넓어지고 있다는 것으로 받아들여도 되겠지요.

다민족/다문화공생사회로 발전해 나가는 이 시대에 "다민족"과 "다문화"에 응축된 덩어리를 어떤 식으로 분석하여 밝혀낼지는 사회과학 전반의 학문영역에 걸친 과제입니다. 그 과제를 해결하기 위해서는 다민족이나 다문화, 다언어에 관계된 사실을 단지 나열하는 것만으로는 그 과제의 실태에 연관된 문맥이 쉽게 떠오르지 않습니다. 여기에 언어경관이 하나의 접근법으로서 가능성이 있다고 생각됩니다. 화상을 분석하는 언어경관의 연구방법은 사진을 찍는 이른바 "잘라내는" 작업을 통하여 "무엇"을 잘라내는지, 그리고 분석에 쓸 사진을 선택함에 있어서 이 사진이 "무엇"을 말하고자 하는지 라는 시점을 "잘라내는" 작업을 촉진합니다. 또한 참고문헌의 텍스트가 아닌 "정보"로서의 화상을 분석하는 방법이기도 합니다. 그러한 점에서 다양한 미디어가 등장하여 정보화 사회가 된 21 세기 현재 다양한 사회를 반영한 새로운 연구방법으로서 언어경관도 하나의 접근법이 될 수 있지 않겠습니까?

신쥬쿠는 일본의 다른 자치구와는 달리 다국적/다민족이라는 현실을 안고 있습니다. 그 중에서도 현재의 이동자인 뉴커머 한국인의 동향과 오오쿠보지역 전체가 어떻게 연결되는지는 저출산 현상이 진행되고 있는 대도시 신쥬쿠의 미래와도 연결되어 있습니다 [10]. 50 년 후의 오오쿠보지역의

[10] 사례 중에 하나를 소개하자면 어린이와 가족을 둘러싼 다민족화의 실천적인 예가 드러난 언어경관으로서 오오쿠보지역의 아동관 정보지를 추가합니다. 아동관과 학동 보육소가 함께 설치된 오오쿠보 아동관에서는 매월 아동관 정보지가 발행되고 있습니다. 아동관의 이름을 에워싸는 형식으로 "어서 오세요/안녕하세요" 라는 의미의 여덟 가지 언어(일본어, 영어, 중국어 포루투갈어, 프랑스어,

다언어경관이 비춰내는 것은 과연 어떠한 “다언어” 일까요?

참고문헌

藤井幸之助 (2005)「韓国・朝鮮人」, 真田信治・庄司博史編著『事典　日本の多言語社会』岩波書店, pp. 178-182

金美善 (2005a)「言語景観にみえる在日コリアンの言語使用」, 真田信治・生越直樹・任榮哲編著『在日コリアンの言語相』和泉書院, pp. 195-224

金美善 (2009)「第 8 章　言語景観における移民言語のあらわれかた」, 庄司博史, ペート・バックハウス, フロリアン・クルマス編著『日本の言語景観』三元社, pp. 187-205

生越直樹 (2005)「在日コリアンの言語使用意識とその変化」, 真田信治・生越直樹・任榮哲編著『在日コリアンの言語相』和泉書院, pp. 195-224

P. バックハウス (2005)「日本の多言語景観」、真田信治・庄司博史編著『事典　日本の多言語社会』岩波書店, pp. 53-56

ペート・バックハウス(2009) 「第 6 章　日本の言語景観の行政的背景」, 庄司博史, ペート・バックハウス, フロリアン・クルマス編著『日本の言語景観』三元社, pp. 145-170

庄司博史、ペート・バックハウス、フロリアン・クルマス編著 (2009)『日本の言語景観』三元社

Backhaus, P. (2007) Linguistic Landscapes: A Comparative Study of Urban Multi-lingualism in Tokyo, Clevedon: Multilingual Matters.

Fujita-Round, S. and Maher, J. C.(2008) ‘Language Education Policy in Japan’ in S, May & N, Hornberger (eds.) Encyclopedia of Language and Education (2nd ed), Volume 1. pp.393-404

참고웹사이트

오오쿠보아동관 아트프로젝트 http://np-okubojidoukan.artforia.net/

신쥬쿠구청 http://www.city.shinjuku.lg.jp/

도요타재단 연구조성 프로젝트 “신쥬쿠에 새로이 이주해 오신 한국분들의 라이프스토리 기록집의 작성-얼굴이 보이는 지역만들기를 위한 기초작업-”
http://koreannewcomersintokyo.web.officelive.com/default.aspx

---

스페인어, 한국어, 태국어)로 쓰여져 있습니다. 매월 아동관의 일본인 직원이 손으로 쓰고 있으며 다언어 사용자의 어린이들이나 어른들을 위한 따뜻한 메시지가 전달되고 있습니다. 오오쿠보 아동관은 구(區)의 통폐합 계획으로 인해 2011 년 3 월에 없어질 예정이며 이러한 “다민족화”의 실천적인 예가 보임에도 소멸할 수도 있다는 것을 시사하고 있습니다. 이 아동관은 외국과 연결된 어린이들의 학습을 지원해 온 그룹이 학습의 장으로서 이용해 왔다는 이유도 있어서 아동관이 오오쿠보로부터 없어지는 것을 안타까워하는 지역주민이나 학습 지원에 동참하였던 여러 입장의 어른들이 “안녕 오오쿠보 아동관” 이라는 제목으로 지역주민과 외국과 연결된 어린이들을 연결하는 “오오쿠보 아동관 아트프로젝트”를 전개하고 있습니다. 프로젝트의 이벤트에 관련된 화상이나 사진을 언어경관으로 생각한다면 오오쿠보의 생활권에는 지역주민 뿐만 아니라 지역 밖의 사람도 끌어들이는 “다민족화”가 확장되리라는 것을 알 수 있습니다. 2010 년 오오쿠보 지역의 거리의 경관과 아동관 주변의 생활 공간을 웹사이트에서 볼 수가 있습니다.
(http://np-okubojidoukan.artforia.net/)

＜コラム・論考 / 칼럼 논고 5＞

多文化空間での子育てをめぐるナラティブ

李　　坪　鉉

日本社会は、1990年代以後多くのニューカマーを受け入れることで、多国籍・多文化・多民族化が加速され、現実に様々な問題と直面することとなる。その一つとして、地域社会で共に生きる外国にルーツをもつ親子は、言語・文化の異なりによってコミュニティの中で多様な問題にぶつかりつつも、その社会の一員として絶えず努力しつつ、毎日の生活に奮闘している。

外国にルーツをもつ家庭は地域社会で孤立されがちで、親にとっても多文化養育空間は、葛藤が続く負の場としてのイメージが多い。一方、ホスト社会との肯定的な関係を形成することによって、積極的に社会に参加するようになる側面も無視できない部分である。つまり、ホスト社会からの除外による孤立感に落ちていた外国にルーツをもつ母親が、日本語の識字を得ることによって養育への自信感を回復すると同時に自分の状況に関連する学習を通じて、ネガティブな思考が主体的に変革していく「意識化」を起こす。これこそ、パウロ・フレイレがいう識字を通した女性のエンパワーメントであり、尊厳の回復にも大きな役割を担当する側面として解釈できる。このような多文化空間で外国にルーツをもつ親子をめぐる多様な葛藤と文化変容の様相は多文化社会での人間形成が複雑で総合的な過程であることを立証している。

ドロシ・ロー・ノルトは「子どもが育つ魔法の言語」で、まず、親自身がその見本になるべきであって、もちろん見本といって完璧を意味するのではなく、困難におちいった時に負けず直面できることで十分だという。その人が何を持っているかによって、その人の価値を決めるのではなく、子どもは親が自分をありのまま愛してくれる姿から重要な価値を学ぶ。子どもが成長した後には、もう親の存在を必要としないので対話は難しくなる。親として何を話すかを考えるのではなく、子どもとともに何をするか、すなわち、行動で親の価値観というのが伝わるのである。

コーエンがいう海外で生活しながら、強い集団アイデンティティを持続している現代のディアスポラと呼ばれる我々たち。移民として日本社会で出産・育児をしている親にとって母語が持つ意味は特別である[1]。二重または多言語環境で子どもにどのように母語を教えるか、その方法をめぐる悩みは共通の課題である。特に、児童期を移民として生きるということは、個人的には移動する時の言語発達段階と言語及び文化問題を内包しており、社会の中では環境としての言語使用、つまり、家庭と学校が取るべき役割の重要性が問題化される。この時、ホスト社会の外国人に対する態度が重要なポイントとして作用する。ここで、日本人・外国人という二項対立的な思考ではなく、一人一人が異なることが当たり前なハイブリットな社会を支持する多文化教育の重要性が再び認識されるのである。

東京で子どもを育てているニューカマーの教育観に影響を与えている要因に関する研究[2]から、韓国人ニューカマーたちは日本での子どもの養育状況を理想的な形から脱皮した否定的な状況として認識し、摩擦の場として解釈する傾向をみせている。同時に、子どもの養育の経験をこのような摩擦回避と疎外感の緩和という二つの観点から見ているという面談の分析結果が出ている。

親自身の言語教育及び学習と関連した多用な経験から一定の教育観を形成しており、その教育観の特徴として各言語を教育することで特定のアイデンティティを獲得・形成することができると考えている。そして、多くの言語を堪能にこなすことによって、アイデンティティの選択幅も広められるのである。

---

[1] 国際母語デー（International Mother Language Day）は、毎年2月21日で、ユネスコが1999年に制定した。言語と文化の多様性、多言語の使用、それぞれの母語を尊重することを推進することが目的である。

[2] 拙稿、渡辺幸倫、帆足哲也、「多文化社会における養育者の教育観の形成－新宿のニューカマー韓国人を対象とした探索型集団面接から－」、『国際移動と教育』明石書店、平成23年3月発行予定。

その考えの背景として、言語を各社会のなかでの精神的・経済的に自立していく手段とみなし、子どもにその手段を獲得させるための学習に力を入れている。つまり、日本社会での主流言語である日本語の習得は当たり前で、自然に身につくものと思う反面、母語である韓国語の習得は親の責任のように感じながら、個別教育として力を注ぎ、そして、韓国国内情勢の影響もあり、世界語としての英語の習得に悩んでいるのが現実である。

なにより、韓国語教育が持つ象徴性を見ると、親子のコミュニケーションの手段として韓国語をあげている。すなわち、家族を社会化のための初の場と考えた際、韓国語がコミュニケーションの手段となり、親戚及び宗教的ネットワークなど場所と国を問わず韓国語を話せることで韓国語社会との交渉も可能になることを含んでいる。 また、韓国語教育には、言語教育を通してアイデンティティの世代間の同一性を確保するという点で、民族性の象徴である韓国語を話せることで、家族と民族グループへの所属意識が芽生えるという面も重要視されている。

コミュニケーションの手段の確保という観点から、単純に言語が通じるということだけではなく、コミュニケーションという言語の実質面も重視される。つまり、異国で生活する家族特有の言語である韓国語・日本語・英語が混ざった一種のクレオール語[3]のような言語が発生するということも看過できない現象である。

以上の現象は、二回にわたる記録集の中でも、子育てをめぐる話からその一面を垣間見ることができる。

ニューカマー韓国人たちは、異国での子育てをめぐって多くの葛藤を抱えている。代表的な多文化空間である新宿という地域は、子育てにおいても多文化養育空間であり、そこに居住をきめるという理由は様々であるが、そのなかでも子どもの教育に関連された部分も多くの比重をもっている。東京韓国学校を始め、多くの韓国人コミュニティが存在しており、特に韓人教会という宗教的な面と母語を含めて多くの学習補助機関などへのネットワーク作りができることは無視できない部分である。

一方、親の教育観によって、あえて新宿を遠ざけるケースもある。知識中心の教育方針に力を注ぐ韓国式の教育の代わりに、全人教育に力を入れている日本の公教育、あるいはインターナショナル・スクールを選ぶケースもある。歓楽街と近隣している新宿から遠ざけて、のびのびとした住宅地を選ぶケースもある。これらに共通することは、親として最善の教育を子どもに与えたいというのが特徴である。

このように社会との交渉過程で、親が描く立派な韓国人として成長することが期待されつつ、韓国語の駆使だけでなく、韓国文化・情緒を理解する韓国人として世界各国で活躍する民族的アイデンティティをもつ立派な韓国人を育てることが親の役割だと意識している。

そのほか、ベーカー[4]がいうバイリンガルの子どもにとって母語教育の重要性と教育達成、すなわち、学校教育を通した学力不振・学習の遅れなどへの影響を心配する親心から母語である韓国語教育への重要性が再び認識される。

子どもたちが小さいころから多言語、多文化、多民族という多様な環境のなかで育ちながら、自己形成していくなかで多文化への柔軟な考えと偏見や先入観のない価値観、ありのままの人間相互関係を重要視しながら、ともに成長していく社会を目標に、協動的実践を図るべきである。移民社会で韓国人ニューカマーのエンパワーメントを支持する場が新宿のコミュニティのなかで存在し、これらの教育ニーズを充足していることは注目すべきである。 日本社会において多文化共生の実現可能性を提示し、エンパワーメントしていく外国にルーツをもつ親の存在は、きっと日本の社会を変化していく力になるだろう。

---

[3] 意思相通ができない異なる言語の商人たちの間で自然に作り上げられた言語で、その子どもたちに母語として形成されるようになった言語を指す。

[4] Colin Baker 著、ジョン・ブヨン訳、
『A Parent's and Teacher's guide to bilingualism』、ネクサス出版、2006 年。

＜コラム・論考 / 칼럼 논고 5＞

다문화공간에서의 자녀교육을 둘러싼 내러티브

이 호 현

일본사회는 1990 년대 이후 많은 뉴커머(newcomer)들을 맞이함으로써, 다국적・다문화・다민족화가 가속하는 현실에 직면하게 되고 ,지역사회에서 함께 살고있는 외국에 루트를 가진 부모자녀는 언어・문화의 차이로 인해 커뮤니티속에서 다양한 문제에 부딪히면서도,그사회의 일원으로 생활하기 위해 끊임없이 노력하며, 현실의 무게감속에서 매일매일 분투하고 있다.

외국에 루트를 가진 가정은 지역사회에서 고립되기 쉽고, 부모에게 있어 다문화양육공간은, 갈등이 계속되는 負의 場으로서의 이미지가 많다. 반면, 호스트사회와의 긍정적인 관계를 형성하게 되면 적극적으로 사회참가를 하게되는 측면 또한 무시할수 없는 부분이다. 즉, 호스트사회로부터의 소외에 의한 고립감에 빠졌던 외국에 루트를 가진 엄마가, 일본어 문해 능력을 획득함으로써, 양육에의 자신감회복과 동시에 자신의 상황에 관련된 학습을 통해, 소극적인 사고가 주체적으로 변혁해 가려고 하는 「의식화」를 초래하게된다. 이것이야말로 파울로 프레이레가 말하는 문해교육을 통한 여성의 임파워먼트 Empowermen 이며, 존엄회복에도 크나큰 역할을 담당하고 있는 측면으로 해석된다. 이러한 다문화양육공간에서 외국에 루트를 가진 부모자녀를 둘러싼 다양한 갈등과 문화변용의 양상들은 다문화 사회에서의 인간형성이 아주 복잡하고 종합적인 과정임을 입증한다.

도로시・로・노르트는『아이가 자라는 마법의 언어』에서, 먼저 부모 자신이 그 본보기가 되어야 하며, 물론 본보기 라고 해서 완벽을 의미하는 것이 아니라 역경에 빠졌을 때 굴하지 않고 직면할수 있는 것으로 충분하다고 말한다. 그 사람이 무엇을 가졌느냐에 따라 그 가치를 결정하는 것이 아니라, 어린이는 부모가 자신을 있는그대로 사랑해주는 모습에서 중요한 가치관을 배운다. 어린이가 성장한 후에는 이미 부모의 존재를 필요치 않으므로 대화가 힘들다. 부모로서 무엇을 말할까 라고 생각하는 것이 아니라, 어린이와 함께 무엇을 하는가, 즉 행동으로 부모의 가치관이 전달되는 것이다.

코엔이 말하는 해외에 살면서 강한 집단 아이덴티티를 지속시키고 있는 현시대의 디아스포라로 일컫어지는 우리들. 이민으로서 일본사회에서 출산 육아를 하는 부모에게 있어 모어가 가지는 의미는 각별하다. 이중 또는 다(多) 언어환경에서 자녀에게 어떻게 모어를 가르칠까, 그 방법을 둘러싼 고민은 공통된 과제이다 [1]. 특히 아동기를 이민으로 살아간다는 것은, 개인적으로는 이동할때의 언어발달 단계와 언어와 문화의 아이덴티티 문제를 내포하며, 사회속에서는 환경으로서의 언어사용 즉 가정과 학교가 취할 역할의 중요성이 대두된다. 이때 호스트사회의 외국인에 대한 태도가 중요한 포인트로 작용한다. 여기서, 일본인 ・외국인 이라는 이항대립적인 사고가 아닌 한사람 한사람이 다른것이 당연한 하이브릿드(hybrid)한 사회를 지지하는 다문화 교육의 중요성이 다시금 인식되는 현실이다.

동경에서 자녀를 양육하고 있는 뉴커머의 교육관에 영향을 주고 있는 요인을 분석한 연구 [2] 에서, 한국인 뉴커머들은 일본에서의 자녀양육상황을, 이상적인 모습으로부터 탈피한 부정적 상황과 마찰의 장으로 해석하는 경향을 보이고 있다. 동시에 자녀양육경험을 마찰회피와 소외감의 완화 라는 두 관점으로 보고있다는 면담분석결과가 나왔다.

---

[1] International Mother Language Day ；매년 2 월 21 일로, 유네스코에서 1999 년에 제정했다. 언어와 문화의 다양성, 다언어의 사용, 그리고 각각의 모국어존중을 추진하는 것이 목적이다.

[2] 졸고,와따나베유끼노리, 호아시테츠야 「다문화사회에서 양육자의 교육관 형성-신쥬쿠의 뉴커머 한국인을 대상으로 한 탐색형 집단면접을 통해서-」, 『국제이동과 교육』明石書店, 2011년3월 발행예정.

부모 자신의 언어교육 및 학습과 관련된 다양한 경험으로 일정의 교육관을 형성하고 있으며, 그 교육관의 특징으로서 각 언어를 교육하는 것으로 특정 아이덴티티를 획득・형성 할 수 있다고 본다. 그리고 언어구사가 가능함으로 인해 아이덴티티의 선택폭이 넓어질수 있다고 생각하고 있다. 그 생각의 배경으로는 언어를 각 사회속에서 정신적 경제적으로 자립해나가는 수단으로 보며, 자녀에게 그 수단을 획득시키기 위한 학습에 투자를 하고 있는 것으로 보인다. 즉, 일본사회에서 주류언어인 일본어의 습득은 당연한 것으로, 자연스럽게 몸에 익혀지는 것으로 생각하는 반면, 모어인 한국어의 습득은 부모의 책임으로 보며, 개별교육을 시키고자 노력하며, 또한 한국국내의 정세에 영향 입어, 세계어로서의 영어습득에 고민하고 있는 것이 현실이다.

무엇보다 한국어교육이 가지는 상징성을 보면, 부모자녀간의 커뮤니케이션 수단으로서 한국어를 들고 있다. 즉 가족을 사회화의 첫 장으로 볼 때, 한국어가 커뮤니케이션의 수단이 되며,친척 및 종교적 네트워크등 장소와 나라를 불문하고 한국어를 구사할 수 있는 것으로 한국어사회와의 교섭도 가능해진다는 것을 포함하고 있다. 또한, 한국어교육에는, 언어교육을 통해 아이덴티티의 세대간 동일성을 확보하는 점에서, 민족성의 상징인 한국어를 구사함으로써, 가족과 민족그룹에 대한 소속의식이 생겨난다는 면도 중요시되고 있다.

커뮤니케이션 수단의 확보라는 점에서, 단순히 언어가 통하는 것 뿐만 아니라, 커뮤티케이션이라는 언어의 실절적인 면이 중시된다. 즉, 이국에서 생활하는 가족특유의 언어 즉 한국어・일본어・영어가 섞인 일종의 크레오르어[3]와 같은 언어가 발생하고 있다는 점도 간과 할 수 없는 현상중의 하나이다.

이상의 현상들은, 두 번의 기록집의 인터뷰 내용을 통해서도 자녀양육과 관련된 내용들을 엿볼 수 있었다.

뉴커머 한국인들은, 자녀양육 단계에서 많은 갈등들을 안고 있다. 대표적인 다문화공간인 신쥬쿠라는 지역으로 한국인 부모들이 거주를 결정하게 되는 이유로는, 여러 가지를 들 수 있겠지만, 그 중에서도 특히 자녀교육과 관련된 부분이 큰 비중을 차지하고 있음을 알 수 있다. 한국인 학교를 비롯해서, 많은 한국인 커뮤니티가 존재하며, 특히 한인 교회라는 종교적인 면과 모국어를 비롯한 학습보조기관 등과의 네트워크를 만들기 쉽다는 것은 무시할 수 없는 부분이다.

한편, 교육관에 따라서 일부러 신쥬쿠를 멀리 하는 케이스도 있다. 지식교육 중심인 한국교육 대신, 전인교육 중심인 일본공교육 혹은 인터내셔널 스쿨 쪽을 택하는 경우와 유흥가를 끼고 있는 신쥬쿠에서 떨어진 주택지를 선택하는 경우 등을 들 수 있다. 하지만, 두 경우 모두 부모로서 최선의 교육을 자녀에게 부여하고 싶어하는 공통점이 있다.

이같이 사회와의 교섭과정에서, 부모가 그려내는「훌륭한 한국인」 으로 성장하기를 기대하고, 한국어 구사 뿐만 아니라, 한국문화・정서를 이해하는 한국인으로서 세계각국에서 활약하는 민족적 아이덴티티를 확보한 훌륭한 한국인을 길러내는 것이 부모의 역할로 의식하고 있다.

그외、Colin Baker[4]가 말하는 Bilingual 의 어린이에게 있어서의 모어교육의 중요성과 교육달성,즉 학교교육을 통한 학업부진 등에의 영향등을 우려하는 부모마음에서 모어인 한국어 교육에의 중요성이 다시금 인지되어진다.

아이들이 어려서부터 다언어 다문화 다민족이라는 다양한환경속에서 자라며, 자아형성을 해나가는데 있어서 다문화에의 유연성과 편견이나 선입관 없는 가치관, 있는 그대로의 인간 상호관계를 중요시 하면서 함께 성장하는 사회를 목표로 해야한다. 이민사회에서 한국인들의 Empowerment 를 지지하는 주된 場이 신쥬쿠의 커뮤니티 속에 존재하며, 이러한 교육의 요구를 충족시켜주고 있다는 점도 간과할수 없다. 일본사회에서의 다문화공생의 실현가능성을 제시하는 Empowerment 해가는 외국에 루트를 가진 부모의 존재는 분명 일본사회를 변화시키는 힘이 될 것 이다.

---

[3] 의사소통이 안 되는 다른 언어의 상인들 사이에서 자연스럽게 만들어진 언어로, 그 자녀들에게 모어로써 형성되어진 언어를 가리킨다.

[4] Colin baker 저、정부영 번역『A Parent's and Teacher's guide to bilingualism』、넥사스出版、2006 年

＜コラム・論考 / 칼럼 논고 6＞

―心の癒しの場所、コリアンタウン―
私のナラティブ：自分と新宿区との関わり

呉　世蓮

私は日本に留学に来て今年で 7 年目になります。7 年間の留学生活を語るには、新宿区との関わりを欠かせて語ることはできません。なぜなら学校、住居、そして人との関わりのすべてが、東京都心の西部に位置する新宿区で行われているからです。つまり新宿区は、私にとって生きている歴史のそのものなのです。

なかでも新宿区というと、一般的に新宿駅を中心とするエリアが思い浮かぶと思います。東京都庁をはじめとする超高層ビル群が広がる西新宿、大規模な商業施設が並ぶ新宿、夜はとても派手な町となる歌舞伎町、韓国系ショップが並ぶ大久保など、このエリアは「新宿区の代表」と呼ぶにふさわしい個性豊かな顔を持っています。

特に、私は「新宿区の代表」の中の、大久保、JR 大久保駅・新大久保駅を中心に 7 年間の日本での留学生活を過ごしています。

日本一の「コリアンタウン」と称される JR 大久保駅・新大久保駅の周囲は、江戸時代までは農村であり、明治時代になるとつつじの景勝地として近郊から多くの観光客が訪れていたそうです。終戦後に在日コリアンなどが集まるようになり、1970 年代頃から韓国料理店が少しずつ営業をはじめ、現在は韓流スターやドラマなどの人気により、日本各地から遊びに来る観光客も増えたそうです。

実際、私が来日した当時（2004 年）と現在の新大久保の周囲を比べると韓国人だけではなく、日本人の観光客も著しく増えたことがわかります。以前は新大久保の韓国料理屋さんに入ると韓国人が殆どで、まるで韓国にあるお店に入ったかのように、店員さんから韓国語で話し掛けられたりもしました。最近は日本人のお客さんも増え、お店によっては日本語で対応されるようになりましたが、こちらから韓国語で「アンニョンハセヨ」（こんにちは。）と挨拶をしながら、お店に入ることも多くなりました。日本にいる韓国人として非常に嬉しく思います。

今は、韓流のブームやコリアンタウン、大久保の町の人々のお陰で町全体が活性化されていますが、昔は治安があまりよくないというイメージから、日本人も大久保・新大久保に行くことを控えていたと聞いたことがあります。しかし、韓国人として韓国の文化、特に食文化を知ってもらうために日本人の友達をお家に招き、韓国料理を作って食べさせたことがあります。初めて韓国料理を食べた友達は韓国料理が大好きになり、私と一緒なら新大久保に行ってみたいと言ってくれました。新大久保に初めて行った友達は日本の中の韓国を体験し、今はすっかり韓流ファンとなりました。

日本と韓国の文化交流の場としての新大久保。日本にいながら韓国の食べ物が懐かしくなると、お袋の味を探しに訪れる新大久保。食べ物から癒されるのもあるかもしれませんが、町の雰囲気から韓国にいる気分となり、コリアンタウン、新大久保にいるだけで心が癒されるといっても過言ではないと思います。

ここ、JR 大久保駅・新大久保駅の一帯でグルメなウォーキングもたまにはいいかも知れません。

参考資料
新宿区公式ホームページ
http://www.city.shinjuku.lg.jp（2010 年 8 月 12 日閲覧）

＜コラム・論考 / 칼럼 논고 6＞

―마음의 휴식처、코리안타운―
나의 내러티브:신쥬쿠구와의 관계

오 세연

저는 일본에 유학 온지 올해로 7 년째입니다. 7 년간의 유학 생활을 이야기 하려면, 신주쿠구와의 관계를 빼고 이야기 할수는 없습니다. 왜냐하면 학교, 사는곳, 그리고 사람과의 관계에 있어서 모두,동경 도심의 서부에 위치한 신주쿠 지역에서 이루어지고 있기 때문입니다. 즉, 신주쿠 지역은 저에게 있어서 살아있는 역사 그것입니다.

그 중에서도 신주쿠 지역이라고 하면, 일반적으로 신주쿠역을 중심으로 하는 지역을 떠올릴거라고 생각합니다. 동경 도청을 시작하여 초고층 빌딩들이 펼쳐지는 서（西）신주쿠, 대규모인 상업시설이 즐비한 신주쿠, 밤에는 매우 화려한 거리가 되는 카부키쵸, 한국계 가게가 많이 모여 있는 오오쿠보등, 이 지역은「신주쿠구의 대표」라고 부르기에 합당한 개성 넘치는 얼굴을 가지고 있습니다.

특히 저는「신주쿠구의 대표」중의 신오오쿠보, JR 오오쿠보역 ・신오오쿠보역을 중심으로 7 년간의 일본 유학생활을 보내고 있습니다.

일본 제일의「코리안 타운」이라고 칭하는 JR 오오쿠보・신오오쿠부의 주변은, 에도시대까지는 농촌이었고, 메이지시대에는 철쭉의 경승지（景勝地）로서 근교로부터 많은 관광객이 방문했다고 합니다. 2 차대전후, 재일동포등이 모이기 시작하여, 1970 년대부터 한국요리점이 조금씩 영업을 시작하고 현재는 한류스타와 드라마등의 인기로 인해, 일본 각지에서 놀러 오는 관광객이 늘어났다고 합니다.

실제 제가 일본에 온 당시(2004 년)와 현재의 신오오쿠보의 주변을 비교하면 한국인 뿐만 아니라, 일본인 관광객도 증가한 것을 현저하게 알수 있습니다.이전에는 신오오쿠보의 한국요리점에 들어 가면 한국인이 대부분이었고, 마치 한국에 있는 가게에 들어 간 것처럼 점원으로부터 한국어로 인사를 받았습니다. 최근에는 일본인 손님도 늘었기 때문에 가게에 따라서 일본어로 대응하는 곳도 있지만, 제가 먼저「안녕하세요」라고 인사를 하면서 가게에 들어가는 경우도 많아 졌습니다. 일본에 있는 한국인으로서 매우 기쁘게 생각합니다.

지금은, 한류 붐과 코리안타운,오오쿠보의 지역 사람들 덕분에 거리 전체가 활성화 되었지만, 예전에는 치안이 별로 좋지 않다는 이미지 때문에 일본인도 신오오쿠보에 가는 것을 꺼려했다고 들은 적이 있습니다. 하지만, 한국인으로서 한국의 문화, 특히 음식문화를 알리기 위해서 일본인 친구를 집에 초대하여, 한국요리를 직접 만들어 준 적이 있습니다. 처음으로 한국요리를 먹은 친구는 한국요리를 좋아하게 되어 저와 함께라면 신오오쿠보에도 가 보고 싶다고 하였습니다. 신오오쿠보에 처음으로 간 친구는 일본 안의 한국을 체험하고, 지금은 완전히 한류 팬이 되었습니다.

일본과 한국의 문화교류의 장으로서의 신오오쿠보. 일본에 있으면서 한국의 음식이 그리워질때, 어머니의 맛을 찾으러 방문하는 신오오쿠보. 음식으로 인해 위로를 받기도 하지만, 거리의 분위기로 부터 한국에 있는 기분을 느낄수 있어서 여기 코리안 타운, 신오오쿠보에 있는 것 만으로 마음이 편해진다고 해도 과언이 아니라고 생각합니다.

이곳, JR 오오쿠보역・신오오쿠보역의 주변을,가끔은 미식가 처럼 산보해 보는 것도 멋있지 않을까요.

参考資料
신주쿠구 공식 홈페이지
http://www.city.shinjuku.lg.jp (2010.8.12 열람)

第二部：読み手の視点

제 2 부 : 읽는 사람의 시점

＜『記録集１』の感想 / 『기록집 1』의 감상　1＞

「韓国は近くてとても遠い国」

武田香織（30 代、女性、パート勤務）

韓国は近くてとても遠い国。これはインタビュー集を読む前の、私の韓国に対するイメージ。理由は、私の生活環境の中には韓国人の知り合いは一人もいないし、韓国に旅行した経験もなかったからだ。韓流ブームとも縁が無かった。だからほとんど真っ白な状態でインタビュー集を読んだ。

最初に驚いたのは、語られる内容にあまり違和感がなかったこと。それでも驚かされたことがある。例えば、韓国の幼児教育のことだ。驚き以上に日本の教育に危機感を感じた。私が住んでいるところは田舎で、子どもたちは伸び伸びと育っている。勉強より遊ぶ時間が長く、塾に通っている子どもたちはあまり多くない。聞いたところによると「中学に上がるまでに九九は覚えさせてくださいね」、と学校から注意があるとか。夜中の 2 時まで塾で勉強するという韓国とは対照的だ。

私も 3 人の子どもを持つ母親だが、韓国の幼児教育にかける親御さんのような情熱を子どもの教育に注ぐことができるかと言われると、難しい。学力低下が話題となる日本に比べ、韓国には見習うことがたくさんありそうだ。今後も注目していきたいと思う。

もうひとつ、生活習慣の違いもインタビュー集を読んで知ることができた。1 人で外食をしない、女性は人前でタバコを吸わないこと、などなど。他にも私の知らないことが、まだたくさんあるに違いない、もっともっと新しい発見がありそうな気がする。第 2 集が届くのが今から待ち遠しい。

「한국은 가깝고도 아주 먼 나라」

타케다 가오리（30 대、여성、파트근무）

한국은 가깝고도 아주 먼 나라. 이것은 인터뷰 집을 읽기 전, 저의 한국에 대한 이미지이다. 그 이유는 제 생활환경 중에는 한국인 지인이 한 명도 없으며, 한국에 여행한 경험도 없기 때문이다. 한류 붐과도 인연이 없었다. 그래서 거의 백지상태로 인터뷰 집을 읽었다.

최초로 놀란 것은, 이야기 되어지는 내용에 별로 위화감이 없었다는 것. 그래도 놀란 것이 있다. 예를 들면, 한국의 유아교육이다. 놀란 것 이상으로 일본교육에 위기감을 느꼈다. 내가 살고 있는 곳은 시골로 아이들은 무럭무럭 자라고 있다. 공부보다 노는 시간이 길고, 학원에 다니고 있는 아이들은 그다지 많지 않다.

물어 본 곳에 의하면, 「중학교에 들어가지 전까지 구구단은 외우게 해주세요」 라고 학교에서 알림 사항이 있다 라던가. 한밤중인 2 시까지 학원에서 공부한다라는 한국과는 대조적이다.

저도 3 명의 아이를 둔 엄마로서, 한국의 부모들이 유아교육에 거는 것 같은 정열을 아이들 교육에 쏟을 수 있을지 묻는다면 어렵다. 학력저하가 화제가 되고 있는 일본에 비교해서 한국에는 배울 점들이 많이 있는 것 같다. 앞으로도 주목해 가고 싶다.

한가지 더 생활습관의 차이도 인터뷰 집을 읽고 알게 되었다. 혼자서는 외식을 안 하는 것, 여성은 다른 사람 앞에서 담배를 피우지 않는 것 등등. 그 외에도 제가 모르는 것이 많이 있음에 틀림없으리라, 더욱더 새로운 발견이 있을 것 같은 느낌이 든다. 제 2 집을 보는 것이 벌써부터 기다려진다.

＜『記録集１』の感想 / 『기록집 1』의 감상　２＞

「ナラティブへのギャップと感想」

中島広美（40 代、女性、主婦）

最初、このインタビュー集を読むのに違和感のような、うまく言葉で表せない、心の底にざわめくものがあった。同じ同胞でありながら、20 年以上日本に住み、デラシネ（根無し草）を気取り、納得と不安の両輪の間でバランスをとっている自分には、新宿の若い世代の韓国人に対する特別な関心はなかった。知人からこの冊子が送られてきて、目の前に置かれた時、私に「ほら、開けてみてよ。韓国人だったでしょう？ 今もそうでしょう？」、と催促するような、問いただすような、自分の中の声に振り回されるような感じがした。そして、ページを開いた。

ナラティブだの、アイデンティティだの、「顔」だのという言葉が動きだし、私に語りかけ、こんがらかせる。私はそれらにどこにも漂流されまいとしていた。語りたいけど、この人たちみたいに語れない自分がいる。ナラティブされた彼らの語りには深い思考がないように感じた。どちらかというと軽く、まるで世界の一市民のように、渡り鳥のように、あちらこちらをわだかまりなんかないように、一見自由そう。でも 私には彼らのもどかしさが垣間見える。

世界のどこにも、安住でき自由になれる場所なんてない。いざこざがあり、理不尽な体験をすることもある。それを時には語り合い、そして再び自由を求めて生きる。この日本という国、東京という首都、新宿というまちは、そうした生き方にふさわしいのだろうか。

ナラティブには語り手による微調整とも言える“解説”の面がある。それを聞き取る側、そして、それを読む側にもそれを“解説”している面がある。テレビのドキュメンタリー番組のナレイター（解説者）のように、第三者的に語られるのが私にはなぜかしっくりくる。インタビューを読みながら私は考えた。“この人は自分ではこう言うけれど、他の人はどんなふうに読むのだろうか？”と。もうひとつ踏み込んだ言葉が欲しい。世代の違いかもしれない。私はもう完全な韓国人とはいえないからだろうか。

今の私はインタビュー集の中の人たちのように、日本語さえできればたくさんのチャンスがあるのに、とはもはや思えない。代わりに、以前の私、過去の私に、タイムラグはあるものの、似ている自分に出くわして、狼狽しながら、でも、ナラティブでないところの（語られてない）、語られないところで共感したい衝動を感じた。

＜『記録集１』の感想 / 『기록집 1』의 감상　２＞

「내러티브에 대한 갭과 감상」

나카시마 히로미(40 대、여성、주부)

처음에 이 인터뷰 집을 읽는 것에 위화감과 같은, 무어라 말로써 표현하기 힘든 마음속으로부터의 웅성거림이 있었다. 같은 동포이면서 20 년 이상 일본에 살며 뿌리 없는 풀처럼, 납득과 불안이라는 두 바퀴 사이에서 밸런스를 잡고 있는 자신에게는, 신쥬쿠의 젊은 세대 한국인에 대해 특별한 관심은 없었다. 지인으로부터 이 책자가 보내어져 와서, 눈 앞에 두었을 때, 나에게 「봐, 열어봐. 한국인 이였잖아. 지금도 그렇지?」라고 재촉하는 것 같은, 따져 묻는 듯한, 자신의 속내에 휘둘러지는 듯한 느낌이 들었다. 그리고 페이지를 열었다.

내러티브 라든지, 아이덴티티 라든지 「얼굴」이라든지, 라는 말이 움직 이기 시작해, 나에게 말을 걸어 혼돈스럽게 한다. 나는 그것들 어디에도 표류하지 않으리라 했다. 이야기 하고 싶어도, 이 사람들처럼 이야기 할 수 없는 내 자신이 있다. 내러티브 되어진 그들의 이야기에는 깊은 사고가 없는 것 같이 느꼈다. 어느 쪽이냐 라면 가볍게 마치 세계의 한 시민인 것처럼, 철새처럼 이쪽저쪽을 막힘이 없는 것 같이, 일견 자유로울 것 같다. 하지만 나에게는 그들의 안타까움이 살짝 보인다.

세계의 어디에도 안주해서 자유로워질 수 있는 곳은 없다. 옥신각신이 있고, 불합리한 체험을 할 수도 있다. 그것을 때로는 서로 이야기하며, 그리고 다시금 자유를 찾아서 살아간다. 이 일본이라는 나라, 동경이라는 수도, 신쥬쿠라는 거리는 그러한 삶의 태도에 어울릴 것인가.

내러티브에는 이야기하시는 분에 의한 미조정이라고도 할 수 있는 “해설” 의 면이 있다. 그것을 듣는 측, 그리고 그것을 읽는 측에도 그것을 “해설” 하고 있는 면이 있다. 텔레비전의 다큐멘터리 프로그램의 해설자처럼, 제 3 자 입장에서 이야기 되어지는 것이 나에게는 왜인지 강하게 다가온다.

인터뷰를 읽으면서 나는 생각했다. “이 사람은 자신은 이렇게 이야기 하지만, 다른 사람은 어떻게 읽을까? 라고.

한가지 더 깊이 파고든 말이 있으면 좋겠다. 세대차이 일지도 모른다. 나는 이제 완전한 한국인이라고는 말할 수 없기 때문일까.

지금의 나는 인터뷰 집 속의 사람들처럼, 일본어만 된다면 많은 기회가 있다 라고는 더 이상 생각되지 않는다. 대신에 이전의 나, 과거의 나에게 타임 래그는 있지만, 닮은 자신에게 맞닥쳐져 낭패하면서, 하지만, 내러티브 되어지지 않은 부분의(이야기 되어지지 않은), 이야기할 수 없는 부분에 공감하고 싶은 충동을 느꼈다.

＜『記録集２』の感想 / 『기록집２』의 감상　１＞

新宿のニューカマー韓国人のライフスタイル記録集を読んで

塩見直亮（20 歳、男性、学生、東京都）

正直なことを言うと、この冊子を読む直前まで、人のライフスタイルを知ることはどうでもよいと思っていた。これは、決して韓国人が嫌いだからというわけではなく（むしろ韓国人は好きである）、一人の人間としての生き方を赤の他人が知り、どうこう言うものではないと思ったからである。

しかし、この冊子を読んでいくうちに、日本が、日本に来る外国人に対する対応をもう一度考え直さなくてはならないのでは、という感情を抱くようになった。

まず、日本語学校の問題である。日本語を外国人が習うには最適な場所であるのは尤もではあるが、先生以外の日本人との接点が全くないようでは、「本当の日本語」というのは習得できないような気がする。私の考える「本当の日本語」とは、現代の若者が使うような、「やばい」や「うざい」などである。あくまで思い込みではあるが、日本語学校では、きれいな日本語、つまりは最近あまり若者が使わなくなっていっている日本語を教えている気がする。私の友人である留学生の日本語の教科書を見ても、普段全く使わない日本語が書かれているため、日本語学校でも同じような教科書を使っているだろうと想像はつく。彼ら留学生の場合は、大学でほかの日本人との接点があるため、日本語を使用するには困らないであろう。しかし、日本語学校だけで、日本人との接点がなく黙々と授業を受けているだけの場合は、あまり使われていない日本語を使用していくことになってしまい、余計日本人との接触が困難になり、日本に来たのに、かえって日本嫌いになりそうな気がする。そのため、日本語学校ではもっと課外活動を多くし、日本での生活を肌身で感じて学ぶような授業にしていけばよいと思う。そうすれば、自然と日本の文化も学ぶことができ、さらには、普段使われている日本語を自然と身につけていけると、私は思う。

また、韓国人ばかりの日本語学校のクラスというのも改善すべきであると思う。私自身も一度イギリスの大学に英語留学したことがあるが、全くと言っていいほど英語ができない私であったが、クラスに日本人だけでなく、さまざまな国の学生がいたということもあり、身ぶり手ぶりで相手に伝え、交流をした。もしも、交流が全くなく、日本人だけで英語を学んでいたら、おそらく日本で英語の授業を受けるのと変わりはないと思う。なので、これは韓国人などの外国人にも言えるように、90%以上が韓国人というクラス環境では、絶対韓国語を使ってしまうだろうし、日本に勉強に来ているほかの国々の人々とも接点が全くない気がする。そのため、この点を改善すべきと私は考える。

さらに、為替に応じて学費を変えていくべきだと思う。学校を経営していく面ではきついとは思う。しかし、日本人向けではなく、外国人向けの学校であるため、今現在の円高の状況で今までと同じ学費で行うと、生徒が入学しなくなっていったり、アルバイトをハードにしなくてはならなくなり、勉強がおろそかになったりする虞があると思う。

一方、良い点としては、日本人の温かさである。周囲の人間が、外国人が日本にいることに慣れているだけなのかもしれないが、生活を行っていくうえで、差別が少なくなっていると、この冊子を読んでもわかったし、普段の生活でも思う。

改善点はあるが、良い点をもっと伸ばしていけば、日本に対する好感度がより一層あがり、反日感情がある人々も減っていってくれるのではないだろうか。海外滞在経験のある日本人が、日本が見習うべき点をもっと表に出していくべきだと思う。そうすれば、いろいろな国々の人々とも共存できる国が形成されていくと私自身は思う。

＜『記録集２』の感想 / 『기록집２』의 감상　１＞

신쥬쿠에 새로이 이주해 온 한국인들의 라이프스타일 수록집을 읽고서

시오미 다다아끼(20 세, 남성,학생,동경)

솔직히 말하면 이 잡지를 읽기 전까지 다른 사람의 라이프스타일을 알게 되는 것은 아무래도 상관없었다. 한국인이 결코 싫어서가 아니라(오히려 한국인을 좋아한다) 한 사람의 인간으로서의 삶의 방식을 전혀 모르는 사람이 이렇다 저렇다 할 문제는 아니라고 생각했기 때문이다.

하지만 이 잡지를 읽고 있는 중에 일본이, 일본에 오는 외국인에 대한 대우를 다시 한번 생각해 보지 않으면 안 된다는 감정을 품게 되었다.

먼저, 일본어학교의 문제를 생각해보게 되었다. 일본어를 외국인이 배우기 위해 최적의 장소임에는 틀림없으나 선생님 이외의 일본인과 접할 기회가 전혀 없어서는 “진정한 일본어” 라는 것은 습득할 수 없다는 생각이 든다. 나는 현대의 젊은이들이 사용하는 “やばい”나 “うざい”[1] 등이 “진정한 일본어” 라고 생각한다. 어디까지나 내 생각일 뿐이지만 일본어학교에서는 아름다운 일본어, 즉 요즘에는 젊은이들이 별로 사용하지 않는 일본어를 가르치고 있는 듯한 느낌이 든다. 내 친구 중에 유학생이 있는데 그 친구의 교과서를 보면 일상생활에서 전혀 쓰이지 않는 일본어가 적혀 있기 때문에 일본어학교에서도 비슷한 교과서를 사용하고 있을 것이라는 상상이 충분히 간다.

그들 유학생의 경우는 대학에서 다른 일본인들과 접할 기회가 있기 때문에 일본어를 쓰는 데에는 불편함이 없을 것이다. 하지만 일본어학교 이외에 일본인과 접할 기회가 없이 묵묵히 수업을 받고만 있어서는 별로 사용하지 않는 일본어를 쓰게 되고 말아서 오히려 일본인과 접할 때 어려움이 생기게 되고 모처럼 일본에 왔는데 일본이 싫어지게 될 것이라는 느낌이 든다. 일본어학교는 더욱더 과외활동을 늘려서 일본에서의 생활을 피부로 느끼고 배울 수 있는 수업을 만들어 가면 좋을 것이라 생각된다. 그리하면 자연스럽게 일본 문화를 배울 수 있고 더 나아가서는 평소에 쓰지 않는 일본어를 자연스레 익힐 수 있을 것이다. 또한 한국인만 가득 있는 일본어학교의 교실도 개선해야 한다고 생각한다. 나도 영국의 대학에 영어유학을 한 번 간 적이 있는데 처음에는 전혀 영어를 하지 못하던 나는 교실에 일본인 뿐만이 아니라 여러 나라의 학생들이 있었기 때문에 손짓 발짓으로 의사소통을 하며 교류를 했었다. 만약에 전혀 교류가 없이 일본인만 모여서 영어를 배웠다면 아마도 일본에서 영어 수업을 듣는 것과 마찬가지였을 것이다. 그렇기 때문에 한국인이나 다른 외국인에게도 해당되는 말이지만 90%이상이 한국인인 교실 환경에서는 절대로 한국어를 사용하게 될 것이고 일본에 공부하러 온 다른 나라의 사람들과도 접할 기회가 전혀 없으리라는 느낌이 든다.

그래서 나는 이러한 점들을 개선해야 한다고 생각한다. 더 나아가서 환율에 따라서 학비를 바꿔야 한다고 생각한다. 학교를 경영해나가는 입장에서는 힘들다고는 생각한다. 하지만 일본인을 대상으로 하는 것이 아니라 외국인을 대상으로 하는 학교이기 때문에 지금 현재의 엔고 상황에서 지금까지의 학비와 똑같이 받으면 학생들이 입학하지 못하게 되거나 아르바이트를 더 늘리지 않으면 안되게 되어 공부를 소홀이 하게 될 가능성이 있다. 한편 좋은 점으로서는 일본인의 따뜻함을 들 수 있다. 주변의 사람이 외국인이 일본에 있다는 사실에 익숙해 진 것인지는 모르지만 생활을 하는 과정에서 차별이 적어지고 있다는 것을 이 잡지를 읽고 알게 되었으며 평소의 생활에서도 그렇게 느낀다.

개선해야 할 점은 있지만 좋은 점을 더욱 개발하여 나아간다면 일본에 대한 호감도가 더욱 높아질 것이고 반일감정을 가지고 있는 사람도 줄어 가게 되지 않을까. 해외체재 경험이 있는 일본인이 목소리를 높여서, 일본이 보고 배워야 할 것들을 더욱더 발언해야 한다고 생각한다. 그러면 여러 나라의 사람들과 함께 살아갈 수 있는 나라가 형성되리라고 생각한다.

---

[1] 일본어의 속어

＜『記録集２』の感想 / 『기록집２』의 감상　２＞

記録集を読んで

北口　弘剛（19 歳、男性、学生、東京都）

新宿の韓国人 100 人の話プロジェクトを読んで、私は、日本に留学、もしくは日本で暮らしている韓国の人々は、成し遂げたい大きな目標を持って日本で生活していることが理解できた。

この記録集でインタビューを受けた韓国人は、日本にすんなりと馴染めていない人が多いと感じた。私自身、留学経験はないが、中学生時代に学校の行事の 1 つとしてカナダへ 2 週間ほどホームステイをしたことがあり、その時、私はカナダの人々と馴染むことができなかった。そのホームステイでは、一緒に行った友人が多くいて、その友人たちとばかり話していた気がする。友人がいてもその国に馴染んでいくことは困難なはずだが、韓国から日本に来た人々は 1 人で何もかもを行っていると思うと、非常に感心する。来日当初は日本語を人並みに話すことは困難であるはずだが、新宿や新大久保へ行き、韓国人の友人を作り、そこから生まれてくる精神的な安心感がわいてくることが、韓国の人々が日本で成功できている大きな要因になっているのではないか、と考える。

また、この記録集を読み進めていて、日本で暮らしている韓国人は、「どうしても日本に留学したい」と思って日本に来ている人は少ないと感じた。これは私の思い込みだが、自分の住んでいる国から海外に出ていく場合、私はどこか特定の国に行きたいのではないか、と思っていた。しかし、この記録集では、いろいろな選択肢があった中で、「とりあえず日本でいいか」というようなことが見られた。私にとっては意外であった。しかし、そのような気持ちで来日した韓国の人々も、日本で生活を送っていくうちに、韓国との相違点や日本の制度に関する疑問など、様々な感情を抱いていっていることも、この記録集からは理解できた。特に、韓国と日本の教育体制に関する事柄についてはよく述べられていた。韓国のように大学受験のための準備期間としてある高校時代等よりも、日本のように自由な環境の中で伸び伸びと生活できる方が良いのではないかという意見が印象的であった。また、海外から来た人は、日本に住んでいくために必要な手続き等で、日本の制度の煩雑さを理解できていると思う。これらのことから、日本人が知らない制度を韓国の人々は知っているのではないかとも考える。

そして、それぞれのインタビューでの最後の項目で、将来どうしていきたいかや今後の目標について述べられていた。韓国の人々は、韓国に戻って日韓の交流に関する仕事に携わることや、日本で韓国料理店やその他の店を起業することなどの目標があることが分かった。様々な目標を掲げている韓国の人々は、日本で得た人脈やいろいろな経験により、自分のやりたいことに自信を持って、目標を達成しようとしていることも新たに理解できた。

記録集を読んで、改めて韓国の人々の向上精神というものは素晴らしいものがあることが分かった。また、韓国の人々は、韓国への愛国精神も強く持っていることも併せて理解できた。日本の人々が「日本」という国に対して愛国心を持って言われるかというと、持っているとは一概には言えないであろう。インタビューを受けた韓国人だから、私はこのように思ったのかもしれない。インタビューを受けた韓国の人々が抱いている感情としては、「日本は物価が高い」ということが挙げられていた。これは仕方のないことだが、これらのことを解決するための 1 つとして、友人や日本で知り合った人々と協力し合って問題解決を行っていることも理解できた。

また、このような機会がなければ、新宿や新大久保で暮らす韓国の人々の生活というものを知ることが叶わなかったであろう。これらの様々な異文化をいかにして乗り越えてきたのかということを分かることができて、非常に有意義であると感じた。

＜『記録集２』の感想 / 『기록집２』의 감상　２＞

기록집을 읽고서

키타구치 히로타케(19 세, 남성,학생,동경)

나는 신쥬쿠의 한국인 100 명의 이야기 프로젝트를 읽고 일본에 유학오거나 아니면 현재 일본에 살고 있는 한국인들이 반드시 이루어 내고자 하는 커다란 목표를 가지고 일본에서 생활하고 있다는 사실을 깨닫았다.

이 수록집에서 한국인의 인터뷰를 읽고 일본의 생활에 익숙해 지지 못하고 있는 사람들이 많다고 느꼈다. 나는 유학을 해 본 경험이 없지만 중학교 때 학교의 행사 중에 캐나다에 2 주 정도 홈스테이를 한 적이 있었다. 그 때의 나는 캐나다 사람과 친해지는 것이 힘들었다. 홈스테이에는 같이 간 친구들이 많았고 나는 그 친구들이랑만 이야기를 한 기억이 난다. 친구들과 함께 갔음에도 불구하고 그 나라에 익숙해지는 것이 힘들기 마련이건만 한국에서 일본에 온 사람은 자기 스스로 모든 것을 해야만 한다고 생각하면 정말로 대단하다고 느껴진다. 처음 일본에 왔을 때는 일본인처럼 일본어를 하는 것이 힘들텐데 신쥬쿠나 신오오쿠보에 가서 한국인 친구를 사귀고 그곳에서 정신적인 안도감을 얻을 수 있다는 사실이 한국사람들이 일본에서 성공할 수 있는 큰 요인이 아닐까라고 생각한다.

또한 이 수록집을 읽어가면서 일본에 살고 있는 한국인은 “어떻게 해서든지 일본에 유학을 하고 싶다” 라고 생각해서 일본에 온 사람은 적다고 느꼈다. 단지 내 생각일 뿐이지만 자기가 살고 있는 나라와 다른 해외에 나갈 경우, 나는 특정의 어떤 나라에 가고 싶지 않을까 라고 생각했었다. 하지만 이 수록집에는 여러 가지 선택 가능한 나라가운데 “일단은 일본이 괜찮겠지” 라는 느낌을 받았다. 나로서는 정말 의외였다. 하지만 그러한 마음으로 일본에 온 한국 사람들이 일본에서 생활하면서 한국과의 차이점이나 일본의 제도에 관한 의문점 등 여러 가지 감정을 가지고 있다는 사실을 이 수록집을 읽고 알게 되었다. 특히 한국과 일본의 교육시스템에 관한 내용들이 잘 나타나 있었다. 한국처럼 고등학교가 대학의 수험을 위한 준비기간으로서 존재하는 것보다 일본처럼 자유로운 환경에서 쑥쑥 자라 갈수 있는 편이 낫지 않을까라는 의견이 인상 깊었다. 그리고 해외에서 온 사람들은 일본에서 생활하는데 필요한 여러 가지 수속이나 일본의 제도가 너무 번잡하다는 것을 잘 이해하고 있다고 생각한다. 이런 것을 보면 한국인들은 일본인도 모르는 제도를 알고 있지 않을까라고도 생각한다.

그리고 각각의 인터뷰 마지막 항목에서 장래에 무엇을 하고 싶은지, 앞으로의 목표에 대하여 쓰여져 있었다. 한국 사람들은 한국으로 돌아가 한일교류와 관련된 일을 한다던가 일본에서 한국요리점이나 다른 종류의 가게를 연다는 등의 목표를 가지고 있다는 사실을 잘 알았다. 다양한 목표를 가지고 있는 한국 사람들은 일본에서 얻은 인맥이나 여러 가지 경험을 가지고 자기가 하고 싶은 일에 대하여 자신감을 가지고 목표를 달성하려고 한다는 것을 새로이 깨달았다.

수록집을 읽고서 다시 한번 한국 사람들의 향상심이라는 것에 대하여 대단하다고 느꼈다. 그리고 한국 사람들은 한국에 대하여 대단한 애국심을 가지고 있다는 사실을 더불어 알게 되었다. 일본인들에게 “일본”이라는 나라에 대하여 애국심을 가지고 있는지 물어본다면 모든 사람이 애국심을 가지고 있다고는 말할 수 없을 것이다. 인터뷰를 한 한국 사람이기 때문에 이런 생각을 가지게 된 것인지도 모른다. 인터뷰를 한 한국 사람들이 가지고 잇는 감정 중에 “일본은 물가가 높다” 라는 것이 있었다. 이것은 어쩔 수 없는 일이지만 이것을 해결하기 위한 하나의 방법으로서 친구나 일본에서 알게 된 사람들과 서로 협력하여 문제를 해결해 나가고 있다는 것도 알게 되었다.

또한 이 수록집을 읽지 않았다면 신쥬쿠나 오오쿠보에서 생활하고 있는 한국 사람들의 생활을 알 수 없었을 것이다. 다양한 이문화에 있어서 이러한 어려움들을 어떤 식으로 이겨냈는지 그것을 알 수 있어서 정말로 유익한 경험이었다.

第三部：27 人の韓国人ニューカマーの声

제 3 부 : 27 명의 한국인 뉴커머들의 목소리

＜ インタビュー / 인터뷰　1 ＞

キム・スヒョン（20 代・女性）　「日韓共同作業を夢見る、作家志望生」

2009 年 11 月、光州出身
学生（2006 年度のミスコリアの美[1]に選ばれる）、日本歴 1 年半
インタビュー：呉　世蓮（インタビューは韓国語で行われた）

◇　現在の仕事　◇

今は、学生です。ドラマの作家を志望する、学生です。ミスコリアは、職業ではなく、元ミスコリアとして社会で活躍するドラマ作家になりたいです。そして将来、批評家の方にも。そのために、日本で、日本の歴史と社会について勉強をしたいです。

◇　日本語の勉強は？　◇

日本に来る前に、本を読んだりしましたが、韓国の日本語の塾でひらがなから習いました。現在は 2008 年 4 月から、日本語学校に 1 年半くらい通っています。

◇　日本語の習得　◇

日本語は英語と違って韓国語と文法も似てて、似てる単語も多くて、最初は覚えやすかったけど、勉強をすればするほど難しくて、中国と同じく漢文を使いながら、日本は何か情緒的な意味が入ってるような気がします。

韓国で文藝創作、言語を専攻してきました。言葉を使って創作する仕事をしたいです。意思疎通がうまくいかない日本に初めて来たときに、道を教えてくれる時には、直接連れていってくれたり、身振り、手振りなどで道を案内してくれたことから、言葉についてもう一度考えられるチャンスだったと思います。日本は近い国ですけど、言葉を発しないと日本人なのか、韓国人なのか区別付かないじゃないですか。言語を使えない状態で人々と意思疎通をした経験があったからこそ、日本人のことが好きになったというか（笑）人と人として。

◇　いざ日本に来てどうだったのか　◇

韓国と似てるところもありますが、韓国よりは外国人が生活するところが多く、日本は日本という一つの国ではなく、一つの世界？と表現しても言い過ぎではないと思います。島国である日本は、多様な国の文化があるという、多文化といいますか、アジアでありながら、西洋的な雰囲気とアジア的な雰囲気が、日本ならではの個性だと思います。知れば知るほど、宝物の倉庫のように、面白いことがいっぱいです。

あと、マックの店員さんが、50、60 代のおばさんが、少女のように明るく挨拶をしながら、「いらっしゃいませ」というのを見て、とても驚きました。50, 60 代の方がファーストフード店で働くのをみて、日本から生命力と尊敬心を感じました。韓国では絶対見られない光景ですから。

◇　日本に来て大変だったことは？　◇

雰囲気がとても自由にみえて、若干は感情を表現するには、とても自由でした。しかし、厳しい社会的な雰囲気？個人主義？そのため、大人しく何かの行動をとるべき責任感を感じました。この点で、自ら成長できたと思います。

◇　どのようなところが厳しかったのか？　◇

韓国ではバイトをしたことがなく、私の年齢と近い日本の若者の会話や関心分野など知りたくてバイトをしました。私より若い学生たち、高校生たちが親に頼らず、生活費は簡単に自分で解決しながら、学業を進めていました。その歳に、私は学校だけ通い、親からお金をもらい、私の生活のすべてを親に頼って解決したため、私より年下でも、先輩のような姿、学ぶところのある先輩だと思ったこともあります。自ら独立心を育てようと。このようなところでは、反省もしたり、経済的な観念も、現実的になったともいえます。

---

[1] 韓国では「眞・善・美」と順位を付ける。

◇　韓国人が多いといわれる新宿にはよく行くのか？　◇

池袋に住んでいまして、新宿、新大久保はとても親近感があります。多様性を持っていながら、人を安らかにしてくれる雰囲気があって、よく待ち合わせの場所として人が集まるのだと思います。

新大久保の韓国人のマートには、月一回くらいは行きます。韓国人ですけど、実は新大久保にはあんまり行かないようにしているのです。その理由は、日本語を習いに来たため、なるべく韓国の文化とは接しないようにしているからです。やっぱり日本のキムチと韓国のキムチは違いまして、キムチを買うためには新大久保に行くしかないと思います。そして、他の日本人の友達や中国人の友達に韓国料理を作ってあげたり、何か韓国について知ってもらいたいという韓国人の欲求といいますかね、韓国を知ってもらうためには、やっぱり料理ですよね？（笑）

◇　これから日本にずっといるのか？　◇

一応、韓国に帰り、ドラマ作家の仕事を習い、ドラマ作家に関する仕事をして、30 歳初めに、私の名前でドラマを書けるようになったら、自分の作品を、日本に輸出するか、それとも日本と韓国で共同制作をしたいと思います。そのため、日本語を通訳してくれる人がいなくてもいいように、ひとりで直接交流したくて日本語の勉強をしているわけです。

◇　日本社会に対する要望　◇

個人的な話で、笑ってしまいますけど（笑）

公共施設などを大きく作ってもらいたいです。生活施設？マンションのキッチン、バスなどは若干低いといいますか…

あと、日本は多文化であり、世界の文化が組み合わせられて素敵だと思いますが、ちょっと批判的な言葉でいうと、模倣の国という人もいるほど、その弊害が危険ではないかと思うこともあります。日本の伝統的な部分？昔のものをもう少し生かして、昔の雰囲気をいかせる施設と環境に少し力を入れるとさらに素敵な社会になるのではないでしょうか。

◇　最後に　◇

学生として日本をこのように体験して、日本の現地の人のように、同じく生活をし、同じく働いてお金を稼いで生活をしました。これからは仕事として来日をし、まさに文化を体験したわけなので、日本に対する誤解がうまれないような文化交流ができるようにしたいです。なぜなら、日本が好きになったわけではなく、日本人たち、バイトをしながら日本人が好きになったので、人と人との関係を築きあげながら交流をしたいのです。

＜ インタビュー / 인터뷰　2 ＞

Y さん（30 代・男性）「新宿は今の自分にちょうどいい」

2010 年 01 月 12 日、太田出身、自営業、日本歴通算 11 年目
インタビュアー：渡辺幸倫

Y さんとは彼が来日する前からの 14 年来の友人。これまで、いろいろと遊んだり助け合ったりしてきた。最近はお互いに忙しくなって、会うことも少なくなってきていたので、この機会に話せたのはとてもありがたかった。

◇　今の仕事　◇

Y さんは以前、エンジニアとして会社に勤めていたこともあったが、自分でビジネスをやることに興味を持ってから一念発起。現在は 4 つの仕事をこなす忙しい生活をしている。

「1 つは、韓国からの依頼を受けて日本で一部の仕事をして、またそれを送り返すという仕事。もうひとつは、ある健康食品の流通関係のネットワークビジネスの仕事。で、３つ目が、いわゆる自分の知り合いで仕事を探してる人の相談に乗ってます。あとは、最近頑張ってる仕事がありまして、韓国に投資しようとしている会社の仕事を手伝ってます。」

◇　日本での人とのつながり　◇

そんな Y さんが大事にしているのは人脈。この人脈が広がるのと同時に現在の 4 つの仕事へと繋がっていったという。なかでも、もっとも大事にしているのは教会関係。Y さんはキリスト教の信者で、はじめに日本に来たときからずっと熱心に教会に通っている。奥さんともそこで出会ったし、教会では同世代の人、先輩世代の人、後輩世代の人と幅広いつきあいがある。

「今の人間関係では、教会の人間関係が一番。12 年前に日本にきたときからずっと続いているから、教会の信頼関係が一番深いですね。家族ぐるみの付き合いは教会が多いですね。ほとんど教会です。」

他にも仕事上の人間関係も広がっている。仕事関係では日本人とのつきあいが多いそうで、日本と韓国の間を取り持つ、日本人同士のビジネスの間に立つなど様々な形がある。今後はいわゆる在日韓国人の知り合いも作っていきたいという。まだまだ人脈は広がっていきそうだ。

ただ、人との出会いはいつも楽しいものとは限らない。イライラすることもある。

「ひとつは日本人。被害意識を持ってる日本人。もちろん在日もそうなんですけども、いつも韓国と日本を比べるんですね。別にそうしなくていいんですよ。なのに、わざわざ韓国の悪い点を見つけ出して、『日本はこうなのに、韓国はこうでしょ？』っていう感じでいう人はいますよね。わざと傷つけるんですよ。」

言っている人に悪意があるとも思わないけども、「だからどうしたいの？」といつも思うという。このような思いは、Y さん自身が、ちゃんと目的・目標を意識して日々を送ることを大事にしているところからくるようで、Y さんと同じように韓国から来た人に感じるときがある。

「最初来たときには、光ってたんだけど、マンネリになっちゃって。他の人がなんかやろうとしたらネガティブ発言をするんですね。『おまえさぁ、そもそもだめだろ？』って感じで、言うんですよ。口出すんですよ。別に口出さなくてもいいのに。わざわざ自分の失敗の背景があるから、他の人にそれをやらせてあげないんですね。『やらせてもいいのに。成功するかもしれないのに』っていう感じで、自分は駄目なのに、他の人も駄目にさせる人。そんなことを見てたら自分も口出したくなりますね（笑）」

こんな態度をとってしまうことの多い私は、自分のことをいわれているようで実に耳が痛かった。

◇　人生を変えたフィリピン留学と日本への旅行　◇

Y さんの現在のような姿勢はどこから来ているのか。これまでの人生の中で影響を受けた出来事について聞いてみた。まず語ってくれた事件は、フィリピンへの英語留学。聖書について英語で勉強するサークルに入っていた Y さんは英語の勉強にも興味を持っていた。きっかけは 90 年代初め、大学一年生の夏休みが終わった頃だった。

「先輩の何人かが、アメリカ、フィリピン、タイに行ってきたよ、など言ってたんです。『えー、行けるんだ！』と思って。そこで自分も『どんな風にすればいけるんですか』と聞いたら、『まず軍隊に行かないといけない』って。じゃあっと思って、先に軍隊に志願したんですね。韓国は軍隊制度があって、

それが終わらないと海外に行くのが厳しいんです。だから、先に申請して、1 年生終わったところで軍隊に行ってきました。」

その後、先輩をつかまえては話を聞き、ガイドブックを読みあさって情報収集をした。情報の他に必要だったのがお金。お金を貯めるために大学を休学したいと相談したところ両親が出してくれたという。このフィリピン留学で Y さんの世界観に大きな変化が起こった。

「向こうの人も外人だから変な目で見るんですよね。（乗り合いの）ジープに乗れば、自分だけ外人だから。みんな見るんですよね。自分から見ればみんな泥棒みたいで。『え、後進国の人でしょ』という感じで。はじめはね。」

当時持っていたという自分の偏見を隠さず話す。それが 2 ヶ月後には。

「フィリピン人でもいろんな人がいるということ。外国人に対してもアメリカ人はこう、とかフィリピン人はこうとかそういうイメージがなくなって。あんまり変わらないんだ。そういう風に思えたんですね。これでかなり自分の人生観が変わりました。365 日 24 時間、全てが変わってく時間でした。フィリピンというところは。韓国の姿勢からフィリピンという韓国ではないところに移って、新しい目線で韓国を見るようになりました。」

当時の興奮が伝わる。大学 4 年生になった時には、交換留学で韓国に来ていた日本からの留学生を訪ねて初来日。情報はその留学生からもらったけども、やはりお金は問題。もう親には頼れない。

「ひらめいたのは、3 年生の時にキリスト教のサークルの役員をしていろいろと活動していたんですが、そのサークルの役員用の職員室。そこに行って、理由を説明して、『お金がないんです』って行ったら、『50 万ウォンの奨学金きたからあげるー』って。『ありがとうございます！』となってね。」

話は簡単そうだが、この経験の影響は大きかった。Y さんは直ぐに現在と結びつけてまとめてくれた。

「計画書がちゃんとあれば。やり方がわかったんですよ。フィリピンに行く前から何回かやってくうちに自分のものにした訳だから。今も同じで、今すぐフィンランドとか北極圏に行っても生きて行ける自信を持っているんです。今も投資会社の仕事では、『かなりお金があるんだけど、逆に投資先がないから困っている』状態なんです。『こんなお金、どうすればおろせるの？』と考えても、プロジェクトがないと動かせないんです。それで、『いい計画書がないといけないんだ。プロジェクトがあれば、いくらでもお金がもらえるんだ』って。同じことを分かったんです。レベルは小さいけどやり方は同じ。フィリピンにいった経験、日本の旅行の経験からですね。」

ちなみに Y さんと私はこの日本旅行の際に出会った。釜山からの船に乗り合わせたのだ。その時には Y さんは日本語を全く話せなかったので、英語やつたない韓国語、日本語で語り明かした。日本上陸後も広島までの間だったが旅程をともにした。もちろん、まさか 10 数年後に今日のような日が来るとは思いもしなかった。

◇　将来について　◇

「自分は、これからはずっと日本に住むつもりはありません。逆に他の国でずっといることも考えていないです。私は日本人ではなく韓国人ですが、その前に地球人です。10 年前なら私は『日本か韓国かどっちかに決めなきゃいけない』と思ってたけど、今はどちらにしろ同じです。どちらの国にいても自分の生き方があるから、家族が安全でいい暮らしができていい教育環境でいい経験をつめるところだったらどこでもいいかなと思います。特に日本でも韓国でもお金がある程度あったら関係ないです。」

あくまで自分の生き方ができるところに住みたい。こんな思いが伝わってくる。今後も日本にこだわらないと言うが、現時点で新宿が Y さんのいう「いい経験をつめるところ」ということなのだろう。

Y さんとは初めて会った頃に、「いつか子どもができたら、交換してホームステイさせよう」と約束をしていた。彼には既に 3 人の子どもがいるが、私はまだなので、最近はいつも頑張るように言われてしまう…。録音したインタビューの時間は 70 分ほどだったが、インタビュー前後にも最近の話をいろいろして実に愉快な夜だった。

< インタビュー / 인터뷰 2 >

Y 씨(30 대•남성) 「신쥬쿠는 지금의 나에게 딱 좋다」

2010 년 01 월 12 일, 대전 출신, 자영업, 일본거주 11 년째
인터뷰 담당 : 와타나베 유키노리

Y 씨와는 그가 일본을 방문하기 전부터 14 년 동안 친구. 지금까지 같이 놀거나 여러가지로 서로 돕고 지내 왔다. 최근에는 서로 바빠지고, 만날 기회도 적었는데, 이 기회에 이야기할 수 있어 매우 고마웠다.

◇ 지금의 일 ◇

Y 씨는 이전에 엔지니어로서 회사에 근무했던 적도 있었지만, 비즈니스에 흥미를 가지고 나서 그것에 전념. 현재는 4 개의 일을 해내는 바쁜 생활을 하고 있다.

「첫째는, 한국으로부터의 의뢰를 받아 일본에서 일부의 일을 하고, 또 그것을 되돌려 보내는 일. 또 하나는, 건강식품의 유통 관계의 네트워크 비즈니스의 일. 그리고, 세번째, 이른바 자신이 알고 있는 주변사람 중 일자리를 찾고 있는 사람의 상담에 응하고 있습니다. 그리고, 최근에 노력하고 있는 일이 있는데, 한국에 투자하려고 하고 있는 회사의 일을 돕고 있습니다.」

◇ 일본에서의 인간관계 ◇

그런 Y 씨가 소중히 하고 있는 것은 인맥. 이 인맥이 퍼지는 것과 동시에 현재의 4 개의 일로 연결되어 갔다고 한다. 그 중에서도, 가장 소중히 하고 있는 것은 교회 관계. Y 씨는 기독교 신자로, 처음에 일본에 왔을 때로부터 계속해서 열심히 교회에 다니고 있다. 부인과도 거기서 만났고, 교회에서는 같은 세대의 사람, 선배, 후배 할 것 없이 폭넓은 교제가 있다.

「지금의 인간 관계에서는, 교회의 인간 관계가 제일. 12 년전에 일본에 왔을 때로부터 계속 되고 있기 때문에, 교회의 신뢰 관계가 제일 깊네요. 가족 모두의 교제는 교회가 많네요. 거의 교회입니다.」

그 밖에도 업무상의 인간 관계도 넓어지고 있다. 일 관계에서는 일본인과의 교제가 많다고 하고, 일본과 한국인 사이를 주선하는 일, 일본인끼리의 비즈니스 등 여러 가지 형태가 있다. 향후는 이른바 재일교포 한국인의 인맥도 넓혀가고 싶다고 한다. 아직도 인맥은 넓어져 갈 것 같다.

단지, 사람과의 만남은 언제나 즐거운 것이라고는 할 수 없다. 초조해하기도 한다.「먼저는 일본인. 피해 의식을 가지고 있는 일본인. 물론 재일교포도 그렇지만, 언제나 한국과 일본을 비교합니다. 별로 그렇게 하지 않아도 괜찮은데. 그런데, 일부러 한국의 나쁜 점을 찾아내고, 「일본은 이러한데, 한국은 이러하겠지?」라고 하는 느낌으로 말하는 사람도 있더군요. 일부러 상처를 줍니다.」

말하는 사람에게 악의가 있다고는 생각하지 않지만, 「그래서 어떻게 하고 싶어?」라고 언제나 생각한다고 한다. 이러한 생각은, Y 씨 자신이, 제대로 목적/목표를 의식하고 하루하루를 보내는 것을 소중히 하고 있는 것에서 나오는 같고, Y 씨와 같은 한국에서 온 사람에게 느낄 때가 있다.

「처음에 일본에 왔을 때에는 빛나고 있었는데, 매너리즘이 되어 버려서, 다른 사람이 무엇을 하려고 하면 부정적인 발언을 합니다. 「넌, 원래 안되잖아?」라는 식으로 말하고 맙니다. 별로 말하지 않아도 되는데. 일부러 자신의 실패의 배경이 있으니까, 다른 사람에게 하도록 내버려 두지 않게 되네요.「시켜도 괜찮은데. 성공할지도 모르는데」라고 하는 느낌으로, 자신은 안되기 때문에 다른 사람도 못하게 하는 사람. 그런 일을 보고 있으면 나도 한마디 하고 싶어 지는 군요.」

이런 태도를 취해 버리는 것이 많은 나는, 내 얘기를 하는 것 같아서 사실 귀가 따가웠다.

◇ 인생을 바꾼 필리핀 유학과 일본에의 여행 ◇

Y 씨의 현재와 같은 자세는 어디에서 온 것인가. 지금까지의 인생에서 영향을 받은 사건에 대해 물어 보았다. 먼저 말해 준 사건은, 필리핀에의 영어 유학. 성경에 관해 영어로 공부하는 써클에 들어가 있던 Y 씨는 영어 공부에도 흥미를 가지고 있었다. 계기는 90 년대 초, 대학 1 학년의 여름방학이 끝나갈 무렵이었다.

「선배 여럿이, 미국, 필리핀, 타이에 다녀 왔어, 라고 말했습니다.「오-, 가기도 하는구나!」라고 생각해, 그래서 나도 「어떻게 하면 갈 수 있습니까」라고 물으면, 「우선 군대 안 가면 안

된다」라는 것.... 그래? 라는 생각에, 먼저 군대에 지원했습니다. 한국은 군대 제도가 있고, 그것이 끝나지 않으면 해외에 가는 것이 어렵습니다. 그래서, 먼저 신청하고, 1 학년 끝내고 군대에 다녀왔습니다.」

그 후, 선배들을 붙잡고는 이야기를 물어, 가이드 북을 닥치는 대로 읽고 정보 수집을 했다. 정보 외에 필요했던 것이 돈. 돈을 모으기 위해서 대학을 휴학하고 싶다고 상담했는데, 부모님이 돈을 주셨다고 한다. 이 필리핀 유학으로 Y 씨의 세계관에 큰 변화가 일어났다.

「저쪽 사람들도 외국인이니까 이상한 눈으로 봅니다. (합승)지프를 타면, 나만 외국인이니까, 모두 쳐다 봅니다. 내가 보면 모두 도둑같아. 「그래, 후진국 사람들 이니까」라는 생각으로...처음에는요.」

당시 가지고 있었다고 하는 자신의 편견을 숨기지 않고 이야기해 주었다. 그것이 2 개월 후에는.

「필리핀인에서도 여러 사람이 있다는 것. 외국인에 대해서도, 미국인은 이렇고, 필리핀인은 이렇고 라는 이미지가 없어졌다. 별로 다르지 않다. 그런 식으로 생각이 들었다. 이것으로 꽤 나의 인생관이 바뀌었습니다. 365 일 24 시간, 전부가 바뀌어져 가는 시간이었습니다. 필리핀이라고 하는 곳은. 한국이라는 자세로부터 필리핀이라고 하는 한국이 아닌 곳으로 옮겨기고, 새로운 시선으로 다시금 한국을 보게 되었습니다.」

당시의 흥분이 전해진다. 대학 4 학년이 되었을 때에는, 교환학생으로 한국에 와있었던 일본 유학생을 방문해 첫 일본 방문. 정보는 그 유학생으로부터 받았지만, 역시 돈은 문제. 더 이상 부모에게는 의지할 수 없다.

「번쩍 떠 오른 것이, 3 학년때에 기독교 써클의 임원을 하고 있어 이리저리 많은 활동을 하고 있었다. 그 써클의 임원용 직원실, 거기에 가서 이유를 설명하고, 「돈이 없습니다」라고 얘기하고 갔더니, 「50 만원의 장학금 들어와 있으니까 줄께—」「감사합니다!」라고...」

이야기는 간단한 것 같지만, 이 경험의 영향은 컸다. Y 씨는 곧바로 현재와 묶어 정리해 주었다.

「계획서가 제대로 있으면 방식을 알 수 있습니다. 필리핀에 가기 전부터 몇 번인가 경험이 있어서 인지 그사이에 그 경험들은 내 것이 되었습니다. 지금도, 금방 핀란드라든지 북극권에 가도 살아 갈 수 있는 자신이 있습니다. 지금도 투자 회사의 일에서는, 「 꽤 돈이 있는데, 반대로 투자처가 없기 때문에 곤란해 하고 있는」상태입니다.「이런 돈, 어떻게 하면 모을 수 있는거야?」라고 생각해도, 프로젝트가 없으면 움직일 수 없습니다. 그래서, 「좋은 계획서가 없으면 안 된다. 프로젝트가 있으면, 얼마든지 돈을 받을 수 있다」라고 한다. 같은 것을 알았습니다. 레벨은 작지만 방식은 같다. 필리핀에 간 경험, 일본의 여행의 경험으로부터요.」

덧붙여서 Y 씨와 나는 이 일본 여행 때에 만났다. 부산으로부터의 배에 함께 탔던 것이다. 그 때 Y 씨는 일본어를 전혀 할 수 없었기 때문에, 영어나 변변치 않은 한국어, 일본어로 밤새 이야기했다. 일본에 도착한 후에도 히로시마까지의 여정을 함께 했다. 물론, 설마 10 여 년 후 오늘날 같은 날이 온다고는 생각도 하지 못했었다.

◇ 장래에 대해 ◇

「저는, 지금부터는 계속해서 일본에 살 생각은 없습니다. 반대로, 다른 나라에서 계속해서 있을 생각도 없습니다. 저는 일본인이 아니고 한국인이지만, 그 전에 지구인입니다. 10 년전 이라면 나는 「일본이나 한국 어느 쪽인가로 결정하지 않으면 안 된다」라고 생각했겠지만, 지금은 어느 쪽으로 해라 같습니다. 어느 쪽의 나라에 있어도 나만의 삶의 방법이 있으니까, 가족이 안전하고 좋은 생활이 가능하고, 좋은 교육 환경에서 좋은 경험을 할 수 있는 곳이라면 어디라도 좋다고 생각합니다. 특히 일본에서도 한국에서도 돈이 어느 정도 있으면 관계없겠습니다.」

어디까지나 자신의 삶의 방식대로 살아갈 수 있는 곳에서 살고 싶다. 이런 생각이 전해져 온다. 이후에도 일본을 고집하지 않는다고 하지만, 현시점에서 신쥬쿠가 Y 씨가 말하는 「좋은 경험을 채우는 곳」이라고 하는 것일 것이다.

Y 씨와는 처음으로 만났을 무렵에,「언젠가 아이가 생기면, 교환으로 홈 스테이를 시키자」라고 약속을 했다. 그에게는 이미 3 명의 아이가 있지만, 나는 아직이므로, 최근에는 언제나 노력하라고 소리를 듣는다. 녹음한 인터뷰의 시간은 70 분 정도였지만, 인터뷰 전후에도 최근의 이야기를 여러 가지 할 수 있어 실로 유쾌한 밤이었다.

＜ インタビュー / 인터뷰　3 ＞

PH さん（30 代・女性）「幼稚園は小学校の予備教育？」

2010 年 2 月 25 日、ソウル出身、日本語学校生、日本歴 1 年
インタビュアー：武田里子

◇　略歴と家族　◇

PH さんは 1976 年生まれの 34 歳。4 人きょうだいの末っ子で、自宅はソウルの景福宮の近くにあり、子どもの頃はきょうだいや友だちと公園などでよく遊んだ。学校が休みの時には、釜山にいる叔母（母親のきょうだい）のところに泊りに行き、いとこたちとおいしいものを食べたり、一緒に遊んだ楽しい思い出がたくさんある。両親は 72 歳。今のところ健康で、2 人で旅行に出かけたりしているが、PH さんが一日も早く帰国するのを心待ちにしている。
一番上の兄は旧ソ連に留学したことがある。その影響があったのかもしれないが、ずっと海外で暮らしてみたいと思っていた。大学を卒業後、小学校の教員として働いたあと、幼稚園に転職した。自分の適性としては、幼稚園の教員に向いていると思うし、幼児教育の重要性を感じている。子どもたちに遊びを通した友だちとの関係づくりや情操教育をしたいと思っていた。しかし、実際に仕事を始めてみると、保護者からは遊びよりも小学校に入ってからの勉強に役立つ教科学習に力を入れてほしいというプレッシャーが強く、PH さんが思い描いていたような幼児教育を実践することは難しかった。また、問題行動の目立つ子どもは、親に原因があることが多いと感じるようになった。理想と現実のギャップ、幼児教育を通じて見えてきた親子関係の問題などを考える中で、カウンセラーへの興味がわいてきた。カウンセラーになるためには、心理学を勉強しなければならない。
心理学を学ぶだけなら韓国の大学に入ればいい。でも、PH さんには、留学してみたいという年来の夢もある。そんな PH さんにとって日本に留学して心理学を学ぶことは自然な成り行きだった。しかし、その夢の実現の前に立ちふさがった最初の関門は家族の説得だった。家族に了解をもらうまでに 2 カ月ほどかかった。家族には安定した仕事についているのに、なぜ、留学する必要があるのかが理解できないようだった。それでも最後は、「今できることをしっかりやったらいい」と送り出してくれた。

◇　韓国の幼児教育の問題点　◇

韓国の受験競争の激しさはマスコミにもよく取り上げられるが、そのため幼稚園は小学校入学前の予備教育機関としての位置づけが強く、保護者もそれを望んでいる。そのため幼稚園では、子どもたちを集めるために、ハングルの読み書きや算数だけではなく、英語教育も取り入れなければならず、そのために外国人教員を雇っているところもある。
幼稚園の教員の給与は、日本円に換算すると、公立が 24 万円、私立だと 20 万円前後。給与は小学校の教員の方が高い。PH さんが勤めていた幼稚園は、5 歳児クラスが 20 人、6 歳児クラスが 25 人、7 歳児クラスが 30 人だった。5 歳児は 2 人の教員で担当するが、6 歳児と 7 歳児は担任が 1 人になる。
最近は園児の 8 割は一人っ子である。韓国では教育費にお金がかかるため一人っ子が多い。しかし、一人っ子の子どもたちを見ていると、きょうだいで遊んだ経験がないため、我慢をしたり、おもちゃを他の子に譲ったりすることができなかったり、どうしても自己中心的になりがちで協調性に欠ける傾向がある。PH さん自身は、一人っ子は良くないと感じている。
子どもたちは 9 時に登園し、午後 2 時に退園する。教員はそのあと翌日の教材準備や親との連絡などがあるので、帰宅できるのは早くて 6 時。遅い時は 8 時を過ぎることもある。10 年間の教員生活は、とにかく忙しかった。子どもたちの問題により深くかかわるためには、カウンセリングスキルが必要だと感じていたが、立ち止まって考えたり、勉強する余裕はなかった。

◇　日本での暮らし　◇

2009 年 4 月、中野にある日本語学校に入学するために来日した。初めての来日は 1997 年に大阪にいる

友だちを訪ねた時で、その後、観光で 2 回ほど来日したことがあるので、日本は「外国」という感じはしない。日本は近いし、特に大久保には韓国料理の店や食材店も多いので、生活に困ることはない。ただ、物価が高いので、経済的にゆとりがないと生活するのはなかなか大変である。当面の目標はとにかく来年大学に入学すること。昨年日本語能力検定試験の 2 級に合格したので、今年は大学入試に必要な 1 級にどうしても合格したい。
来日してしばらくの間は、韓国人で日本の大学を卒業して働いている友だちのアパートに居候させてもらい、その後、アパートに移った。アパートは大久保駅から歩いて 5 分なので学校へ行くにもアルバイトに行くにも都合がよい。家賃は 5 万 4000 円。夕食は簡単なものを自分で作って食べる。大久保にはたくさん韓国料理のお店があるが、韓国に比べるととても高いので外食することはめったにない。
一番の悩みというか苦労しているのはアルバイトと勉強を両立させることだ。日本語学校の授業は午後 1 時 20 分から 5 時までで、アルバイトを 2 つ掛け持ちしている。一つは高田馬場にある弁当屋さんで、早朝から昼まで週 4 日働いている。時給は 950 円。このアルバイトのよいところは、朝ごはんと昼ごはんが食べられることである。もう一つは、週 2 回、韓国人夫妻の幼稚園児と小学生に韓国語を教えている。アルバイトは、韓国人留学生向けのウェブサイトですぐに見つけることができた。生活費はアルバイトで何とかやりくりしているが、授業料（年間 60 万円）は貯金を取り崩している。リーマン・ショックでウォンが下がった時には、このまま留学を続けるかどうか迷った。
東京で困った時に相談できる韓国人の友だちが 2 人いるが、日本人の友だちはいない。日本人の友だちが見つけられないのは、まだ、自分の気持ちを日本語で上手く伝えられないことと、時間的に余裕がないためである。気分転換したいときは韓国人の友だちと会っておしゃべりをする。趣味は、散歩をしながら写真を撮ること。

◇　将来の夢　◇

大学を卒業したら韓国に帰って、政府系の教育関係の研究所で働きたいと思っている。でも、競争が厳しいので上手くいくかどうか分からない。他の選択肢として心理学の研究が進んでいるドイツに留学することも考えているが、年齢的に難しいかもしれない。日本での生活は大変なことが多いが、夢があるから頑張れる。

＜ インタビュー / 인터뷰　4　＞

PY さん（20 代・女性）「10 月に戻ります」

2010 年 3 月 3 日、蔚山出身、日本語学校生、日本歴 1 年
インタビュアー：武田里子

◇　略歴と家族　◇

PY さんは、1988 年生まれの 21 歳。韓国の大学を休学して 2009 年 4 月に来日し、中野にある日本語学校の 1 年プログラムに入学して日本語の勉強をしていた。「していた」というのは、このインタビューの数日後に帰国することが決まっていたからである。4 月に休学中の韓国の大学に復学し、卒業論文を書き上げて、10 月に再来日する。そして、来春、日本の大学に入学する計画を立てている。昨年、日本語能力検定試験の 2 級に合格したが、日本の大学に入るには 1 級が必要だと言われている。韓国に帰っても日本語の勉強を続けるつもりだ。PY さんは韓国の大学では文学を専攻しているが、実は、文学にはあまり興味がない。文学部に入ることになったのは、大学入試の結果によるものだった。だから、日本の大学では、本当に勉強したかった経営学部に入るつもりだ。

出身は釜山に近い蔚山で、共働きのサラリーマン家庭で育った。大学生の兄と二人きょうだいである。子どもの頃は、両親が仕事から帰ってくるまでは祖母が面倒を見てくれた。PY さんが小学校に入るころから韓国では受験競争が激しくなり、PY さんも小学 5 年から塾に通い始め、その他にピアノや美術の教室にも通った。中学時代は、塾から帰宅するのは夜 9 時頃で、試験前には夜中の 2 時頃まで塾で勉強した。それは、PY さんが特別だったわけではなく、他の子どもたちも多くが小学校から塾に通っていた。ただ、子どもたちはなぜ勉強しなければならないのかよくわからず、みんなが行くので塾に行っていたような気がする。だから塾では勉強ばかりしていたわけではなく、塾は他の子どもたちと「遊ぶ場」でもあった。

PY さんは、高校 2 年の時、1 年間、選択科目で日本語の勉強をした。理由は、日本の芸能人に憧れたからだ。特にジャニーズが好きで、雑誌に掲載されたジャニーズの記事が読みたくて日本語を勉強した。日本の芸能人が好きな友人が他に 3 人ほどいて、その友人たちと雑誌を回し読みしたり、インターネットで調べたり、NHK の番組を見たりしていた。3 年生の時は、受験勉強のために一旦、日本語の勉強は中断したが、大学に入ってから来日するまで 1 年半ほど日本語の塾に通った。だから、来日した時には日本語での日常的なコミュニケーションには困らなかった。ただ、「韓国で習ったことが、日本に来てみたら意味が違うことがあったり、使い方が違うことがあって戸惑った」という。

2009 年に留学で来日する前に、観光で 4 回ほど来日したことがある。日本に留学中の友だちを訪ねたり、東京、千葉、福岡、熊本などを旅行した。釜山と福岡の間はフェリーが運航されているので、釜山の近くに住んでいる韓国人には九州は身近な場所である。PY さんには在日の親戚はいない。家族に日本語のできる人もいない。

◇　日本での暮らし　◇

日本で暮らしてみて、一番困ったことは日本の天候だという。日本の夏の蒸し暑さには閉口した。それと物価の高さ。生活費を補うためにしゃぶしゃぶ屋さんでアルバイトもした。一日のうち、アルバイトに 5 時間、学校の授業が 4 時間。それに移動などを加えると自習時間を確保するのは大変だった。日ごろのストレスは、週末に友だちとおしゃべりをして発散した。相手は同じ日本語学校の韓国人生徒がほとんどだが、仲の良い台湾人もいる。日本人の友だちと話せば日本語の勉強になると思うが、間違っていないだろうかとか気にしながら話すことになるので、疲れているとそのエネルギーがわいてこない。時々、インターネットのサイトで案内が流れる留学生と日本人がおしゃべりをする会に参加することもある。こうしたイベントは、留学生と日本人の数がだいたい同じで会話練習になることもあるが、日本人参加者が少なくて、韓国人同士のおしゃべりで終わってしまうこともある。

日本で暮らして驚いたことは、「吉野家」みたいに食堂で一人でご飯を食べる人が多いことだ。韓国では、一人で食事をしたり、映画を見たりすることはあまりない。最初はさびしい感じがしたが、しばらくしたら、一人でいる時間がほしい時とか、疲れた時に簡単に食べて帰れるので便利だと思うようになった。かつ丼やお好み焼きなどを自分で作ることもある。日本の食べ物と言えば納豆がある。4〜5 年前から韓国でも、健康ブームの影響でデパートなどで納豆が売られていることは知っていたが、食べたことはなかった。日本に来て初めて食べてみたが、意外に美味しかった。もう一つ驚いたことと言えば、女性が喫茶店や子どもと一緒にいる時にタバコを吸っている姿を見かけたことだ。「韓国ではタバコを吸う女性に偏見があるので、女性は男性の前や親の前では吸わない。」

◇　仕事・恋愛・結婚　◇

PY さんは大学 3 年生。人間としても、女性としてもこれからどう生きていくかについて悩むことが多い。今後の人生プランについては、「したいものはいっぱいありますけど、できるものがあまりなくて、いつも迷っています。結婚は、前はしたかったけど、今は 30 代以上になってからしたいし、就職前にもっといろいろな国に留学したい」。韓国では英語熱が高まっている。確かに大学生の間で英語圏への留学を考えている人も多く、なかには、留学する前に、ウォーミングアップを兼ねてフィリピンで英語の勉強をする人もいる。直接、英語圏に行くよりも、物価の安いフィリピンであれば英語を 1 対 1 で教えてもらえるからだ。PY さんの兄も 4 カ月ほどフィリピンに英語留学した。お兄さんも大学卒業後に留学を考えているという。ただ、そうした英語ブームについては、韓国国内でも本当に必要性があるのか、単なる浪費ではないかといった批判もあるという。

結婚や恋愛は、女子学生の間でよく話題になるテーマである。PY さんの母親は、子育てと仕事を両立させてきたので、PY さんにも自立した人生を歩むことを期待している。PY さん自身も結婚後は両親のように共働きをすることになるだろうと考えている。韓国も日本と同じように未婚化の広がりや離婚率の上昇、出生率の低下など家族の問題がクローズアップされている。PY さんはそうした現状に対して、「私がしたいものを考えたら結婚は遅くなります。でも、社会全体を考えたら、良くない傾向だ」と感じている。「もっと勉強したいし、自分が欲しいものを大事にしたい。本当に信じられる人でないと結婚したくない。離婚は嫌ですから。死ぬまで幸せにしてくれる人じゃないと私は結婚しない」という。女性としてどう生きるか、自分の可能性を追い求めることと、家族規範や性別役割規範とどのように折り合って行くのか。また、PY さんによれば、韓国では、「自尊心の高い」男性がデート費用を払うのが一般的なので、経済的に余裕がない男性はなかなか異性と付き合えないという。一方、女性の方は、美容には惜しまずお金を使う傾向がある。「韓国の男性は、まずは女性を容ぼうで判断することが多いからだ」という。PY さんの生き方や恋愛や結婚への迷いは、社会的経済的制約を受けながらもよりよく生きたいと願う点で、国籍を問わず同世代の女性たちが共通して直面している課題のようだ。

＜ インタビュー / 인터뷰　5 ＞

PH さん（20 代・女性）「将来の夢はパン屋さん」

2010 年 3 月 4 日、ピョンテク出身、日本語学校生、1 年目
インタビュアー：武田里子

◇　来日までの略歴　◇

PH さんは、1980 年生まれの 29 歳。出身はソウルから車で 50 分ほどのところにある京畿道のピョンテクである。両親を早くに亡くした PH さんは、大学を卒業するまで兄と二人で暮らしていた。大学卒業後は、韓国の総合家電・情報通信メーカーとしてはトップクラスの大手企業に就職した。勤務地が実家から離れていたため社員寮に入ることになり、初めて一人で暮らすことになった。会社は、有名企業だったが、担当していたのは一般事務の仕事だったので、「毎日毎日同じ仕事でつまらなかった」という。本当は営業など外で働く仕事がしたかったが、チャンスに恵まれなかった。27 歳で退職した時は、「あまり先のことを考えていたわけじゃなかった」。結婚という選択もあったが付き合っていた彼から、日本に留学しようと誘われ、2009 年 4 月に来日した。

PH さんは、「私は日本には来たいですが、留学は全然考えたことがありませんでした。観光は良いですが、暮らすのは大変だと聞いていましたから。でも、ヨーロッパとか、アメリカも留学するのはどこも大変でしょう。それなら同じアジアにある日本が良いのかなあ」と思ったと留学することになった経緯を語った。日本が良いと思った理由は、日本語で上手く説明できないと言いながらも、「韓国より経済が上だし、女性のためのいろいろな文化もたくさんあるし、他の国より働いたり、勉強したりすることができる」と感じたからだという。また、ソウルには日本留学する人たちのための「留学院」がたくさんあり、来日前に入学する学校や学生寮も決めることができる仕組みがあるので、日本に留学することは、それほど難しいことではない。日韓の人の往来が増えていることも日本留学に対する心理的な壁を低くしている。

それでも、実際に留学するまでには、いろいろと下調べをし、来日する 1 年ほど前には彼と下見にも来た。PH さんはその時が初めての来日だった。彼の方は、大学時代に 1～2 回来日したことがあり、PH さんを留学に誘った手前いろいろと責任を感じているようである。

◇　日本での暮らし　◇

今のところ、生活上の問題は二人で協力して解決している。下見で来日した時の滞在は 3 日間と短かったので、新宿や原宿などＪＲ山手線沿線を少し見て回った程度である。その時は、「東京は新しくて韓国より良い所だ」という印象をもったが、実際に生活してみると大変なことが多い。大変というのは、アルバイトをしながら勉強をする生活のことである。アルバイトもなかなか見つけられなかった。「お店も若い人たちが欲しいので」と、年齢がハンディになったという。来日して 3 カ月ほどは貯金を取り崩して生活した。その時は、彼の方も仕事が見つからなかったので、資金が続くかどうか不安で韓国へ帰ることも考えたという。今、アルバイトをしているお弁当屋さんの求人募集はネットで見つけた。朝 4 時半から 11 時半まで働き、そこで昼食をとり、午後からは日本語学校で授業を受ける。PH さんも彼も授業の出席率は 100%である。大久保のアパートの家賃は 6 畳一間で 6 万 8 千円と高いが、学校までは徒歩 7 分と近く、アルバイト先にも徒歩で通えるので我慢している。

PH さんの通う日本語学校は 98%が韓国人である。PH さんのクラスも 15 名中 14 名が韓国人でロシア人が 1 名という構成である。唯一のロシア人は、PH さんによると「韓国人が好きじゃないみたいで、あまりしゃべらない」という。14 人の韓国人の中でアルバイトをしているのは PH さんを含めてわずか 3～4 人で、他の人たちは家から送金してもらっていることを知り、「お金持ちがたくさんいることに驚いた」という。学校には不満がある。来日前の説明では、年に 2 回は日本文化を体験するプログラムがあ

ると聞いていたが、そうしたプログラムはなく、「がっかりした」。

PH さんは、自分だけでなく日本語学校の生徒たちはなかなか日本人との接点が持てないという。学校の中で出会う日本人は先生だけ。交流イベントなどで出会った日本人とは、その時だけで終わってしまい、その後も続く関係を作るのは難しい。クラスメイトの中には、専門学校や大学に進学できれば、今度は日本人の方が大勢になるから自然に友だちができるという人もいる。PH さんは知り合いから、「日本人を紹介してあげるけど、日本人と友だちになるにはお金がかかる」と言われたことがある。確かに「一緒に食事をしたり、飲んだり、話したりするとお金がかかる」ことは分かるが、PH さんはそういう形で友だちを作ることには気が進まない。

◇　将来の夢　◇

PH さんの日本語学校は、2 年プログラムなので、あと 1 年はとにかく日本語の勉強に専念して、大学に進学するつもりだ。大学では経営か経済の勉強をしたいと思っている。インターネットでいろいろな大学の学費や奨学金制度、就職状況などを調べているが、まだ、どこの大学を受験したらよいのか決められずにいる。まずは 6 月の試験までは勉強に専念し、その後は、旅行もしてみたい。まだ、来日してから東京以外に出かけたことがないのだ。PH さんにとって、今一番気がかりなのは、4 月からは授業が午前中に変わるので、お弁当屋さんのアルバイトができなくなることだ。また新たにアルバイトを探さなければならないが、上手く見つけられるかどうか不安を感じている。

PH さんの将来の夢はパン屋さんを開業することである。なぜ、パン屋さんかというと、初めて来日した時にコンビニで買ったパンの美味しさにびっくりしたからだ。韓国の専門店のパンより柔らかくて美味しかったという。日本では、専門学校を卒業してもパン屋で働くためのビザはとれないと聞いているので、たぶん韓国で開業することになる。大学で経営の勉強をして、専門学校でパン作りの勉強もするとなると、PH さんの夢が実現するまでにはまだ 7～8 年かかりそうだ。「大変ですね」という私に、「大丈夫です」とほほ笑んだ。

< インタビュー / 인터뷰 6 >

L·M 씨(20 대·여성) 「5 년간의 일본유학생활을 되돌아 보고」

2010 년 3 월 18 일, 서울 출신, 학생, 체재 5 년째
인터뷰 담당 : 오세연 (인터뷰는 한국어로 실시)

◇ 일본을 방문한 것은, 언제? ◇

2005 년, 고등학교를 졸업하고, 곧바로 일본을 방문했습니다.

◇ 막상, 일본에 와보니 어때요? ◇

나는, 일본에 살면서 언제나 즐거웠다고 생각합니다. 돌아가는 것이 외로울 정도입니다. 주위의 사람의 눈을 너무 신경 쓰지 않아도 되는 일, 이것은 살기 편하다고 생각 합니다.

◇ 친구 ◇

한국에서 일본으로의 유학을 목표로 하고 있는 학생들이 다니는 학원이 있습니다. 고 3 때, 이 학원에서 알게 된 친구와 함께 입시 준비를 하면서, 일본에 있는 일본어 학교도 함께 다녀서, 각자 일본의 대학에 입학했기 때문에, 일본에 살고 있는 한국인 친구가 많습니다.

시간만 맞으면 만나려 하고 있고, 한 달에 두 세 번 정도는 만나고 있습니다. 처음으로, 일본 을 방문했을 무렵은 친구와 함께 살았습니다. 일본어 학교에 다니고 있던 1 년간은 친구와 일본어 학교의 기숙사에서 함께 살았습니다.

◇ 기숙사에서의 생활 ◇

방이 세 개 있는 기숙사였습니다. 하나의 방에 친구와 둘이서 살았습니다. 6 명이 단독주택에 살았습니다. 그러나, 같은 목표를 가지고 함께 공부 하고 있었기 때문에, 서로 보이지 않는 경쟁심이 있었다고 생각합니다. 조금은 심리전과 같은?. 대학에 입학하기 전까지는 이런 일들이 자주 있었습니다.

서로 힘들었던 경험 등을 공유하고 있었기 때문에, 가족보다 제일 이해해 주는 사람은 이 친구입니다. 나에게 있어서 빠뜨릴 수 없는, 제일 중요한 존재라고도 말할 수 있습니다.

◇ 일본인 친구 ◇

일본인 친구는 많다고는 말할 수 없습니다만, 세미나에 참가하기 시작해서 늘어 난 것 같습니다. 여성 교육과 일본 교육사 전공의 세미나참가 학생의 연령대가 제법 높았습니다. 30 대의 친구도, 20 대 후반의 친구도 있어 연령대가 다양하고, 즐겁습니다.

세미나참가 학생은 모두 일본인으로, 중국 유학생이 두 명 있습니다. 같은 외국인의 유학생끼리, 공감하는 것도 많아, 자주 만나고 밥을 먹으러 가거나 놀러 가기도 하고 사이가 좋습니다. 친구와의 관계로 언어의 벽을 느낀 것은, 남자친구가 말을 줄여서 사용하거나 속어 등을 사용해 이해 못했던 적도 있어 웃으면서 대처했습니다. 그렇지 않으면, 다른 여자 친구에게 묻기도 합니다.

◇ 한국인 친구, 일본인 친구, 중국인의 친구의 각각의 차이는 있습니까? ◇

한국인 친구의 경우는, 고교 3 년부터의 친구였기 때문에, 소꿉 친구로, 쭉 함께 생활을 해 왔기 때문에 편하지만, 일본인 친구는 대학에 입학하고 나서, 어른이 되고 나서 만났기 때문에, 벌써 가치관 등이 형성된 상태로, 사이가 좋아지는 것은 간단한 일이 아니었습니다. 언어도 다르고, 처음은 어떻게 가까이 가야 할 지 어려웠지만, 저 같은 경우에는, 친구가 먼저 말을 걸어 주었기 때문에, 가까운 사이가 될 수 있었다고 생각합니다.

성격이라고 하기보다, 말의 뉘앙스의 문제지만, 내 생각과 달리, 전혀 다른 의미로 받아들이는 경우도 있었습니다. 이것이 제일 어려웠다고 생각합니다. 한국에 돌아가도 쭉 연락을 해며, 서로 왕래하면서, 교류해 나가고 싶습니다.

◇ 대학생활에서 느낀 것 ◇

친구와의 관계로, 얻을 수 있던 것도 많고, 배우고 있는 것도 많다고 생각합니다. 솔직히, 공부 이상으로 새로운 사람들을 만나, 이 사람들은, 앞으로의 일생의 함께할 사람들이므로, 소중한 것을

얻었다고 생각합니다.

◇ 자주 가는 장소는? ◇
신쥬쿠입니다. 약속이 있으면, 언제나 신쥬쿠에서 합니다. 신쥬쿠는 출구에 따라서 분위기가 달라, 만나는 사람에 따라서, 출구만 바꾸어 만나기도 합니다. 신쥬쿠의 매력은, 다양한 분위기, 그리고 편리한 교통이라고 생각합니다.

◇ 친구와 코리안 타운인 신오오쿠보에 간 적은? ◇
내가 한국의 요리를 아주 좋아해서, 언제나 친구를 데리고 갑니다. 처음으로 간 일본인 친구는, 맵다고 하면서도, 모두 맛있다고 해 줍니다. 한국의 문화에 대해 자주 여러 가지 묻기도 합니다. 세미나에는 한국인이 저밖에 없지만, 교수님이 한국을 아주 좋아하시고, 수업중에도 한국에 대한 이야기가 자주 나옵니다. 그래서, 친구들도 자연스럽게 모두 한국 문화에 흥미를 가져, 좋아하게 된 것 같습니다.

◇ 아르바이트의 경험은? ◇
일본어 학교에 다녔을 무렵은, 도토르(커피전문점)에서 조금 했습니다. 대학에 들어가고 나서는, 미용성형 외과의 접수로 아르바이트를 했습니다. 가끔, 통역 아르바이트도 했습니다. 전시회나 박람회 등에서, 3 일, 5 일, 어느 회사의 상품을 소개하거나 수출이나 수입 등, 계약을 할 때의 통역을 했습니다.

◇ 아르바이트에서 힘들었던 것은? ◇
내가 수술한 것은 아닌데, 갑자기 전화로 욕을 말하는 손님도 있고, 자기 코를 원래대로 돌려놓으라고 말하는 사람도 있고, 미용성형 외과였기 때문에, 이런 일들은 자주 있었습니다. 미용성형 외과여서, 절대 사과해선 안 됩니다. 사과해 버리면, 병원 측이 인정하게 되기 때문에, 대처하는 것이 힘 들었습니다.

◇ 아르바이트의 경험을 통해 ◇
통역의 일을 하면서, 알게 된 한국인이나 일본인도 많아, 지금도 연락을 하면서 좋은 사이로 지내고 있습니다.

◇ 장래, 구체적인 목표, 하고 싶은 일? ◇
솔직히, 현모양처가 되는 것이 꿈입니다. 결혼하기 전까지는, 일하고 싶습니다. 그 때문에, 같은 일을 반복하는 것 보다는, 출장이나 무역, 관광업과 같은 일을 하고 싶습니다. 내가 일본에 살고, 대학도 일본에서 대학도 다니고 있으니, 일본과 관련된 일을 하고 싶습니다.

◇ 일본에 와서 제일 힘들었던 것은? ◇
개인적으로, 이 공부가 나에게 있어서 정말로 맞는지, 그리고 환율도 높아 경제적으로 힘들었습니다. 그러나, 저는 운이 좋아, 생활비는 장학금으로 괜찮았습니다만, 수업료는, 부모님이 언제나 보내 주셔서, 부모님께는 언제나 죄송스럽게 생각하고 있습니다.

◇ 일본에서 좋았던 것은? ◇
자유로운 분위기가, 나에게 있어서 해방감 이라고 할까요? 여기에 살면서, 혼자서 강해진 것도 있고, 내 인생에 있어서, 지금까지 선택해 온 것 중에서, 일본에 온 것을 결정한 것이, 제일 좋았다고 생각합니다.

◇ 일본의 사회에 바라는 것? ◇
유학생으로서의 5 년간, 느낀 것입니다. 나는 사립 대학이라, 수업료도 비싸고 돈이 듭니다. 솔직히 나는, 운이 좋아 장학금을 받았지만, 장학금의 기회가 많지는 않습니다. 특히 우리 학교의 경우, 외국인을 대부분 받아 들이려고 하지만, 이것에 대해서 대책이 아직은 너무 부족하다고 생각합니다. 아는 사람은 도중에 돌아가버리기도 하고, 힘들게 생각해서 결정한 유학이었는데, 이러한 경우를 보고 마음이 아팠습니다.

＜ インタビュー / 인터뷰　6 ＞

L・M さん（20 代・女性）「5 年間の日本の留学生活を振り返って」

2010 年 3 月 18 日、ソウル出身、学生、5 年目
インタビュアー：呉　世蓮（インタビューは韓国語で行われた）

◇　来日したのは、いつ？　◇
2005 年、高校を卒業して、すぐに来日しました。

◇　いざ、日本に来てどう？　◇
私は、日本に住みながらいつも楽しかったと思います。帰るのがさみしいほどです。周りの人の目をあまり気にしなくていいこと、これは暮らしやすいと思います。

◇　お友達　◇
韓国で日本への留学を目指している学生たちが通う塾があります。高 3 の時、この塾で知り合った友達と一緒に入試準備をしながら、日本にある日本語学校も一緒に通いまして、それぞれ日本の大学に入学したため、日本に住んでいる韓国人の友達が多いです。
時間さえ合えば、会おうとしているので、月 2、3 回くらいは会っていました。初めて、来日した頃は、友達と一緒に暮らしました。日本語学校に通っていた 1 年間は友達と日本語学校の寮に、一緒に住みました。

◇　寮での生活　◇
部屋の三つある寮でした。一つの部屋に友達と二人で暮らしました。6 人が一戸建てに住みました。しかし、一緒に勉強を、同じ目標を目指して、勉強をしたので、互いに見えない競争心があったと思います。ちょっと心理戦のような？大学に入学する前まではこのようなことがありました。
お互いに、大変だった経験などを共有しているので、家族より、一番理解してくれる人はこの友達です。私にとって欠かせない、一番大切な存在とも言えます。

◇　日本人の友達　◇
日本人の友達は多いとは言えませんが、ゼミに入ってから増えた気がします。女性教育と日本教育史の専攻の、ゼミ生の年齢がけっこう高いです。30 代の友達も、20 代後半の友達もいて年齢が多様で、楽しいです。
ゼミ生はみんな日本人で、中国の留学生が二人います。同じ外国人の留学生同士で、共感するところも多く、よく会ってご飯に行ったり、遊びに行ったり、仲良しです。友達との関係で、言語の壁を感じたことは、男の友達が略された言葉を使ったり、俗語など、理解できなかったこともあります。笑いながら対処しました。（笑）それとも、女の子の友達に聞いたりしました。

◇　韓国人の友達、日本人の友達、中国人の友達のそれぞれの違いはありますか？　◇
韓国人の友達の場合は、高校三年からの友達だったため、幼なじみで、ずっと一緒に生活をしてきたわけなので、楽ですけど、日本人の友達は大学に入学してから、大人になってから出会ったため、すでに価値観などが形成された状態で、仲良くなるのって簡単な事ではありませんでした。言語も違って、最初はどうやって近付けるのか、難しかったですが、私の場合、友達が先に声を掛けてくれたので、仲良くなれたと思います。
性格というより、言葉のニュアンスの問題ですが、私の考えと違って、違う意味で受け取られたこともありました。これが一番難しかったと思います。韓国に帰ってもずっと連絡をとり、お互いに行き来しながら、交流していきたいです。

◇　大学生活で感じたこと　◇
友達との関係で、得られたことも多く、学んでいることも多いと思います。正直なところ勉強以上に、新しい人々に出会い、この人々は、これからの一生の人達なので、大切なものを得たと思います。

◇　よく行く場所は？　◇
　新宿です。約束があると、いつも新宿で待ち合わせします。新宿は出口によって雰囲気が違うので、会う人によって、出口だけ変えて会ったりします。新宿の魅力は、多様な雰囲気、そして便利な交通だと思います。

◇　友達とコリアンタウンである新大久保に行ったことは？　◇
　私が韓国の料理が大好きなので、いつも友達を連れて行きます。初めて行った日本人の友達は、辛いと言いながら、みんな美味しいと言ってくれます。韓国の文化についてよくいろいろ聞かれたりします。ゼミには韓国人が私しかいないですが、大学の先生が韓国が大好きで、授業中にも韓国についての話がよく出るのです。それで、友達も自然的に、みんな韓国の文化に興味を持ち、好きになったみたいです。

◇　バイトの経験は？　◇
　日本語学校に通ったころは、ドトールでちょっとしました。大学に入ってからは、美容整形外科の受付でバイトをしました。たまに、通訳のバイトもしました。展示会や博覧会などで、三日、五日と。ある会社の商品を紹介したり、輸出や輸入など、契約をする時の通訳をしました。

◇　バイトで大変だったことは？　◇
　私が手術したわけではないのに、いきなり電話で悪口をいうお客さんもいたり、自分の鼻を元に戻せという人もいたり、美容整形外科だったので、このようなことが多かったです。美容整形外科なので、絶対、謝ってはいけないです。謝ってしまうと、病院側が認めることになるため、対処するのが大変でした。

◇　バイトの経験を通して　◇
　通訳の仕事をしながら、知り合った韓国人も日本人も多く、今も連絡をしながら仲良いです。

◇　将来、具体的な目標、なりたい事？　◇
　正直に、良妻賢母になるのが夢です。結婚する前までは、働きたいです。そのため、同じことが繰り返される仕事より、出張や貿易、観光業のような仕事をしたいです。私が日本に住み、大学も日本で通っていましたので、日本と関連した仕事です。

◇　日本に来て一番大変だったことは？　◇
　個人的に、この勉強が私にとって本当に合うのか、そして円高によって経済的な大変さです。しかし、私は運よく、生活費は奨学金で大丈夫でしたが、授業料は、親がいつも送ってくれまして、さらに円高によって親にいつも申し訳なく思いました。

◇　日本で良かったことは？　◇
　自由な雰囲気が、私にとって解放感といいますか、ここに住みながら、一人で強くなったところもあり、私の人生にとって、これまで選んできたことのなかで、日本に来たことを決めたことが、一番よかったと思います。

◇　日本の社会に望むこと？　◇
　留学生としての 5 年間、感じたことです。私は私立大学で、授業料も高く、お金がかかります。正直に私は、運よく奨学金を貰いましたが、奨学金の機会が多くないです。特に私の学校の場合、外国人を多く受け入れようとしますが、これに対して対策がまだ、足りないと思います。知り合いは途中帰ってしまったり、大変な思いをしながら決めた留学だったのに、このようなケースをみて、心が痛かったです。

＜ インタビュー / 인터뷰　7 ＞

T さん（40 代・男性）「新宿から二度目の出発」

2010 年 4 月 3 日、ソウル出身、会社員、日本歴通算約 15 年
インタビュアー：渡辺幸倫

◇　来日のきっかけ　◇

1965 年生まれの男性。8 人兄弟の 8 番目としてソウルで生まれる。実家は大手の布団屋さん。兄がアメリカに留学していたこともあり、自分もアメリカに行きたいと考えていた。しかし、韓国で教育大学在学中にその兄が帰国してきたので日本留学へと進路を変更。**「日本はバブルの時代だったから、ちょっと良いんじゃないかなって思った」**と振り返る。

◇　来日当初の思い出：楽しい日々　◇

新大久保にあった日本語学校に 2 年通い、その頃に出会った日本人と大学卒業後の 96 年に結婚することになる。T さんが通っていた歯科の衛生士だった。彼女が初めて話をした外国人は T さんだったという。**「最初はデートの時に辞書を何冊か持って。もう漢字わかんなかったら探したりですね」**。思い出話に笑いはつきない。日本語学校卒業後には浦和にある短期大学へ進学した。美術を学びたかったが家族の意見を取り入れ経営学を専攻する。卒業後には東京や大阪などに住み、貿易や飲食店などいろいろな仕事を経験した。在日韓国人の親戚とも頻繁に会っていた。当時はあまり日本に外国人は多くなく、いろいろな人によくしてもらったのがよい思い出。**「僕は運がいいのかもしれない」**と笑ってその頃のエピソードを話してくれた。知り合ったある外食チェーンオーナーに社員旅行に招待されたこともある。そのオーナーとの家族ぐるみの交流はその後韓国に帰国してからもしばらく続いた。

◇　韓国への帰国：成功と挫折　◇

99 年、妻の実家のある大阪に住んでいる時に家族の薦めもあって韓国へ。家業をしばらく手伝うが、自立して商売をすることになる。化粧品の輸出業。韓国で製造し、日本や東南アジアなどに輸出、大手ドラッグストアチェーンの店頭に商品が並んだ。特にシンガポールはテレビ広告なども出した思い出の地。仕事が多忙を極めたその時期に離婚。子どもはいなかった。しばらくすると韓国の大企業が競合品を出すようになり徐々に業績が下がってくる。4 年ほどはやった化粧品業に見切りをつけ、友人の誘いもあって 2007 年に再来日。二回目の日本での長期滞在が始まる。

◇　再来日とこれからの目標：再出発　◇

今回の来日後にも友人の会社をしばらく手伝った後、別の会社に勤めたが、その会社が倒産。しばらく求職活動をしていたが、最近貿易会社に仕事が決まり、現在はビザの申請中。

今後はその会社に勤めながらもお金を貯め、飲食店を開くという希望を持っている。一時期のような大きな会社を経営すると言うことまでは望まないが、自分で独立した事業をしたい。飲食店は韓国料理をベースにしたフュージョンをテーマに、競争の激しすぎない少し郊外に開くのがよいだろうと思っている。そこでさらに資本金を貯めて貿易の仕事でも自立する事を目指している。

「結構お金もあったんですけど、それも全部なくしてしまって…。今は大変ですけど、まだ若いから、がんばるしかないなって思って日本にまた戻ってきたんです。これからは、昔みたいな大きな夢じゃないんですけど、がんばってちょっとずつ貯めて食堂をトライして。もともと貿易の仕事ばっかり何年もやってたので、それもやってみたいなって思ってるんです。やっぱり資本金の問題で、食堂をやってうまくいったらそれからやるでしょう。」

＜ インタビュー / 인터뷰　8 ＞

Ｔさん（30 代・女性）「異国での出産と教育について」

2010 年 4 月 7 日、ソウル出身、主婦、日本歴 13 年
インタビュアー：川村千鶴子・李 坪鉉

◇　経歴と概要　◇

1970 年大田市（デジョン）生まれ、ソウル周辺の小学校を出る。姉家族を助けるためにシドニーに 1 年滞在し、その後結婚（1997 年）、3 度の訪日体験のある夫の希望でともに来日（1997 年）、夫は留学生となり大学に入学し、家族滞在となる。

2003 年就職、出産後 2 児の母となる（国立医療センターと社会保険中央病院で出産、入院助産の費用が出たうえに 30 万円の出産手当もあった）。

いくつかの仕事を体験した。不慣れな日本語で敬語の使い方を間違えたことを理由に解雇されたこともある。2009 年 12 月に、職安通りに化粧品を中心とする韓国物産の小売店を起業することになった。保証金、家賃を払いながら、インタビュー時で 4 ヶ月になる。顧客は 40 代～50 代の韓流ブームに乗った日本人女性が大半を占める。夜は観光バスでやってくる。ビスネスの展開、勝負どころはまさにこれからといったところ。T さんは、接客業に向いていたコミュニケーション力のある性格で、ファンミーティングを企画するなど希望に満ちていた。

◇　異国での出産　◇

Ｔさんは日本で二度の出産を経験する。一番目の子のときは、まだ、日本語がうまく話せず、病院での検査の度に夫と一緒に行ったりした。しかし、実際の分娩の時は、立ち会いができないと言われ、不安な気持ちのまま、一人で分娩室で頑張ったという。

分娩がうまく進まず、24 時間以上たった頃には、主人がお医者さんに何回も帝王切開をお願いしたそうだが、自然分娩を勧められ、出産の違いも感じたという。後から考えると手術せず良かったという。

産後の手伝いのため、義理の母が来日してくれたが、家から病院に来る間、電車を間違って、迷子になり、夫が迎えに行ったというエピソードも話してくれた。

異国での出産は不安であったが、区から出産助成金をもらい、少なくとも経済的不安から開放されていたこと、同胞同士の助け合いもあったことなどが家族の結びつきを強めてきた。ちなみに当時の母子手帳はまだ日本語だけであった。

◇　子どもの保育と教育について　－励みと悩み－　◇

Ｔさんには小学校 5 年生と 1 年生の娘さんがいる。この子どもたちの誕生から子育て、現在までの悲喜こもごもの体験が、Ｔさん夫婦の絆を強めているといっていいだろう。他にも保育や子育ての話など、移住する家族の実態を語ってくれた。経済的に苦しいときに、子どもたちのお稽古事をすべて止めたこともあった。日本語習得の進む子どもたちの成長は、夫婦の前向きな姿勢を勇気づけている。特に商売に挑戦するエネルギーは、子育てで自信をつけてきた過程と無関係ではない。

日本の公立保育園での経験が良く、日本の小学校に入れる際の迷いは無かったという。学校から持ってくる溢れるほどのチラシは理解できず、ほぼ捨てているが、準備するものに関して、保育園での遠足の際のお弁当が用意できなかった経験があり、それ以後は、子どもがしっかりと教えてくれるようになって助かるという。

Ｔさんは、韓国の知識中心の小学校教育とは違って、体育を始め、多方面でも体験をさせてくれる日本の教育方針に満足しているという。

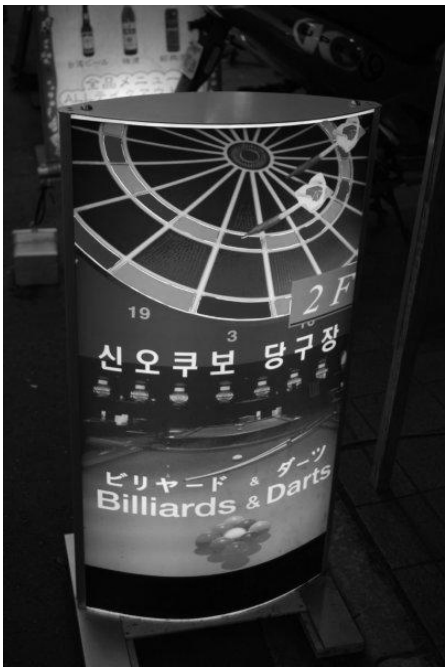
しかし、Ｔさんの悩みのひとつは、子どもたちに韓国語を学ばせたいと思っていることだ。現在、こ

どもたちは日本語を日常的に使用しているが、将来を考えると母語であるハングルを修得させておきたい。そこで、家では、ハングルの絵本を読ませたり、書き写したり、韓国語で返事をしてくれたら、小遣いをあげるなど、色々と工夫している。

◇　将来の展望　◇

T さんの話を聞くと、日本での子育てを通した様々な経験が、人とのつながりを生み、人との付き合いの中での円満さを高め、さらにはご主人が始めた商売をしっかりとサポートできる源になっているように思える。そして、苦労してきた経験を通して学んだ、韓国の魅力（コスメテッィク、インテリア商品など）を営業に活かすというマーケティングを展開しようとしている。顧客としては国籍を問わず、「女性」をターゲットとしているようだ。

今後、子どもたちの成長に伴って、ますます日本社会に根付いたビジネスで成功できる可能性は大きい。地域には、韓流ブームに乗って、遠隔地からも顧客が訪れてくる。新しい日韓の関係性や家族の生活の向上は、Tさんに市民としての意識をも培っているように感じられた。



＜ インタビュー / 인터뷰　9 ＞

Ann さん（40 代・女性）「日本語さえできればたくさんの機会がある国、日本」

2010 年 4 月 18 日、全羅北道出身、自営業、日本歴 6 年
インタビュアー：李 坪鉉（インタビューは韓国語で行われた）

◇　略歴と来日のきっかけ　◇

2005 年来日の 42 歳の女性。夫と新宿でお店を経営。小 1 と 3 才の娘と百人町に住む。韓国ではソウルで大学卒業後、看護士として 1 年働き、教会の知り合いである夫と結婚。

日本に来るきっかけは、百人町でお店を経営する親戚から、店の従業員として来ないかという誘いを受け、それを頼りに何の準備（日本語の勉強、待遇の内容、住まいなど）もなく、ご主人と 1 才の娘を連れて来日した。しかし、実際に到着した百人町にあるお店は、経営破たん間近で、借金取りも来るし、給料もなく、住む部屋を探す余裕さえない状況で、初めての日本は、「ものすごく悲しかった」と当時の思いを語る。

来日前の Ann さんは大学卒業以来、看護士として働いていた。自ら経済力を持って社会生活をしていたので、心の余裕もあった。クリスチャンであるため宣教地としてカナダ、パキスタン、中国、シンガポールなどにも訪問し、将来も宣教のために活動する計画をたてていた。

◇　日本で自分のお店を持つまで　◇

3 年計画での来日の決心から、新宿についたが、予想と違い、全ての生活は一変してしまった。はじめの 2 年間は給料なし。お店の奥にある部屋で子育てをしながら、夫婦で死に物狂いで働き、4 年後にそのお店を買い取ることができた。

日本での一番の苦労は、住居環境も問題だ。給料をろくにもらえず、部屋を借りるお金も無かった。子どもを保育園にも預けられず、私立保育園は環境が劣悪で、お店で面倒を見ながら商売を続けたことが一番大変だったという。来日 4 年後に二番目の子どもを産んだ時も、ろくに産後休みも取れず電話注文などを受けざるを得ないほど、生活は休む暇もない毎日だった。

今は、自分名義のお店を持つことにも成功した。当時を思い出しながら、ここまでできた力の原点は、信仰心と独立心旺盛な性格だという。この性格は、幼い頃から親からあまり干渉されず自由に育ててもらったおかげだと付け加えてくれた。

◇　言葉の問題（日本語）　◇

日本語に関しては、夫婦ともに急に来日を決心したので日本語は全く話せなかった。来日してから、ご主人はお店を手伝いながら日本語学校に通ったが、Ann さんは全く日本語を習う機会も無く、ほぼ 6 年が過ぎてしまった。日本語が話せないことで、当初の取引先は「日本人の店」と「韓国人の店」が 50：50 だったが、今では 30：70 となり、多くの日本人経営のお店との取引ができなくなってしまった。最初に覚えた日本語が、

「いま、たんとうしゃがいないので」「いま、がいしゅつちゅうです」

これだけを言い続けてお店を引っ張ってきたという。ひらがな、カタカナは、時間がある度に書いていると自然に覚えたが、テレビの音などは人より遅く、来日 5 年目になって、やっと聞き取れるようになったという。6 年目を迎える今、お店での電話対応は、

「ツタツタだけど、言いたいことはほとんどいえるようになりました」

「今の我が店の取引先は全部私のお客さんですから」

という。自ら自分のお店の経営を仕切っている自負心も伺うことができた。

3 才から日本の保育園に通い小学校に上がった娘が何よりの日本語の先生で、

「オンマ、それはこういうんだよ」
と、優しく、ママの日本語を直してくれたり、学校でもらってくるフリガナのついたチラシを読むのが楽しみだという。今は、テレビも大事な先生。

◇　子どもの教育　◇

子どもの教育に関しては、正直、忙しさのあまり、今まではあまり考えたことが無かったという。しかし、上の子が小学校に入ることをきっかけに、入学前に韓国にいる教育相談員をしている親戚に相談した。そこで、「せっかく日本にいるので、それを活かした方が良い」とアドバイスをもらい、日本の公立小学校に入れた。日本語と日本の価値観を学び、日本人と情緒的な交流ができることを期待している。

もう一つ、日本で子どもを教育する理由として、「日本という国は、閉鎖的な面もあるが、意外と日本語ができるという前提の下、たくさんの機会を与えてくれる国である」ことをあげた。「日本はたくさんの機会を得ることができる国である」というイメージはやはり成功した本人の経験の影響だろうか。

◇　将来の計画　◇

「夫婦で同じ店の中で苦しみを乗り越え、喧嘩も絶えなかったが、絆も深まった。一人で日本にきていたら、とっくに帰ったはずだ」と振り返る。

これからの目標は、今のお店を大きくして、娘に譲ってあげることだ。不景気の現在は今の店を良く守りながらも、第二第三の我が店をもちたいという計画もある。儲けたお金の投資や、引退後の計画なども夫婦でよく話し合っているという。

Ann さんは児童福祉に関心が高く、看護士の資格を無駄にせず、いつかは、そういう面で使えるようになることも期待している。「きっと、今まで守ってくれた神様がその願いもいつかはかなえてくれることを信じている」と話を終えた。

＜ インタビュー / 인터뷰　10 ＞

U さん（20 代女性）　「中国から韓国、そして日本」

2009 年 12 月 17 日、中国吉林省延辺出身、大学生、日本滞在歴 4 ヶ月
インタビュアー：河合優子

◇　日本に来日するまで　◇

U さんは、1985 年、中国吉林省延辺朝鮮族自治州で生まれた。両親が 9 歳のときに韓国に働きに行ったため、祖父母に育てられた。中国生まれだが、民族学校に通い、コリア語で教育を受けため、コリア語には不自由することなく、さらに中国語（北京語）も話すことができる。高校卒業後、両親のいる韓国に移り住み、韓国南部の大学に入学して、日本語を専攻した。大学で日本語を学ぶことにした理由としては、「日本が好きですから。日本文化とか日本料理とか、日本が好きですから、日本語を選びました」。日本語の優しい響きが好きだったという。韓国では、中国生まれということで、無視されたり、差別的なことばを使われたりしたこともあったそうだ。現在、国籍は韓国である。大学卒業後、2009 年 8 月に来日した。

◇　日本に来日してから　◇

新大久保（大久保地区）に住み、そこの日本語学校に通って日本語を勉強している。年間の授業料は 70 万円で、これは両親が負担してくれた。新大久保に来たのは、延辺のころの友人の紹介だった。この友人は、中国から来日し、すでに 5，6 年新大久保に住んでいるため、いろいろと日本での生活の面倒を見てもらっているという。新大久保は韓国の人が多く、韓国とあまり変わらないという印象だったそうだ。まだ来日したばかりで、日本語があまりできなくても、バイトしたり生活できるという点で、新大久保は U さんにとって非常によい場所だ。自分で韓国料理の店でバイトを見つけて、午前中は日本語学校で 3 時間半日本語の勉強をし、午後は友達と会ったり、生活費のためにバイトをしている。

来日して間もないため、まだ日本人の友人はいない。まだ新大久保以外の場所にもほとんど行ったことがないという。日本語は日本語学校とバイトで使うくらいだ。日本語学校には中国人の留学生も多いので、韓国に移住して忘れてしまっていた中国語を思い出しつつあるという。家族と離れ、一人暮らしをしている日本での生活については、「全部一人だけだから寂しいし、家族にもちょっと会いたいし。一人だけだから、何でも一人で全部します。それがちょっと大変」だという。

◇　将来について　◇

とりあえず日本語学校で 2 年勉強し、その後のことはまだ考えていないという。将来はできれば日本で就職してみたいそうだが、韓国にある日本の会社に就職する、もしくは、日本語、中国語を生かして、韓国の会社で通訳として働いてみたいという希望もある。さらに、韓国料理の食材や化粧品などを日本で売るような、インターネットショッピングの会社を立ち上げてみたいともいう。

結婚はすぐには考えていない。自分の仕事を見つけ、余裕ができたところで考えたいという。相手は、韓国の男性にだけにこだわらず、アジアの人であれば、中国、台湾、日本など国籍を問わずどこの人でもいいという。ただし、「アメリカ人はちょっと・・・」なのだそうだ。U さんに近い容貌の人に親近感を感じるようだ。

今後、日本以外の外国へ行ってみたいか、という質問に対し、どこかに行くのは「自分の運、運命ですから、希望はありません」、「私の仕事、勉強をするだけ」と語る。生まれ育った中国から韓国へ行ったのも、韓国から留学で日本に来たのも運であり、チャンスがあったからだった、と U さんは考えている。今後もチャンスがあればどこか別の場所へいくかもしれないが、今のところ特に希望はないという。とにかく今は、住んでいる日本の生活に慣れ、人と会って勉強したいのだそうだ。

＜ インタビュー / 인터뷰　11 ＞

金某さん（40 代、男性）　「貿易業での成功を夢見て」

2010 年 3 月 4 日、固城（コソン）出身、貿易会社勤務
滞日歴：通算約 22 年
インタビュアー：堀内康史

◇　来日の経緯　◇

来日のきっかけは、韓国で大学生だった当時は、学生運動も盛んで混乱がつづいており、社会の閉塞感などから、とにかく外に出たいという気持ちで日本に来た。日本には、おじ家族がおり、他の外国にはつてがなかったので日本以外の国を行き先として考えることはなかった。

◇　これまでの日本での生活　◇

1987 年に日本に来てからは、2 年ほど日本語学校などに通い、90 年に首都圏にある公立大学に入学した。その後、同じく首都圏にある国立大学の大学院に進んだが、修了はしないまま、ジャーナリストの仕事を本格的に始めた。フリーのジャーナリストとして、日韓以外のアジアの国にも出向き取材をし、自分の取材した映像がテレビで放映されるなど、やりがいのある仕事ではあった。しかし、収入は安定せず、なおかつこの間日本人女性と結婚し子どものできた金某さんは、2 年間でこの仕事はやめ、転職することになった。

◇　現在の仕事について　◇

その後、家計を安定させるため新聞配達の仕事をしたり、翻訳会社に勤めたりと、試行錯誤をしながら、2002 年に自身で起業し、服飾関係の貿易を生業とするようになった。しかし、この仕事も事業の好調不調の差が大きく、安定して家庭に収入を入れることができない状況が続いていた時期に、家族とすれ違いがおこり離婚することになった。

その後も、自身のこの貿易会社は厳しい経営状況が続いていたので、2008 年に休業することにした。現在は、韓国系の企業に雇われて、今までの仕事で得た経験をもとに、3 人で、年間億単位という規模の大きい貿易の仕事をしている。ちなみにこの大久保に事務所を構えたのは、この会社の東京支社長が日本語ができないため、韓国語だけでやっていけるという点も、大きな要因であったという。

◇　日本は住みやすいか？　◇

金某さんにとって、日本は住みやすいか住みにくいかと聞かれたら、住みやすい、という。東京だからというのもあるかもしれないが、個人のプライバシーに深くかかわろうとしない良さを感じているという。仕事上は外国人ということで当初は信頼してもらえない部分もあるが、飲み屋でもどこでも、自分の名前を言って、「えっ、何だお前外国人か！？」と言って逃げるような人間は今までそんなにいなかった、ということもあり、日本の社会のある種の寛容さも感じているようである。

◇　将来の見通し　◇

今後の見通しとしては、韓国より日本に人脈や生活の基盤があるので、おそらくこのままずっと日本で生活していくことになりそうだという。その際、生活の安定や仕事上の便宜を考えると、ビザや国籍についてもいろいろ悩むことがあるという。「国家っていうことは結構悩ましいテーマでもあったけれども、別に俺が背負わなくても背負う人はたくさんいるらしいし、背負って行きたいとも思ってないんで。だから別に日本の国籍をとるから楽だとかそういうことはないんだけれども、まあ少なくとも永住は取るだろうし、あるいは場合によってはもう日本国籍の取得も考えてはいる」という。

そしていつか貿易の仕事を辞めるとしたら、食べ物屋さんをやってみたいという夢がある。あるいは、日本の田舎で「半農半 X（エックス）」という感じで暮らしていけたらいいなとも思い描いている。

＜ インタビュー / 인터뷰　12 ＞

Ｂさん（30 代、女性）「日本の生活に満足」

2010 年 3 月 12 日、釜山出身、大学院生、日本暦 8 年目
インタビュアー：ソン・ウォンソク

◇　日本は留学先の一つとして選択した　◇

Ｂさんは 1978 年生まれの 31 歳の女性。現在都内私立大学大学院で法学修士課程 2 年。今年（2010 年）博士課程への進学が決まった学生だ。日本に他の家族や親戚はなく、都下で一人暮らしをしている。家族は自営業を営むご両親と大学院生の弟が釜山に住んでいる。2002 年、韓国の 4 年制大学で経営学科を卒業したＢさんは、韓国で 6 ヶ月ほど日本語を勉強して、10 月に東京にある日本語学校に入学することで日本での生活を始めた。来日してから新宿にある日本語学校に 1 年半通った後、都内の国立大学に進学した。

留学を考えたのは、「大学卒業する時はやりきれなかったことに対する後悔みたいのがあった」からだ。卒業する前に留学に行ければと思い、3 ヶ月ほど留学してもいいかと家族に言ったら、はじめは反対された。お母さんは 3 ヶ月なら留学ではなく旅行なので、留学するならばちゃんとやれと言われた。それで、まず卒業前に 1 ヶ月ほど日本を旅行した。当時は留学先として日本のほかに中国やアメリカも考えていたが、中国は両親の「危ない」というイメージから反対され、アメリカは「心理的に遠すぎる」と言われ、日本に決めた。どこに行きたいというよりも、「漠然と留学に行きたいという気持ちが大きかったので、日本で妥協した」。

◇　外国人であることが法学部選択の契機に　◇

進学に関しては、はじめは大学院に入ることも考えたが、願書を出すタイミングを逃したこともあり、学部に入学することにした。学部は法学部を選択したが、それは自分が日本で外国人として生活した経験が契機となった。外国人になってから「すごい、暮らしと法律と関わっている」と気づいた。外国人登録をはじめ、外国人だからやることがたくさんあった。

◇　アルバイトは文化の学び場　◇

アルバイトをしながら、日本人とのコミュニケーションを学んだ。たとえば両手の人差し指を交差させて「お勘定をお願いします」を表すジェスチャーは日本に来ないと分からない。外国語はその国に行かなくても勉強はできるが、行かないと分からないことがあるのはバイトをしてみて感じた。

韓国で仕事をしたことがないので正確に比較できないが、職場の雰囲気も違うのではと感じる。たとえば、韓国では仕事中にもプライベート電話にも出るが、日本ではやってはいけないなという暗黙のルールがあるようだ。「韓国でもやりすぎるとひどくないかともいわれるかもしれませんが、それに対して悪いとは思わないが、日本では厳しいみたい」。

韓国と似ているところもある。昼ごはんを食べに一緒に行くと学生だからといっていつもおごってくれる。それが負担で行かないこともある。それは韓国と同じ。韓国では、日本では割り勘をするというイメージや認識があるが、日本に来てみたら、そうでもなかった。韓国と同じく人によって違う。韓国ですべての人がそうでないように日本でも人によって違う。

プライベートなことを人に言うかどうかに関しても日本も韓国と同じように思える。自分は韓国にいた時もあまり人にプライベートなことを聞いたりしなかったので、日本に来てもっとそういう

雰囲気・文化じゃないので聞かなくなった。だから時に「日本の文化に馴染んでいる」といわれる。だが、まわりの韓国人の中には上手く聞く人もいて、相手の日本人もよく答えてくれる。日本の人はとても「受動的」と思える。中にはそれを期待する人もいるみたい。「聞いてほしい、聞いてくれ」みたいな。相手が困っているのにこっちが無理に聞くのは失礼ですが、普通は喜ぶ。

◇　「内の人」と「外の人」をはっきり分ける日本人　◇

日本の大学生と韓国の大学生を比較すると、韓国では先輩と後輩の区別は学年で決まるが、日本の大学生は「内の人」と「外の人」がはっきりしている。日本は自分が属するサークルやクラブで決まる。同じ学部であっても自分のサークルやクラブの組織の知り合いじゃないと他人になる。そういう違いがある。自分もサークルをやって、「日本は組織文化だなとすごく感じた」。

ゼミも同じ。ゼミ生はよく団結する。ＯＢとかＯＧとかの関係もきちんとしている。だからサークルやゼミに入らないと「所属感がないし、友だちもいない」ので、組織に入るのが「本当に大事」。組織に入らなかったら一人ぼっちになる。「存在感がゼロ」かも。

学生は組織の構成員として所属感から「安心」する。また「忠誠心も必要」。学部の場合はサークルが中心になるが、何でもそれに合わせて調整する。そういう意味で忠誠である。サークル活動を中心に動いている人たちはそれを中心にバイトなどのスケジュールを立てる。忠誠心を持っている人はお互いに団結力も強い。お互いに面倒を見、安定している。だからそこに所属しようとする。

だが、Ｂさんは大学のサークルを 1 年でやめた。2 年生になると、サークル活動を運営する執行部になる。これは、クラブ活動中心の生活をしないといけないことを意味する。でも、勉強もアルバイトもしないといけなかった。3 つに同じくらいの重みをおきたかったが、やっていける自信がなかった。サークルをやめてサークルの人との関係も途切れた。同じサークルだった人 1 人、2 人とは連絡をとっているが、サークルをやめてからはゼミと授業で知り合った人と友だちになった。

◇　大久保は日本人の友だちに韓国を紹介する異文化交流の場　◇

現在の生活は学校とアルバイトがほとんど。大久保は来るとしても月 1 回くらいであまり来ない。韓国の食材はネットで買っているし、韓国の友だちと一緒に来たりもしない。日本で生活した初期には定期が新大久保を通ったので、よく降りたが、違うところに住むようになってからはあまり来なくなった。韓国人だから来るというより、日本人と食事をする時に「韓国人なので連れて行ってくれ」と言われることがある。しかし大久保に来ると、自分もほとんど分からないのに案内役になる。「なんていうかな、日本の友達に韓国を紹介する異文化の交流する場みたいなところ」になっている。

その中でも大久保の変化を感じる。以前は、商店は多かったが韓国の田舎のような雰囲気もあった。当時は「外国人のための町」という雰囲気だったが、韓流以降、飲食店や写真集を売っている店も増え、最近は「日本人相手に何かを売ろう」とする雰囲気に変わった。以前 7、8 年前までは韓国料理屋もあまりなかったので大久保に来ないといけなかった。そして小さい店でジャジャン麺を食べたりしたが、最近は韓国料理屋も増えたし規模も大きくなったし、入ったら芸能人の写真などが張られている。

◇　日本の生活には満足している　◇

Ｂさんは将来、仕事があるところに住むつもりだ。そこは日本、韓国、そして他の外国でもいい。自分は日本に来て、これがどういう結果を生むかは分からないが、韓国にいたらできなかった経験をたくさんしたので「よかった」と思っている。韓国の友だちを見ると無事に卒業していい仕事見

つけて、今はみんな結婚して、「ドラマみたいな人生」を送っている。

いま日本の生活に慣れて「不便もなく満足」している。不便だったことは、日本に来た当初、韓国のようなオンドルがなく、エアコンを暖房で使っていたので空気が乾燥して、最初の冬は風邪の思い出しかない。それと、花粉症で日本生活が「長いな」と思ったりする。食べ物は、はじめはしょっぱいと思ったが、今は大丈夫。食事は和食が多い。韓国からインスタントラーメンを送ってもらっている。

日本語に関しては、韓国語と日本語が似ていて初めの頃は「手軽に接する」ことができたが、それがむしろ「穴」になってしまうのではと思っている。似ているだろうと思って使った場合に、日本では逆の意味でとらえる場合があったり、あるいは状況によって使い方が違ったりすることもある。そういう面で大変。これは違うなと思ってもはっきりは分からなくて、日本人にきいてみたりするのがだんだん増えていくようだ。だから、言語の勉強は本当に「限りがない」というか、「きりがない」と感じている。

韓国には年一回くらい 1、2 週間帰る。帰ると親に「早く帰ってきて」と言われる。今年で 8 年目だから、もう十分ではないかとこの間言われた。

日本社会に対して「変化を恐れないでほしい」と思っている。韓国の場合は、まず変えてみて、またその状況に応じて「変えていけばいいじゃない」という雰囲気ならば、日本はいろんな可能性を取り上げてここに進もうかあっちに進もうか、いつも悩んでいるようだ。韓国のやり方が 100%良いということではないし、それなりに危険性は高いが、社会の変化が多様である。だが、日本はそれぞれ主張ばかりやっていて、「チャンスを逃してしまう」場合がある。その時代に合わせて変えていく必要があるのに、主張だけやっていて、後になって、「アー、こういう風にやればよかった」と後悔することが時々目に見える。特に最近は社会の制度のほうを勉強して、研究会や検討会は毎日やっているのに、結果が出ない。そういうのを見たらちょっと「変化を恐れずに大胆に行動に移ってもいいんじゃないか」と思う。「日本の社会を見ると活気がないようで」と日本に対する要望を述べた。

＜ インタビュー / 인터뷰　13 ＞

OY さん（20 代・男性）「男同士の約束」

2010 年 3 月 30 日、蔚山（ウルサン）出身、韓国系企業勤務、日本在住 6 年
インタビュアー：武田里子

◇　略歴と家族　◇

OY さんは韓国南部の工業都市・蔚山の出身。父親は地方紙の新聞社の幹部、母親は会社経営という比較的恵まれた家庭の長男として 1981 年に生まれた。姉と弟の 3 人きょうだいである。弟も 3 年ほど日本で暮らしたことがある。2009 年 8 月、現在働いている会社でアルバイトをしていた 1 つ歳下の韓国人女性と結婚した。

教育熱心な父からは、「将来の選択肢をできるだけ多くするために勉強が必要なんだ」と言われて育った。そのおかげで自分は、今、こうして日本で働いていられるのかもしれない。でも、「半端じゃない」韓国の受験競争のあり方は、そろそろ見直す必要があると感じている。

OY さんには、小学生の頃からの夢があった。それはホテルの支配人になることだった。理由は「カッコよく見えた」から。高校は外国語専門学校に進み、英語を専攻した。大学はホテル学科のある大学に進学するつもりだった。ところが、なぜか OY さんが受験した 1999 年はホテル学科の人気が高く、合格するには成績がギリギリだったので断念した。専攻を変えたが、幸い奨学金がもらえる大学に進学することができ、在学中に兵役を終わらせた。

1997 年の通貨危機は、韓国では政府が IMF に援助要請をするほど深刻なダメージを受けた。OY さん一家の生活も一変した。母親は経営していた店を閉めることになり、理事を務めていた化粧品会社の借金が残ったため、単身で日本に働きに行くことになった。OY さんが高校生の時のことだ。その後、母親は、韓国での経験を生かしてエステ関係の会社を起業し、今も東京を拠点に生活している。

◇　栄光と挫折　◇

2004 年 4 月、OY さんは日本語学校に入学するため来日した。来日を勧めたのは、日本で働いていた母親だった。ある日、兵役についていた OY さんの元に母親から一通の手紙が届いた。そこには、「歴史的なわだかまりを脇におくことができれば、韓国人が日本人に学ぶことはたくさんある。だからあなたも機会があれば日本に来て学んだらよい」と書いてあった。

日本語は来日後に「あいうえお」から学んだが、面白いように日本語の力がついた。日本語の先生方にはまだ無理だと言われたが、翌年、ホテルの専門学校に入学し、2 年後にはそこそこ有名なホテルに就職した。ホテルの支配人になるという夢に近づけた気がした。ホテルのパンフレットには、「初めての外国人スタッフ」と紹介され写真が載った。OY さんはこの 6 年間に 1 度だけ、就職できたことを父に報告するために韓国に帰った。「うちの父はお酒が好きなんで、お酒を飲んだら親戚とか友だちにそのパンフレットを見せながら自慢するわけですよ」。その時の父の満面の笑みが忘れられない。

ところが、OY さんはそのホテルを 3 カ月ほどで退職してしまう。学校では良くできたはずの日本語なのに、仕事の現場では他のスタッフから渡される走り書きのメモが読めない。最初は丁寧に教えてくれた先輩も、そのうちに「読めないなら勉強しろよ」と厳しくなった。スタッフの中には「韓国人は嫌いだ」という人もいた。初めて味わう挫折感。「もう少し我慢すればよかった」、と思うこともある。一緒に入社した友人は、外国人で初めてのインチャージ（一定の時間帯の責任者）になるという話を聞いた。もし自分が粘っていたらその立場にいたかもしれない。「もちろん、友だちにはおめでたいことなんだけど、自分のことを考えるともったいなかったかなあ」、と思うこともある。

◇　起業と挫折、男同士の約束　◇

ホテルは辞めてしまったが、日本の生活にも慣れたところだったので、韓国には帰りたくなかった。何ができるだろうと考えた末に、2007 年秋、茨城で焼肉店を起業した。開店資金と当座の運転

資金は、母親から借りた。茨城にしたのは資金的に東京での開店は難しかったからだ。最初の 3 カ月は赤字で、運転資金が減る一方だったので毎日不安だった。年末になると客足が伸びてきた。韓流スターが好きな「オバサン」たちが手伝ってくれたり、毎日食べに来てくれたり、車で 1 時間ほどのところにある韓国人クラブで働く女性たちにもひいきにしてもらった。ところが、ようやく店が軌道に乗り始めた 2008 年 9 月、リーマン・ショックの煽りを受けて経営が行き詰ってしまった。

「資本金を全部使うつもりでもう少し粘ったら、何とかなったかもしれない」。でも余力を残して閉店することを決断した。そのおかげで他の人に迷惑をかけず、母親に借りたお金も返済することができた。店の常連客にも閉店の挨拶をした。茨城ではいい思い出が多い。人に恵まれた。店を閉めた後、2 カ月間、身を寄せていたのは常連客のところだった。その人は、奥さんが韓国人ということもあり、一緒に飲んだり、サウナに行ったり、ゴルフに誘ってもらったり、ほんとによくしてもらった。お客さんがトウモロコシやジャガイモを玄関先に届けてくれることもあった。OY さんも店で使うために栽培していたエゴマの葉をお客さんに分けてやったりした。

「リーマン・ショックがなかったら、おそらく茨城の店を続けていたと思う。でもそうしたら、女房には出会うことがなかったんだから、1 つを失って、1 つを得たってことかな」と前向きに考えることにしている。

2008 年の年末に新宿に舞い戻った。卒業した日本語学校に挨拶に行き、そこで今働いている会社の社長を紹介された。面接の時に社長から「ここで死ぬ気になって働いてほしい」と言われ、心が動いた。「自分が落ち込んでいた時に手を握ってくれた人なので、社長のために、自分のために、男同士の約束のために頑張ろうと思った」。自分が大変だった時に手を握ってくれた人の恩に報いたい。

◇　埋まらない溝　◇

茨城では地域の人たちとの良い関係ができたが、東京ではそういった人間関係を期待することはできない。「正直言って、韓国人を嫌がる日本人って結構いるんですよ。それに今は仕事でいっぱい、いっぱいなので、仕事以外で人と付き合う余裕はない」。自分が今まで住んでいた日本人の中に入り込むんだから、邪魔をしちゃいけないと思っている。だから妻にも、ゴミを捨てたり、大声を出さないとか、役に立とうというよりも、なるべく「マイナスをしなきゃプラスになる」と言っている。

年配の人たちからは、直接的に差別されるというより、無視されたり、嫌われているんだなぁっていう「雰囲気」を感じることがある。酔っ払いのおじいさんには「韓国人のくせに」と言われたことがある。「韓国だったら殴っちゃうとこだけど、ここは日本だから我慢します」。

他方で、専門学校で親しくなった友人からは、「韓国と日本の歴史的な問題について、自分は日本の代表ってわけじゃないけど申し訳ない」って言われたことがあり、日本人もいろいろな考え方をする人がいるんだということが分かって少しホッとした。「やった側はすぐに忘れてしまうけど、やられた側は忘れない」。この溝はなかなか埋まらないと思う。

◇　将来　◇

OY さんが、今迷っているのは、子どもの教育のことだ。まだ、子どもはいないが、日本にいると日本の考え方になってしまうだろう。そうすると自分の子どもでこれまでの家族のつながりがなくなってしまうような気がする。両親には「お互い元気に頑張ればそれでいい」と言われているが、長男としての責任のようなものをどこかで感じている。

子どもができたら韓国へ帰った方がいいのではないかと思うのは、子どもに自分と親との関係を見せたいからだ。祖母もいるので、祖母に対する父の態度も見せたい。そうした関係性の中でしか育てられないものがあると思う。核家族だとどうしても考え方が自己中心的になると思う。大家族で暮らすと、「勝って勝つじゃなくて、負けてあげて勝つ人間関係」を学ぶことができる。OY さんはそれがとても大事なことだと考えている。「道を選ぶのは子どもだけど、道を作るのは親の責任だ」という父の子育てについての考え方に、今は深く共感することができる。

当面の目標は、「頑張って、正直、上まで行きたい」という。「社内で出世して、母もいるし、女房もいるので、家を買いたい。でも、最後の最後は（韓国に）帰るんじゃないですかねぇ」。まだ、将来については方向性が定まっていない。

< インタビュー / 인터뷰 13 >

OY 씨(20 대 /남성)「 남자끼리의 약속」

2010 년 3 월 30 일, 울산출신, 한국계기업근무, 일본체재 6 년
인터뷰어 : 타케다 리코

◇ 약력, 가족 ◇

OY 씨는 한국 남쪽의 공업도시인 울산 출신이다. 아버지께서는 지방 신문사의 간부이시고 어머니는 회사를 경영하시는, 비교적 부유한 집에서 장남으로 태어났다. 누나와 남동생으로 삼남매이다. 남동생은 3 년정도 일본에서 생활한 적이 있다. 2009 년 8 월 지금 일하고 있는 회사에서 아르바이트를 하고 있는 한살 아래의 여자와 결혼했다.

교육열이 높은 아버지로부터 "미래의 선택을 가능한한 많이 만들기 위해서는 공부하는 것이 중요하다" 라는 말을 들으며 자랐다. 그 덕분에 지금 이렇게 일본에서 일할 수 있는 것인지도 모른다. 하지만 도를 넘은 한국의 수험전쟁은 슬슬 재검토할 필요를 느낀다고 한다.

OY 씨는 초등학생 때부터 호텔의 지배인이 되는 꿈이 있었는데 그 이유는 멋있게 보였기 때문이라고 한다. 고등학교는 외국어학교에 진학하여 영어를 전공했다. 대학은 호텔과가 있는 곳으로 진학할 예정이었다. 하지만 OY 씨가 갈려고 했던 1999 년 그 대학의 호텔과가 인기가 높아서 합격하기엔 성적이 아슬아슬했기 때문에 포기했다고 한다. 전공을 바꿨지만 다행이 장학금을 받을 수 있는 대학에 진학할 수 있었고 재학중에 병역의 의무도 마쳤다.

1997 년에 있었던 아시아의 통화위기 때에 한국은 정부가 IMF 로부터 원조요청을 할 정도로 심각한 데미지를 받았다. OY 씨의 가정의 생활도 한번에 변했다고 한다. 어머니께서 경영하고 계셨던 가게도 문을 닫게 되어 이사직을 맡고 있었던 화장품회사의 빚이 남아 있었기 때문에 단신으로 일본에 일하러 가게 되었다. 그 뒤 어머니는 한국에서의 경험을 살려서 에스테관련 회사를 차려 지금도 동경을 거점으로 생활하고 있다.

◇ 영광과 좌절 ◇

2004 년 4 월 OY 씨는 일본어학교에 입학하기 위해 일본에 넘어왔다. 일본에서 일하고 계신 어머니의 추천이 있었기에 일본에 넘어오게 되었다. 어느 날, 군대에 있던 OY 씨에 어머니로부터 한통의 편지가 왔었다. 그 편지에는 "역사적인 응어리를 한 쪽에 제쳐두고 생각해 본다면 한국인은 일본인에게 배울 것이 많다. 그러니까 너도 기회가 있으면 일본에 와서 배운다면 좋다" 라고 적혀 있었다.

일본어는 일본에 와서 "あいうえお(아이우에오)" 부터 배웠지만 신기할 정도로 일본어 능력이 늘어만 갔다. 일본어 선생님도 무리라고 말했지만 그 다음 해에 호텔의 전문학교에 입학하여 2 년 뒤에는 어느 정도 유명한 호텔에 취직하였다. 호텔의 지배인이 되고자 하는 꿈에 조금은 다가선 듯한 느낌이 들었다. 호텔의 팜플렛에는 "첫 외국인 스탭" 이라고 사진소개가 실렸다. OY 씨는 6 년동안 딱 한번 아버지에게 취직한 것을 말씀드리려 한국에 돌아갔다. "아버지께서는 술을 좋아하시기 때문에 술을 마시면 친척이나 친구들에서 그 팜플렛을 보여주면서 자랑하시곤 합니다." 라고 OY 씨는 말한다. 그 때에 아버지의 웃음이 잊혀지질 않는다.

하지만 OY 씨는 그 호텔을 3 개월만에 그만두게 된다. 학교에서는 잘 되었던 일본어가 일할 때에 다른 스템으로 부터 전달되는 메모를 읽을 수 없었다. 처음에는 친절하게 가르쳐 주었던 선배도 시간이 지나자 "읽을 수 없으면 공부해라" 라고 엄하게 말하게 되었다. 스탭중에는 한국인이 싫다라고 말하는 사람도 있었다. 처음으로 맛보는 좌절감. "조금만 더 참았더라면"

하는 생각도 있다. 함께 입사한 친구는 외국인으로서는 처음으로 인챠지(일정 시간대의 책임자)가 된다는 이야기도 들었다. 만약 좀 더 버텼었다면 지금 그 자리에 자기가 있었을 지도 모른다. "물론 친구에게는 축하할 만한 일이지만 조금은 아깝다" 라고 생각할 때도 있다고 한다.

◇ 가게 오픈과 좌절 그리고 남자끼리의 약속 ◇

호텔을 그만두게 되었지만 일본의 생활에도 익숙해 지고 있을 때였기 때문에 한국에 돌아가고 싶지는 않았다. 뭔가 할 수 있지 않을까라고 생각한 끝에 2007 년 가을에 이바라키에서 불고기집을 오픈하게 되었다. 개점 자금과 당장의 운용자금은 어머니로부터 빌렸다. 이바라키로 결정한 것은 자금면에 있어서 동경은 힘들었기 때문이다. 처음 3 개월은 적자였고 운용자금도 점점 줄기만 했기 때문에 매일이 불안한 나날들이었다. 년말이 되니까 손님도 늘었다. "한류스타"를 좋아하는 아줌마들이 도와주거나 매일 먹으로 와주거나 차로 한시간이 걸리는 한국클럽에서 일하는 여자분들도 도움이 되어 주었다. 하지만 가게가 제자리를 찾아가기 시작한 2008 년 8 월에 리먼쇼크의 영향을 받아서 가게가 힘들어졌다.

"자본금을 전부 쓸 작정으로 조금 더 버텼다면 어떻게든 되었을지도 모른다" 라고 생각한다. 하지만 조금은 남겨두고 가게 문을 닫는 것을 결정하게 된다. 그 덕분에 다른 사람에게 폐를 끼치지 않고 어머니에게 빌린 돈도 다 갚을 수 있게 되었다. 가게를 닫은 지 2 개월 후 당시 가게의 단골손님이었던 분에게 신세를 지게 되었다. 그 사람은 부인이 한국인이었던지라 함께 술을 마시거나 사우나에 가거나 골프치러 가자고 말해주는 등 진짜 잘 해주었다. 손님이 집앞에 옥수수나 고구마를 보내어 줄 때도 있었다. OY 씨도 가게에서 쓰기 위해 재배하였던 깻잎을 손님들에게 나누어 주기도 했다.

"리먼쇼크가 없었다면 아마도 이바라키에서 가게를 계속했을 거라고 생각한다. 하지만 그렇게 했더라면 아내와의 만남이 없었을 거니까 하나를 잃고 하나를 얻었다고나 할까" 라고 긍정적으로 생각하려고 한다.

2008 년 년말에 신쥬쿠에 다시 돌아왔다. 졸업한 일본어학교에 인사를 하러 갔었는데 그 곳에서 지금 일하고 있는 회사의 사장님을 소개 받았다. 면접할 때에 사장님이 "이 곳에서 뼈를 묻을 각오를 하고 일해주기를 바란다"고 말해서 마음이 움직였다. "내가 힘들 때에 손을 잡아주신 사장님이기에 사장님을 위해서 내 자신을 위해서 남자끼리의 약속을 위해서 열심히 하리라 마음먹었다." 자기가 힘들 때에 손을 잡아준 사람의 은혜에 보답하고 싶다라고 OY 씨는 말한다.

◇ 메꾸어지지 않는 골 ◇

이바라키에서는 지역주민들과 좋은 관계를 만들었지만, 동경에서는 그러한 인간관계를 기대하기는 힘들다. "솔직히 말해서 한국인을 싫어하는 일본인은 꽤 많아요. 거기다 일이 너무 많아서 일 외에 사람들과 만날 여유가 없어요." 라고 말한다. 자기가 지금까지 살고 있었던 일본인 속으로 뛰어드는 것이기 때문에 방해해서는 안된다는 생각이다. 그러니까 부인에게도 쓰레기를 버린다던지 큰소리를 내지 않는다던가, 도움을 주는 것보다 가능한한 "마이너스적인 일을 안한다면 플러스가 된다" 라고 늘 말하고 있다.

나이 드신 분들에게는 직접적인 차별을 받는다는 것보다 무시당하거나 싫어한다는 분위기를 느낄 경우가 많다고 한다. 술에 취한 할아버지에게 "한국인 주제에" 라고 들은 적도 있다. "한국이었다면 한방 날렸겠지만 여기는 일본이니까 참아야죠." 라고 말한다.

전문학교에서 친해진 친구에게는 "한국과 일본의 역사적인 문제에 대해 자기는 일본의 대표가 아니니까 미안해" 라고 들은 적이 있어서 일본인 중에서도 다양한 생각을 가진 사람이

있구나라는 것을 알게 되어 조금은 안심했다. “가해자는 쉽게 잊어버리지만 피해자는 잊어버리지 않는다.” 이러한 골은 왠만해서는 메꾸어지지 않을 거라 생각한다.

◇ 장래 ◇

OY 씨는 지금 아이의 교육문제로 고민중이다. 아직 아이는 없지만 일본에 있음 일본의 사고방식을 배우게 될것이다. 그렇게 되면 자신의 아이와 지금까지의 가족의 끈이 없어지게 될 것같은 기분이 든다. 부모님은 “서로 건강하게 열심히 한다면 그걸로 된다” 라고 말씀하시지만 장남으로서의 책임감도 어느정도 느끼고 있다.

아이가 생긴다면 한국에 돌아가는 편이 좋을지도 모른다고 생각하는 것은 아이에게 자기와 부모님의 관계를 보여주고 싶기 때문이다. 할머니가 있기 때문에 할머니에 대한 아버지의 태도를 아이에게 보여주고 싶다. 그러한 관계 안에서만 배울 수 있는 무언가가 있다고 생각한다. 핵가족인 경우에는 어쩔 수 없이 자기중심적인 사고방식을 배우게 된다고 생각한다. 대가족인 경우 “이기고 이기는 것이 아니라 져주고 이기는 인간관계”를 배울 수 있다. OY 씨는 그것이 매우 중요하다고 생각하고 있다. “자기의 길을 선택하는 것은 아이이지만 길을 만들어 주는 것은 부모의 책임이다” 라는 아버지의 양육 방침에 지금은 매우 깊게 공감하고 있다고 한다.

지금 당분간의 목표는 “열심히 해서 솔직히 위까지 올라가 보고 싶다” 라는 것이다. “회사안에서 출세해서 어머니도 있고 아내도 있으니까 집을 사고 싶다. 하지만 마지막의 마지막은 한국에 돌아가지 않을까요” 라고 말한다. 아직 장래의 방향성에 대해서는 정해져 있지 않다.

＜ インタビュー / 인터뷰　14 ＞

KJ さん（30 代・男性）「一目惚れ」

2010 年 4 月 1 日、ソウル出身、韓国系企業勤務、日本在住 7 年
インタビュアー：武田里子

◇　略歴と家族　◇

KJ さんは 1977 年生まれの 33 歳。妹が一人いる。父親は、建築関連の運送業を営んでいる。韓国人男性で、特に長男の場合はみな家のことを大事に思っている。KJ さんも将来は、両親のために韓国に帰るつもりだが、まずは日本で頑張って成功したいと考えている。KJ さんは、日本留学のときに知り合った日本人女性と 2009 年 3 月に結婚したばかりだ。両親には、反対されるだろうと、日本人女性と付き合っていることをなかなか言い出せなかった。ところが、意外なことに両親から「好きな仕事をして、好きな人と元気で暮らせればそれでいい」という言葉をかけられ、驚かされた。同棲からなかなか結婚に進まない 2 人に、業を煮やしたのは KJ さんの母親だった。占いで結婚式の候補日を 2 つに絞り、全ての段取りをつけて、「さあ、日にちは自分たちで決めなさい」と背中を押してくれた。3 月 14 日にしたのは、結婚記念日がホワイトデーと一緒なら、忘れないと考えたからだった。

◇　来日、妻との出会い　◇

「僕の人生って結構気まぐれというか、その都度の偶然が重なっているんです」という KJ さん。中学の成績は良かった。高校は、普通の一般学校とどちらかというとエリートが行く外国語高等学校の選択肢があった。外国語高等学校は特別な試験があるが、KJ さんはそれに合格した。入学後に専攻する外国語を選ばなくてはならない。KJ さんは、第一志望を英語、第二志望を中国語、第三志望を日本語にした。それが「運命」だったのか、第三志望の日本語で受かった。「それまでは、正直、日本に対して何の興味もなかった」ので、「日本語かよ」と思った。大学受験では、外国語高等学校の生徒は、高校で専攻した学科を選ぶと特典がある。浪人はしたくなかったので、大学も日本語学科を選んだ。「僕がこうして今、日本にいるのは、中学 3 年のときにさかのぼるんです」。在学中に兵役を済ませて、せっかく日本語を勉強したので、日本に行かないまま卒業するのはもったいないと思い、1 年間休学して 2002 年に来日し、代々木にある日本語学校に通った。

当時、韓国人留学生と日本人学生が、毎週土曜日に大久保で日本語と韓国語を相互に学び合う会を開いていた。夜 7 時から 2 時間くらい会話練習をした後は、近くの居酒屋で懇親会、というのがいつものパターンだった。KJ さんも最初の 2 カ月ほどその会に通ったが、アルバイトを始めたりするうちに足が遠のいた。その年の暮に友人から電話をもらい、久しぶりに参加した会で偶然出会った女性に一目惚れした。「とにかく可愛かったです。可愛くて仲良くなりたいな」って。何とか携帯電話の番号を聞き出し、翌日から猛アタックを開始するものの、最初のデートにこぎつけるのに 1 カ月もかかった。「後で聞いたら僕の第一印象はあまり良くなかったみたいです。ひげを生やして茶髪で、あんまりしゃべらないし、無口で酒ばかり飲んでたので。」さらに 1 カ月位かけてようやく手を握れるところまで来たが、KJ さんの留学期間はまもなく終わろうとしていた。4 年生に復学して、とにかく卒業しなければならない。

2 月に KJ さんが帰国すると、彼女が 3 月の連休に会いにきてくれた。5 月の連休にも会いにきてくれた。夏休みに入った 7 月には KJ さんが日本に来た。会えない間はインターネットのチャットや国際電話で連絡を取り合った。当時、KJ さんは学生だったので、デートの費用はほとんど彼女が払ってくれた。卒業したら、なんとか日本に行ける仕事を探さなければならない。彼女のこともあったが、日本語を活かせる仕事がしたかった。韓国に住みながら日本に出張で行ったり来たりする形じゃなくて、韓国企業で日本に常駐できる仕事を探した。しかし、見つからなかった。「いい会社は英語も必要だったので僕のスキルでは足りなくて、途中でこのままでは駄目だな」と思い、それじゃぁ韓国語を外国人に教える資格を取ろうと、4 カ月コースの講習も受けた。しかし、この作戦も上手くいかなかった。韓国語講師の仕事も見つからず、時間の無駄だったかもしれないと、途方に暮れていたところに舞い込んできたのが、韓国政府が募集して海外の企業に人材を派遣するプロ

グラム情報だった。それに応募して採用され、派遣されたのが今の会社である。再来日したのは、2004 年 11 月。6 カ月の研修後は、韓国に戻ることも、正社員として採用される可能性もある。幸い、KJ さんは採用された。これで彼女との遠距離恋愛に終止符を打つことができた。それが一番嬉しかった。「親も大感激で、日本で働ける、良かったね」、と喜んでくれた。

◇　親族で初めての国際結婚　◇

日本人女性との結婚については、自分の両親の説得はほとんど必要がなかった。むしろ父親は、日本の女性に対して献身的というイメージをもっていたので喜んでくれた。でも親戚の間では KJ さんが初めての国際結婚だったので、「うちの家族にもこんなことが起きるんだ」、と驚いた人の方が多かった。

問題は彼女の両親の説得だった。地方の出身だったせいか、「韓国人と結婚したら韓国に帰らないといけない、お前が苦労する」、となかなか了解が得られなかった。最後は、説得は無理だろうとあきらめて、押し切ったと言うか、半分無視して同棲の既成事実を作り、「結婚式をこの日に決めたので参加して下さい」と通知を送った。結婚式は韓国であげた。彼女の父親は体調が悪くて参加できなかったが、母親は出席してくれて、「娘をよろしくお願いします」と言ってくれた。「今もまだ、腹を割って話せる関係ではないのですが、嫌な顔はしませんね。たまに遊びに行くとすごいご馳走を作ってくれます」。

◇　子育て　◇

KJ さんは、国籍は韓国のままにするつもりだ。子どもは子どもの自由に任せたい。妻との会話は100％日本語。妻は簡単な韓国語の単語は分かるが文章にはならない。だから両親との会話は、もっぱら KJ さんが同時通訳のように橋渡し役をすることになる。KJ さんは韓国語を教える資格もあるわけだから、本当は、韓国語を教えた方がいいと思う。でも、「家に帰ってくると二人とも疲れていて、勉強するエネルギーは残っていない」。それどころか、団地内の付き合いもままならない。「休日は出かける元気もなくて、グターっとしていることが多い。地域活動って暇人じゃないとできないのではないか」、というのが正直な思いだ。

日本と韓国では、性別役割規範に共通性がある。しかし、KJ さんは、「世界の半分は女性で半分は男性なんだから、協力し合うのは当たり前だ」という考えだ。女性も「女だから」という考え方をする人や、女性であることに甘えている感じの人は好きではない。両親には、「早く孫の顔が見たい」と言われているが、妻が子育てと仕事を両立できるかどうか不安がある。生活費が高い日本で暮らすには、自分の稼ぎだけでは生活は難しい。子どもができても共働きをすることになるだろう。だから、子どもを保育所に上手く入れられるかどうか、今から心配だ。

子どもは日本語が主体になると思うが、韓国語も幼いころから「注入したい」。日本語と韓国語が両方喋れたらすごく得だと思うし、それに英語もできたらすごく可能性が広がる。子どもは頭が悪くてもいいから健康であればいい。今の韓国の受験戦争は行き過ぎだと思っているので、子どもはのびのび育てたい。

◇　将来　◇

KJ さんは、将来的には、自分の店をやるか、事業を起こしたいと考えている。そして、今より、頻繁に韓国と日本を往来できるようになりたい。まだ、漠然としているが、起業するとしたら飲食店、会社を作るなら貿易関係になるだろう。独立したいと思うのは、縛られたくないからだ。縛られないためには独立するしかない。

両親は、結婚には賛成してくれたが、さびしい気持ちもあると思う。20 何年も一緒に暮らしてきた息子がいきなり突然姿を消したようなものだから。でも、例えば、日本でも東京に両親がいて、大阪とかで仕事をしている人は、なかなか頻繁に東京に来られない。それがたまたま韓国だったと考えればいいんじゃないだろうか。日本と韓国は飛行機で 2 時間ほどの距離なので、少し遠い所で仕事をしている感覚でとらえればいいのだ。ただ、今は、時間とお金の問題で、度々帰国するというわけにはいかない。起業したいというのは、時間的にも金銭的にも余裕ができれば、韓国との往来もしやすくなると思うからだ。

< インタビュー / 인터뷰 14 >

KJ 씨(30 대/남성) 「첫눈에 반해버린 나의 아내」

2010 년 4 월 1 일, 서울출신, 한국계기업근무, 일본체재 7 년
인터뷰어 : 타케다 리코

◇ 약력, 가족 ◇

KJ 씨는 1977 년에 태어나 현재 33 살로서 여동생이 한명있다. 아버지는 건축에 관련된 운송업을 경영하고 계신다. 한국의 남성, 특히 장남의 경우에는 자신의 집을 소중히 생각하고 있는데 KJ 씨도 장래에는 부모님을 위하여 한국에 돌아갈 예정이라고 한다. 하지만 지금은 일본에서 열심히 해서 성공하고 싶다고 한다.

KJ 씨는 일본유학 중에 알게 된 일본인 여성과 2009 년 3 월에 결혼하였다. 부모님에게는 반대당할거라고 생각해서 일본인 여성과 사귀는 것을 좀처럼 말하지 못했다. 하지만 의외로 부모님에게서 "좋아하는 일을 하고, 좋아하는 사람과 건강하게 살면 그걸로 된다"라는 말을 듣고 놀랐다고 한다. 동거를 시작하고서 결혼하기까지 2 년이 걸린 두 사람에게 결혼을 부추긴 것은 KJ 씨의 어머니였다. KJ 씨의 어머니는 점을 보고 난 뒤, 2 개의 결혼식 후보날를 정하였고 모든 일정을 결정하고 "자 결혼 날짜는 둘이서 알아서 정해라"고 등을 떠밀었다고 한다. 결혼식을 3 월 14 일로 정한 이유는 결혼기념일이 화이트데이와 같은 날이라면 잊어버리지 않을 거라고 생각한 이유에서라고 한다.

◇ 일본에 건너 옴, 아내와의 만남 ◇

"나의 인생은 꽤 변덕스럽다고 할까, 그때 그때 우연이 겹쳐졌었습니다"라고 말하는 KJ 씨. 중학교 시절의 성적은 꽤 좋은 편이었고 고등학교도 보통의 일반학교나 또는 엘리트들이 다니는 외국어 고등학교에 진학하는 갈림길에서 KJ 씨는 외국어고등학교에 입학하기 위한 특별 시험에 합격하였다. 입학 후에는 전공 외국어를 선택하지 않으면 안되었었는데 KJ 씨는 제 1 지망으로 영어, 제 2 지망으로 중국어, 제 3 지망으로 일본어를 선택했다고 한다. 하지만 운명이었는지 모르지만 전공으로 제 3 지망인 일본어가 되었다고 한다. "그 때까지는 솔직히 일본에 대하여 아무런 흥미도 없었기에 뭐야 일본어인가"라고 생각했다고 한다. 외국어고등학교 학생의 경우 대학수험에서 자신이 고교에서 전공한 학과을 지원할 경우 특전이 있었다. 재수를 하기 싫었기 때문에 대학도 일본어를 선택했다. KJ 씨는 "내가 지금 이렇게 일본에 있을 수 있는 것은 중학교 3 학년 때로 거슬러 올라갑니다"라고 말했다. 재학중에 병역의 의무를 마친 KJ 씨는 모처럼 일본어를 공부했는데 일본에 한번도 가지 못하고 졸업하기에는 너무 아깝다는 생각을 하고 1 년 휴학을 한 뒤 2002 년에 요요기의 어느 일본어학교에 다녔다고 한다.

당시 한국인 유학생과 일본인 학생이 매주 토요일 오오쿠보에서 일본어와 한국어를 서로 배우는 모임이 있었다. 밤 7 시부터 2 시간 정도 회화연습을 한 후에 가까운 이자까야에서 뒷풀이를 하고는 했었다고 한다. KJ 씨도 처음 2 개월 정도 그 모임에 다녔었지만 아르바이트를 시작하면서 점점 안 나가게 되었다고. 그 해 말에 친구가 전화를 해서 오랜만에 모임에 참가했었는데 우연히 만난 여성에게 첫눈에 반해버렸다고 한다. "어딘가 귀여웠어요. 귀여워서 친해지고 싶었죠"라고. 이리저리해서 휴대폰 전화번호를 알아낸 뒤 그 다음날부터 강하게 대쉬를 했지만 첫 데이트까지 한 달정도가 걸렸다고 한다. "나중에 들은 얘기지만 나의 첫인상이 별로 안 좋았다고 해요. 수염을 기르고 염색한 머리에 말도 별로 안하고 묵묵히 술만

마시고 있었기 때문에". 첫 데이트로부터 한 달뒤 겨우 손을 잡을 정도가 되었는데 그 때는 벌써 KJ 씨의 유학생활이 끝나려고 하고 있었다. KJ 씨는 한국으로 돌아가서 4 학년으로 복학하여 졸업하지 않으면 안되었다.

2 월에 KJ 씨가 귀국하고 3 월에 여자친구가 자기를 만나러 연휴동안 한국에 와주었다. 그리고 5 월에도 연휴동안 만나러 와주었고 7 월달에 여름방학이 되자 이번에는 KJ 씨가 여자친구를 만나러 일본에 왔었다고 한다. 떨어져 있을 때는 채팅이나 국제전화로 서로 연락을 주고 받았다. 당시에는 KJ 씨가 학생이었기 때문에 데이트 비용은 거의 여자친구가 내주었다고 한다. 졸업하고 나서는 어떻게든 일본에서 일하는 직장을 구하지 않으면 안되었다. 여자친구도 그렇지만 일본어를 활용할 수 있는 일을 하고 싶었다고 한다. 한국에 살면서 일본으로 출장가는 형식의 일이 아니라 일본에 살면서 할 수 있는 일을 찾았지만 거의 없었다고 한다. "좋은 회사는 영어도 필요했었기 때문에 나 스스로 기술도 부족했고 이정도로는 안되는구나" 라고 생각해서 외국인에게 한국어를 가르치는 일을 하고자 4 개월코스의 강습을 받았다. 그러나 이 작전도 실패로 끝났다. 한국어강사 자리도 찾지 못하고 헛되이 시간만 흘러가고 있을 때 한국정부가 모집하던 해외기업에 인재를 파견하는 프로그램의 이야기가 귀에 들어왔다. 그 모집에 응모해서 채용되어 파견된 곳이 지금의 회사이라고 한다. 다시 일본을 찾은 것은 2004 년 11 월이었다. 6 개월의 연수 뒤에는 한국에 돌아갈 수도, 일본에 남아서 정사원으로 채용될 가능성도 있었다. 다행이 KJ 씨는 채용되었다고 한다. 이걸로 여자친구와의 원거리연애에 종지부를 찍을 수 있었다. 이 일이 가장 기뻤다고 한다. 부모님도 너무 좋아하셨고 "일본에서 일할 수 있어서 다행이네"라고 기뻐해 주셨다.

◇ 친척중에서 처음있는 국제결혼 ◇

일본여성과의 결혼하는 것에 부모님의 설득은 거의 필요없었다. 오히려 부모님께서는 일본여성에 대하여 헌신적이라는 이미지를 가지고 있었기 때문에 기뻐해주셨다. 하지만 친척중에서 국제결혼은 KJ 씨가 처음이었기에 "우리 가족에게도 이런 일이 일어나는 구나" 라고 놀라는 사람이 많았었다.

문제는 여자친구의 부모님을 설득하는 것이었다. 지방출신인 것도 있었지만 "한국인과 결혼하면 한국에 돌아가지 않으면 안되잖아, 너가 고생할 거야" 라고 왠만해서는 이해해주시지 않았었다고 한다. 나중에는 설득하는게 무리라고 생각해서 억지로 밀어부쳤다고나 할까 동거라는 기정사실을 만들어서 "이 날에 결혼식을 합니다 참가해주세요" 라고 연락을 했다고 한다. 결혼식은 한국에서 올렸는데 장인어른은 몸이 안 좋아서 참가하지 못하고 장모님은 와 주셔서 "딸을 잘 부탁드립니다" 라고 말씀해주셨다. "아직까지도 편하게 얘기하지는 못하지만 싫은 얼굴은 하지 않으십니다. 가끔 놀러 가면 맛있는 음식 많이 주시죠" 라고 KJ 씨는 말한다.

◇ 양육 ◇

KJ 씨는 자기의 국적을 한국인 채로 놔둘 생각이지만 아이는 아이의 자유에 맡길 생각이다. 부인과의 대화는 100 퍼센트 일본어. 부인은 간단한 한국어 단어정도 알 뿐 문장은 모른다. 그래서 부모님과의 대화는 KJ 씨가 중간에서 동시통역처럼 가교역활을 하게 된다고 한다. KJ 씨는 한국어를 가르치는 자격이 있으니까 한국어를 가르치는 편이 낫다고 생각하지만 "집에 돌아오면 둘다 피곤에 지쳐서 공부할 힘이 전혀 남아 있지 않아요" 라고 한다. 그 뿐만이 아니라 이웃간의 교류도 좀처럼 되지 않는다고 한다. "휴일에는 놀러갈 힘도 없어서 축 늘어져 있을 때가 많아요. 지역활동이라는 것은 한가한 사람만 할 수 있는게 아닌가요" 라고 솔직히 생각한다고 한다.

한국과 일본에서는 남녀역활규범에 대해 공통점이 있다. 하지만 KJ 씨는 “세계의 반은 여자고 반은 남자이니까 서로 협력하는 것은 당연한 것이다” 라는 생각이다. “여자니까” 라는 생각을 가지고 있는 여자나 자기가 여자라고 응석부리는 사람은 별로 좋아하지 않는다고 한다. 부모님은 “빨리 손자 얼굴이 보고 싶다” 라고 말씀하시지만 아내가 양육과 일을 병행할 수 있을까 걱정이다. 생활비가 많이 드는 일본에서 살기 위해서는 자기가 버는 것만으로는 힘들다. 아이가 생겨도 맞벌이를 계속하게 될 것이다. 그래서 아이를 보육원에 잘 보낼 수 있을가 어떨까 지금부터도 걱정이다.

아이는 일본어를 주로 하게 되겠지만 한국어도 어릴 때부터 주입하고 싶다. 한국어와 일본어 양쪽 다 하게 되면 매우 도움이 되리라 생각되고 거기다 영어까지 된다면 더욱 가능성이 많아지리라 생각된다. 그리고 아이는 머리가 나빠도 되니까 건강했으면 좋겠다고 한다. 지금의 한국의 수험전쟁은 과도한 면이 있기에 아이가 건강하게만 자라줬으면 좋겠다고 한다.

◇ 장래 ◇

KJ 씨는 장래에 자신의 가게를 열던가 회사를 만들고 싶다고 생각하고 있다. 그리고 지금보다 더욱 한국과 일본으로 왔다 갔다 할 수 있기를 원하고 있다. 그리고 막연하기는 하지만 가게를 연다면 음식점, 회사를 만든다면 무역관계쪽 일이 될거라고 한다. 독립하고 싶어하는 KJ 씨는 자기가 무언가에 얽매이기 싫어서라고 한다. 얽매이지 않기 위해서는 독립하는 수 밖에 없다.
부모님께서는 결혼에는 찬성해주셨지만 섭섭한 마음도 있으시리라 생각한다. 20 여년동안 같이 살던 아들이 갑자기 모습을 감춘 것과도 같은 상황이니까. 하지만 동경에 부모님이 있고 오사카에 일을 하고 있는 사람도 역시 왠만해서는 부모님을 만날 기회가 없는 것은 마찬가지가 아닌가? 그것이 KJ 씨의 경우에는 한국이라고 생각하면 되지 않느냐라고 한다. 한국과 일본은 비행기로 2 시간 거리이기 때문에 조금 먼 곳에서 일하고 있다고 생각하면 되는 것이다. 단지 지금은 시간과 돈문제로 자주 귀국할 수 있는 입장이 되지 못한다. 자기 회사를 만들고 싶은 이유는 시간적으로도 금전적으로도 여유가 생기면 한국을 자주 왔다 갔다 할 수 있어서이다.

＜ インタビュー / 인터뷰　15 ＞

M さん（30 代・男性）「どの国でもいいところ・悪いところはある」

2010 年 4 月 1 日、京畿道出身、博士後期課程 4 年生、日本歴 6 年半
インタビュアー：若園雄志郎

◇　日本に来てみて　◇

韓国の大学を卒業して 6 ヶ月程語学学校に通ってから日本に来た。現在は大学院教育学系研究科の博士後期課程に在籍している。なぜ博士課程に進学したのかについては、「特に理由はない」ようである。生計は基本的に韓国語を教えるなどのアルバイトで立てているが、殆ど家賃と食費で消えてしまうので生活は苦しいという。

◇　現在について　◇

だいたい 3 年前、修士の頃は時間的に余裕があったためにいろいろな人と会うことができたが、現在はアルバイトに時間を割かねばならず、なかなか機会が無いようである。そのため留学生センターなどに情報と人を求めて行くこともあったということであった。

◇　日本について　◇

韓国の大学・大学院と日本との差はどこにあるのか、という問いに対してはしばらく考えた上で「言葉の使い方や自分の振る舞い」と答えた。ただしこれは韓国の友人であっても変わらない、ということであるので、文化の違いというよりは通常の人間関係として考えていいだろう。

日本に対するイメージは特にないが、強いて挙げれば韓国にいたときに親切にしてくれたのが日本人だったということがあった。留学先に日本を選んだのは「自分でもわからない」という。むしろどの国でもいいところ・悪いところはあるのだから、先入観を持って日本に来たということではないらしい。もちろんこれは人に対しても同様であり、いい人もいれば悪い人もいる、というようにある種達観した部分があるように感じられた。

新宿について、大久保周辺はあまり行かない。M さんとしては身近に思えないようである。歌舞伎町についてはアルバイトをしていた経験から細かい地理まで知っているというが、愛着があるということではなさそうである。

日本の良くない点について重ねて尋ねてみたところ、行政の手続きの煩雑さを挙げていた。これは引っ越しをよくやると話していたため、その保証人などの手続きが煩わしいことがよくあるのであろう。しかし物価については日本の方が比較的安いように思われること、そしてなんとか経済的に自立していることから住みやすいところだとは感じているようである。

◇　将来について　◇

「正直、将来のことは一切考えてない」と話していた。語学でも現在の専門でも講師になれればなってもいいらしいが、採用されるかどうか不安だという。ただし講師という将来を目標としているわけではなく、語学学校でも大学でも自分に合ったものがあれば問わないということである。

M さんにはまだ具体的な将来像を持っているわけではないことが全体を通じて感じられたことである。わざわざ日本に留学している以上、インタビュアーの中では M さんに何らかの具体的な将来像があるのではないかと期待していた部分があったことは否定できない。しかし、M さんのようにまだはっきりとはわからないと考えている場合もあるということがわかったことは発見であった。

＜ インタビュー / 인터뷰　16 ＞

PY さん（30 代・女性）「チャンスの女神の前髪」

2010 年 4 月 5 日、ソウル出身、韓国系企業勤務、日本在住 7 年
インタビュアー：武田里子

◇　略歴と家族　◇

PY さんは 1978 年、2 人姉妹の長女として生まれた。PY さんが最初に来日したのは、日本に留学していた母親の元を訪ねた小学 3 年生の頃にさかのぼる。また、曾祖父は日本生まれという家庭環境で育ったためか、日本には外国というイメージがない。東京はソウルとそれほど違わないので、親戚の家がある「まち」みたいな感覚だという。

大学では幼児教育を専攻した。その後、1998 年に国費留学生として来日した時には、もともと興味があった子ども服の研究をするため、都内の大学で服装造形を学ぶことにした。当初は大学院に進むつもりだったが、卒業制作のファッションショーで担当した演出の面白さにはまってしまう。この PY さんの進路変更は先生方を慌てさせ、大学院で PY さんを指導する予定だった先生には怒られた。芸能関係の仕事は一見華やかだが、苦労することは分かっていた。でも、若い時でなければできない。ソウルコレクションを担当する韓国の会社から内定をもらったのは、卒業の 1 週間前だった。「今、来なければ次の人にポジションを回す」と言われ、考える余裕などなかった。「チャンスの女神の前髪」を掴まなければ後で後悔する。帰国したのは 2003 年。そこで 3 年ほど働いて、2006 年に再来日した。韓国の芸能関係にネットワークがあることをかわれて、今勤めている会社の社長に日本で働かないかと誘われたのだ。

PY さんの妹も大学 2 年の時に日本に短期留学したことがあり、現在は日本の大手銀行で働いている。近く、海外に赴任する。娘二人は日本で働き、母も仕事の関係で東京とソウルを行き来している。家族の中では父だけがソウルを拠点に暮らしている。

◇　ソウルと東京　◇

新宿や大久保は看板や標識にハングルがあり、逆にソウルの明洞に行くと日本語ばかり聞こえてくるので、「ここは何処かしら」と思うことがある。勤務先の会社には韓国人が多く、打合せも韓国語ですることがある。言葉や生活、文化面でのストレスがないためか、ホームシックの経験はない。それどころか、20 代の前半を日本で過ごし、社会経験が日本で始まったせいか、自分が日本人化していると感じることがある。例えば、最近は、韓国もマナーが良くなったが、乗客は並ばないでバスが来ると一斉に乗りこもうとする。ソウルに帰った時に、友だちに「どうして並ばないの」と言うと、「日本人みたいなこと言わないでよ」、と笑われてしまった。

東京は女性にとって住みやすい。一人の時間を持てるのがいい。韓国でランチタイムを一人で過ごしていると、友だちがいないのかとか、いじめられているのかとか、いろいろ詮索される。また、ランチの時はいつも先輩がおごってくれる。日本では割り勘。PY さんにもソウルで 3 年働いているうちに後輩ができた。「ランチに行こう」、と後輩に声をかけると、財布を持たずに「はい」と立ち上がる。「なんで？」って思う。しばらくして、PY さんは「割り勘文化」を会社に持ち込んだ。上司が女性だったせいか、意外にすんなりと受け入れられた。

日本の良い点は、女性向けの商品がとても充実していることだ。ヘアースプレーやマスカラなどの種類がとても多い。人気のあるお土産は「さらさらシート」だ。韓国は湿度があまり高くないためか「さらさらシート」を売っていなかったので喜ばれた。FIFA ワールドカップ以降、日本のいろいろな商品が韓国に入って来るようになった。例えば、制汗スプレーも以前はニベアのものしかなかったが、最近はとても種類が豊富になった。

日本の生活にはほとんどストレスを感じないという PY さんだが、未だに違和感を覚えるのが友人との付き合い方だ。韓国では友だちとの約束は気軽に、「今日は天気がいいから一杯飲まない？」と思いついたら電話をするだけでいい。ところが日本では、大学の同級生で集まるといっても、1 か月位前からメー

ルで待ち合わせ時間を決めて予約をし、誰誰が来れないとか来るとか、予算はいくらとか、細かいことまで事前に決めないといけない。「もっと、気軽に声をかけて、都合が悪ければまた次に」という感じでいいのにと思う。この面倒臭さには、未だになじめない。

◇　韓国のイメージアップ　◇

今の会社に誘われた時、「迷いがなかった」といったら嘘になる。ソウルの仕事にも未練があったし、実はアイドルにはあまり興味がなかった。それでも、この誘いを受けることにしたのには、いくつか理由がある。一つには、日本で韓国人のイメージがあまり良くないことが気になっていたからだ。仕事で日本に韓国文化の紹介ができる。そして、韓国をアピールしながら、自分が頑張っている姿を日本の人に見せることで少しは韓国のイメージアップに役立つかもしれない。それに、この仕事も年をとったらできない。「チャンスの女神の前髪」を掴まなければ、後で後悔する。もし、これがアメリカやイギリスで働かないかという誘いだったら断っていただろう。東京は PY さんにとっては知り合いのいない釜山よりも身近な場所で、友だちもいて、妹もいて、母もしょっちゅう来るところだ。心理的な壁は低い。

最初に担当した仕事は、韓国スターのグッズや CD の輸入だった。ファッションショーの仕事などを通じて広げた芸能関係のつながりを活用している。仕事で一番必要なことは、韓国の芸能情報をいち早く入手すること。特に CD は、レコーディングの段階で押さえないと、製造枚数が限られているため必要な枚数を確保できない。雑誌も、例えば、表紙が「ヨンさま」だったら、出版前に何百冊、何千冊とおさえないと手に入らない。そこが PY さんの腕のみせどころになる。情報とネットワークが勝負だ。この仕事をすることになるなら、韓国にいる間にもっと幅広く知り合いを作っておけば良かったと思う。「好き嫌いがはっきりしているので、性格が悪そうな人とはあまり親しくしないとか、選別して付き合っていた」ことを、少し悔やんでいる。

◇　将来　◇

最初は 5 年位働いたら韓国へ帰り、結婚することになるだろうと思っていた。それが今は、日本に居るなら 35 年ローンでマンションを買おうと思っている。これは全く想像していなかった展開で、自分でも驚いている。生活の拠点はこれからも日本になるだろう。

将来構想を変えることになった理由を考えると、2 つくらいあるように思う。一つは、今の仕事が面白くて充実感があるからだ。もし、朝 9 時に出勤して夕方帰るという単調な仕事だったら、韓国に帰っていただろう。新人歌手は次々にデビューするし、新しい音楽も次々にリリースされる。面白い芸能関係のニュースには事欠かない。そうした情報をいち早くキャッチして、誰にも注目されていない商品を仕入れて、それが売れたときには仕事の手ごたえを感じる。

もう一つは、職場環境が大きいと思う。勤務先の社長が女性を活用する明確な方針を打ち出しているからだ。特に、文化分野は男性より女性の方が適していると、全ての部門の責任者に女性を起用している。PY さんの世代が主力だが、最近、そのうちの一人が出産した。すると、これから次々に産休に入るだろうからと、子育てと仕事が両立できるように保育施設の検討も始めた。

ただ、マンションを買う話は父親がさびしい思いをするような気がして、まだ言い出せずにいる。妹も日本で暮らすことになるだろう。父親からは、「女性でも何でもできなきゃだめだし、もし旦那がフリーターだったらしっかり働かなければだめだ」と言われてきた。「パパは老人ホームに入るから、早く嫁に行け」と言うが、本心は一緒に住みたいと思っているに違いない。20 代前半の頃は、「30 歳までに絶対結婚する」と思っていたが、仕事が面白くなったら結婚願望が小さくなった。でも、来年には結婚したいと思う。子どものことを考えると、小学校の入学式で母親が 40 歳過ぎていたらかわいそうだと思うからだ。付き合っている韓国人の彼とは、マンションを買うかどうかについて、まだ、意見がまとまっていない。

＜ インタビュー / 인터뷰　17 ＞

ヨンさん（40 代・男性）「世界と日本のゲートウエイを作る」

2010 年 4 月 13 日、ソウル出身、自営業、日本歴通算 12 年目
インタビュアー：渡辺幸倫

来日以来11年勤めた会社を辞め1年ほど前に独立したヨンさん。現在は自分が**「本当にやりたい、小さいけどもやりたいことを」**との思いから日本と世界をつなぐ情報ゲートウエイサイトの開発をしている。一時間半をこえる長目のインタビューだったが、これまでの人生で影響を受けたことややり遂げてきたことなどについて、いろいろと語ってくれた。

◇　大学時代の話　◇

弟が一人の 2 人兄弟。子どもの頃は**「もう皆同じで、全部貧乏だったんですね、大体」**と振り返る。大人からは特別な資源のない国だから豊かになるためには頭しかないと教えられ、**「勉強、勉強、勉強だけだったんです。国全体が」**と感じていた。

しかし、1980 年はじめ頃に**「大学はいると、今まで経験してなった文化とかも、見えたんですね」**という。具体的には**「1980 年代には、韓国が凄く問題があったんです」「光州の事件もあったし。それがちょっと隠蔽ですか？なんとかマスコミ？とか全部報道とかもができなかった」**ことが見えてきた。**「私が高校生の時には全然知らなかったものが、壁とかに書いてあるんですよ。何々がありました、何人何人が死亡しましたとかって。で、この後ろには米軍があって、全部指示通りに今の政府がやりました」**などとあったそうだ。知ったからには、**「政府にちょっと反対するしかない」**となるのが当時の大学生であった。当然のように**「デモとかも凄かったですよ」**と言う。

民主化運動の時代であった80年代に大学生活を過ごしたこの世代は後に386世代と呼ばれるようになる。激動の 80 年代に大学生活を過ごした 60 年代生まれの世代で、現在も韓国社会で独特の存在感を持っている。

ヨンさんは大学生の時に初めて来日する。日本に留学していた友達を訪ねて一週間ほど旅行にきた。今からほぼ 25 年前のことだが、印象に残っているのはテレビ。**「すごいなーと。深夜のテレビ番組見て」「友達と、集まって、お酒のみながら、本当にこれ放送しても大丈夫なのかなって思ったんですよ」**と言う。韓国での生活との大きな違いを感じた瞬間だったことだろう。

◇　韓国での会社員時代　◇

激動の大学時代を終え、90 年代の初頭に IT 関係の企業に就職する。建設プロジェクトの情報管理を多く扱った。そこで働いた 7 年間は、インターネットによる急速な社会変化が起こり、競争も日々激しくなる一方だった。そんな時にいわゆる IMF 通貨金融危機が起こり、国外に活躍の場を求めようとすることになる。**「この時代の日本は、韓国より何年くらいかちょっと遅かったんですよ。インターネットのホームページとかまだ作ってない状態なんで。こっちで競争して難しいよりも、まだ何もないところでやればいいと思って」**。韓国との IT 格差は IMF 危機後に韓国政府が行った積極的な IT 化推進政策によって広がったとされるが、ヨンさんによれば、実際には IMF 危機頃には既に差が広がりつつあったそうである。

しかし渡航先として日本に対して特別な思いがあったわけではない。ただ、今思えば、大学時代に日本語を**「アイウエオくらいだったんですけども勉強」**した時に思ったことは関係していたかもという。その頃ことだが、**「サッカーの日韓戦の試合をあるときに見たんですよ。この試合で、日本**

のアナウンサーとか、解説する人が、逆に、どのように日韓戦について話してるのかちょっと聞きたい気持ちは少しあったんですよ」。大学時代に影響を受けた報道されていることが全てではないという考えがこの好奇心に繋がったのだろう。

◇　日本に来てから　◇

90 年代末頃に、奥さんと生後間もない娘さんを残して来日。IT 技術者として文京区に住みながら港区の会社に通った。ほどなく二人を呼び寄せ、その後、蕨市や国分寺市などを経て新宿区に移り住んだ。

最後の引っ越しは娘さんの教育のため。新宿区内の韓国学校のすぐ近くに移った。「**韓国ではちょっと両親とかはもう全力じゃないですか。子供の教育に。子供のために引っ越したり。今も私たちも同じなんです**」と言う。日本での韓国学校の他にも、学習塾に通わせたり、長期休暇中に韓国の実家に戻った際に地元の学校に通わせたりと教育には余念がない。日本に住む韓国人として、「**日本の方くらいの日本語はできないし、韓国の人のような韓国語はできないですよ**」と悩みを隠さないが、今後の教育については、「**大学を何処でいくか。日本で行くか、アメリカで行くか、韓国で行くかによっては、中学生からなんか準備しないと**」と幅広い視野から可能性を考えている。

◇　本当にやりたいことを求めての独立　－3 つのゲートウエイ－　◇

11 年働いた会社では鉄道会社の料金徴収システムや、工場の生産管理などのプロジェクトに取り組んだ。いろいろな経験を積むことができたが、会社のためでなく自分のために仕事をしたいという思いが強くなり、一年ほど前に独立した。

今は、日本と世界をつなげるゲートウエイとなるサイトを作っている。「**ゲートウエイ・トゥ・ジャパンと名刺にも書いているんです**」。ヨンさんのサイトは大きく三つに別れる。

まずは、12 年になる日本での生活で知った情報を日本以外の国につたえるサイトだ。「**今普通にインターネットに載っているものじゃなくて**」、新しい見せ方を模索している。ヨンさんは例を挙げてくれた。「**例えば今、普通に日本とインターネットで検索すると、色んな情報が出るんですよ。これが今現在までの『情報』です**」話にも力が入る。これを印刷したり紹介されている本を購入したりするのがこれまでの形だった。「**それを今後は一つにしてスマートフォンが、一つだけあれば世界何処でも行ける。情報をこれで全部もらえるから。それで今、スマートフォン用のアイテムをちょっと作ってるんですよ**」。

二つ目は新大久保に注目したものだ。「**日本の方はこの新大久保のことをコリアンタウンとか言うじゃないですか**」。ただ、「**普通、美味しいお店の紹介があって、三段バラ（豚肉の焼き肉：インタビュアー注）とか具体的に食べたいものの紹介がある。これをちょっと選択して逆に見せよう。この逆のシステムを作ればいいんじゃないかと思ってます**」。店を起点にした街の紹介ではなく、食べたい料理やほしいサービスを起点にした街の紹介。発想の転換だ。世界と日本といった単純ではない、複雑な経路のゲートウエイが見える。

三つ目は、「**今こっちに住んでる韓国の人たちのコミュニティの場所**」。日本に住んでいる韓国人が自由に情報交換ができる場所が少なすぎると感じている。つまり、韓国からの日本へのゲートウエイだ。もちろん一般生活上のことも視野にあるが、そこには仕事上の問題を解決したいという思いもある。

韓国からの IT 技術者は派遣会社を通して働いている人が多い。ヨンさんが来日した頃には、学歴や就業経験などの条件が現在よりもかなり厳しかったのだが、この 10 年で随分と緩和された。その結果、残念ながら必ずしもレベルの高い技術者ばかりとはいえなくなってしまった。しばらくはそ

れでも技術者が必要という時期が続いたが、やはり昨今の不況の影響か、技術者のレベルを問題にしたトラブルが起こり、契約が更新されないことが起こり始めているという。

会社側にたとえ正当な理由があったとしても「**クビになったりすると、韓国はインターネットの文化だから、そのクビになる人が理由は、理由は書かなくて結果だけ書く**」と問題を指摘する。契約が打ち切りになって悔しい気持ちも分かるが、ヨンさんは状況を厳しく分析する。「**理由はあるんですよ**」。「**ほんとに経歴のない人派遣する会社も問題だし、それに『行きなさい』と言われたら行って自分が経歴があるように頑張るのもおかしいし。インチキみたいものになっていって…**」しまっているというのだ。いずれにしても、「**結果だけを話すとこのようになるじゃないですか。クビだけいうと。悪い会社ですよと。理由があるんですけど**」。しかも、それを根拠に技術者達のコミュニティではブラックリスト、「**この会社は行っちゃダメって言うリスト**」まで作成されてしまうというのである。

このような状況を憂いながらも、一方では、IT 技術者の排出国としての中国、ベトナムなどの台頭に危機感を募らせている。韓国人技術者が現場から離れてしまっている間に、「**他の国の人が全部スペースを埋めてるから、行く場所がなくなってくる…**」という状況の変化があり、「**韓国のこっちで働いていた IT 関係の人たちはどうすればいいか…**」と戸惑ってしまう。

だからこそ、技術者の技能や経験を管理し、問題が起きたときに責任をとる団体が必要だと考えている。ヨンさんのサイトのコミュニティがそのきっかけになればと願っている。「**できれば架け橋っていうほどの大きな話じゃないんですけど、本当に道を作りたいです。ゲートのように。そこで、良いもの悪いもがあっても、そこで話せれば、誰かが助けたりとか、そこで協力したりとかできる。そういうゲートを作りたい**」。その先には IT 技術者だけではなく、日本の中小企業を世界に紹介するというゲートウエイも視野にある。「**韓国に日本の小さい企業を紹介しても、まだ道とか場所とか分からないじゃないですか。こういうのをちょっと何とか一つに集めて、興味のある人に来てもらって、『これ中小企業の良い製品だ』とか、わかるような場所とかあるといいじゃないですか。誰もやらないから私がやりたい**」。大企業にはルートがあるだろうが、中小企業では必ずしも同じことができない。そんな会社と世界をつなげたいというのである。

独立してからの会社は数人の友人が手伝ってくれている。その友達と一緒にゆっくりと、しかし、しっかりとこのコミュニティを育てていきたい。

「**一生懸命やれば自分が期待してなったものまでも、できるんじゃじゃないか。それが希望です。まぁ一緒にやってる人たちの希望も一緒です。本当にお金を儲けなくても、誰かがこれをやらないと。必ず必要なものだったんですけど、誰もやらないから私たちがやりましょうと**」。

世界と日本のゲートウエイ。誰もやらないから自分がやる。

実に頼もしい限りだ。

< インタビュー / 인터뷰 17 >

영씨(40 대/남성) 「세계와 일본의 게이트웨이를 만들다」

2010 년 4 월 13 일, 서울출신, 자영업, 일본체재 12 년째
인터뷰어 : 와타나베

일본에 와서 11 년간 일했던 회사를 그만두고 1 년전에 독립한 영씨. 현재 자신이 "진짜로 하고 싶은 것, 작지만 자기가 하고 싶은 것" 이라는 생각으로 일본과 세계를 연결하는 정보 게이트웨이를 개발하고 있다. 한시간 반을 넘어서는 장시간의 인터뷰였지만 지금까지의 인생에 영향을 끼친 것이나 이루어 낸 일등에 관해서 여러가지 이야기를 들려주었다.

◇ 대학시절의 이야기 ◇

형제는 남동생이 있다. 어릴 때는 "뭐 대부분 똑같이 전부 가난했었죠,. 대체로." 라고 회상했다. 어른이 되고 나서부터 특별한 자원이 없는 이 나라에서 부자가 되기 위해서는 지식밖에 없다고 생각해 "공부, 공부, 공부가 전부였어요. 나라 전체가." 라고 느꼈었다.

그러나 1980 년 초에 "대학에 들어가면 지금까지 경험해보지 못했던 문화라던가 그런 것이 보였었어요." 라고 한다. 구체적으로는 "1980 년대에는 한국이 문제가 많았어요." "광주사건도 있었고, 그것이 은폐라고 할까요? 무슨 매스컴이라던가 전부 보도할 수가 없다." 라는 것이 보여졌다. "내가 고등학생일 때는 전혀 몰랐던 것이 벽같은 곳에 써져 있었어요. 무슨, 무슨 일이 있었다하던가 몇명이 죽었다라던지. 그리고 그 배후에는 미군이 있어서 전부 지시한 대로 정부가 했습니다." 라는 것이 쓰여져 있었다고 한다. 알기로는 "정부에 대해 반대하는 수 밖에 없었다" 라는 것이 당시의 대학생이었다고 한다. 당연히 "데모는 대단히 많았어요" 라고 한다.

민주화운동 시대였던 80 년대에 대학생활을 보낸 세대는 386 세대라고 불리워 지게 된다. 격동의 80 년대에 대학생활을 보낸 60 년대 출생의 세대로서 지금도 한국회사에서는 독특한 존재감을 가지고 있다.

영씨는 대학시절에 처음으로 일본에 오게 된다. 일본에 유학하고 있는 친구에게 들러 1 주일 정도 여행을 했다. 지금으로부터 약 25 년전의 일이지만 인상에 남아 있는 것은 텔레비젼. "대단하구나~. 심야방송을 보고". "친구들이 모여서 술마시면서 봤는데 진짜로 이런 것을 방송해도 괜찮은가 라고 생각했었지요." 라고 말했다. 한국에서의 생활과 많이 다르다고 느꼈던 순간이었을 것이다.

◇ 한국에서의 회사원 시절 ◇

격동의 대학시절을 끝내고 90 년대 초에 IT 관련 기업에 취직한다. 건설 프로젝트의 정보관리를 주로 맡았다. 그곳에서 일한 7 년동안 급속한 인터넷에 의한 사회변화가 일어나, 날로 경쟁이 치열해졌었다. 그러던 때에 IMF 통화금융위기가 일어나서 국외에서의 활약의 장소를 원하게 된다. "그 때의 일본은 한국보다 몇년 뒤쳐져있었어요. 인터넷의 홈페이지라던지 아직 만들어지지 않았었고. 한국에서 경쟁해서 힘들어 지는 것보다 아직 아무 것도 만들어지지 않은 곳이 좋겠다는 생각에." 한국과의 IT 격차는 IMF 위기 뒤에 한국정부가 실시한 적극적인 IT 화추진정책에 의해 벌려진 것이라고 하지만 영씨에 의하면 실제로는 IMF 때에 벌써 격차가 벌려지고 있었다고 한다.

하지만 해외로 나가는 나라로서 일본에 대한 특별한 감정은 없었다고 한다. 단지 지금 생각해보면 대학시절에 일본어를 "アイウエオ정도 이지만 공부"했을 때 생각한 것과 관계있다고

생각한다. 그 때 당시의 일이지만 “어느날 한일 축구 시합을 보게 되었어요. 이 시합에서 일본의 아나운서나 해설자가 반대로 어떻게 한일전에 대해서 말하고 있는지 조금 들어보고 싶다는 마음이 있었어요.” 재학시절에 영향을 받은 보도가 전부가 아닐 거라는 생각이 이러한 호기심으로부터 생겨났었다고 생각한다.

◇ 일본에 오고 나서 ◇

90 년대 말에 부인과 태어난지 얼마 안된 딸을 한국에 남겨두고 일본에 넘어왔다. IT 기술자로서 분쿄구에서 미나토구에 있는 회사에 다녔었다. 얼마 안 있어 부인과 딸을 불러들여 그 뒤 쿠라시나 고쿠분지시 등을 거쳐 신쥬쿠에 이사와서 살게 된다.

마지막의 이사는 딸의 교육을 위해서이다. 신쥬쿠 안에 있는 한국학교에서 가까운 곳으로 이사하게 되었다. “한국의 부모는 아이의 교육에 열심이지 않지 않습니까? 아이를 위해서 이사를 한다던가. 지금도 똑같아요.” 라고 말한다. 일본에서의 한국학교 이외에도 학원에 보낸다던지 장기휴가중에 한국에 돌아갈 때는 그 쪽의 학교에 보낸다던지 교육에 여념이 없다. 일본에 사는 한국인으로서 “일본인처럼 일본어가 되지도 않고 한국인처럼 한국어도 잘 되지 않아요.” 라고 고민을 좀처럼 감추지 못하지만 앞으로의 교육에 관해서는 “대학은 어디로 갈 것인지, 일본에서 갈 것인지 미국, 아니면 한국으로 갈 것인지에 따라 중학교서부터 뭔가 준비하지 않으면” 이라고 하면서 넓은 시야를 가지고 여러 가능성을 생각하고 있다.

◇ 진짜로 하고 싶은 것을 위해서 독립 –세가지의 게이트웨이- ◇

11 년간 일했던 회사에서는 철도회사의 요금징수 시스템이나 공장의 생산관리 등의 프로젝트를 담당했었다. 다양한 경험을 쌓을 수 있었지만 회사를 위해서가 아니라 자기를 위해서 일하고 싶다는 생각이 강해져서 1 년정도 전에 독립하였다.

지금은 일본과 세계를 연결하는 게이트웨이가 되는 사이트를 만들고 있다. “게이트웨이 투재팬이라고 명함에도 쓰여져 있어요”. 영씨의 사이트는 크게 세부분으로 나뉘어 진다.

먼저 12 년째 되는 일본의 생활 가운데 알게 된 정보를 일본 이외의 나라에 전달하는 사이트이다. “지금 일반적으로 인터넷에 실려있는 내용이 아니라”, 새로운 방법으로 유저에게 보여주는 것을 모색중이라고 한다. 영씨는 한가지 예를 들었다. “예를 들면 지금 일반적으로 인터넷에서 일본이라고 검색을 하면 여러가지 정보가 나옵니다. 이것이 지금까지 말하는 ‘정보’입니다.” 라고 목소리에 힘이 들어간다. 이것을 프린트아웃하거나 책을 구입하는 것이 지금까지의 형식이었다. “그것을 앞으로는 스마트폰 하나만 있으면 세계의 어느 곳이나 갈수 있게 된다. 정보를 이걸로 다 받을 수 있으니까. 그래서 지금 스마트폰용 아이템을 만들고 있어요”.

두번째는 신오오쿠보에 주목한 내용이다. “일본인은 이 신오오쿠보를 코리언타운이라고 부르지 않습니까?” 단지 “보통 맛있는 가게의 소개를 하고 삼겹살이나 먹고 싶은 것을 상세히 소개하고 있어요. 이것을 조금 선택하여서 역으로 보여줘봅시다. 이 반대의 시스템을 만들면 되지 않을까 라고 생각하고 있어요.” 거리를 기점으로 한 마을의 소개가 아니라 먹고 싶은 요리나 원하는 서비스를 기점으로 한 거리 소개. 발상의 전환이다. 세계와 일본이라는 단순한 경로가 아닌 복잡한 경로의 게이트웨이가 보인다.

세번째로는 “지금 이곳에서 살고 있는 한국인들의 커뮤니티를 위한 장소” 일본에 살고 있는 한국인이 자유롭게 정보교환할 수 있는 장소가 너무 적다고 느끼고 있다. 즉, 한국에서부터 일본으로의 게이트웨이다. 물론 일반생활상의 내용들도 생각하고 있지만 주로 일관계의 문제를 해결하기 위한 게이트웨이를 만들겠다는 생각도 있다.

한국에서 온 IT 기술자들은 파견회사를 통해서 일하는 사람들이 많다. 영씨가 일본에 왔을 때에는 학력이나 취직경험등 조건이 지금보다 꽤 엄격했었지만 최근 10 년동안 꽤 완화되었다. 그 결과 아쉽게도 반드시 레벨이 높은 기술자가 일본에 온다고는 말할 수 없게 되었다. 그래도 잠시동안 기술자들을 필요로 하는 시기가 계속되었지만 역시 최근의 불황의 영향으로 기술자들의 레벨을 문제로 트러블이 발생한다던가 고용계약이 갱신되지 않는 등의 문제가 발생하기 시작했다고 한다.

회사측에 설령 정당한 이유가 있다 하더라도 "한국은 인터넷 문화이기 때문에 해고라도 되면 해고된 사람은 이유는 적지 않고 결과만을 적는다." 라는 문제를 지적한다. 고용계약이 도중에 끊겨 분한 마음은 알지만 영씨는 지금의 상황을 엄격하게 분석한다. "이유는 있습니다.""진짜로 경력도 없는 사람을 파견하는 회사도 문제이고, 거기다 가라고 한다고 해서 일본에 넘어와 자기가 경력이 있는 것처럼 속이면서 열심히 하는 것도 이상하고. 사기치는 것처럼 되어버려서..." 라고 말한다. 어찌됐든 "결과 만을 이야기하면 이렇게 되지 않습니까? 해고만을 이야기하면. 안 좋은 회사이에요라고 이유가 있지만은" 거기다 그것을 근거로 기술자들의 커뮤니티에서 블랙리스트, "이 회사에 가면 안된다 리스트"까지 만들어지게 되는 것이다.
이러한 상황을 걱정하면서도 한편으로는 IT 기술자의 배출국으로서 중국, 베트남등의 등장에 위기감을 느끼고 있다. 한국인 기술자들이 현장에서 멀어져가는 동안 "다른 나라의 사람이 전부 자리를 메꾸고 있으니까 갈 장소가 없어지고 있다" 라고 하면서, 상황이 변하고 있고 "이곳에서 일하고 있는 한국의 기술자들은 어떻게 해야하는지" 라고 어쩔줄 몰라한다.

그렇기 때문에 기술자들의 기술이나 경험을 관리하고 문제가 발생하였을 때는 책임을 지는 단체가 필요하다고 생각하고 있다. 영씨의 사이트의 커뮤니티가 그 계기가 되기를 바라고 있다. "가능하다면 교가 역할이라는 큰 이야기는 아니어도 정말로 길을 만들어 주고 싶어요. 게이트처럼. 거기에 좋은 것 나쁜 것이 있어도 거기에서 말하면 누군가가 도와준다던가 협력해 줄 수 있는 그런 게이트웨이를 만들고 싶다." 더 나아가서는 IT 기술자뿐만 아니라 일본의 중소기업을 세계에 소개하는 게이트웨이도 계획하고 있다. "한국에 일본의 작은 기업을 소개해도 아직 길이라던가 장소 같은 것을 모르지 않습니까? 이런 것을 조금씩 모아서 흥미있는 사람들이 와서 '이거 중소기업의 좋은 제품이다' 라던지 이런 것을 알 수 있는 장소가 있으면 좋지 않습니까? 아무도 하지 않으니까 내가 하고 싶다." 대기업에는 루트가 있지만 중소기업에는 반드시 대기업과 같은 루트를 가지리라는 법은 없다. 그러한 회사와 세계를 연결하고 싶은 것이다.

독립하고 나서 몇 명의 친구들이 회사를 도와주고 있다. 그 친구들과 함께 천천히 그렇지만 확실히 커뮤니티를 만들어 나가고 싶다.

"열심히 한다면 자기가 기대하지 않았던 것까지 가능하게 되지 않겠습니까. 그것이 희망입니다. 뭐 함께 일하고 있는 사람들의 희망도 같습니다. 진짜로 돈을 벌지 못해도 누군가가 이것을 하지 않으면 안됩니다. 반드시 필요한 것이었지만 아무도 하지 않으니까 우리들이 하자고요."

세계와 일본의 게이트웨이. 아무도 하지 않으니까 자신이 하겠다.

실로 믿음직스러울 뿐이다.

＜ インタビュー / 인터뷰　18 ＞

N さん（30 代・女性）「留学、結婚を経て、日本に暮らす」

2010 年 4 月 16 日、テグ出身、パート勤務、日本在住 10 年目
インタビュアー：藤田ラウンド幸世

◇　略歴と家族　◇

N さんは 1972 年生まれで、4 人きょうだいの 3 番目に育った。小学校のときに中南部の都市に移り、小学校から高等教育、そして就職までそこで過ごす。上二人のきょうだいは大学に進学したが、N さんは大学ではなく、専門学校の司書コースで勉強をする。卒業後、アルバイトをしたりもしたが、その後、異なる分野の仕事を紹介され、その仕事に必要な専門知識の勉強をし、一ヵ月後に合格をして、採用される。

日本には、二度留学経験がある。一度目は、会社を休職して 1 ヵ月半の短期留学を経験。二度目は、28 歳のときで、日本語学校に入学。アルバイトをしながら、2 年間日本語の勉強をする。日本の大学に入って勉強をしたいという気持ちがあったが、経済的な理由から、2 年間ずっと迷い、結局、進学はしなかった。アルバイト先で一緒に働いていた男性と交際し、結婚をする。現在は、日本人の夫と子どもと新宿区に暮らす。

◇　高校時代に出会った日本のサブカルチャー　◇

60 年代後半から 70 年代に生まれた「ベビーブーム世代」の人たちは、当時、すでに大学進学熱のため、猛勉強をして大学入学を果たすことが普通になっていた。お弁当を二つ持って学校に通う毎日だった。

「朝 7 時に出たら、50 分バス乗って行って、そこから勉強が始まって、夜 10 時まで勉強するんですよ、それ、自由学習って言うんですけど、自由学習じゃないんですよ・・・強制的にさせられて。6 時くらいに授業が終わって、それからご飯を食べて、6 時半ごろから、自分で学習を始めるんですけど、私は勉強ではなくて本を読んでいたんですよ。」

N さんは哲学に興味をもっていた。高校に入ってから、毎月、お小遣いをもらうと、本屋に行き、本を一冊買うことが楽しみだった。本屋に行き、新しい本と出会うことが幸せだった。女性として、「インテリで、知的で、ちょっと違う生き方をしている」人にあこがれた。『星の王子様』も愛読していた。今、振り返ると、真面目に勉強をする時期にしていなかったことを後悔することもあるが、この時期の「本」への憧れは現在の自分の仕事にもつながっているという。

日本の音楽や小説、漫画も好きだったので日本には興味を持っていた。1991 年のある日、いつものように本を買いにいったとき、偶然見つけ、手にとったのが村上春樹だった。手にとって読んでみたら新しい内容だったので即座に買った。家に帰って読み始め、そのまま一気に朝まで読み続けた。それから『ノルウェイの森』も読み、衝撃を受けたことを覚えている。

音楽はそのときはミスター・チルドレンが好きだった。住んでいた街には、日本の音楽を流すカフェがあり、そこで日本の本や CD を貸してくれることもあった。そのころは、日本語は全くわからなかったが、いつか日本に行ってみたいと強く思った。

◇　日本への留学と結婚　◇

初来日は、会社で働いていたころに友達に誘われて、休職をして、1 ヵ月半の短期留学を体験する。今から考えると日本語もわからないのに勇気があったと振り返る。日本語は読めないので村上春樹の本は読めなかったが、ミスチルや松任谷由美の CD を買ったりして、楽しかった。

帰国後、「村上春樹が日本語で読めたらいいな、ミスチルの歌を日本語で歌えたらいいなと思って、勉強を続けようと思ったりしたんですが、韓国で 23 歳くらいだと親がちょっと、お母さんが心配してもう結婚すればみたいにいわれるようになりました」。以後、日本語は自分で勉強し、いつか日本で勉強をしたいとその機会を窺う。

28 歳のときに再来日、日本語学校に入学。アルバイトをしながら、日本語の勉強をする。日本語学校の同期の学生たちは中国人が多く、懸命に勉強をして大学受験を目指していた。こうした人たちが次々に早稲田や慶応などに受かるのをみて、自分も日本の大学で勉強したいという気持ちを捨

てがたかった。しかし、経済的なことを考えると、年齢的に親に頼ることもできず、最後まで迷う。二度目の留学では、まだ日本語が上手ではないころから、アルバイトの店員として雇ってくれた職場があった。初めの募集では土日という条件だったのが、自分が一生懸命働いたのを認めてくれて、一ヵ月後には仕事を増やしてくれた。2 年後、留学期間の終わるころに職場の男性と付き合い始め、プロポーズを受ける。夫は両親に挨拶に来てくれた。

結婚後、夫の職場の近くに初めは住んだが、その後、夫の故郷に家族で戻ることになる。夫の故郷は田舎で、そこでは家賃が 3LDK で 1 万 5 千円だった。同じ韓国出身のお嫁さんの立場の人が同じ地域に二人いたものの、車で 1、2 時間のところに住んでいたので頻繁には会えなかった。仕事がなかったので、働けなかった。その代わり、当時、韓流ブームだったので、公民館で韓国語を教えたり、キムチを作って近所の人にあげたりして喜ばれていた。その後、夫と相談をして東京に戻ることを決心した。

◇　新宿区で子育てをしながら、働く　◇

東京では生活費が高いことを覚悟し、初めから共働きを考えていた。住居は、以前通っていた新宿区にあるキリスト教会の友達に家探しを頼み、教会に通える距離にある場所を見つけてもらい、2006 年に東京に戻った。

新宿区を選んだ理由は、以前からの教会を通じた韓国人の知り合いが多く、情報も簡単に手に入ることだが、一方で友達は韓国人が多いので日本人とあまり付き合うことがないことも自覚している。田舎から東京に戻ってきたときのカルチャーショックをはっきりと覚えている。夫の故郷では、夫の家族の地元だったのでみな、自分に挨拶をしてくれて、子どもの学校にいったときも親切にしてくれたが、新宿に引っ越してきてから子どもの学校行事に参加したときに、お母さんたちは全然話かけてくれず、グループができている感じで入り込みづらかった。「集まって、話はしてるんだけど、なんかこう私を見ても話しかけない・・・、なんか、一言くらいは話かけるんですけど、そんなにぺらぺらしゃべれないし、なんか、こう、関係が親しくならない。」

また、子どもの付き合いを通して自分たちの家族と友達の家族の違いを感じることが多い。子どもが友だちの家に遊びにいくと、「お母さんうちが一番貧乏だよ」と帰ってきてから言ったり、「社長さん」で、「一戸建て」で、ある友達の家に行ったら「お母さんエレベーターがあったよ」と聞いたり、「その反面、他の友達の家に行ったら、うちより狭かったよとか」、子どもの体験を通して、新宿区の貧富の格差を感じることもある。

韓国人との付き合いの方が気楽だということもあり、日本人のお母さんたちとの付き合いに積極的になれないという心理もある。「日本人のお母さんだったら気遣わなければならないし」「保育園とかに行って話しているときは、なんかすごく笑いながら親しく話をするんですけど、うちに遊びに来てくださいとか言われたこともないし、みんな保育園のお母さんたちは仕事をしていて忙しいから」と距離感をうまくつかめない。

自分も東京に来てからは、主婦だけではなく、本屋でパート勤務を始め、週に 4 日忙しく働いているので充実している。高校時代からの本と音楽が好きだったことが今の仕事につながっていて、自分がしてみたかった仕事だったので、大変なこともあるが、やめられない。

◇　子どもの韓国語　◇

夫が日本人なので特別に韓国語を習わせたいとか、そういうこだわりは特にない。新宿区内に韓国学校はあるのは聞いたことはあるが、学費が高く、通うのも大変。家で自分から子どもに韓国語で話しかけることはあるが、全体的に日本語の方が多い。子どもは、韓国語は聞いてわかるものの、答えるときは日本語で返す。去年、韓国に子どもを連れて帰ったら、思ったよりできなかったのはショックだった。自分は加減をしてゆっくり話しているが、現地にいったらそうはいかないので、うまく聞き取れなかった様子。周りの韓国人のお母さんからは、「あなたは韓国人なんだからもうちょっと韓国語教えなさい、両方できるチャンスなのになんで逃がしてるの、韓国語を教えないとだめだよみたいなことを言われ」、「自分でも意識して韓国語でしゃべろうとしているんですけど、分からないとやっぱり日本語で言っちゃう」。それでも、通っている教会の、土曜日に子どもに韓国語を教えてくれるクラスに連れて行っている。永住ビザを持っているのでこれからも日本に家族と住むつもりでいる。

＜ インタビュー / 인터뷰　19 ＞

S さん（20 代・女性）「残りの大学生活でやってみたいのは英語の勉強」

2010 年 7 月 5 日、釜山出身、大学生、日本滞在歴 5 年目
インタビュー担当：河合優子

◇　日本に来日するまで　◇

S さんは韓国で高校を卒業後、2006 年春に来日した。韓国では、とくに外国語高校を希望していたわけではなかったが、数学が得意だったため、成績優秀者が集まる外国語高校の入試に合格してしまったという。高校では、英語をメインに勉強しながら、日本語も勉強した。高校では、副専攻として中国語か日本語が選択できたが、中学時代にクラスの友だちに見せてもらった、日本のドラマ『ごくせん』を見たことがきっかけで、日本語を選択した。日本に留学を決めた理由の一つに、英語があまり好きではなかったことがあるという。

◇　日本語学校時代　◇

来日して最初に住んだのは高田馬場。ここで日本語学校に通うことにしたのは、韓国人学生が約 2 割と少なめであったことが理由だった。高田馬場での生活については、「ひとり暮らしがすごく楽しかったし、あと、高田馬場って少し歩いたら新大久保で、新宿もあって、あと、早稲田大学も近くて、どこでも行けるし、楽しかった」。日本語学校で学ぶなかで、友人間で使うような日本語ではなく、敬語などを含めたきちんとした日本語の話しことばを学ぼうと、居酒屋で働き始める。そこで、店長から、名札の名前を本名にすると、違和感を感じる客がいるかもしれないから、日本名にしてほしいといわれる。本名でなにがいけないのだろうと最初は思ったが、働くのには日本名があったほうが逆に楽だったという。この店には、韓国人の他にも中国人留学生のアルバイトもいたが、みんな週に何度も名札の名前を変えて、「今日は何にしようかな」と楽しんでいた。そのうち、日本人のアルバイトの人たちも、おもしろがって名前を変え始めた。

◇　大学に入学してから　◇

神奈川県の大学に入学し、メディア関係の勉強をしている。最初はすぐに日本人の友だちができず、大学近くのアパートに住んでいたが、新大久保に週 5 回通って、韓国人の友だちに会い、授業のない日はそのまま友人の家に泊まっていた。新大久保には複雑な感情がある。「韓国人って、新大久保嫌いなんですよ。でも、行く感じ」という。その理由については、「韓国人ばっかりいるから。私は日本語を勉強しに日本に来たのに、結局、韓国語しかしゃべらないという感じが多かったので」と話す。

同じ大学の日本人大学生については、「みんな恥ずかしがり屋ですよ。メールはちゃんとしてるんですけど、会うとすぐ行っちゃって、挨拶もしないし、それのちょっと繰り返しがあって……」という。しかし、大学 2 年生のとき、海外での課外授業に参加し、日本人の友だちもできるようになると、新大久保へ行く回数も、週に 1 回ぐらいに減ったという。

最近、いとこが大学卒業して来日し、新大久保で日本語学校に通っているため、新大久保にはよく出かける。いとこは、日本語が全然話せないため、S さんが新大久保を勧めたそうだ。

◇　アルバイトなど　◇

新宿でアルバイトを探すのは難しくないが、現在住んでいる外国人人口も少ない関東圏の中都市では、とても大変だ。「電話を 30 回ぐらいしたんですけど、『じゃ、そしたら面接を、火曜日にしましょう、何時がいいですか？お名前教えてください』と言うので、そのときに名前でばれちゃうじ

ゃないですか、外国人ということ。それで、『私、外国人なんですけど、それでも大丈夫ですか？』と聞いたら、『ああ、外国人か、ごめんなさい』とか言うんですよ。」。アルバイト求人を見て、電話をし、アルバイトについていろいろと話をした後、「外国人です」と告げると、相手から「日本語を話せるのか」、と聞かれて、今まで日本語で話していたのに、と絶句したことあるという。現在は、「最後の挑戦」と思って電話したレストランに雇ってもらい、アルバイトをしている。

ただし、中都市には新宿にはない良い面もある。「みんな忙しいじゃないですか、新宿の人。だから、『すみません』って言っても、すぐ行っちゃうし」という。今住んでいるところでは、特に中高年の女性がとても親切だという。バスで「今日は何買い物したの」とか、「私も韓国語勉強しているの」などと話しかけられたりするという。

◇　日本社会に望むこと　◇

新大久保で、日本人の年配の男性から、「やっぱりおまえは韓国人だろ」と言われ、嫌な思いをしたことが何度かある。「嫌なことを言われても、あんまり日本語を話せないから言えないんです。だから、家に帰って、アニメとかドラマ見て、すごく悪口を覚えて、今度会ったら絶対言ってやろう」と思ったそうだ。

日本の人にはもっと普通に接してほしいという。「韓国人だからということにこだわらないでほしいというか。同じ外国人じゃないですか、アメリカ人とかイギリス人とか。韓国人も外国人だし。でも、韓国人に会うと、すぐ歴史の話とか、そういうことを言わないほうが……」。しかし、韓国に関してはもっと知ってほしいという気持ちもある。バイト先では「韓国って中国語話すんだっけ」といわれたり、お客さんにモンゴル人の人がいたときには、バイト先の人から「S さんは韓国人だから、モンゴル語もできるのかな」と聞かれて驚いたという。

◇　将来について　◇

卒業後については迷っている。円高であることもあり、日ごろから金銭的に気をつかって生活しているため、「本当は日本にいれたらすごくいいんですけど、ちょっと疲れたので、韓国に帰って 1 年間ぐらい休みたいんです、何もしないで」。ただし、韓国で就職するとなると英語力が問われるため、「本当に TOEIC 点数があんまり出ないと就職できないので、そういうことを考えたら、韓国に帰りたくない」のだそうだ。これから、残りの留学生活でやってみたいことは、英語の勉強だ。

将来は、バラエティー番組のプロデューサーになりたいという。そして、単におもしろい番組をつくるというだけでなく、社会貢献につながるような番組をつくりたい。例えば、韓国の『無限挑戦』というバラエティー番組では、番組のカレンダーを限定販売し、その収益金を寄付しているが、このように単に娯楽だけのものではなく、社会に何らかの形で還元できるような番組をつくってみたいそうだ。

＜ インタビュー / 인터뷰　20 ＞

K さん（30 代・男性）　「日本で研究者に」

2010 年 7 月 8 日、ソウル出身、大学助手、日本滞在歴 12 年
インタビュー担当：河合優子

◇　日本に来日するまで　◇

K さんは、高校卒業後、韓国の大学に入学し、社会学を専攻した。社会学にしたのは、「偏差値と成績、もっぱらそれだけ」だったという。大学 2 年まで終えたところで、兵役のために休学し、1998 年 6 月に除隊した。新学年度は翌年の 3 月からのため、その間の期間を利用し、その年の 10 月、初めて日本にやってきた。先に K さんの兄が日本に留学しており、来日には不安はなかったが、日本語はそれ以前にまったく学んだことはなかった。

◇　日本語学校時代　◇

「東西南北」という漢字も書けないくらいだったが、日本語の上達がとても早く、来日後 5 ヶ月目に受験した日本語能力試験 1 級の模擬試験で、400 点中 380 点をとった。日本の大学に入学することを考えはじめ、入試ではとりあえず日本語を読めて書けるようにならなくてはならないと、漢字や単語をひたすら書いて覚えるという方法で日本語を勉強したという。

◇　大学入学してから　◇

来日した翌年には大学受験に合格し、経済学を専攻した。やはり読み書きを中心に日本語を学んできたため、「大学に入って、実際に 1 年生のときはほとんどしゃべれなかったんですね。特に敬語だけの日本語なんで、結構距離感があるんです、やっぱり友達と。タメロがきけないので」と K さんは話す。最初の 1 年はほとんど日本の友人ができなかったそうだ。

それで考えついたのは、韓国語を教えることだった。大学内にビラを貼り、ボランティアで韓国語を教え始めた。それがきっかけで、だんだん日本人の友人もできるようになっただけでなく、韓国語講師としての仕事も紹介してもらえるようになった。民間企業や大学の短期講座などで、韓国語講師を 8 年間務めた。韓国語を教えることについては、「大変だったんですよ。やっぱり準備するのも大変でしたし、私も改めて母国語を勉強しなきゃいけないので。でも、意外と向いていたっていうか、楽しかったんですね、人を教えるのが。韓国語を教えるのが楽しいんじゃなくて、何か自分が持ってるものを伝えて、それがきっかけになっていろいろと交流が広まっていくっていうのがすごく楽しくて」という。大学では知り合えない、サラリーマン、OL、医者など幅広い層の日本の人たちとの交流ができたという。今でも教えた人たちとつきあいがある。

◇　住む場所　◇

最初は新宿区内に住んでいたが、神奈川県の郊外の一軒家に 3 年ほど住んで新宿区まで通学していたこともある。大学からはかなり遠かったが、犬と一緒に住めるところを探していた。そこでは、地域のコミュニティが残っており、近隣の人との交流もあり、まるで韓国の田舎のようだったという。しかし、やはり通学には不便だということで、現在は都内に戻って生活している。郊外での生活について、「一軒家だったので、やっぱり外国に 1 人で住むっていうのは、とても不安なんですよね、男であっても。なので、やっぱり自分から、求めるようになるんですよ、人のつながりっていうのを。例えば地震が起きて食水とか配給されるときに、自分だけ取り残されたらどうしようみたいな・・・やっぱり自分から前向きに求めていくっていう、そういう姿勢があったんですけれども、ここ（都内）だとほとんどそういうのを感じない」。

コリアン・タウンと呼ばれる新大久保について、K さんは次のように語った。「そこに韓国人がいっぱいいるから行きたくなっていう意味じゃなくて、もしそこが韓国の、いわゆるコリアタウンじ

ゃなくても、多分行かないと思う。なかなか行きたくないっていうのがあるんですね。ちょっと暗い感じがするんです、どうしても。多分歌舞伎町ともリンクしてくるとも思うんですけれども」。しかし、韓国の食材を買う目的や、留学生会の集まりなどで、新大久保に月 1、2 回は出かける。

◇　日本社会について　◇

日本での経験は、「多分、運のいいほうかもしれないんですけれども、それほど嫌なことは今までは経験してないんですね」という。ドラマ『冬のソナタ』の人気が出る前と後では、韓国人であることの意味が、大きく変化したことを実感した。　日本社会については、「今の日本って、結構いろいろ言われてるんですけれども、私から見たときには、ものすごいいい国だと思うんですよ。いろんないいものを持ってる国なんですね。例えば、本当に一般的な話をすると、ものをつくるときの、何ていうんですか、丁寧さだとか、そういうのもありますし、やっぱり周りに迷惑をかけないような、そういう意識がきっちりと、みんなそういう意識を持ってるだとか、やっぱり社会的なインフラだとか文化的なインフラを、すべてを見ても、やっぱりいいものっていっぱい持ってるんですよ」という。

◇　歴史問題　◇

日本の植民地支配に関わる歴史問題についても、熱心に語ってくれた。「よく考えてみると、その当時の歴史的な問題になってる当時の被害者、いわゆる被害者の人たちがまだ生きてるんですよね。あと 10 年も残ってないと思うんですけれども、まだ生きてるっていうことは、過去の問題じゃなくて現実問題だと思うんですよ。だから、本当に日本としては、日本が歴史的な問題にかかわったときに、周りの国々が持ってるイメージを変えるチャンスって、あと 10 年も残ってないと思うんですよ。この間に何をどうするのかっていうことなんですよね。なんで、それぞれ果たすべき役割があると思うんですよ。ただ、若者のような、全くそのような、直接的な責任も持ってない人たちっていうのは、やっぱりそれをちゃんと知ることによって、この問題について韓国人、あるいは中国人と話すときに、やっぱり真剣な姿勢が自然と持てるようになるんじゃないのかなと思うんですね。」

◇　将来について　◇

大学卒業後、大学院に進み、現在は大学で助手を務め、講師として大学で教えながら、博士論文の完成を目指している。将来は、日本で研究者として仕事をしたいと考えている。「周りの日本のいろんな方々に助けていただいてここまで来てるので、ちょっとこんな言い方よくないかもしれないんですけれども、何らかの形で私も何かをこの社会にしたいんですね・・・自分でできることっていうのは、何か書いて研究をしたり、あるいは学生たちを教えたりすることぐらいなので、自分の実力がどこまでいけるのかっていうのは別として・・・しばらくは日本に残ってやっていきたいなという気持ちは、正直あります」と抱負を語ってくれた。

< インタビュー / 인터뷰 20 >

K 씨(30 대·남성) 「일본에서 연구자로」

2010 년 7 월 8 일, 서울 출신, 대학교 조수, 일본거주 12 년
인터뷰 담당 : 카와이 유코

◇ 일본 방문할 때까지 ◇

K 씨는, 고교 졸업 후, 한국의 대학에 입학해, 사회학을 전공했다. 사회학에서 한 것은, 「오로지 편차치와 성적, 그것 뿐」이었다고 한다. 대학 2 년을 마친 후, 병역을 위해서 휴학을 했고, 1998 년 6 월에 제대했다. 신학기의 시작은 다음 해 3 월부터였기 때문에, 그 동안의 기간을 이용해, 그 해 10 월 처음으로 일본을 방문 했다. 먼저 K 씨의 형이 일본에 유학하고 있어 일본 방문에 대한 불안은 없었지만, 일본어는 그 이전에 전혀 배웠던 적은 없었다.

◇ 일본어 학교 시절 ◇

「동서남북」이라고 하는 한자도 못쓰는 정도였지만, 일본어의 습득이 매우 빨라, 일본 방문 후 5 개월째에 일본어 능력 시험 1 급 모의 시험에서 400 점 만점에 380 점을 받았다. 일본의 대학에 입학할 것을 생각해, 입시에서는 우선 일본어를 읽을 수 있고 쓸 수 있도록 하지 않으면 안 된다는 생각에 한자나 단어를 오로지 쓰며 외우는 방법으로 일본어를 공부했다고 한다.

◇ 대학 입학 후 ◇

일본 방문한 다음 해에는 대학 입시에 합격해 경제학을 전공했다. 역시 읽고 쓰기를 중심으로 일본어를 배워 왔기 때문에, 「대학에 들어가고 실제로 1 학년 때는 거의 말을 할 수 없었지요. 특히 일본어는 존경어를 많이 사용하기 때문에, 상당히 거리감이 있습니다. 역시 친구들과 편하게 말을 할 수 없기 때문에」라고 K 씨는 이야기한다. 처음 1 년은 거의 일본인 친구가 없었다고 한다.

그래서 생각한 것이 한국어를 가르치는 것이었다. 대학 내에 전단지를 붙여, 자원봉사로 한국어를 가르치기 시작했다. 그것을 계기로, 점점 일본인 친구도 생기게 되었을 뿐 아니라, 한국어 강사로서의 일도 소개 받을 수 있게 되었다. 민간기업이나 대학의 단기 강좌 등에서, 한국어 강사로서 8 년간을 일했다. 한국어를 가르치는 것에 대해서는, 「힘들었죠. 역시 준비하는 것도 힘들었어요. 저 역시 모국어를 다시 공부하지 않으면 안되기 때문에요. 그렇지만 의외로 적성에 맞는지 재미 있었어요. 사람들을 가르친다는 것이. 한국어를 가르치는 것이 재미있는 것이 아니라, 무엇인가 자신이 가지고 있는 것을 전하고, 그것이 계기가 되어 여러 가지 교류가 이루어져 나가는 것이 너무 재미있었어요」라고 한다. 대학교에서는 만날 수 없는, 샐러리맨, 의사 등 폭넓은 층의 일본 사람들과의 교류를 할 수 있었다고 한다. 지금도 가르친 사람들과 교제가 이어지고 있다.

◇ 거주지 ◇

처음은 신쥬쿠구내에 살고 있었지만, 카나가와현 교외의 단독주택에 3 년 정도 살아 신쥬쿠구까지 통학했던 적도 있다. 학교에서는 꽤 멀었지만, 애완견을 키울 수 있는 곳을 찾고 있었다. 그곳에서는 지역의 커뮤니티가 남아 있어 주변 사람들과의 교류도 있었고, 마치 한국의 시골 같았다고 한다. 그러나, 역시 통학에는 불편함을 느껴, 현재는 도내로 돌아와 생활하고 있다. 교외에서의 생활에 대해서, 「단독 주택이라, 역시 외국에 혼자서 산다고 하는 것은 매우 불안하네요, 남자여도. 그래서, 역시 스스로 사람들과의 연결을 요구하게 됩니다. 예를 들면 지진이 일어나 식수등이 배급될 때, 자기만 남겨지면 어떻게 하지? 같은… 역시 스스로 적극적으로 요구해 나가야 하는 느낌 이었지만, 여기(도내)라면 거의 그러한 것을 느끼지 않는다」.

코리아 타운으로 불리는 신오오쿠보에 대해서, K 씨는 다음과 같이 말했다.「거기에 한국인이 많이

있기 때문에 가고 싶지 않다는 의미가 아니고, 만약 거기가 이른바 코리아 타운이 아니어도, 아마도 가지 않을거라 생각한다. 좀처럼 가고 싶지 않네요. 아무래도 조금 어두운 느낌이 듭니다. 아마 가부키쵸와 비슷한 느낌이 든다고 생각합니다만」. 그러나, 한국의 식 재료를 사기 위해서나, 유학생회의 모임 등으로 신오오쿠보에 월 1,2 회 정도는 나간다.

◇ 일본 사회에 대해 ◇

일본에서의 경험은, 「아마, 운이 좋은 편일지도 모릅니다만, 그렇게 싫은 것은 지금까지는 경험한적이 없네요.」라고 한다. 드라마 「겨울 소나타」의 인기가 있기 전과 후에는, 한국인인 것의 의미가 크게 변화한 것을 실감했다. 일본 사회에 대해서는, 「지금의 일본은 상당히 여러 가지 말들이 많았지만, 제가 보기엔 아주 좋은 나라라고 생각합니다. 여러 가지 좋은 면을 많이 가지고 있는 나라인 것 같아요. 예를 들면, 정말로 일반적인 이야기를 하면, 물건을 만들 때의 그 뭐라고 할까, 정중함이라든지, 역시 주위에 폐를 끼치지 않는 듯한, 그러한 의식이 제대로, 모두 그러한 의식을 가지고 있는 것 같고, 역시 사회적인 인프라나 문화적인 인프라등 모든 면을 봐도, 역시 좋은 것을 많이 가지고 있네요.」라고 한다.

◇ 역사 문제 ◇

일본의 식민지 지배에 관련되는 역사 문제에 대해서도, 열심히 말해 주었다. 「잘 생각해 보면, 그 당시의 역사적인 문제로 되어있는 당시의 피해자, 이른바 피해자들이 아직 살아 있다는 거에요. 앞으로 10 년도 남지 않다고 생각하지만, 아직 살아 있다는 것은, 과거의 문제가 아니고 현실 문제라고 생각합니다. 그렇기 때문에, 정말로 일본으로서는 일본이 역사적인 문제와 관계되었을 때에, 주위의 나라들이 가지고 있는 이미지를 바꿀 찬스는, 앞으로 10 년도 남지 않았다고 생각합니다. 그사이 무엇을 어떻게 할 것인지에 달려 있습니다. 각각 완수해야 할 역할이 있다고 생각합니다. 단지, 직접적인 책임은 가지고 있지 않은 젊은이들과 함께 그것을 제대로 이해 하는 것에 의해서, 이 문제에 대해 한국인, 혹은 중국인과 이야기할 때, 역시 진지한 자세를 자연스럽게 가질 수 있게 되지 않을까 생각합니다.」

◇ 장래에 대해 ◇

대학졸업 후, 대학원에 진학해, 현재는 대학에서 조수를 맡아 강사로서 대학에서 가르치면서, 박사 논문의 완성을 목표로 하고 있다. 장래에는, 일본에서 연구자로서 일을 하고 싶다.「일본에 계신 주위의 여러 분들의 도움으로 여기까지 왔기 때문에, 조금 이런 말투는 좋지 않을지도 모르지만, 어떠한 식으로라도 나도 무엇인가를 사회에 공헌을 하고 싶네요…자신이 할 수 있는 것이라고는, 무엇인가를 쓰고 연구를 하거나 혹은 학생들을 가르치거나 하는 것 정도여서, 자신의 실력을 어디까지 발휘할 수 있거나 하는 문제는 접어두더라도…당분간은 일본에 남아서 해 나가고 싶다는 마음이 솔직한 심정입니다.」라고 포부를 말해 주었다.

＜ インタビュー / 인터뷰　21 ＞

R さん（20 代・女性）　「スペインにも留学したい」

2010 年 7 月 13 日、釜山出身、大学生、日本滞在歴 4 年
インタビュー担当：河合優子

◇　日本に来日するきっかけ　◇

R さんは、釜山出身で、2006 年 9 月に来日した。韓国で高校卒業後、大学に入学し、新聞放送学科で 1 年半ほど勉強した。日本語は高校、そして大学でも学んだ。R さんの通っていた高校では、英語のほかにもう一つ第二外国語の授業をとらなくてはならなかったが、日本語の授業しかなく、高校 2 年生までは日本語の授業は必修だった。大学に進学してからも、第二外国語に日本語を選択した。2 年生の夏休みに、休学して海外でボランティアをしようと思っていたところ、日本人男性と結婚して神奈川県に住んでいた従姉に、日本で日本語を勉強してみないか、と誘われた。最初は 3 ヶ月の観光ビザで日本にやってきた。

◇　日本語学校時代　◇

日本語学校で学習を始めて 1 ヶ月ぐらいたつと、とてもおもしろくなり、ビザを延長・変更して本格的に日本語の勉強に打ち込んだ。R さんの通っていた神奈川県の日本語学校はカザフスタン、セネガル、ロシアなど世界のさまざまな地域から学生が集まっており、その人たちとの交流がとても楽しかったという。1 年 6 ヶ月後に、関東圏にある大学のメディア系学科に進学した。

◇　大学に入ってから　◇

大学に入学したあと、最初は日本人の友人があまりできなかったという。大学でも留学生は日本語の授業を受けなくてはならなかったため、そこで知り合った中国人の留学生などと仲良くなった。そのうち、同じ授業やゼミで知り合った、日本人の友だちもできていった。

日本と韓国での友人関係の違いに関して、日本の友だちは恋愛の話が多く、政治や経済など、もっと幅広い話がしにくいと感じている。それから、友人間での親しさの表現のしかたに関しても、日本と韓国の違いがあるという。「例えば韓国人は、一応親しくなったら、すごいそれを表現をするっていうか・・・。日本人の友達だと、そういうのがなくて、あと、挨拶はするけど、何となく遠い感じがする」。日韓の歴史問題については、あまり話題にしないようにしているが、話してみたいという気持ちはある。しかし、外国語である日本語でそれについて話すことは簡単ではなく、「言葉を慎重に選ばなきゃいけないと思ってます」という。韓国語もわかるような人であればいい、と R さんは話す。

◇　新宿・新大久保　◇

新宿には 2006 年に来日して、2009 年の夏までに、合計しても 5 回ぐらいしか行ったことはなかった。R さんが始めて新大久保に行ったのは、2009 年の 8 月だ。「新宿と新大久保は別のもの」だという。「新宿は、新大久保とすごい近いんですけど、新宿のほうは日本人が多くて。。。新大久保は、本当に韓国みたい。初めて行ったときはびっくりしました」。それまで従姉の家で一緒に暮らしていたが、その家を出ることになり、2009 年の 8 月から 3 ヶ月間、専門学校に通っている韓国人の友人と、新大久保でルームシェアをして暮らした。

新大久保は、住みやすいが、逆に少し寂しく感じることもあったという。新大久保以外の場所で

は、一人で行動することには抵抗はないが、新大久保は、韓国人が多いため、常に誰かと一緒に行動するという韓国文化に従っていないと、孤独感を感じてしまう。「この辺（大学の近く）だと、1人でやっても 1 人じゃないですから、本当に。1 人でやってる人が私 1 人じゃないから、別にいいかなって感じなんですけど、そこでは 1 人でできないんで。この辺ではコーヒーショップとか結構1 人で行くんですけど、新大久保に住んだときは、ちょっと遠めの新宿まで……」。ルームシェアをした友人と、とても仲良くなったこともあって、それ以降は、月に 1、2 回は新大久保に行くようになった。新大久保では、ラーメンやコチュジャンなどの韓国の食材を購入するのだそうだ。

◇　アルバイト　◇

アルバイトは中華料理屋や居酒屋でも経験した。現在、住んでいる関東圏の中都市で、アルバイトを探すのは難しい。「ネットとか情報誌とか見て電話して、最初に言って、『私は外国人なんですけど大丈夫ですか？』って聞いたら、速攻で断るところもあるし……」。「あまり外国人がそんなに多くないから、このあたりは。あまり雇ってくれるところがそんなに多くはない」という。

中華料理屋では、あまり普段の生活では話す機会がないパートで働きに来る女性や年配の常連客との会話が楽しかった。同年代の大学の友人が使わない日本語が出てきたり、そのような年代の人の日本語の聞き取りは難しく、もう一度言ってもらったりすることも多かったが、逆にそれがおもしろかった。居酒屋では、言葉だけでなく、従業員のコミュニケーションのしかたの違いも学んだという。例えば、韓国の飲食店では、客に呼ばれたとき、手がはなせないときには、呼ばれていることを認識しておくだけで、その客に対して「少々お待ちください」などと返事をすることは、あまりないそうだ。しかし、同じような場面で、R さんは客の一人から「なぜ返事をしないのか」と怒鳴られてしまった。

今は韓国語の個人レッスンをしている。大学 1 年生だった 2008 年、日本語学校の先生の紹介で、もう一人の韓国人留学生と一緒に、高校で 1 学期間、韓国語を教えた。対象は、修学旅行で韓国にいく高校生である。それがきっかけで韓国語を教えることの楽しさを知ったという。大学で日本語教育の授業を履修しながら、それを韓国語のレッスンにも役立てている。

◇　将来について　◇

大学を卒業後は、企業で広報関係の仕事をしてみたいという希望を持っている。できれば日本で就職したいと思っているが、どうなるかはわからない。そして、3 年ぐらい働いたら、大学 1 年から学んでいるスペイン語の勉強をするためにスペインに留学してみたいそうだ。R さんのお母さんが好きだという韓国の女性旅行作家の本に触発されたという。

< インタビュー / 인터뷰 22 >

LS さん（20 代・女性）「정겨운 나라 일본, 많이 보고, 많은 것을 경험하고 싶은 나라」

2010 년 7 월 17 일,서울 출신,일본어 어학교 재학,체재 4 개월째
인터뷰어 : 이호현（인터뷰는 한국어로 이루어졌다.）

◇ 약력 및 일본에 오게 되는 계기 ◇

서울에서 태어나 중학교 시절 읽은 「인어공주를 위하여」 라는 만화를 계기로, 만화를 그리기 시작한 소녀. 그때 당시만 해도 만화관련 학원 등이 활성화되지 않았기에 같은 취미의 친구들이랑 정보교류를 하고,모임에 참가해서 만화를 배우기 시작한다. 그러다 점점 인터넷이 활성화 되기 시작하고, 만화행사인 「코믹」 「마카」등이 서울에서 열릴 때 참가해서 더 많은 사람들과 활발한 정보교류를 하게 된다. 그러나 만화 가에의 꿈을 키우며 교류모임이나 대회에 참여 하는 것에 부모님의 반대도 심해서, 많이 싸웠다고 한다. 그런 부모님의 허락을 받을 수 있 는 뭔가가 필요했고, 물론 입상하면 대학특전의 영광도 있었기에, 권위 있는 만화대회인 「카툰대회」에 참가할 결심을 하게 된다. 그때 대상 을 받게 되고, 쉽게 대학도 가고 부모님의 반대도 극복할수 있게 된다.

대학에서 2 년간의 전문 공부가 끝나고, 졸업과 동시에 이현세 만화 가의 문하생으로 입문하지만, 지금껏 해온 이론과 만화세계의 실전과의 갭으로 인해 자신의 길이 아님을 깨닫고, 6 개월간의 문하생 생활을 끝 내고 방황하던 중, 친구를 통해 캐리커쳐 라는 세계를 알게 된다. 그림실력을 녹슬지 않게 하기 위함과, 돈을 벌어야 했기에 프리랜서로 일하던 중, 일러스트를 하는 분들과의 만남을 통해 광고,작품,게임, 동화, 교과서 등 그 활용의 광범위함에 매력을 느껴 일러스트 쪽으로 눈을 돌리게 된다. 일러스트로 2 년간 생활하다, 일본유학을 마치고 돌아온 친구에게서, 일본은 한 캐릭터를 만들면 많은 분야에서 각각 상품을 만들어 잘 활용한다는 세분화된 시스템에 대한 얘기를 듣고, 한국의 캐릭터 생명이 2-3 년으로 짧은 것과 비교해 볼 때, 꼭 한번 직접 경험해 보고 싶다고 결심하게 된다. 물론 20 살 때 세이카(精華) 대학에 가고 싶어 오오사카에 여행 왔던 경험이 있었지만, 친구가 수속 했던 유학원에 가서 일본유학의 수속을 거쳐, 신쥬쿠의 어학원에 오게 된다. 일본에 오는 것 또한 외국에 나간다는 것 자체로 부모님이 반대 하셨는데, 마침 일러스트로 작업했던 영어동화책이 출판되어, 그 책을 보여 드리면서, 「내 가능성을 더 열고 싶다. 더 공부하고 싶다 」고 설득하여, 말씀이 많지 않은 부모님으로부터 「잘하구, 몸 건강히 있구」라는 말씀을 듣고, 유학 길에 오른다.

◇ 일본에서의 생활 ◇

본인은 어학교의 다른 친구들에 비해 운이 좋은 편이라고 한다. 이유인즉, 일본어를 잘하는 한국인 룸메이트가 있어서 불편함이 거의 없다는 것이다. 일본어를 잘 못하는 다른 어학교 친구들은 전철 타는 것 하나부터 쿠약쇼에 가는 것 등 멀리 여행가는 것도 꺼려한다고 한다. 그리고 교회에 다니기에 마음의 의지할 곳 또한 있어, 전체적으로 안정된 생활을 하는 것 같다.

행동반경은 주로 집에서 학교, 교회로 이루어 지는데, 학교가 신쥬쿠에 있기도 하지만, 친구들과의 모임 등은 대부분 신쥬쿠, 신오오쿠보에서 이루어 진다고 한다. 신쥬쿠의 어학원에 다니는 초기 유학생들의 생활반경이 대부분 이러한데, 신쥬쿠를 중심으로 모여 있지만, 모처럼 일본에 왔으니까, 이곳을 벗어나서 좀더 일본인이 많고, 일본적인 분위기의 곳에서 일본의

문화를 한껏 체험하고 싶은 것이 유학생들의 또 다른 바람이라는 점이 아이러니다. 언어가 안되기 때문에 더 많은 일본인과 사귀고 대화도 하고 싶지만, 좀처럼 그런 기회가 주어지지 않는 점을 안타까워 하고 있다. 좀더 많은 정보 교류가 이루어 질수 있는 만남의 장이나, 전문분야별로 조언과 교류를 할수 있는 곳이 있으면 좋겠다는 바램을 듣고, 초기 유학생들에게 있어 필요한 점과 현실을 느낄수 있었다.

◇ 일본에 대한 이미지 ◇

현재 숙소가 있는 곳이 오오츠카의 주택지로, 일본이란 곳이 의외로 참 정겹다는 표현을 쓰고 있다. 동네의 오래된 주택양식이며, 애완견을 데리고 산책 나와서 소담을 나누는 동네 할머니 할아버지의 모습, 강아지,고양이가 많으며 한적한 풍경은, 고향인 서울에서는 이제 보기 힘든 풍경이기에 잃어버린 과거의 정겨움을 느끼는 듯 하다. 특이한 문화로는 신사를 비롯해, 동네 어디를 가도 곧 잘 눈에 띄는 빨간 마후라를 한 조그마한 불상(お地蔵さん)이 있는 미신적인 공간은 문화 충격 이었다고 한다.

또한, 반찬가게가 참 많다는 것이 신기했는데, 일본주부들은 만드는 것 보다 주로 사서 먹는구나 라고 느끼며,한국의 어머니를 떠 올렸으리라 본다.

아직은 일본인과 많이 교류해 보지 못했지만, 어학교의 일본어 선생님은 참 야사시이(やさしい) 하다고 표현한다. 패션이나 주위의 경관도 유심히 본다는 발언으로부터 일러스트로서의 기질이 엿보였다.

◇ 장래의 계획 ◇

일년 뒤 어학원이 끝나면, 한국에서의 경력을 살려서 회사에 취직하고 싶다고 한다. 그래서 한국에서의 뽀로로 처럼 재미있고 유익한, 아이들을 위한 교육용 캐릭터를 만들고 싶다고 한다. 하나의 캐릭터가 탄생하면 다양한 분야에서 여러가지 방법으로 캐릭터를 활용화 한다는 일본의 시스템을 직접 체험해 나가고 싶다는 꿈이 이루어 지길 바라는 마음이다. 한국적인 정서를 갖춘 LS 씨가 일본에서 느끼는 정겨움을 잘 표현해 낸다면 멋진 캐릭터가 탄생하리라 믿어 의심치 않는다.

＜ インタビュー / 인터뷰　22 ＞

LS さん（20 代・女性）「懐かしい町並みを残している国、にっぽん、たくさんの事を見て、いっぱい体験してみたい国」

2010 年 7 月 17 日、ソウル出身、日本語学校在学、滞在 4 ヶ月目
インタビュアー：李 坪鉉（インタビューは韓国語で行われた）

◇　経歴および来日のきっかけ　◇

ソウル生まれ。LS さんは中学時代に読んだ漫画「人魚姫のために」がきっかけで漫画家を目指すことになった。その当時は漫画と関連した塾などが多くなかったので同じ趣味を持った友たちから情報を得たり、交流会などに参加したりして漫画を学び始める。そして、インターネットが急速に普及したこと、漫画の大きなイベントである「コミック」「マカ」などがソウルで開催されたことでより多くの人々と情報の交流ができるようになる。ところが、漫画家という夢を抱いて交流会や大会に参加することにご両親の反対があって喧嘩もたくさんしたという。そのようなご両親を説得するために何かが必要だったので、LS さんは入賞すると大学に特別進学できる「カートゥーン大会 Cartoon」に参加することを決心する。その結果、グランプリに選ばれ、大学に進学することになってご両親からの反対を乗り切ることができたという。

LS さんは大学で 2 年間漫画に関する専門的な勉強を終えて、卒業後、漫画家であるイ・ヒョンセの門下生となる。しかし、漫画世界における現実と自分が今までやってきた理論とのギャップを感じ、6 ヶ月で弟子生活をやめてしまう。その後、友達を通じてカリカチュア caricature の世界について知るようになる。絵を描く腕を保つためとお金を稼ぐためにフリーで働いている中、イラストの仕事に携わっている人たちとの出会いを通じて広告、作品、ゲーム、童話、教科書など、イラストの幅広い活用に魅力を感じてイラストレーターに目を向ける。イラストレーターとして 2 年間働いていた時に、日本での留学を終えてきた友達から日本のキャラクターの事情について聞かされる。日本では一つのキャラクターを作ると様々な分野で商品化され、活用するという細分化されたシステムが整っている。しかし、日本のキャラクター事情と韓国のキャラクター事情を比べてみると、韓国ではキャラクターの寿命が 2-3 年で短いので日本でぜひ一度は経験してみたいと決心する。もちろん、20 歳の時に精華大学に留学するため、大阪へ旅行に行ったことがあった。しかし、今回は友達が紹介してくれた留学院で日本留学の手続きをして新宿の日本語学校に来ることになった。日本ということより海外に出ること自体にご両親の反対はあったが、ちょうど自分がイラストレーターとして作業した英語の童話本が出版されたので、ご両親にはそれを見せながら「自分の可能性を確かめたい。もっと勉強したい」と説得したそうだ。普段、無口であるご両親から「元気でがんばりなさい」と言われ、留学することになる。

◇　日本での暮らし　◇

本人は日本語学校の他の学生より運がいいという。日本語が上手なルームメイトのおかげで生活の不便なところはほとんどないからだ。日本語の上手くない日本語学校の学生たちは、電車に乗ったり、区役所に行ったりすることなど、遠くに旅行することも大変だという。そして、教会に通うことで心のよりところができ、全体的に安定した生活を送っているようだ。

生活は主に家、学校、教会という範囲で行われるが、日本語学校が新宿にあることもあって、友達との集まりなどは主に新宿・新大久保であるという。新宿の日本語学校に通い始めた留学生の大半がそうであるように、生活半径は新宿を中心に回っているが、せっかく日本に来たからにはもっ

と日本人が多く、日本的な雰囲気が感じられる所で日本の文化を体験したいというのが留学生の望みでもあり、それがアイロニーなところでもある。言葉が通じないがためにもっと日本人と話したいが、なかなか機会がないことを LS さんは残念に思っていた。留学生活を始めた学生にとってたくさんの出会いがある情報交流の場や専門分野に関する情報やアドバイスを聞ける場がほしいということを聞いて、彼らの現実や必要としている部分を垣間見ることができた。

◇　日本に対するイメージ　◇

宿舎は現在、大塚の住宅地にあるが、日本は意外と昔懐かしい風景を保っている国だという。古い町並みや住宅様式、ペットを連れて散歩しながら会話を交えるおばあさんとおじいさんの姿、猫や犬がたくさんいる町の風景、静かな街並みなどは故郷であるソウルではめったに見ることのできない風景である。そのため、忘れ去られた過去の名残りを感じることができるそうだ。日本特有の文化としての神社を始め、町の至るところにある赤いマフラーをした仏像(お地蔵さん)のある迷信的な空間は彼女にとってはカルチャーショックだったようだ。

また、商店街におかずを売る店が多いことも面白かったという。日本の主婦は自分で作るよりお店で買って食べるんだなぁと感じながら、おそらく韓国のお母さんを思い出した瞬間だと思う。LS さんは、まだ日本人との交流は少ないが、日本人の先生のことをとても「優しい」と表現する。そして、ファッションや周りの景観などを興味深く見るという発言からイラストレーターとしてのプロ意識が感じられた。

◇　将来の計画　◇

日本語学校は後 1 年ほど残っているが、それが終わったら韓国での経験を生かして会社に就職したいという。それで韓国の「ポロロ」のような面白くて有益な子ども向けの教育キャラクターを創りたいと言っている。一つのキャラクターが誕生すると様々な分野で活用させるという日本のシステムを直接体験したいという夢が叶えることを願ってやまない。韓国の情緒をよく知っている LS さんが日本で感じた昔懐かしい、失われつつある情緒を上手く表現するとすばらしいキャラクターが誕生するに違いないだろう。

＜ インタビュー / 인터뷰　23 ＞

J･E 씨（20 代･女性）「理系界の女性研究者を志す / 이공계의 여성 연구자를 꿈꾸다.」

2010 년 7 월 18 일,서울 출신,대학교 4 학년,일본체재 5 년 4 개월
인터뷰어 : 오세연
인터뷰는 일본어와 한국어가 병용되면서 이루어졌다.
(インタビューは日本語と韓国語が併用されながら行われた)

◇　自己紹介(자기 소개)　◇

일본에 온지는 벌써 5 년 하고도 3,4 개월정도 지났구요. 지금은 대학교 4 학년에 재학중입니다. 지금은 대학원진학을 위해서 공부하고 있는 중입니다.

（はい、私の名前は金智恩（キム・ジウン）です。日本に来て 5 年と 3，4 カ月程経ちました。今は大学 4 年生で、大学院進学のために勉強しているところです。）

태어난 곳은 부산인데, 초등학교때 서울로 이사를 가서 서울에서 지금 거주중이구요, 서울에서 가족들이 거주중이구요. 엄마, 아빠, 저 이렇게 세가족입니다.

（生まれたのは釜山ですが、小学校の時ソウルに引っ越して、家族は今ソウルに住んでいます。母、父、私の三人家族です。）

지금은 신쥬쿠에 있는 동경 이과대학교 、이공계만 있는 학교에 재학중이거든요.

（今は、新宿区にある東京理科大学という理工系のみの学校に在学中です。）전공은 응용학이에요.

（専攻は応用学です。）우리 생활에 밀접한 관계가 있는 재료들을 만들거나 주로 그 재료를 만들어가는 쪽에 가까운 공부를 요즘 많이 하고 있어요.

（私たちの生活に密接な関係のある材料を作ったり、材料の生産方法についての勉強をしています）

◇　大学生活(대학 생활)　◇

처음 학교 입학했을때는 일본에 대한 별 차이 없이 그냥 하면 다 잘되겠지 이런생각이 커서 그냥 했는데. 생각보다 그게힘들더라구요.뭐 내용도 수업내용도 많이 어렵기도 하고 그러면서 차차 적응해 나가다 보니까 3 학년이 되고 4 학년이 된거 같습니다.

（初めて大学に入学した時、日本の大学について、あんまり大した違いはないだろうと思っていたのですが、思ったより大変で、授業の内容もとても難しくて。でも徐々に慣れてきて、あっという間に 3 年生になり、4 年生になったと思います。）

중간중간 서클을 할생각도 있어가지고 1 학년때도 좀 들어가보고 2 학년되어서도 또 다른 서클에 들어가봤는데. 그런 서클이 방학때도 활동을 굉장히 많이 하더라구요. 너무 열심히 하는 애들도 있고 한데, 저는 그냥 방학때 되면 한국가서 쉬고싶고 그런마음이 커서 아무래도 그런 열심히 하는 애들이랑은 좀 걔네들한테 메이와쿠가 아닐까 해서 서클을 거의 방학기준으로 해서 많이 그만뒀죠.

（サークル活動をしようと思い、1 年の時、入ったり、2 年の時もまた他のサークルに入ったりしましたが、殆どのサークルが夏休みや春休みに活動をしていまして非常に頑張っている子もいるんですが、私は休みさえあれば韓国に帰りたくなったりしたので、このような気持ちが頑張っている子たちに邪魔になったり、迷惑掛けると思って、夏休みを区切りにやめました。）

◇　大学の友達(학교 친구들)　◇

大学には韓国人の留学生があまりいないです。ほとんど日本人の友達が多いため、私は日本・韓国の友達を分けて考えていません。実際、日本と韓国と分けなくても、人間として向き合ってからそんな違いをまだそこまで感じられないです。どっちかというと男の友達との差が見えますけど

（笑）、女の友達はそこまで差が見えないです。例えば、私は実際、そこまで感じられなかったけど、なんか、周りから言われてやっぱりそうだなーと思っていたのが、兵役問題に関して。韓国の男の友達の方が、性格の強みが出るっていうかそういうのはちょっと見えました（笑）。

(대학에는 한국인 유학생이 별로 없어요.거의 일본인 친구이기때문에 저는 일본인과 한국인 친구로 나누지는 않아요.실제로 나누지 않아도 서로 사람으로서 대하기 때문에 그렇게 까지 틀린점이 없어요.아마도 남자 친구들이 여자 친구들 보다는 차이를 느껴요.예를들어서 크게는 느끼지 않았지만 주변사람들이 그렇게 말하니깐 역시 그렇구나.라고 생각했지만요,병역문제에 관해서. 한국의 남자 친구들이 성격상 강하다고 해야 할까요?(웃음))

◇　新宿区との関わり(신쥬쿠와의 관계)　◇

学校が飯田橋にあるため、新宿区内での生活が多いです。新宿区のイメージは、本当に東京の真ん中っていう感じです。凄い活性化されている反面、神楽坂みたいにすごい住宅街とか落ち着いているような場所もあって、色んなものが混ざっている感じ。外国人もいっぱいいるし、最初住むにはけっこういいかなというイメージもあります。

(학교가 이이다바시에 있어서 신쥬쿠내의 생활이 많아요.신쥬쿠의 이미지는 정말로 동경의 중심인 느낌이 들어요.매우 활성화 되어져 있는 반면,카구라자카 같은 주택가로 조용한 곳도 있어서 여러모로 섞인 느낌.외국인도 많고, 처음 살기로는 매우 좋은 곳이라는 이미지도 있어요.)

◇　将来の夢(장래의 꿈)　◇

なぜ、大学院に進学しようと思ったのかは、最初、それを決めるまで、本当大変でした。正直、理系だから当たり前のように皆、進学するってイメージがあったので、自分も何となく進学しなきゃいけないのかなというイメージがあったけど、実際勉強を始めたら、責任感なく、ただみんなが行くから行くという感じでは行きたくなかったです。もし自分が本当に研究したい分野とかが見つかったら、行くけど、それじゃなかったら、就活するって気持ちで、去年から就活もちょっと同時にやったのですが、その内、自分がしたい勉強が明確に見えてきたし、だったら、私も進学して、もうちょっと自分のスキルや研究力も磨きたいと思い、大学院への進学を決めました。将来の夢は具体的にはなってないけど、研究職に就き、色んな技術を学んで、学校だけじゃなくて、企業などでも学べることがいっぱいあると思います。そういう力をつけてそれから本当に実務に近いような仕事をしてみたいです。どっちかというと、そういう色んなところのかけ橋のような、そういう仕事のできる職を探したいです。

(왜 대학원에 진학할려고 생각했는지..먼저 이걸 결정 하기까지 정말 힘들었어요.솔직히 이공계라서 당연한 것 처럼 모두 대학원 진학하는 이미지가 있어서 저도 진학해야겠구나 라고 생각했지만 실제로 공부를 시작한 후 책임감 없이 그냥 모두 가니깐 간다는 느낌으로 가고싶지는 않았어요. 만약 제가 정말 연구하고 싶은 분야가 있다면 가지만,그렇지 않으면 취직활동 한다는 마음으로 작년부터 취직활동도 동시에 했지만,그 사이에 제가 하고싶은 공부가 명확히 보였고,그러면 저도 대학원에 진학해서 저의 스킬과 연구력도 기르고 싶다고 생각해서 진학을 결정했어요.장래의 꿈은 구체적이지는 않지만,연구직에서 여러 기술을 배우고,학교 뿐만 아니라 기업등에서도 배울점이 많이 있다고 생각해요.그런 기술을 배워서 정말로 실무에 가까운 일도 하고 싶어요. 여러면에 있어서 가교처럼,연결의 다리 같은 일을 하고싶어요.)

＜ インタビュー / 인터뷰　24 ＞

H さん（20 代・女性）「日本と韓国の関係をもう一歩進めたい」

2010 年 7 月 23 日、ソウル出身、日本語学校生、日本在住 1 年
インタビュアー：藤田ラウンド幸世

◇　略歴と家族　◇

H さんは 1989 年生まれ、ソウル出身。中学・高校と一生懸命受験勉強をした。特技として、音楽、特に声楽に長けていた。大学は、声楽科のある念願の大学に合格。しかし、一学期の後に、自分のやりたかった方向性と合わず、悩む。大学一年のときに、ヨーロッパの音楽院に移るために入学試験を受けに行くが、受からず、その後、日本への留学を目指すことになる。決心をすると、行動に移す性格なので、ヨーロッパから帰国後、留学院に出向き日本の留学を具体的に考え始める。翌年、大学一年を終わらずに、退学をし、すぐに日本留学のための資金のため、就職。半年後、日本に留学を果たす。

現在は、日本語学校に在学しながら、希望をする大学への入学試験を目指している。

◇　中学で日本語能力試験 3 級に合格　◇

H さんは、中学二年生の担任教師が「日本語」の先生だった。日本語が上手なだけではなく、イケメンの先生だったため、がんばろうという気持ちになって、第二外国語としての日本語を勉強し、結果として、中学の間に日本語能力試験三級に合格をした。日本のポップカルチャーに触れたのは、中学三年の時で、初めてみたマンガは『ナルト』だった。

中学の時の成績がよかったため、学校の先生が推薦をしてくれて、伝統のある有名女子高校に入学できた。この高校では、第二外国語として日本語か中国語を選ばなければならなかったが、H さんは日本語をいつのまにか選んでいた。

◇　高校の時に日本にホームステイ　◇

高校一年生から二年生に上がる時に、学年から 10 人が選ばれて、埼玉県の高校にホームステイと留学を経験する。ホームステイでは、「自分のプライドが傷ついたというか」、全然、話が通じることがなく、うまくしゃべれないのでショックを受けた。ホームステイ家族とは、ことばが通じなかったのであまり仲が良かったとは言えない。しかし、このホームステイ留学がきっかけとなり、帰国後にはこのままじゃダメになると一念発起し、日本のドラマやアニメを全部ダウンロードして、いつでも流すようにした。内容が全然わからなくても、字幕を見ながら内容を推測し、3 回くらい繰り返し見ていた。その成果が表れたのが、ホームステイをした一年後に今度は日本から学生が来て、H さんの家にも受け入れることになった時だった。自分も知らないうちに、ホームステイに来た女子学生と日本語でしゃべっていた。このときの女子学生とは、今でも連絡を取り合う友達となっている。

高校時代には、アニメーションの『ブリーチ』や『銀魂』が好きになり、小説は吉本ばななや推理小説の東野圭吾が大好きになる。音楽は、小学 6 年生の頃から、嵐が好きになり、日本語がわかるようになってからもっと好きになった。

◇　韓国で念願の大学に合格　◇

韓国社会では、H さんが高校に進学する頃に、政権が変わり、教育政策も変化したため、高校一年生の成績が一番大事ということになった。そうした余波が H さんの生活にも波及してくる。具体的には、高校が 4 時に終わると、5 時までに塾に行き、5 時から 8 時は勉強をして、8 時から 8 時 40 分くらいまでは塾の近くのファーストフードのお店でおにぎりを食べて、その後、また 12 時まで自習をする、といった勉強漬けの毎日を送ることになった。塾は 12 時に終わった後に、車で家の前まで送ってくれる。

帰宅すると、お風呂に入り、それから英語と韓国語（国語）を復習した。塾の先生から「何してる？」と電話がかかってくるので、寝る前に当日やったことをまとめなくてはならなかった。この塾は、入るときにテストを受け、テストの成績でクラスを分けていた。そのくらい、どこにいっても成績が重視され、偏差値の高い大学を目指すように励まされていた。中学も高校も成績がよく、声楽が得意で、母親とともに、いい大学にいくために必死になっていたが、今振り返ってみると、当時はいい大学を目指すことに対して疑問を持っていなかったという。

大学は念願どおりの大学に合格し、声楽科に入学をする。

◇　自分で選択をした日本留学　◇

H さんは、大学に入ってから、自分のやりたかった方向と大学の勉強が一致せずに違和感をもったため、夏休みにヨーロッパの声楽科のある学校に留学を前提として入学試験を受けに行く。イタリアの音楽院の試験を受け、実技で歌を歌ったが、受かることはなかった。そのときはスーツケースを持ってそのままヨーロッパ旅行をする。

「ヨーロッパの旅行が終わって、その時、いろいろ考えて結論を出して、それで、留学院（韓国にある留学を斡旋・仲介所）に行ったんですね。」この時には、せっかく入った念願の大学に戻ることは考えず、日本への留学に方向性が固まったようだった。一度、決心すると、H さんの行動は早かった。4 ヶ月後、大学の一学年が終わる翌年の 1 月に退学し、それからは日本の留学資金を貯金するため、化粧品販売員として就職をする。

H さんは親の方針で高校の時から、必要最低限のお金以外はもらわなかったので、週末にアルバイトをしていた。H さんは、「ホテルでサービングしたり、結婚式の手伝いでした。でも、専攻が音楽だったから、ピアノも弾けるし、歌も歌えるから、週末はそのアルバイトをして結構もらったんです」。このアルバイトで得たお金をもとに、友人と二人で株をして、お金を儲ける経験もした。リーマン・ショックが始まる直前に止め、そのときに株はすべて売却をした。その他にも、10 年くらい弾いたピアノを売ったりして、日本留学に向けて、次々に自分で資金を工面していった。

◇　日本の生活　◇

H さんは、来日して、新宿区の日本語学校に入学をする。前はパン屋さん、そして今は、自分が常連客だったコンビニでアルバイトをしている。来日直後は寮に住んでいたが、今は、先輩から引き継いだアパートに住んでいる。韓国人のネットワークがインターネット上に多く構築されているが、H さんにとっては、「その中ですごく良い情報もありますが、自分にとっていらない情報がほとんど」で、そうした情報は使わないという。

日本は韓国よりも先進国なので、今回、行政の業務処理が遅いので驚いた。外国人登録証の手続きのために区役所に行ったら、登録証をもらうまでに 2 週間くらいかかった。韓国は行政の業務がすごく速いから、日本の行政は正直にいって、一体、何してるの？って思うくらいだった。

日本に来て予想以上に良かったことは、電車のシステム。人身事故が起こったりしたら、すぐに流れて、「どこどこの駅で人身事故が起きております、申し訳ございません」というのには、すごいなと思った。

逆に日本に来てから韓国のことを考えたときに、韓国はやっぱり IT に強いと思う。悪いところは、「言論？新聞とか、インターネットで流している新聞社とかの記事が汚いなって思ったんです」。例えば、「ワールドカップの時、韓国が勝った時に日本でなんかこんなに悪いコメントがいっぱいありましたって、それを記事にするんですよ。そんなコメントをブログに書く人は、日本人全体がそう思っていますっていう風に記事を書くから、それは汚いなって思ったんです。」

◇　近い将来の夢　◇

今年の秋には、現在目指している日本の大学の国際関係学科の入学試験を受ける予定。そこでは、国際関係について学び、特に韓国と日本の関係をもう一歩進めるための外交問題に取り組み、外交問題を少しでも解決することを学びたい。その学科には、大学を 3 年で卒業し、大学院博士前期を 2 年で、つまり 5 年でマスターまでの資格を取れる制度がある。当面のところ、日本には 5 年住み、その後、英語圏のイギリスとか、アメリカに行って、33 歳前後に博士号を取りたい。その後で、韓国に帰国し、外交官の試験をうけるつもりでいる。

< インタビュー / 인터뷰 25 >

PH さん（40 代・女性）「언제든 돌아갈 타국 땅에서 내 자녀들이 자라는 나라가 된 일본」

2010 년 8 월 7 일,서울 출신, 자영업,체재 9 년째
인터뷰어:이호현(인터뷰는 한국어로 이루어졌다.)

◇ 일본에 오는 계기와 첫 일본생활 ◇

일본에 온지 9 년째를 맞는 40 대의 여성분. 신오오쿠보에서 통신 관련사무실을 운영하며, 남편의 무역업도 겸업하고 있다. 초등학교에 다니는 두 아들과 함께 4 인 가족이 신오오쿠보에 살고 있다.

한국에서는 서울에서 같은 통신계열의 사업을 하고 있었고, 결혼 후에 남편이 하던 직업상 일본어가 종종 필요했기에, 좀더 일본어를 배우고자 하는 열심으로 일년간의 계획으로 유학길에 오른다. 그러나 일년 뒤 부인이 두 아이를 데리고 남편이 있는 곳으로 옴으로써 일본에서의 첫 생활이 시작된다.

처음에는, 일본어를 못한다 라는 언어문제 이전에, 타국에서 두남자아이를 양육하는 것만으로도 너무 버겁고, 집이 좁고, 이동의 불편함과 생활고 등으로 마냥 일본이 싫기만 한 매일매일 이였다고 한다.

근처에 아이들이 놀 만한 곳도 없고, 친구들도 없고, 개구쟁이 두 아이들을 마음껏 놀릴 수 있는 방법을 모색한 결과, 일하는 엄마들을 위한 보육원 제도를 알게 된다. 그래서 아이들을 놀리겠다는 일념으로 남편 몰래 일을 찾기 시작한다. 그러나 일어를 한마디도 못하는 자신이 일할만한 곳은 어디에도 없었다.

그러던 중, 일본에 온지 6 개월만에 신쥬쿠에 있는 한국계 회사에 지원해서, 한국에서의 경력을 사서, 일단 아르바이트로 일을 시작한다.

아침 6 시에부터 준비해서 두 아이를 각각 다른 보육원에 보내고, 버스 타고 전철 타고, 약 두 시간에 걸쳐서 신쥬쿠에 나오게 된다. 일이 끝나는 6 시면 총알같이 달려서 아이들을 데리러 가야했기에, 신쥬쿠역까지 매일같이 카부키도오리를 달려야만 하는 일과 였지만, 일이 너무 재미있고, 일하는 동안에는 모든 것을 잊을 수 있었기에 너무 좋았다고 한다. 아마도 일이 양육스트레스에서 해방되는 돌파구 역할을 해준 듯 하다.

기억에 남는 양육중의 에피소드로는, 연년생의 두 아이들은, 쌍둥이 유모차를 태워 다녔고, 어느 날 우유랑 기저귀, 쌀 등을 사서, 유모차에 걸고, 버스를 갈아타고 집에 오는 중에, 유달리 체격이 큰 두 아이가 조금만 움직이면 유모차 채로 뒤집어 져서, 길바닥에 애들은 물론 쌀이랑 전부 쏟아 부어서, 서럽기까지 했던 일이 종종 있었다. 일본은 선진국인줄 알고 왔는데, 가까이 슈퍼도 하나 없고, 버스로 이동해야 하는 불편함과, 동네 슈퍼는 택배서비스도 없고, 너무너무 살기 불편한 나라 일본이어서, 정말 힘들었다고 한다.

또 하나, 처음 자전거에 애를 태우고 다니는 엄마들을 보면서 무슨 곡예를 하는 것 같아 신기한 눈으로 봤는데, 어느 날 보니, 자신이 자전거 앞뒤로 두 아이를 태우고, 짐들을 걸고, 심지어 우산까지 받치고 달리고 있는 모습이 되었더라고 씁쓸한 웃음을 지으며 옛날 얘기를 하듯 들려주었다.

◇ 신오오쿠보에서 사무실을 열기까지 ◇

한국에서 사업을 하던 같은 계열의 일이었지만, 일본어가 안된다는 핸디로, 아르바이트로 시작한 일이었지만, 한국에서의 경험을 살려 열심히 일한 덕분에 좋은 성과를 보였고, 인정받아서, 일본회사의 대리점을 경영하기까지 된다. 그러던 중, 한국계 회사에서 근무하던 남편과 함께 자신들의 사업을 시작해 보자는 계획을 세워, 남편의 무역업과 부인의 통신업을 겸업한 사무실을 오픈 하게 된다. 물론 대부분의 고객이 있는 신오오쿠보에 자리잡은 것은 당연한 일일지도.

때마침, 시기적으로 아이들이 초등학교를 들어갈 시기였고, 고학년이 되면 한국학교에 보내고

싶었던 부분들과도 일치하는 부분 이였다.
처음 신쥬쿠에 일하러 왔던 때는, 외국인이라고는 찾아볼 수 없었던 신유리가오카에 비해, 한국인들이 많고, 점심시간이면 한국음식을 먹으면서 한국말로 얘기하는 것 만으로도 신쥬쿠는 너무너무 좋은 곳이였다고 한다. 그런데 실상 삶의 주거지로서 살기 시작한 신쥬쿠는 생각했던 것 과는 많이 다르게, 지금껏 보지 못했던, 밤의 문화도 눈에 보이고, 특히 아이들에게는 보이고 싶지 않은 부분이다. 그리고 일 관계로 엮인 고객들과의 인간관계가 일에서만 끝나지 않고, 더 세세한 부분까지 엮이고, 보이게 되면서, 복잡한 인간관계를 경험하고, 터득해 나가야 하는, 진정한 삶의 전쟁이 시작되었다고 한다.
이러한 복잡 다양한 스트레스는 지금껏 좋기만 했던 신쥬쿠가 그렇게 매력적이게만 보이지는 않게 되는 계기가 된다.

◇ 언어문제 ◇
일본어를 전혀 하지 못하는 상황에서 두 아이를 데리고 일본에 왔지만, 어린 아이들의 양육에 바쁜 매일매일로 일본어를 배워야지 라는 생각은 엄두도 낼 수 없었다. 그러던 중, 아르바이트를 시작하면서, 일을 통해 실전으로 일어를 배우게 되고, 10 개월 정도 지났을 즈음엔 일에 관련된 회화는 일어로 할 수 있는 레벨이 된다. 지금 현재도, 일하는데 있어서는 일본어와 한국어를 반반씩 사용하는 일상인데, 고객의 대부분인 한국인들과의 접객은 한국말로, 그러나, 그 일의 사무적인 마무리는 일본인과 일본어로 하는 패턴이다.
아이들의 학교 면담이나, 보호자 모임 등에 참가해서도 그렇게 불편함 없이 일본어를 구사할 수 있는 것으로 보아, 상당히 언어적 감각이 좋은 것 같다.

◇ 자녀 교육 ◇
직장 동료로부터 전도되어 신유리카오카에서 신쥬쿠까지 매주 일요일을 전부 할애해서 예배에 나올 만큼 열심이였던 것은 단지 신앙심 때문만이 아니라, 두 아이에게 한국인이라는 정체감을 느끼게 하고, 한국어를 잘 사용하길 바라는 교육적인 측면이 많았다는 PH 씨의 한국어에 대한 열정은 특별났다. 하지만, 일을 시작하면서, 아이들의 교육에 관해서는, 일이 우선시 되어, 조금은 선생님들께 일임한 부분이 많았다고 한다. 물론 두 아이들이 숙제랑 준비물 등 잘 챙기고 적응도 잘 해 주었기에 가능한 부분 이였지만. 개성이 강한 첫째 아이가 고학년이 되면서 일본의 교육에 잘 적응하지 못하면서, 한국학교로의 전학을 생각하게 된다. 원래부터 한국어공부에 열성이였던 점과, 남자아이로써 자신들의 뿌리가 어딘지 확실히 아이덴티티를 심어주고자 했던 부분도 작용했다고 보인다.
일본공교육학교에서 한국학교로 보내게 되었지만, 두 아이가 일본인이 가지는 장점인 성실함과 계획성, 그리고 기초에 충실한 점 들을 잘 배우고, 한국인이 가지는 장점인 자유분방함과 독창성을 잘 살려서, 셋카쿠(せっかく: 모처럼) 일본에서 생활하므로, 두 나라의 장점들을 조화롭게 잘 배워서 삶을 개척해 나가길 바란다는 바램을 덧붙였다.

◇ 장래계획 ◇
한국에서 흔히들 어느 회사에 10 년을 있으면 그 일에 프로가 되고, 20 년을 있으면 자연스레 정상에 오른다는 말이 있듯이, PH 씨도 그 분야에서는 거의 20 년 가까이 해왔으므로, 어느 정도 자리를 잡았고, 잘 할 수 있다는 자신감도 있으므로, 앞으로는 잘 계획을 세워서 다운되지 않게,너무 목표에만 치중하지 않게, 일본의 좋은 장점들을 배워서 금전적인 면도 잘 관리를 해서 운영해 나가고 싶다고 한다.
그리고, 처음 일본생활이 양육과 겹쳐서 너무 힘들었기에, 잘 보지 못했던 일본의 좋은 점들에 눈을 돌리고, 이젠 좀 일본을 즐기고 싶다고 말한다. 언제든 아쉽지 않게 떠날 수 있도록 100 엔 숍 물건이 대부분 이였던 자신의 삶에서, 이젠 일본을 타국이 아닌, 자신의 아이들이 길러지는 나라로서 좀더 애착을 갖고, 조화롭게 생활해 나가고 싶다고 한다. 무엇보다, 아이들이 일본인이 가지는 장점과 한국인이 가지는 장점들을 잘 배우고 갖춘 아이들로서 성장해 나가길 바란다고 덧붙였다.

＜ インタビュー / 인터뷰　25 ＞

ＰＨさん（40 代・女性）「いつでも帰るという他国から、わが子が育つ国になった日本、これからは賢く日本を満喫し、子どもたちも両国の良さを学んでほしい。」
2010 年 8 月 7 日、ソウル出身、自営業、滞日 9 年目
インタビュアー：李 坪鉉（インタビューは韓国語で行われた）

◇　来日のきっかけと初日本生活　◇

日本に来てから 9 年目になる 40 代の女性。新大久保で通信関連の事務所を営んでおり、ご主人の貿易仕事の事務所としても活用している。小学生の 2 人の息子さんと夫婦の 4 人で新大久保に住んでいる。

韓国ではソウルで現在と同類の通信系列の事業をやっていたが、結婚してからご主人が仕事上に必要だった日本語をもっと勉強しようと思って 1 年の予定で留学したという。しかし、1 年後に 2 人の息子さんを連れてご主人がいる日本に移ってきたことで家族 4 人そろって日本での生活が始まった。

最初は日本語ができないという言葉の問題よりも他国で 2 人の息子を育てることに対する負担や狭い部屋、交通の不便さ、経済的な苦労などで日本での生活は嫌な毎日だったという。

家の近くに子どもの遊べるようなところもなかったし、友達もいなかったためにやんちゃな 2 人の息子を遊ばせる方法を探していた。その時、働くお母さんのための保育制度について知り、子どもに遊べる場を提供してあげようとご主人に内緒で仕事を探し始めたそうだ。しかし、日本語が全くできない自分が働ける場所はどこにもなかったという。

そのような日々が続く中、日本に来てから 6 ヵ月が過ぎた時に韓国での経験を評価され、新宿にある韓国系の会社でアルバイトを始めることになった。

一日の日課としては、朝 6 時から準備して 2 人の息子をそれぞれ違う保育園に送る。その後、バスと電車に乗り換え、2 時間かけて新宿に来る。仕事が終わる午後 6 時には子ども達を迎えに行かないといけないので毎日のように新宿駅まで歌舞伎通りを走っていたが、仕事は楽しかったし、仕事していると全てのことを忘れることができてとてもよかったという。おそらく仕事をしている瞬間が育児のストレスから解放する突破口になったようだ。

記憶に残る育児のエピソードは、年子である 2 人の息子を双子用のベビーカーに乗せていたが、ある日は牛乳とおむつ、お米などの買い物をして家に戻る途中で事件は起きた。比較的に大柄であった 2 人の息子がベビーカーの中で少しでも動いたらバランスがとれなくなって倒れてしまった。それで息子はもちろんお米などが道に倒れてしまい、大変だったことがしばしばあったという。日本は先進国だと思っていたが、近くにスーパーもなくてしかも宅配サービスもなかったのでバスで移動せざるを得ない状況がとても大変だったとその当時のことを思い出しながら語ってくれた。

もう一つのエピソードは、自転車に子どもを乗せているお母さんを初めて見た時にはまるで曲芸のようで驚いたが、いつの間にか自分も前と後ろに子どもを載せて、両ハンドルには荷物をかけ、しかも傘をさしながら走るようになったと苦笑いながら昔話を語るように聞かせてくれた。

◇　新大久保で事務室を開くまで　◇

最初の仕事は彼女が韓国でやっていたことと同じ系列のものだったが、初めては日本語ができないためにアルバイトとして雇われた。しかし、韓国での経験を生かして頑張った結果、成果をあげることができた。そのことを会社から認められて日本の会社の代理店を経営することになった。その中、韓国系の会社で働いていたご主人と一緒に起業しようと考えた。それでご主人が勤めていた貿易関連の仕事と自分の通信関連の仕事を両方取りいれた事務所を開くことになった。もちろんほとんどのお客さんがいる新大久保で事務室を開いたのは当然なことだろう。

そして、子どもたちも小学校に入る年頃になったし、以前から子どもたちが高学年になったら韓国系の学校に通わせたいと思っていたので、新宿に移るタイミングとしてちょうど良い時期だったという。

最初、仕事で新宿に来た時には、外国人に会うことのなかった新百合ヶ丘に比べて韓国人も多く、

昼の時間帯には韓国の料理を食べて韓国語で話すことができたのでＰＨさんにとって新宿はとてもいいところだったそうだ。どころが、実際新宿に住み始めたら今まで思っていた新宿と違って見たことのない夜の文化や特に子どもには良くない部分が見え始めた。そして、仕事上で付き合ってきた人々との関係が今までどおり仕事で終わるのではなく、もっと細かいところまでつながったり、いろんなことが見えたりして複雑な人間関係を経験することになった。それらを賢く乗り越えていかなければいけないという、まさに本格的な人生の戦争が始まったという。

このような複雑で多様なストレスは今まですばらしいと思っていた新宿がそこまで魅力的ではないと思い始めたきっかけになったそうだ。

◇　言葉の問題　◇

日本語が全くできないまま 2 人の子どもを連れて来日したが、育児で目まぐるしい毎日を過ごすＰＨさんにとって、日本語の勉強をしようというのは夢にも考えられない状況だったという。アルバイトを始めてからは、仕事上でよく使う言葉から身について、いわゆる「現場の実践日本語」のようなものを覚えた。10 ヶ月が経った頃には仕事に関連する会話は日本語でしゃべれるようになったという。現在も仕事場では日本語と韓国語を半分ずつ使っている。お客さんのほとんどが韓国人なので接客する時は韓国語で、その事務的な仕事は日本人と日本語でするパターンになっているそうだ。

学校の面談や保護者の集まりなどに参加してもそんなに問題なく日本語を使えるということから、言語的なセンスがすごくいいようだ。

◇　子どもの教育　◇

職場の同僚から紹介してもらった教会は新宿にあったので、毎週の日曜日に新百合ヶ丘から新宿まで通っていた。教会に通うために日曜日になるとほぼ丸一日という時間を潰すのだが、そんなに熱心に教会に通ったのは自分の信仰深さではなく 2 人の子どもに韓国人としてのアイデンティティを持たせ、韓国語をたくさん使わせるという教育の側面が多く作用したからたという。このように PH さんの韓国語に対する熱意は特別なものだった。しかし、仕事を始めるとやはり仕事優先になってしまい、子どもの教育は先生に任せる部分が多かったという。もちろん、ＰＨさんが宿題や準備物などは手伝ったし、子どもたちも良く適応してくれたおかげで上手くやっていくことができた。しかし、個性豊かな長男が高学年になると日本の教育システムに適応することができなくなって、韓国系の学校に転向することを考え始めた。元々ＰＨさんが韓国語の勉強に熱心だったことや男の子として自分のルーツがどこかというアイデンティティを持たせたいという気持ちもあってのことだという。

息子さんは日本の公立小学校から韓国系の学校に転校することになったが、せっかく日本に住んでいるので 2 人の子どもが日本人のいいところである真面目さと計画性、そして基礎を大事にすることなどを身につけると同時に韓国人の長所でもある自由奔放なところや独創性を上手く取り入れてよりいい人生を切り開いていくことを願っていると言った。

◇　将来の計画　◇

韓国ではある会社で 10 年間働くとその仕事においてはプロになるし、20 年間働くと自然にトップになれるといわれている。 PH さんもこの分野では 20 年近くやってきたので、ある程度会社も安定しているし、自信もついたので、これからは良く計画を立てて、安易にならず、そして目標だけにこだわらず、日本のいいところを学びながら、金銭的にもよく管理して、会社の運営に頑張りたいと言った。

そして、 PH さんにとって、初めての日本での生活は育児と重なり合ってとっても辛かったせいで、今まで気づかなかった日本のいいところに目をむけて、これからは日本をより楽しみたいという。いつでも惜しまず韓国に帰れるように、生活用品のほとんどを 100 円ショップで購入したことが象徴するような日本での自分の生きざまを変え、これからは日本を他国ではなく、自分の子どもたちが育つ国としてもっと愛情を注ぎ、調和しながら生活を送りたいという。何より子どもたちが日本人のいいところと韓国人のいいところをよく学び、それらを備えた人として成長してほしいと付け加えた。

< インタビュー / 인터뷰 26 >

JO さん（40 代・女性）「일본어가 너무 좋아, 좀더 실전 일본어를 배우고 싶어 일본 유학을 결심. 지금은 한국어 강사를 하면서 언어에 대한 열정을 불태우며, 박사논문 연구 중」

2010 년 8 월 7 일 서울 출신, 한국어 강사,체재 17 년째
인터뷰어:이호현(인터뷰는 한국어로 이루어졌다.)

◇ 일본에 오는 계기와 첫 일본생활 ◇

서울에서 태어나 대학 졸업 후 출판사에서 근무하던 중, 편집 중에 번역을 의뢰 할 때마다 필요성을 느끼며 배우기 시작한 일본어. 그 당시 감명 깊게 읽었던 책 중에 「다문화이해의 첫걸음은 언어 습득이다」는 문구로 더욱 언어습득에 대한 목표를 다지게 된다. 학창시절 배우던 외국어와는 달리, 시험에 대한 부담감 없이 즐겁게 배우기 시작한 일본어. 학습을 할수록 그 재미에 빠져들었던 일본어. 아플 때 조차도 일본어 학습 책을 손에서 놓지 못했던 JO 씨. 그 열정 덕분인지, 배운지 일년 만에 일본어 능력시험 1 급을 취득한다. 그러나 더욱더 자신의 일본어가 정말 일본이라는 나라에서, 일본인 친구를 사귈 때 자연스럽게 통할지 의문이 생기며, 좀더 능숙한 일본어를 배우고 싶고, 실전에서 경험하고픈 열망을 안고 주위의 많은 반대 충고를 뒤로하고 유학 길에 오른다.

나리따 공항에서 「リムジンバスはどこですか」라고 물었을 때, 친절히 가르쳐 주던 답변에, 자신의 일본어가 통했다는 기쁨으로 두 주먹을 불끈 쥐고,「やった」라고 외쳤다며, 웃음짓는 JO 씨. 일본에서의 첫걸음은 이렇게 자신감으로 시작된다.

그러나 신쥬쿠에서 시작된 외국생활은 얼마 지나지 않아 향수병을 겪는다. 태어나서 처음 경험하는 타문화였고, 집을 떠나 외국에 나와있다는 것 만으로 두려움이였다고 한다. 일본의 문화도 잘 몰랐기에 시행착오도 많았다고 하며, 몇가지 에피소드를 들려주었다.

한국의 교회에서 만났던 일본인 친구 집에 초대를 받아, 기쁜 마음으로 방문했지만, 持ち込みパーティ였기에 자신의 빈손이 너무 부끄럽고, 분위기도 썰렁해져서 당황했던 경험을 들려주었다. 또, 공항 도착해서 일본어가 통했다는 자신감에 그 후의 모든 생활상의 수속과 전화 문의 등을 혼자서 시도했다고 한다. 그러나 전화 상대방의 말은 완벽하게 다 못 알아 들을 때가 많았는데도 불구하고, 「はい、わかりました」라고 자신만만한 목소리로 대답하 고는 얼마나 후회했는지 몰랐다며 웃었다. 그때를 떠올릴 때마다, 한번 묻든 것은 순간의 수치지만 묻지 않는 것은 평생의 수치다 라는 일본의 속담이 떠오른다고 한다.

◇ 신쥬쿠의 편리함 ◇

신쥬쿠는 JO 씨에게 있어 제 2 의 고향 같은 곳이라고 한다. 처음 일본에 도착 후 리무진에서 내린 곳이 신쥬쿠이며, 그때 있었던 사쿠라 은행을 보고 참 예쁘다는 인상을 받았다고 한다. 신쥬쿠는 오래 산 동네이기도 하지만, 본인에게 있어 무엇보다 우체국, 편의점 등 24 시간 영업하는 곳이 많다는 점이 매력적이라고 한다. 꺼지지 않는 도시, 전자상가, 백화점, 토오큐한즈 등 생활의 편리함이 모여있는 곳으로 항상 뭘 해야겠다, 무엇이 필요하다 라고 생각했을 때 충족이 안된 적이 한번도 없었는데, 그건 신쥬쿠를 떠나보면 알 수 있다고 덧붙였다. 장터(한국식품점) 또한 큰 몫을 차지한다며, 처음엔 너무 한국적인 게 많은 신오오쿠보는 일본에 왔다는 실감이 나지 않아 재미가 없고, 마음껏 일본을 만끽하고 싶다는

마음을 충족시키기엔 부족했지만, 시간이 지날수록 역시 한국사람은 한국적인 게 가까이 있는 것이 좋아지더라는 깨달음을 말해주었다.

◇ 언어에 대한 학습열의가 한국어강사로 ◇

일본어가 너무 좋아서 일본에 왔지만, 대학진학 상담 중 어차피 일본에서 공부를 한다는 건 일본어가 기본이므로, 다른 전공을 하는 것이 유익하지 않느냐는 충고를 듣고, 선생님이 되고 싶었던 꿈을 떠올려, 교육심리학을 전공하게 된다. 그러나 일본에 오게 된 동기인 언어에 대한 관심을 버릴 수가 없었기에 논문을 일본어 학습자를 대상으로 하는 연구를 중점적으로 해 왔다.

현재는 한국어 강사로 일하고 있는 JO 씨. 주로 직장인을 대상으로 한 회화뿐만 아니라 한국문자의 특성 등 문법을 포함하여 종합적으로 강의 중이다. 학습자는 초급에서 5 년 경력자까지 다양하며, 한국어 학습자의 특성으로 남성분이 1 할 정도이고 대부분이 여성 학습자라는 점이다. 이것은 한국어 학습자의 학습동기로 제 1 위가 한국드라마를 자막 없이 보고 싶다는 조사결과가 그것을 반영해 준다.

신실한 크리스챤인 JO 씨는 언어에 대한 관념이 특별났다. 즉, 성경에서 언어는 원래 하나였는데, 인간의 죄로 인해 바벨탑이 쌓이고, 여러 언어로 파생 된 것이므로, 원래 하나였던 언어는 서로 통하게 되어 있다는 생각에는 변함이 없다고 강조했다. 물론 언어를 흩어 놓으셨기에 일차적으로 갈라진 음성, 발음은 다르지만, 공통점이 있다는 원리하에 차이점들을 정리하면, 언어를 쉽게 가르칠 수 있는 언어 교수법의 개발에 힌트를 얻을 수 있으리라고 덧붙였다. 또한, 언어를 가르치다 보니, 다른 나라의 언어를 안다는 것은 그 나라에 관심을 갖게 되는 계기이지만, 습관과 문화 등을 알게 되는 지름길 이라며, 현재 본인도 중국어를 학습 중인데, 강의를 할 때 많은 도움이 된다고 했다.

◇ 장래 계획 ◇

일본 유학 길에 올라 교육심리학을 전공하게 되고, 긴 시간 학교에서 연구자로 있었지만, 아직 이루지 못한 박사논문에 대한 미련이 남아 있으므로, 환경이 주어진다면 언어에 관련된 연구를 계속해서 끝을 맺고 싶다고 한다. 그리고, 현재는 한국어 강의의 교수법, 즉, 좀더 한국어를 쉽게 배울 수 있는 방법, 획기적인 한국어 교수법을 개발하고 싶다는 꿈을 말해주었다.

＜ インタビュー / 인터뷰　26 ＞

JO さん（40 代・女性）「日本語が大好きでもっと本場の日本語を学びたい一心で留学、今は韓国語講師として言語への研究意欲を燃えつくしている」

2010 年 8 月 7 日、ソウル出身、韓国語講師、滞日 17 年目
インタビュアー：李 坪鉉（インタビューは韓国語で行われた）

◇　来日のきっかけと初日本生活　◇

JO さんはソウル生まれ。大学を卒業後、出版社に勤めていた。その時、編集と関連して翻訳を依頼するたびに日本語の必要性を感じて日本語の勉強を始めた。当時、感心しながら読んでいた本の中で「多文化理解の第一歩は言語習得だ」という文から言語習得の目標をさらに固めていった。学生の時に学んでいた外国語とは違って試験という負担から開放され、勉強することができた日本語、勉強すればするほど楽しみがどんどん増した。JO さんは病気だったときも日本語の本を手から離さなかったという。そのような情熱のおかげだろうか。勉強してから 1 年で日本語能力試験 1 級に合格することができた。しかし、日本という国で、もし日本人の友達ができた時に自分の日本語が通じるかどうかという疑問があったそうだ。また、より質のいい日本語を学びたい気持ちと実際に日本で日本語を話してみたいという気持ちがあったという。そして、周りの反対があったにもかかわらず希望と夢を抱いて留学することになった。

JO さんは始めて成田空港に着いて、案内所で「リムジンバスはどこですか」と聞いたが、それにやさしく答えてもらったことで自分の日本語が通じたという喜びのあまり拳を握りながら「やった」と叫んだそうだ。日本での第一歩はこの経験から得た自身感によりかかって始まったという。
ところが、新宿からスタートした外国での生活はすぐにもホームシックにかかってしまう。生まれて初めて経験する他文化、そして実家から離れて外国に来ていること自体が怖かったという。日本の文化についてもあまり知らないのでたくさんの試行錯誤を経験したそうだ。そのなかで、いくつかのエピソードを聞かせてもらった。

韓国の教会で出会った日本人の友達に、初めて家に招待され、とってもわくわくしながら訪ねた。しかし、持ち込みパーティだったことを知らず、自分は何も準備せず手ぶらで訪問してしまい、とても恥ずかしい思いをしたという。もちろん、その場の雰囲気も重くなってしまってとまどったという経験談を聞かせてくれた。

また、空港に着いて日本語が通じたという自信から、その後の生活上の手続きや電話での問い合わせなどすべてのことを自分 1 人でトライしたそうだ。しかし、電話の問い合わせの場合、相手の言うことを完全に聞き取れなかった時が多かったにもかかわらず、「はい、わかりました」と自信溢れた声で答えてしまったことを、電話を切ってからどれだけ後悔したものか。そのときを思い出すたびに「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」という日本のことわざが頭に浮かぶという。

◇　新宿という町の便利さ　◇

新宿は JO さんにとっては第 2 の故郷のようなところだという。最初に日本に着いてリムジンバスに乗って、降りたとこが新宿のあるところであり、その時、目の前にあったさくら銀行が綺麗でとても印象的だったという。新宿には長く住んでいて、何より郵便局、コンビニなど 24 時間営業のお店が多いのが本人にとってはとても魅力的だという。光が消えない町、電子製品の商店街、百貨店、東急ハンズなど、生活するのにとても便利だった。いつも何かが必要な時、何かをしようと思った時に、その必要が充足されないときはなかったという。それは新宿を離れてみて分かったと言

った。ジャント(韓国食品売場)も大きい存在だったそうだ。初めての新大久保は韓国的なものが多くてあまり面白くなく、日本的な風景や情緒を満喫したいという気持ちを満たすには物足りなかったが、時間がたつと共にやはり韓国人は韓国的なものが身近にあるのが一番だということに気付いたと言った。

◇　言語への学習熱意から韓国語講師に　◇

日本語が大好きで日本に来たが、大学進学の相談の際に先生から、どうせ日本で勉強を続けるということは日本語ができるというのが基本であるので、もう一つ専門的なことを学ぶのはどうかというアドバイスを聞いたそうだ。それで、先生になりたいという昔の夢をもう一度叶いたくて教育心理学を専攻とすることになる。しかし、日本に来るきっかけになった言語に対する興味、関心はおさまらず、日本語学習者を対象にした論文を書き、研究を進めてきた。

JO さんは現在、韓国語講師として働いている。主に社会人を対象に会話だけではなく韓国の文字の特徴など、文法を含めて総合的な講義を行っているという。学習者は初級から 5 年間勉強してきた人まで多彩で、学生の割合は韓国語学習者の大半がそうであるように男性の方が 1 割くらいで他は女性の方であるようだ。韓国語学習のきっかけとして、第一位となるのが、韓国のドラマを字幕なしで見たいという調査結果からも女性の学習者が多いというのは想像しがたくない結果である。

熱心なクリスチャンである JO さんにとって、言語に関する考え方は特別なものだった。その根源として、聖書における言語は元々一つだったが、神になろうとした人間がバベル塔を建てたという罪の結果、言語がそれぞれ分かれたと言われている。だから、JO さんは言語は本来一つだったので究極的にはお互いに通じるはずだという考えをもっており、今もそれは変わっていないと強調した。もちろん、神様が人間の言語を異なるようにしたのでそれぞれの言語はその音声や発音が違う。しかし、言語間の共通点は必ずあるという前提のもとで相違点を整理すれば言語をもっとやさしく教えることができる言語教授法の開発のヒントになるだろうと JO さんは言った。また、彼女は言葉を教える立場なので他の言語を知るということはその国に興味を持つことにつながると、そして、ある国の言葉を学ぶということはその国の習慣や文化を知る近道にもなると言った。本人も現在中国語を勉強しているが、韓国語の講義をする時に役立つという。

◇　将来の計画　◇

JO さんは日本に留学して教育心理学を専攻し、長い間研究者として学校に在籍していたが、まだ成し遂げていない博士論文に対する未練が残っているそうだ。もし、環境が整えたら言語に関する研究を続けて結果を残したいそうだ。最後に、現在は韓国語の教授法、つまり、学習者が韓国語をもっと簡単に習得できるような方法、画期的な教授法を開発したいという夢を語ってくれた。

＜ インタビュー / 인터뷰　27 ＞

李某さん（30 代、男性）　「ジャパニーズドリームの可能性に賭けて」

2010 年 8 月 12 日、プサン出身、貿易会社経営、滞日歴約 9 年
インタビュアー：堀内康史

◇　来日の経緯　◇

大学進学にあたり、希望の大学に入れず、受かった大学に行くか、浪人しようか迷っていたところ、日本に住んでいるおじが、希望しない大学にいくくらいなら、日本に来なさい、と言ってくれたので、日本に行くことにした。ただ、兵役を済ませていないと、外国に行くことは難しかったため、高校卒業後軍隊に入隊し、兵役をおえてから日本に来た。

◇　日本での学業と仕事について　◇

日本に来て、新宿にある日本語学校に 2 年間通い、都内の私立大学に入学した。
大学では、経営学部で貿易のことを勉強した。勉強のかたわら、実務も経験したかったので、4 年間おじの貿易会社でアルバイトをしていた。

2 年前大学を卒業し、そのままおじの貿易会社に就職した。その会社は、日本の商品を韓国に輸出したり、逆に韓国の商品を日本に輸入販売したり、そしてネット販売も行っていた。そこで 2 年間働いていたが、リーマン・ショックなどの影響で会社が危なくなり、社長から会社の見通しについて説明とアドバイスがあり、自分から会社を辞めた。その会社はやめた後数カ月後につぶれた。他の会社に就職することも考えたが、これまでの経験から自信があったので、1 年間の準備期間を経て、昨年会社を設立した。以前の会社のときの取引先を引き継ぐこともでき、頑張っているところである。

◇　現在の仕事　◇

去年、自分の会社（株式会社）を設立、貿易および貿易関連業務を行っている。現在、貿易そのものを自分自身でも行っているが、主に行っている仕事は、ニッケル、銅などの貿易業務において、日本の会社と、外国の会社（韓国以外も）との間を取り持つことであり、その際手数料収入を得ている。不景気なので、思い通りにならない部分もあり苦労はしているが、なんとか持ちこたえて頑張っている。もう少し頑張れば軌道に乗ってうまくいけるのではと考えている。

◇　日本について　◇

韓国にいれば、やはり過去の経緯から、日本については良くないイメージを持つ人もいると思うが、自分の場合は、おじが日本にいて、日本の情報やモノが身の回りにあったせいか、悪いイメージはなかった。音楽 CD や家電製品も日本のものだった。来日当初も、韓国と日本の違いにそれほど戸惑わなかった。

仕事をしている立場からは、日本ではサービス精神などが行き届いていて先進国だということを感じる。また、仕事上のチャンスも多くあると思っている。

以前日本人の女性と付き合っていたときに感じたことは、本音としてどう思っているのか、わからない、ということがあった。ただ、これは文化の違いから来るものなのか、個人差なのか判断はむずかしいところである。韓国にも表向きは良いが、裏で何を考えているのかわからない人はやはりいる。

日本で良くない部分は、警察官による職務質問である。特に悪いこともしていないのに、道路を歩いているときに職務質問をされ、外国人とわかると外国人登録証の提示を求められる。防犯には役立っているのかもしれないが、それが何度もあるので、いやな気持になる。

◇　大久保近辺について　◇

街をあるいていると、大久保はやはり韓国人、中国人が多く日本人は少ないと感じていたが、最近は日本人の数が増えたのではと感じている。この調査で外国人の「顔」が見えないというが、大久保では、韓国人や中国人が多いが、韓国食堂では顧客は日本人である場合が多い。そこでは従業員の韓国人と客の日本人との間で交流もあると感じている。

◇　将来について　◇

いま日本に在住 9 年で、これが 10 年を過ぎると（あと約 1 年で)、永住ビザをもらえるので、少なくとも永住ビザを取るまでは日本に居る予定である。ただ、自分の仕事のことからもあと 4，5 年は日本にいたいと思っている。両親の面倒は、姉が韓国にいるものの、長男である自分がいずれ見なければいけないので、自分が韓国に帰るか、あるいは両親を日本に呼び寄せるかしないといけないとは思っている。両親は日本語ができないが、新宿の周辺であれば、なんとかなるのではとも思う。しかし、今の両親の友人関係がなくなってしまうので、難しい。

日本での事業が本当にうまくいかなければ、韓国に帰って就職することも考えなければいけないが、韓国では 30 歳を越えるとこれまでの実績がなければ仕事を得るのは難しい。アメリカンドリームじゃないけど、ジャパニーズドリームみたいなものはあると思っている。日本のほうが成功の可能性のチャンスがあるので、やはりしばらくは日本で頑張りたい。

スケジュール／스케쥴

2009 年
11 月　準備
12 月　パイロット調査
2010 年
1 月　インタビュー開始
5 月　成果公開　（ホームページ、印刷物など）
9 月　成果公開　（ホームページ、印刷物など）
10 月　中間報告会・中間報告書発行
2011 年
3 月　成果公開　（ホームページ、印刷物など）
7 月　成果公開　（ホームページ、印刷物など）
10 月　最終報告会・最終報告書発行

2009 년
11 월　준비
12 월　예비조사
2010 년
1 월　인터뷰 개시
5 월　성과 공개　(홈페이지, 인쇄물등)
9 월　성과 공개　(홈페이지, 인쇄물등)
10 월　중간보고회, 중간보고서 발행
2011 년
3 월　성과 공개　(홈페이지, 인쇄물등)
7 월　성과 보고　(홈페이지, 인쇄물등)
10 월　최종보고회, 최종보고서 발행

プロジェクトメンバー／프로젝트 멤버

渡辺 幸倫（わたなべ・ゆきのり／와타나베 유키노리）相模女子大学学芸学部講師
／社会教育、言語教育

若園 雄志郎(わかぞの・ゆうしろう／와카조노 유시로）国士舘大学 21 世紀アジア学部非常勤講師
／多文化教育、少数民族の教育

川村 千鶴子（かわむら・ちずこ／카와무라 치즈코）大東文化大学環境創造学部教授
／移民政策、多文化社会論

宣 元錫（そん・うぉんそく／선원석）中央大学総合政策学部兼任講師
／社会政策、労働問題、移民政策

藤田ラウンド 幸世(ふじたらうんど・さちよ／후지타라운도 사치요)桜美林大学基盤教育院非常勤講師／社会言語学、バイリンガル教育

河合 優子（かわい・ゆうこ／카와이 유코）東海大学文学部准教授
／異文化コミュニケーション、メディア論

李 坪鉉（い・ほひょん／이호현）早稲田大学教育・総合科学学術院非常勤講師、和洋女子大学人文学部非常勤講師／社会教育、文化間移動者の文化変容

武田 里子（たけだ・さとこ／타케다 사토코）明星大学非常勤講師・放送大学東京文京学習センター非常勤講師／地域社会学、多文化社会論

堀内 康史（ほりうち・やすし／호리우치 야스시）大東文化大学環境創造学部非常勤講師／社会学

呉 世蓮（お・せよん／오세연）早稲田大学大学院教育学研究科／生涯教育、多文化教育の日韓比較

この研究に関するお問い合わせは：
연구에 관한 문의는：
〒252-0383　神奈川県相模原市南区文京 2-1-1
相模女子大学　10 号館 406 研究室　渡辺幸倫
watanabe-y@star.sagami-wu.ac.jp
プロジェクトのホームページ：
http://koreannewcomersintokyo.web.officelive.com/
発行日：2010 年 10 月 31 日

無断転載を禁止します
무단전재를 금지 합니다.